
魔法少女リリカルなのは ちゃいんど・ふぁいと

ハナサカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ちゃいんど・ふぁいと

【Nコード】

N7432K

【作者名】

ハナサカ

【あらすじ】

時を越え、かつて交わした約束が果たされる。少年も少女も予想していなかったカタチで。これはひとつの王の物語。少女はなにを想い、少年はなにをなすのか。魔法少年、がんばります。

よくよく考えたら、このお話で悠一君ががんばる事ってそんなにな
いと思います。がんばるのは、なのはとティアナとエリオとシャマ
ル。あとはキャラあたりかな。むしろ悠一君はヒロインかと。そん
な、お話。

開幕・すべてはここから始まった。わけではない（前書き）

『注意』

- ・ 作者は素人、ずぶの素人。
- ・ ういきは友達。
- ・ タイトルは適当。
- ・ ファンの皆様、ごめんなさい。

見苦しい点が多々あると思いますが、見ていただけたら幸いです。

開幕・すべてはここから始まった。わけではない

時空管理局古代遺物管理部機動六課に所属するヴォルケンリツターが将、『剣の騎士』シグナムは、この部隊における初任務に出動した新人や同僚と分かれて、次元震が感知された現場に来ていた。

次元震反応がすぐに消えたことと、シグナムの実力を考慮しての単機での任務。

宙に浮かび、桃色のポニーテールをたなびかせ、騎士甲冑を纏い、アームドデバイスである片刃の長剣、レヴァンティンを携えた彼女の眼光は厳しい。

「ここか……」

計器の故障かとも思える微弱な反応だったが、シグナムには気を抜くという選択肢はない。

自分の部隊を持ちたいという、主・八神はやての願いをもって設立された機動六課。その名の下に行動するシグナムにとって、醜態をさらすことは絶対に許されないのだ。

「ふっ……このような考えしかできぬから、ヴィータらに固いといわれるのだろうか」

幼い姿の仲間の顔が頭に浮かんだ。

緊張は解けた。油断などありえない。シグナムは徐々に高度を下げ、反応のあった森に降り立つ。

周囲を探るシグナム。

何の変哲もない森のようだが、かすかに香るこの臭いは、

「血の、臭い……」

かつてかぎ慣れた、けしてなじむことのない臭い。

警戒を強める。レヴァンティンを握る手に自然と力が入る。

臭いをたどって木陰を覗くと、そこには血まみれの少年の姿があった。

「おい、大丈夫か!？」

横たわるのは10歳ぐらいの少年。

かがんで少年の容態を確認する。衣服はボロボロ、ところどころ赤黒い染みに染まっていて、顔や髪にも血の跡が残っている。が、少年は血をまといているだけだった。

「傷が、ない？」

少年の表情は穏やかで、ただ眠っているだけのよう。ただ血がこびりついているだけで、露出している部位に傷らしい傷は見当たらない。

「いったいなんなんだ……」

謎の次元震。ただの次元漂流者にしては妙な格好の少年。

やっかいなことにならなければいいがなと危惧しつつ、シグナムは少年を抱えて機動六課に帰還するのであった。

主人公は寝起き10分で女を泣かす

まどろみから目を覚ます。

「ん、ここは……」

重たいまぶたをこすって周りを眺めると、そこは見知らぬ場所でした。

寝ているのは清潔なベットの上、見につけているのは病人服のようなものに左腕につけられた金の腕輪。

視線を彷徨わせると、自分が寝ているもの以外にもいくつかベットが設置されています。

上半身だけ起き上がらせて考えます。

ぼく、どうしてここに寝ているんでしょう？

「あら、起きたの？」

声に振り向けば、白衣を着た薄い金髪の女性が立っています。

やわらかい笑顔を浮かべていて、いい人そうですね。

「はい、おはようございます」

挨拶は、なにはともかく大事です。

「はい、おはよう。体の調子はどうかしら？」

ベットの上で大きく伸びをしたり腕を振ったりしてみます。

少しダルい感じはありますが、痛みはないですね。

「とくに変わったところはないですね」

おおむね快調です。

「そう？ アナタ血まみれで倒れていたそうだから……」

血まみれ！？ あらうゝ傷は治してくれたみたいだけど、服のほうはそのまんまだったんですね。

「大丈夫ですよ。おかしいところはありません。ところで……ここはどこなのでしょう？」

似たような場所だと保健室でしょうか。こんなにたくさんのベットはなかったですけど。

「あら、ごめんなさい。自己紹介がまだだったわね。私の名前はシヤマル。ここはミッドチルダって呼ばれてる場所にある時空管理局機動六課の医務室なんだけ……わかるかしら？」

「管理局……あゝ、クロノ君たちがいるところですね」

「クロノ提督を知っているの！？」

……びっくりしました。お姉さんもクロリンを知ってるみたいで

すね。有名人なのかな？　それともお姉さんもクロリンのお友達なんでしょうか？

あれ、なんかお姉さんの頬がヒクヒクしてますね。

「クロリ……クロノ君はお友達ですよ。お姉さんはクロノ君を知っているんですか？」

「え、ええ、まあ……よく知っているわ。もしよかったら、キミのこと、お姉さんに教えてくれないかしら？」

「いいですよ。えっと、出身は、海鳴市？　え、日本？　……地球って言ったほうがわかりやすいですね」

ミットチルダっていうのがどういう場所かわかりませんが、クロリンが言ってた、いっぱいある世界のうちの一つじゃないかな？　と思うのですよ。

地球がマイナーかメジャーかは分かりませんが、海鳴や日本じゃ伝わらないでしょうね。うっかりでした。

「私立聖祥大学付属小学校3年1組、花咲悠一と申します」

「私の名前はシャマル。ここはミットチルダって呼ばれてるばしょにある時空管理局機動六課の医務室なんです……わかるかしら？」

次元漂流者だと思われる、黒の長髪に黒眼の少年が私の前でやわらかい表情をしている。

シグナムに保護された血まみれの少年。にもかかわらず一切の傷が見当たらない少年。武器を持っているわけでもなく、身につけていたのはボロ布に金の腕輪だけの少年。

なにか争いごとに巻き込まれたのだろうが、少年の様子からはやわらかい印象しか感じられない。見知らぬ場所にいるにもかかわらず取り乱す様子はなく、現状を理解していないのか、それとも……。

子供とはいえ簡単に信用するわけにはいかないわね。

「管理局……あゝ、クロノ君たちがいるところですね」

「クロノ提督を知っているの!？」

信用うんぬんは一気にふっとんだ。

10歳ほどの少年に『君』づけで呼ばれる時空管理局提督。

あ、ダメ……ニヤニヤしちゃう。

「クロリ……クロノ君はお友達ですよ。お姉さんはクロノ君を知っているんですか?」

「え、ええ、まあ……よく知っているわ。もしよかったら、キミのこと、お姉さんに教えてくれないかしら?」

クロノ提督を知っているということは、管理世界世界の出身かしら? でも、友達ってのは、ねえ。

私の知ってるクロノ提督とは違うかもしれないわね。少なくとも、『管理局のクロノ』を少年が知っているのは間違いないみたい。

「いいですよ。えっと、出身は、海鳴市？ え、日本？ ……地球って言ったほうがわかりやすいですね」

海鳴市！？

聞き覚えのありすぎる地名。私たちが主であるはやてちゃんと出会った場所。二度のロストログア事件の舞台となった場所。

海鳴市出身の次元漂流者が機動六課に保護されるなんて、運がいいのか、作為的な背景があるのか……。

「私立聖祥大学付属小学校3年1組、花咲悠一と申します」

花咲悠一、君ね。……あれ？ どこかで聞いたことがあるような……。たしかはやてちゃんから聞いた覚えが……。

「シャマルさん、子供が運びこまれたって聞いた……」

思考に入りこみすぎて、誰かが部屋に入ってきたのに気がつかなかった。

この声はなのはちゃんだろうか。

振り向くとそこにいたのは、茶髪サイドポニーで管理局の制服を着た女性。なのはちゃんで大当たりです。だが、その表情はこちらがびっくりするほどの驚愕一色に染まっていた。

「ゆう、君？」

ゆう君？ というのは、もしかして悠一君の愛称かしら？

二人は知り合い？ と悠一君の顔を覗けばこちらは困惑した表情。

「はい、そう呼ぶ友達もいますけど。……お姉さんはだれですか？」

悠一君の方はなのはちゃんのことには知らないみたいね。

なのはちゃんを見てみると悠一君の言葉が聞こえているのかいな
いのか、ぶるぶると体を震わせて、って泣いてる！？

「ゆーーーーーくーーーーんッ!！」

なのはちゃんは感極まったように叫ぶと、悠一君に抱きついた。

「な、なんですか？」

「ゆう君、ゆう君！ ゆう君ッ!！ ……ぐすっ……」

腰にしがみつき、泣き喚くだけで要領を得ないなのはちゃんに悠一君は困惑を深めるが、なかなか泣き止まないのを見ると表情を一変。なのはちゃんの髪をすき、背を撫でながら優しい笑顔をうつかべる。

「大丈夫ですよ。ぼくはここにいますから」

「んう、ううううう、ふえええええーーーーん!！」

子供のように泣くのはちゃんに、宝物をあつかうように慰める
悠一君。二人だけの世界を作っていて、

「ああ、私ってば空気……」

邪魔するわけにもいかず、私はそうつぶやくことしかできません
でした。

再会・少女はシヨタコンに成るか？（前書き）

前話少し変更しました。『』がうっとうしかったので。

再会・少女はシヨタコンに成るか？

「落ち着きましたか？」

「ん、うん。ありがとう……」

うう、凄く恥ずかしいの、完全に取り乱したの……。

火照った顔を上げると、ふにやつとした笑顔を浮かべるゆう君。
何もかもが10年前のまま。10年という月日が流れたにもかかわ
らず、変わらぬ姿で微笑む9歳のゆう君。

改めて考える。この子は本当に私の知るゆう君なのだろうか？

六課に対して害をなす人物かもしれないと、疑う心がないわけでは
ないが、彼の顔が、言葉が、私にゆう君が本物であると信じさせる。

咳払いをひとつ。落ち着けと自分に言い聞かす。心地よい胸の高
鳴りは消えてくれなかった。

「キミは本当にゆう君……花咲悠一君なの？」

すぎるような声音になってしまったのは、仕方がないと思うの。

「はい、ぼくは確かに花咲悠一ですけど……お姉さんはだれです
か？」

心がちくりと痛む。ゆう君の見た目は9歳のままだが、私は重ね
た年月分成長してきた。

……ゆう君の困った顔がかわいいと思えるのは、私が大人になつた証だろうか？

「私はなのはだよ。高町なのは」

このゆう君が、私の知るゆう君だつて信じたい。この10年間、ゆう君のことを忘れたことなんて一度もなかったから。

「高町なのは……えっ……なの、ちゃん？……なんでなのちゃんことを知っているのかは分かりませんが、なのちゃんはほんと10年ですよ。お姉さんみたいに、大人じゃありません」

ゆう君の表情が、驚愕と疑惑に染まります。

「違うよゆう君。ゆう君がなんで子供のままなのかは分からないけど、ゆう君がアリシアちゃんの代わりに虚数空間に落ちてから、もう10年経ってるんだよ」

「10年！？……そんなはず不是吗、ぼくがあゝの穴に落ちたしてから1日、かどつかは分からないけど、経っていたとしてもせいぜい2日かそこらですよ？10年だなんて、そんなはずは……」

「ゆう君が、虚数空間に落ちてから1日2日しか経ってないっていうなら、私は信じるよ。虚数空間にかんしては分かっていることの方が多いから、無理やりにも納得してみせる。だからゆう君、私のことも信じてほしい」

ゆう君の目をまっすぐに見つめる。するとゆう君も真剣な顔で見つめ返してくれる。それだけがたまらなく嬉しい。

「私はゆう君が知ってる高町なのはだよ。ゆう君は私がひとりぼっちだった時に一緒にいてくれた。二年生のときに再開して、それから何をするにも一緒だった。虚数空間に飛び込んだ時も、必ず帰ってくるって約束してくれた。そんなゆう君だからこそ、私は信じて待つことができたんだよ？ だから、またこうやってゆう君とおしゃべりができて、私は本当に嬉しいの」

「なのちゃん……」

ゆう君は思案顔でうつむいてしまった。

考えなきゃいけないことはたくさんあって、諸手を挙げて喜べない状況なのは分かってるけど、それでも、私は……。

「……」

お互いに何も言えぬまま、重い時間が流れる。

やがて顔を上げたゆう君は、私がよく見知った柔らかな微笑を浮かべていました。

「10年ですか、長いですね……」

「ホントだよ。私なんてもうすぐ二十歳なんだよ？」

私もつられて笑顔になるのがわかる。まるで、子供のころに戻ったみたいだ。

「あはっ、でも羨ましいな。ばくも早く大きくなりたいです。それに……なのちゃんはすごい美人さんになりましたね」

あうう、顔が赤くなるのがわかるの……。

ゆう君は9歳児だけど、昔から大人っぽいところがあって、だから、つまり……すぐくくるものがあるの！

「なのちゃん、もうちょっとこっちによってくれますか？」

「えうっ！？ ……う、うん……」

ベットに腰掛けてゆう君と向き直る。こうしてみると、私のほうが大きくなってしまったのが分かる。それが少し悲しい。

「なのちゃん」

ユウ君が私に抱きついてきた。

そういえば、ゆう君には抱きつき癖があったんだっただ……。

不思議と恥ずかしさはない。ただ安心感があるだけ。

「そんなつもりはなかった、っていうのはいい訳だよね……ごめんね、なのちゃん。それと……ただいま」

「ううん、いいの……ちゃんと約束を守ってくれたんだから。おかえりなさい、ゆう君」

互いが互いの首元に顔をつずめ、互いが互いの耳元でささやき合う。

私は今、幸せです。

ラブコメは 現実で見る もんじゃねえ

あまりの空気っぷりに、一句詠んでしまいました。シャマルです。

季語は入ってますよ？ ラブコメは春の季語です。私が今決めました。あんなもんは頭ン中が春一色じゃなきゃできません。だって、私に見せ付ける必要なんて、どこにもないじゃないですか。どーせ私は独り身ですよ……ぐすん。

なにも、なのはちゃんが幸せそうなのが許せない、なんてことは微塵にも考えてません。なのはちゃんがいろいろ溜め込んでるのは知ってますし、私にとっても大切なお友達です。弱音を吐かないのはちゃんにとって、甘えられる相手が現れたのはとても喜ばしいことです。でも、でも！ 私だって男の人に甘えたいときがあるんですっ！

事情がよくわからない私でも、最初は感動でウルウルしてましたが、いつまでも抱き合いささやき合う二人に、言いようのないムカムカが湧いてくるわけですよ。

ただ私に言えることはひとつ、リンディ茶は人体に悪影響を及ぼします。つまりそういうことです。

いい加減、「なのはちゃん、魔力がただ漏れよ？ 魔力光がまぶしいわ」な空間から脱出したいわけだが……。なのはちゃんのピンチと言ってフェイトちゃんとはやてちゃんを呼んだから、すぐに二人が来るはずだ。

「なのはッ！」

噂をすれば、ね。

「シャルがなのはのピンッ……うそ……」

「フェイトちゃん早すぎやつ、て……え……？」

私より濃い色の金のロングヘアのフェイト・テストロッサちゃん。我らが主、茶色のボブカットの八神はやてちゃん。二人とも管理局の制服を着ている。

フェイトちゃんもはやてちゃんも驚きの表情で固まっている。なのはちゃんと同じ反応だ。

二人の入室に気がついたのか、悠一君となのはちゃんが顔を上げる。

四つの視線が絡み合う。

「……ユウ？」 「……ゆうくん？」

フェイトちゃんとはやてちゃんの声が重なる。二人はゆっくりと悠一君に近づいていく。

「もしかして……ふーちゃんとはっちゃんですか？」

「ユーーーーーウ……！」

フェイトちゃんが、なのはちゃんなど比較にならない勢いで悠一

君に飛び込んだ。雷神の二つ名は伊達じゃないというわけね。というか、あの勢いのフェイトちゃんを平然と受け止めたのは凄いう。

「ホンマに……ゆーくんなん？」

はやてちゃんは……やっぱり疑ってかかってるわね。

「はい。ぼくはぼく、花咲悠一ですよ。ごめんね、二人にもいっぱい心配かけたみたいで……」

「彼は、私たちの知ってるゆう君で間違いないと思う。虚数空間だと時間の流れが違う、みたいなことがあるんじゃないかと私は思ってる」

はやてちゃんが口を尖らせてる。機動六課の部隊長であるはやてちゃんは、部隊の誰よりも慎重にならなければならない。早々と信じてしまいたい気持ちもあるのだろう。悠一君ははやてちゃんにとって初恋の相手だったはずだから。

「ユウ……本当にユウなんだよね？」

悠一君は微笑みとうなずきで返した。

「私もまた会えて嬉しいよ、ユウ……」

悠一君の胸に顔をうずめるフェイトちゃん。声から幸福感がありありと伝わってきます。

なのはちゃんにしたように、フェイトちゃんの髪をすき背を撫で

てあげる悠一君。なんででしょう、様になってますね。

「なのちゃんにも言いましたけど、二人とも美人さんになりましたね。」

二人の頬に朱に染まる。フェイトちゃんはもちろん、はやてちゃんもあれでウブですからね。

「でも、はっちゃんは……少し、可愛いそうです」

「か、可愛いそうって……なんでなん？」

「……だってあんなに！ あんなにおっぱいが好きだったのに！ はっちゃんはおっぱいを愛していたのに！ なのにッ！」

吹き出さなかった自分を褒めてあげたいです。

「神様のイジワル！ 胸部絶賛激減中！？」

「減ってへんよ！？ ……増えてもないけどなッ！！」

はやてちゃんは怒っているような、だけでも嬉しいような不思議な表情をしています。疑いがなくなったわけではないんでしょうけど、変な緊張は解けたみたいです。

悠一君がはやてちゃんのよき理解者になってくれればいいと思います。……9歳児ですけど。

ただ、胸にかんしては、はやてちゃんはそのままでいいと思います。だって、下には下がいるっていうのは、すごく安心できますか

再会・少女はシヨタコンに成るか？（後書き）

悠一とはやてのおっぱいのやりとりが書きたかったから、この物語を書き始めたようなものです。

なのであるていど満足しちゃいました。……どうしよう。

トラ、トラ、トラ。べつに奇襲とかではない（前書き）

はやてとカリムの口調が安定しませんでした。

自己解釈、独自設定が多分に含まれます。

そういったものが嫌い、もしくは少ないほうがいいと思われるかは、お戻りになったほうがよろしいかと。

さすがにこの設定はおかしくないか？ と思われたかたは、ぜひご指摘ください。

あと、感想くださると嬉しいです。すっごく待ってます。

トラ、トラ、トラ。べつに奇襲とかではない

「ユウ……その、離してくれないかな？」

「……ふーちゃんは、ぼくに抱きしめられるのはイヤですか？」

「うう、イヤではないけど……」

「じゃあ、離しません」

私は今、ユウに抱きしめられている。いや、体格差を考えると抱きつかれてるという方が正しい。ベットに腰掛ける私のお腹あたりにユウの腕が回されている。

なのはとはやてはベットの脇に立っていて、シャマルは、ごゆっくり、なんて笑いながら、早々と医務室から出て行った。

「あきらめや、フエイトちゃん。ゆーくんの抱きつき癖は今に始まったことやないやろ？」

ニヤニヤした顔で言わないでほしい。隣のなのはも苦笑いを浮かべるだけで、助けてくれる気はないみたいだ。

私はべつに、ユウに抱きつかれるのをイヤだと思ってるわけではない。ただ、その、少し恥ずかしいだけで……。そもそもあんな悲しそうな顔で、イヤですか？　なんて言われたら断れるはずがないし、その後で見せた無邪気な笑顔もズルい。顔が熱くなるのも当然というものだ。

私はなのははやてほど、ユウに抱きつかれた経験はないのだから恥ずかしいのは仕方がないと思う。

「ふーちゃんは暖かですよ。ぽかぽかします」

……うん、私も暖かいよ、ユウ。

「それにしても、みんな管理局で働いてるなんてびっくりです。はっちゃんまでまほーつかいさんになってるなんて……っていうか、はっちゃんがふつーに立ってますよ!? 平気なんですか!？」

「……気づくのが遅いと思う」

「ホンマや。いつ気づいてくれるんかってドキドキしottaんよ?」

気づいてくれたごほうびやー、と、はやてはユウを抱きしめながら顔に頬ずりをする。ユウも、きゃーっ、と嬉しそうな悲鳴をあげながらはやてを抱きしめ返す。

ああ……ぬくもりが離れた……。

「足はもう完治してるんよ。心配してれてありがとうな、ゆーくん。実は私な、機動六課って部隊の部隊長をとるんよ。この部隊で一番えらいんやで?」

「そうなんですか? はっちゃんすごいです!」

キラキラとした尊敬の眼差しではやてを見るユウ。はやては笑顔でユウの頭をポンポンと撫でると、ユウから離れた。はやて、なんかいいな……。

「……私となのはも分隊隊長をしてるんだ」

「……ぶんたいたいちよう?」

ユウがポカンとしてる。はやてはニヤニヤしてる。

「機動六課のNO・2つちゅーことやで。フェイトちゃんは執務官でもあるんや」

「しつむかん……クロりんと同じやつですね！ ふえー、ふーちゃんもすごいです！」

はやてナイス！ あ、温もりが戻ってきた……。

……そうだ、ユウにあったら言わなきゃいけないことがあったんだ。

「ユウ、私ユウに言わなきゃいけないことがあるんだ。アリシアと、母さんのこと……ありがとう」

10年前、ロストログアであるジュエルシードをめぐって、母であるプレシア・テストロッサが起きたJS事件。ジュエルシードの頭文字を取って名づけられたこの事件で、ユウはアリシア・テストロッサの代わりに虚数空間に落ちた。母さんにある言葉を残して

「どういたしましたです。プレシアさんは元気ですか？」

「うん。母さんも管理局で働いてるんだ。ユウに会いたいと思ってるはずだから、機会があれば会ってあげて？」

「もちろん。楽しみです」

楽しそうに笑うユウを、私は抱きしめ返す。このぬくもりにするよ。

ゆーくんが本物つちゅーのは間違いないと思う。

ぜったいきよにゆーになるんやー、って豪語してたのをこんな形で思い出すことになるなんて、とんでもない驚きやね。

私にとってゆーくんは初めての友達で……初恋の人。二人つきりでいたいから、ゆーくんが友達を紹介してくれるっていうのを断ったのは今となっては甘酸っぱい思い出や。

ゆーくんが困ってるっていうのならできる限り助けになりたいって思う。けどそれは、ただの友人である八神はやての思いにすぎひん機動六課の部隊長としての私は、六課に害をなすものからみんなを守る義務がある。いや、義務なんかやない。六課のみんなは私の家族や。私は私の意志でみんなを、家族を守りたいって思う。ゆーくんが六課の敵になるなら私は……。

アカン、考えが変な方向に行ってもーた。でもな、悪い方に考えてまう原因には残念ながら心当たりがあるんよ……。ま、とりあえずそれは置いてこか。

内心を隠すようにニヤニヤとした笑みを浮かべる。と、隣のなのはちゃんがさつきから黙りこんでることに気づいた。

こっそりとなのはちゃんを覗き見る。

張り付いた苦笑い。視線は空に固定されていて、何か考え事やるか？

まあ十中八九ゆーくんのことやらなー。

この中で一番ゆーくんと付き合いが長いのがなのはちゃんや。ゆーくんが戻ってきたことを一番喜んでるのはなのはちゃんやろうし、一番戸惑っているのもまたなのはちゃんや。最初は感情が爆発して大胆な行動を取ってしもたけど、冷静になるといろいろと思うこともあるんやろ。

いっしょに年を取りたかった、ってのもあるんやらなあ。

「ユウに会いたいと思ってるはずだから、機会があれば会ってあげて？」

嬉しそうにゆーくんと抱きしめ合つとるフェイトちゃんを見る。

フェイトちゃんはゆーくんの事を9歳児とは見てないように思える。フェイトちゃんにとって、ゆーくんは同年代、とはさすがに言わんけど、対等な相手。頼れる、甘えられる相手なんやろな。

フェイトちゃんはそれが周りから見たら歪やって気づいてるのかな？

「ゆーくん、ゆーくんはどーやって虚数空間から戻ってきたん？報告では血まみれで発見されたってなつとつたけど」

楽しそうな二人には悪いけど、そろそろ話を進めよか。

「血まみれ！？ ユウ大丈夫なの！？」

「大丈夫ですよー。んー、じゃあ順を追って説明しますね」

ゆーくんはフェイトちゃんから体を離すと、コホンとひとつ咳払い。
い。

「あの穴、きょすーくーかんですか？ それに落ちて行つて、どんどん落ちていって、そしたら背景が一面虹色に光ってるレインボーな空間に出たんです。そこで……あつ」

ゆーくんは、忘れてましたー、と声を上げると、私らと反対側のベットの脇に降り立った。

「ど、どないしたん？」

「新しい友達ができたんです。呼んであげないと……」

呼ぶ？ という疑問を口に出す間もなく、ゆーくんは行動を起こした。

両の手の平を開いて前方にまっすぐ突き出し、目を閉じて数秒。そして、

「……おいで」

小さな、されど厳かな声音でつぶやかれる。

ゆーくんの前に展開する魔法陣。灰色の魔力光に、正三角形の中で剣十字の紋章が回転している形のそれは、

「ベルカ式！？」

ゆーくんが魔法を使えるのは知った。魔力光の色も記録に残っている。だが、ゆーくんが使ったのはミッド式の魔法やっただけ。それが、なんで……？

灰色の魔方陣がより強く輝く。と、中心に一匹の虎が姿を現した。3メートルほどの白い巨大な体躯に、黒い縞模様のホワイトタイガー。虎はその金の瞳で、ゆーくんのことをじっと見とる。

『獣を従えし咎人は虚空の海より舞い戻りたる』

私の頭に、ある詩の一節が浮かんだ。

「予言……、まさか……」

ゆーくんはゆっくりと虎に近づいていく。私ら三人は、それをただ見ているだけしかできへなかった。ゆーくんにしても虎にしても

も、静かに視線を合わせる姿はどこか神聖なものに感じられたからや。

ゆうくんが虎の首にゆっくりと抱きつく。虎は温もりをかみ締めるように目を閉じた。

「うん、わかったよ……キミに名前をあげる。キミの名前は……素直丸。スナオマルでどうかな？」

虎——スナオマルはグルウと一鳴きすると、ゆうくんの頬をぺろつと舐めた。

「ハハっ、くすぐりたいよスナオマル」

お座りの状態のスナオマルに嬉しそうに頬ずりをするゆうくん。両者とも気持ちよさそーや。

「ゆうくん、その子どーしたん？」

ゆうくとスナオマルがこっちを見る。……噛み付いたりせーへんよね。

「落っこちて行った先のレインボーな空間にこの子がいたんです。そして、ぼくはそこでスナオマルと戦ったんです」

「戦った!?!? ……ちょっと待った、虚数空間では魔法が使えへんはずよね?」

「はいー、素手と素手のガチンコバトルですよ!」

3メートルを超える虎相手に、素手で挑む9歳児。

「全っ然アカンやん!？」

「ギリギリでしたよー、あそこでカウンターが決まらなければ負けてました」

いや、笑顔で言われても信憑性が無さ過ぎるで……。

「グルルウ……」

悲しげに鳴くスナオマルに抱きつく力を強めるゆうくん。

「本当に、なんとか勝てたって状況でした。体もボロボロでしたけど、スナオマルが治してくれたんです」

だから、気にしてないですよ？ と、ゆうくんはスナオマルに微笑みかける。

「スナオマルに勝つことで、ぼくはこの子に認められ、主人に選ばれたらしいんです。レインボーな空間は、虚数空間に漂う人間を取り込んでスナオマルと戦わせるための檻なんだそうです。スナオマルが主人を得たことによってレインボーな空間は消滅。その際に虚数空間から弾き出される形で、脱出できたんです」

って、スナオマルが教えてくれました。とゆうくんは説明を締めくくった。

「……スナオマルって何者なん？」

虚数空間から脱出するだけでもスゴイことなのに、そこに住んっ

どつたなんてとんでもない話や。学者連中が聞いたら、飛びついてくるで。

これがホントの話なら、スナオマルはただの虎やないってことやけど……危険はないんか？

「うーんと、かつて人間たちからは『灰かむりの虎』と呼ばれていた。ってスナオマルは言ってます」

「灰かむりの虎ッ!？」

「はやて、知ってるの？」

ようやく硬直が解けたらしいフェイトちゃん。

いや、知つとるもなにも……。

「ベルカ自治領はもちろん、管理世界でも有名な童話や。フェイトちゃんも聞いたことくらいあるんちゃうかな。その昔まだ古代ベルカが存在しとった時代。古代ベルカの火山地帯に、一匹の虎が住み着いた。その虎はたまに人里に降りては、人間を襲つとったそうや。んで、それを見かねた、その時代の聖王がその虎を退治したって話なんやけど……」

首を傾げているフェイトちゃんは無視して、目の前でゆうくんに寄り添うスナオマルを見る。どうも聞いてた話のイメージと違う。ゆうくんにより懐いてるみたいやし、人を襲うような凶暴な獣には見えへん。

「流れは大体合ってるそうです。ただ、初めにこちらに手をだしてきたのは人間のほうだし、退治されたのではなく自分は封印された、って言ってます」

……襲ったんは事実なんや……。

「……大丈夫なん？」

私はゆーくんに問いかける。

理由はどうあれ、人を傷つけたことのある獣を目の前にして無警戒というわけにはいかへん。なのはちゃんとフェイトちゃんも身構えている。

「たしかに、スナオマルは昔悪いことをしたかもしれませんが。でも、今はもう大丈夫です。悪さなんてさせません。僕が、させません」

決意の込もった目が私を射抜く。9歳児のそれとは思えへん強い眼光。

信じてもええんかな……？

「ねえユウ……私も触っていいかな？」

フェイトちゃんがおずおずとゆーくに尋ねる。いくらゆーくんの言葉だからって警戒解くのも早すぎひん！？

いいですよー、と了解を得たフェイトちゃんはゆっくりと手を伸ばしスナオマルの頭にふれる。スナオマルはそれを静かに受け入れる。

撫でながら、うわぁ、もふもふだね……。そうでしょー。なんて和やかに会話する二人と、気持ちよさそうに目を閉じる一匹。

……なんかいろいろ構えとったのがアホらしく思えてきたわ。

「……なあゆーくん、私な、スナオマルのことに詳しい人に心辺りがあるんや。二人のこれからのこととかいろいろ考えなアカンやろ

？ やから、一緒にその人に会いに行ってくれへんか？」

いいですよー、って返事を聞きながら考える。灰かむりの虎にかんして、私は詳しく知つとるわけやない。やから、現状なんとも言えへん。それに、これはもはや私一人が判断していい問題ではなくなつてきとる。予言のこともあるしな。

記憶にあるままの、優しいゆうくん。自分でも警戒が薄れてきているのを自覚できる。ゆうくんの力になりたいって強く思つとる自分が、そのためにいろいろとどーしたらいいか考える始めた自分がある。

なあ、ゆうくん……ゆうくんはうちの敵やないよね？

始終頭をよぎるその想いは、疑問というよりも願望に近い気がした。

ミッドチルダ北部にある聖王教会の応接室で、私、カリム・グラシアは八神はやてがやってくるのを待っています。予言のこと話があると言われ、無理矢理時間を作ったのです。

予言。私の希少技能である『預言者の著書』で導き出される未来予測。

『預言者の著書』は最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書を作成するというもの。内容は古代ベルカ語で書き出されていて、解釈によって意味が変わることもある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけというもの。解釈ミスも含めれば、的中率や実用性は割とよく当たる占い程度でしかありません。しかし大規模災害や大きな事件に関して的中率は高く、ありがたいことに管理局や教会から高い信頼をいただいています。

今回の予言は、時空管理局の壊滅を示唆する内容で、機動六課の

設立はこの予言を危惧した人物らによっておこなわれました。ただ、この理由を知っているのは、管理局、聖王教会を合わせても極少数で、六課内で知っているのは、はやりだけです。

機動六課設立の表向きの理由としては、本来の古代遺物管理部隊としてのものとは別に、レリックと呼ばれるロストログアを専門に扱う部隊。しかし裏では、予言の内容を防ぐための先駆けの部隊として設立されました。

予言の内容はまだ漠然としたことしか解かっていませんが、今回はやての話では、予言の詩の一節に該当する人物を保護したとのこと。

その人物を連れて来るということで、そろそろ着いてもいい時間なんですが……。

と、噂をすればコンコン、とドアをノックする音が。

「どうぞ」

「失礼します。騎士カリム、ハラウオン提督をお連れしました」

ドアを開けて部屋に入ってきたのは、私の補佐をしてくれている秘書のシャツハ・ヌエラと、予想していた人物と違う、クロノ・ハラウオン提督でした。

「クロノ提督？ 今日では面会の予定はなかったはずですが……？」

シャツハは失礼します、と部屋を出て行ってしまふ。

私は立ち上がると、クロノ提督に椅子を勧めます。

「ああ、ありがとう。いや、こちらにもはやてから連絡があつてね。たまたま地上本部に用事があつてミッドに来ていて、せっかくだから時間を作つたんだ」

着席を確認してから、改めて椅子に座りなおした私は、クロノ提督と向かい合います。

クロノ提督は私と同じく、六課の後見人の一人でもあります。はやてとは昔馴染みであり、家族ぐるみで付き合いがあるそうです。目の前のクロノ提督は、普段の落ち着いた雰囲気と違って、どこかそわそわしているように見えます。

「お忙しいなら、通信でよかったのでは……？」

「ああ、その……はやてが保護したという人物が、ぼくの古い友人らしくてね、直接会いたくて時間を作ったんだ」

私としては、あのクロノ提督が、という思いが強いです。生真面目を絵に描いたように厳格な性格のクロノ提督から出た言葉とはとても思えません。

驚きが顔に出ていたのか、クロノ提督は照れたような表情を見せます。

クロノ提督もあんな表情するんですね……。
妙に気まずい空気を破ったのは、再びのノックの音でした。

「あ、どうぞ」

「失礼します」

「失礼するで」

「失礼しますー」

三つの声が部屋の中に響きます。シャッハ、はやてに続いて入室

したのは、パーカーに短パンの少年。腰ほどまである綺麗な黒髪に、肩になにか白黒の物体を乗せ、物珍しいそくに辺りをうかがう彼が報告にあつた花咲悠一君でしょうか。

彼、悠一君の黒曜石のような瞳がクロノ提督を捉えました。と、悠一君は輝くような笑顔を見せます。

「クロりん！？　クロりんですか！？」

「ああ、そうだ……キミは、ユーイチか？」

悠一君は、わく、くろくろくと大声を上げながら、立ち上がったクロノ提督に抱きつきます。いきなりのもので、おろおろしているクロノ提督。

「ユーイチ……キミは本当にユーイチなのか？」

「むく、クロりんまでそんなこと言うのですか？　ぼくはずっとぼくです！」

「あ、ああ、すまない」

むくれる悠一君に、あたふたするクロノ提督。こうしてみると、二人が中のよい兄弟のように見えてきました。

「……そうか……よく、戻ってきたな」

がしがしと、強めに悠一君の頭をなでるクロノ提督。悠一君はきやーっ、と嬉しそうに声を上げて、それを受け入れています。

「ただいまです、クロりん。そういえば、はっちゃんから聞きました

たよ、クロりん結婚したんですね。おめでとございます！」

「ありがとう。エイミィも心配していたからね、子供ともども会ってやってほしい」

「お子さんまでいるんですか！？ ふえゝ、クロりんがパパさんですか…… やっぱりいろいろ変わってるんですねえ……」

「ああ、10年は長かったよ……でも、変わらないこともたくさんあるさ」

クロノ提督は優しい笑みを浮かべます。悠一君が少しでも安心できるように、でしょうか。

「うん…… またみんなに会えて、ホントに嬉しいです」

「ぼくもだよ、ユーチ」

今日はクロノ提督の知らなかった一面をたくさん見ることができています。お茶を淹れてくれているシャツハも、チラチラと二人を覗き見ています。はやてもニヤニヤとした顔で、いえ、これは別段珍しいことではありませんね。

「カリム、今失礼なこと考えなかったか？」

「気のせいですよ、はやて」

ニッコリと笑顔ではやてに向ける。あなたはニヤニヤ顔も素敵ですよ、と心をこめて。

想いが伝わったのか、はやてがそれ以上追及してくることはありません

ませんでした。

（彼が、報告にあった花咲悠一君ですね？）

確信はあったが、私は念のため念話ではやてにたずねます。

（そうや。10年前虚数空間に落ちて、今日ミットチルダ東部の森林地帯で発見された彼が、花咲悠一君や。検査の結果では、10年前のゆうくと今のゆうくんは同一人物で間違いないと出とる。ただ、昔と今とで違うトコがいくつかある。まず、昔使ったのはミッド式の魔法やったのに対し、私らの前でベル力式の魔法を使って見せた。その魔法にしても、召喚魔法っぽい見たことないものやった。魔方阵も召喚魔法のそれとは違ったしな。それと、その魔法で呼び出した一匹の虎を従えとるってところは10年前と今とで違うところかな）

（……『灰かむりの虎』、ですか）

『灰かむりの虎』。かつて聖王フリーデリカ様によって封印された伝説の獣。たった一匹で多くの騎士を屠ったとされる災いの獣。その獣を、従える者が現れたのでしょうか？

（『災いの獣は蘇る。猛き王と共に。祝福を送ろう、新たな王の誕生である。されど、心せよ。其は咎人なり』ですか……）

（ん？ なんなんそれ？）

（『灰かむりの虎』の伝承ですよ……。かつて聖王フリーデリカ様は、未来予知の能力を持っていたと言われています。私の『預言者の著書』なんかよりも、もっと強力な能力です。先ほどの、フリ

「デリカ様が『灰かむりの虎』について詠んだとされる予言です」

（咎人ってのは、カリムの予言にもあったな）

（ええ、彼が予言の人物である可能性は高いです。ですが……）

クロノ提督と楽しげに談笑している悠一君に、咎人という表現は似合いません。フリーデリカ様の予言は、抽象的な表現が多く、最後には必ずと言っていいほどに『思考せよ。汝、考える者なり』で締めくくられています。解釈しだい、というのは私の予言と変わりません。

（なんにせよ、まずは様子を見ることが必要で、決断を下すには早計だと思います）

（そか、ならちゃんとお話せんとね）

ん？ はやてがまたニヤニヤしてますね。

「ゆ〜くん、ク〜ロりん。いつまでも二人っきりで話したらあかんよ？」

「ごめんね、はっちゃん。と謝る悠一君に、頬を引きつらせているクロノ提督。

ああ、そういうことですか。

「どうしたんですか、クロりん？ お顔が引きつってますよ、クロりん提督？ 端正な顔立ちが台無しですよ、クロりん・ハラウオン提督？」

「むー、ダメですよ、はっちゃん。クロリンをいじめちゃ」

ごめんなー、軽く謝りながら悠一君の頭をなでるはやて。渋い顔のクロノ提督に相反して、はやてはすごくイイ笑顔です。

はやてが私の隣、クロノ提督と悠一君が、机をはさんで対面の長椅子に座ります。それぞれの前にシャツハ淹れてくれた紅茶が置かれ、そのままシャツハは私の後ろに静かにたたずみます。

「ん、それではユーイチの話をする前に……」

クロノ提督が、私に視線を寄越します。

……ああ、大事なことを忘れてました。

「失礼、自己紹介がまだでしたね。悠一君、私の名前はカリム・グラシア。この教会で騎士をしています」

「騎士さんですかー、初めて見ましたよー。……えっと、ぼくは花咲悠一っていいいます。小学生をやっていました」

よろしく願います、と頭を下げる悠一君。こうして見ると、礼儀たたく、元気のいいただの9歳児にしか見えません。

「自己紹介も済んだところで、話を進めよう。ユーイチ、だいたいのことははやてから聞いた。虚数空間に落ちた後、『灰かむりの虎』が封印されている空間に取り込まれた。ユーイチはそこで『灰かむりの虎』と対峙し、これを降した。『灰かむりの虎』はユーイチと主従関係を結び、戦いで負った傷は『灰かむりの虎』の能力で完治。その後、空間の消滅と共に虚数空間から脱出。ユーイチがその空間で過ごしたのはわずかな時間だが、外の世界では10年の月日が流れていた。と、こんな形で合っているか？」

「はい。合ってますよー」

そこで悠一君は肩に乗せていた白黒の物体を机に降ろした。あれは……猫？

「この子が今の話に出てきた『灰かむりの虎』、名前はスナオマルです」

20センチほどのもこもこした物体——スナオマル。言われてみれば確かに虎に見えなくもないですね。あ、ぐるう、って鳴きました。……可愛い。

「……報告では3メートルを超す巨体だと聞いていたんだが」

スナオマルが悠一君に向かって小さく鳴きます。悠一君は笑顔でスナオマルを抱えてあげます。スナオマルはもぞもぞと悠一君の胸元に顔を擦りつけています。いいなあ、私も抱っこしたいなあ……。

「+-3メートルぐらい、自由に体の大きさ変えられるやつて。目の前で縮んどったから間違いないで」

尻尾をゆらゆらと揺らし、気持ちよさげに目を細めるスナオマル。抱っこしたら気持ちいいんだろなあ、頼んだら抱っこさせてくれるでしょうか……。

「そうか……その虎、スナオマルはぼくたちの知るところの『灰かむりの虎』で間違いないのか？」

確かに彼女は昔、『灰かむりの虎』と呼ばれていました

響いた声はこの部屋にいるどの人物のものとも違いました。

皆が一斉に声の発信源、悠一君の右手首を注視します。

悠一君本人も驚きながらパーカーの袖をめくると、そこには赤い宝玉のはめ込まれた金の腕輪がありました。

「腕輪が……喋った」

メインコアの生成にてこずりまして、ご挨拶が遅れました。主、私はアナスタシアと申します。以後お見知り置きを

アナスタシア。この名前には聞き覚えがあった。聖王フリーデリカ様が『灰かむりの虎』を封印する際に使用されたデバイスの名前。

主は『灰かむりの虎』に認めわれました。聖王フリーデリカに代わり申し上げます。『汝、猛王の名を名乗られたし。血塗られし手を握り返す者よ、罪の意味を知れ』……以上です

「もーおーに、つみ……？ ん、よくわかりませんが、キミはデバイスですね？」

はい。『灰かむりの虎』ともどもよろしく願います

「『灰かむりの虎』じゃなくて、スナオマルって呼んであげてくださいね。えーと、アナって呼んでもいいですか？」

お好きにお呼び下さい

よろしくねー、と赤い宝玉を撫でる悠一君。

『汝、猛王の名を名乗られたし。血塗られし手を握り返す者よ、罪の意味を知れ』ですか、また考えることが増えましたね。

「クロりん、この子は証拠になりませんか？」

悠一君は右手をクロノ提督に差し出します。アナスタシアは自己主張するかにように赤い宝玉をピコピコと点滅させています。

クロノ提督はうかがうようにこちらに視線を寄越します。アナスタシアはともかく、『灰かむりの虎』と猛王という単語を結びつけることができる人間は、聖王教会の中でも多くはありません。

悠一君の言っていることに間違いはないと思いますので、私は頷きで返します。

それにしても、聖王フリーデリカ時代の生き証人ですか……ぜひお話をうかがいたいですね。

「ああ。スナオマルのことはもう大丈夫だ。あとは、ユーイチのこれからのことなんだが……」

クロノ提督は言いよどみます。

……気持ちはわかります。隣のはやても表情を消して、口を固く結んでいます。

言い辛そうしている私たちを見かねたのか、悠一君が口を開きます。

「海鳴には帰れない、ですか？」

まさか、彼は理解しているのですか？

「……どうしてそう思うんだ？」

悠一さんとクロノ提督はまっすぐに視線を合わせます。

「ぼく、覚えてますよ。ロストロギアっていうのは、過去に滅んだ強い力を持った技術や魔法のことでしたよね？ 『古代』とつく地名に、王様ですら封印するしかなかった存在。スナオマルの扱いはロストロギアってことになるんじゃないですか？」

悠一君の言うとおりです。スナオマルはロストロギア、そしてアナスタシアは聖遺物としてあつかわれます。ただの民間人が所有する戦力としては、それはあまりに強大すぎます。そして地球は管理外世界。そんな場所にロストロギアを所有する人物を送るわけにはいきません。

「ぼくはスナオマルと離れる気はありませんから」

スナオマルも同意するようにぐるう、と鳴きます。

私も主以外に従う気はありません

悠一君は自分の置かれた状況を正しく理解しているのでしょう。その上で彼は手放さないと云っているんです。

……悠一君は本当に9歳なの？

と、今まで黙っていたはやてが口を開きました。

「なら、機動六課にこーへんか？」

「はやて！？」

なにを言い出すの！？ それは軽々しく薦めていい道ではないはずです！

はやては真面目な顔で悠一君と向き合います。冗談や何かで言っているわけではないみたいです。

私は慌ててクロノ提督を見ます。思案顔のクロノ提督は、やがて口を開きます。

「ユーイチはどうしたい？」

「……子供に選択させるのですか？」

言葉に陰が混ざります。なかば睨むような視線になってしまふ。

「……ユーイチはちゃんと考えて選択できる人間だ」

クロノ提督の言い分は理解できます。悠一君は子供ながら聡明な考えができるのは、今までの少ないやり取りでも理解しています。JS事件では、現在の『エースオブエース』、高町なのはと共に解決に貢献したという実績があるのも知っています。聡明な彼が、スナオマルと一緒にいるためにこういう選択をするのか、容易に想像できます。だからこそ、この場合彼に選ばせるのではなく、こちらからお願いするのが筋ではないのでしょうか？

悠一君がこちらを見つめているのに気づく。

彼はスナオマルを強く抱きながら、ありがとうございます、と感謝を述べた。

「スナオマルやアナと一緒にいたいっていうのはモチロンだけど、ぼくは、クロりんやはっちゃん、なのちゃんやふーちゃんの助けになりたいとも思ってるんです。だから……お願いします。ぼくを機動六課に入れてください」

悠一君が頭を下げる。はやてとクロノ提督がこちらを見ます。

……なんか、私が無理矢理反対してるみたいじゃないですか。

「はあ……わかりました。……悠一君が六課に所属できるように、私も全力を尽くします」

悠一君は、やったー、と声を上げながら椅子から立ち上がると、こちらに駆け寄って来て私に抱きつきました。

「ありがとう、カリムさん」

耳元で囁かれます。……少し、ゾクゾクしました。

見れば、はやてはニヤニヤと笑い、クロノ提督も笑みを浮かべながら紅茶を飲んでいます。

打って変わった穏やかな空間で、温もりを感じながら私は考えます。

こういった感謝のされかたも、たまにはいいものだな、と。

彼女に慈悲はなく。名がそれを表す

機動六課での初任務の翌日。

今日も今日とて、僕、エリオ・モンディアルと、同じくフオワード陣であるスバルさん、ティアナさん、キャロと竜のフリードの四人と一匹は、早朝訓練のため訓練場である陸戦用空間シュミレータに集合していた。

陸戦用空間シュミレータは基礎設計をシャリオさん、内容監修をなのはさんが行った特別訓練施設。さまざまな状況を再現可能な仮想シュミレータで、海上に張り出す形で設置されている。

そんな訓練場には僕たちの他に二人の人物。一人は、スバルさんとティアナさんが所属するスターズ分隊長で、僕たちの訓練を見てくれる教官のなのはさん。そしてなのはさんの隣に立つもう一人は、見覚えのない、僕やキャロと同じくらいの年の男の子。右手首に赤い宝玉のついた腕輪をはめて、左肩に縞模様の猫を乗せ、ニコニコと笑っている。

スバルさんやティアナさん、キャロのことを覗き見る。三人とも疑問が顔に浮かんでいる。

「みんなそろったね。じゃあ悠一君、自己紹介して？」

男の子は一步前が出る。

「はい。今日から機動六課に配属することになりました。花咲悠一です。よろしくおねがいします」

男の子——ハナサキさんは、ぺこりとお辞儀をした。

僕たち四人の顔には、大小の違いはあれど、驚愕が浮かんでいる。

「悠一くんは特例で、民間協力者という扱いで六課に配属されます。所属はライトニング分隊、コールサインはライトニング05、ポジションはフロントアタッカーになるよ。みんな仲良くしてあげてね？」

ティアナさんの口から、うそでしょ、とつぶやきが漏れる。

みんなが驚きで固まるなか、一番最初に回復したのはスバルさんだった。

「私は、スバル・ナカジマ！ 私もポジションはフロントアタッカーだから、わからないことがあったら何でも聞いてね？」

こちらにも負けずに、ニコニコした笑顔。

スバルさんは、ティアナさんの脇をヒジで突く。

「……私はティアナ・ランスターよ。……よろしく」

ティアナさんは難しい表情をしています。まあ気持ちはわからないくありませんが……。

でも、同じ年くらいの男の子が入ってくれるのは、緊張するけど嬉しいかな。と、流れるに次は僕かな……。

「エリオ・モンドイアルです。よろしくおねがいします」

「えっと、キャロ・ル・ルシエです。こっちは私の使役竜のフリードリヒ。フリードって呼んであげてください。えっと、よろしくおねがいします！」

「キュクルー」

「うわあ、竜ですか……初めて見ました、よろしくね」

フリードの首元に手を伸ばし、優しく撫でる。フリードは嬉しそうに一鳴きすると、ハナサキさんの指に身体を擦り付けた。隣ではキャロが、フリードが初対面の人に懐いてる……、と驚いている。

と、ハナサキさんの肩にいた猫が、くるう、と鳴いた。

「うん、わかってるよスナオマル。えっと、この子がぼくのデバイスで、アナスタシアっていいいます」

右手首を胸の高さまで上げるハナサキさん。アナスタシアと呼ばれるデバイスは、よろしく願いしますと、赤い宝玉をピコピコと点滅させた。

「そしてこの子がぼくの守護獣の、スナオマルです」

フリードにしたように、スナオマルの首元を撫でてあげるハナサキさん。スナオマルはお返しとばかりに、ハナサキさんの頬を舐める。

仲の良さげなハナサキさんと、スナオマル。一人と一匹に、スバルさんが近づいていった。

「わあ、可愛いね。ネコかな？」

「この子は虎ですよー、今はちっちゃいですけど、本当は3メートルぐらいあるんです」

「へえ……ね、ね、抱っこしてみてもいいかな？」

いいですよー、とスナオマルをスバルさんに手渡すハナサキさん。

スバルさんは両手で抱えると、もふもふだあゝ、と喜びの声を上げる。

と、ハナサキさんがこちらを見ていることに気づいた。

「どうしましたか？ ハナサキさん」

とてとてと軽い足取りでこちらに近づいてくるハナサキさん

「もっと気軽に呼んでくれてかまいませんよ。敬語もいらないです」

「そう？ じゃあ、ユウって呼ばせてもらおうかな？」

はいー、と笑うユウ。

同じ年の子と接する機会がキャラとぐらいしかない僕にとって、
同年、しかも同性とどう接するべきか心配であったが、どうやら
杞憂で終わりそうだ。

「ぼくは、じゃあ…… エリりんって呼うんでもいいですか？」

エリりん！？ …… あだ名というやつだろうか？ そんな呼ばれ
方は初めてで、どう返していいか迷ってしまう。

ダメですか？ と悲しげに首を傾げるユウに、僕は思わず、い、
いいよ……。と、うなずいてしまう。

「ありがとー、エリりん！」

ぎゅっ、と抱きしめられる。

そこまで喜ばれると、こちらも照れてしまい、頬が赤くなるのを
自覚する。

いや、べつに嫌ってわけじゃなくて、ただ初めてのことで、びっ

くりただけで、むしろ嬉しかったり……。

ユウが離れても顔は熱いままで、少し恥ずかしい。

僕から身を離れたユウは隣で啞然としていたキャラ口に視線を移した。

「キャラちゃんも、キャラりんって呼んでもいいですか？」

「えう！？ キャ、キャラりんですか！？ ……え、えっと、はい……好きに呼んでください」

僕にしたように、ありがとー、とキャラ口に抱きつくユウ。人見知りの気が強いキャラ口は真つ赤な顔であたふたとしている。……僕も他の人から見たらあんな感じだったのかな……でも。

慌てている人を見ると逆にこちらが落ち着いてくるというもので、幾分か冷静になることができた。

エリりんか……ユウとは、友達になれたら嬉しいな。

そんなことを考えながら、僕は、あうあうと意味のなさない言葉を漏らすキャラ口に助け舟を出すために動き出すのであった。

子供三人で盛り上がってるの見ながら、私、ティアナ・ランスタ―は考える。アイツ、花咲悠――――ユーイチのことを、だ。

このタイミングでの編入。それも民間協力者としてフォワードに所属なんていうのは、たとえ特例という言葉で飾ろうとも、これは異常すぎる。逆に言えば特例を出すだけの理由がアイツにあるということだ。

名前の響きは高町教導官や八神部隊長に似ている。二人は管理外世界出身だったから、その関係者だろうか。

一見するとただの子供に見える。エリオともすぐ仲良くなってい

るようだし、キャラは、まあ、本人のあがり症もあるだろうから、すぐには無理だろうがいずれ打ち解けるだろう。

性格は直情型。エリオが大人びているだけで、これは年齢から考えると当然のことだろう。同じような性格のスバルとは気が合うんじゃないだろうか。

守護獣という単語から察するに扱う魔法はベルカ式か。受け答えがしっかりしているところを見ると、アイツのデバイスはアームドデバイスだろう。その年で、しかも民間人が自分のデバイスを持っているのは珍しいことだ。それだけでアイツが特別たる理由になる。思考に没頭していた私は後ろからやってくる人物に気づかなかった。

「おー、やっとなるかね諸君」

この声は八神部隊長！？

背後から掛けられた声に、私は慌てて敬礼を返す。エリオやキャラも私を見習って敬礼をするが、スバルはスナオマルを抱えているため、変な格好になっている。

もう、なにやってるのよばかスバル！

私の非難する視線に気づいたのか、スバルは苦笑いだ。

「みんな、そないかしこまらんでえーでー。楽にしてやー」

言われたとおり、みんな敬礼を解く。

グイータ副隊長とシグナム副隊長を連れ立った八神部隊長はみんなの態度に満足したのか、うんうん、と、うなずくとユーイチに視線を向けた。

「どーや？ ゆーくん。みんなとは仲良くやれそうか？」

「はい。みんないい人そうですよ。二人も友達ができました。でもはっちゃん、ケジメは必要ですよ？　こーしこんどは、ダメだと思えます」

「部隊長の私がええってゆーとるんやから、ええんやで？」

ゆーくん！？　はっちゃん！？　……二人はどういう関係？　やっぱり故郷の知り合いとかかしら。

あ、友達と呼ばれたエリオとキャロがはにかんでる。……よかったじゃない。

「この二人を紹介しとこと思ってな。この二人が昨日話した私の家族や」

シグナム副隊長とヴィータ副隊長が前に出る。

六課のビッグネーム二人がじきじきに挨拶に来るなんて、なんて待遇なのよ……。

「シグナムだ。怪我がないようで安心した。主から話は聞いている、よろしく頼む」

「ヴィータ、だ。はやての頼みだからな、まあ面倒見てやるよ」

ん？　今ユーイチの顔が一瞬陰ったような……。

「ちょうどええ機会やから、私の口からゆーくんについて説明しとこか」

お願いしますー、と軽い口調のユーイチ。どうやら私の見間違いだっただようね。

これは都合がいい、と私は八神部隊長の話に全神経を傾ける。
八神部隊長は、コホンと前置きを一つ。

「ゆーくんは私やなのはちゃん幼馴染なんや。10年前のJS事件のとき、ゆーくんは虚数空間に落ちた。落ちていった先は、外とは時間の流れの違う空間やった。中での一時間が外では約5年。これは確かな筋からの情報や。中で二時間ほど過ごしたゆーくんが外に出てみたら、10年の時がながれとったちゅーわけや。出てきたところを保護したんがシグナムで、昔のよしみで私が引き取って、ゆーくんはここにおけるわけや。みんな仲良くしたってや?」

スバルたちはユーイチに同情の視線を送っているが、八神部隊長の話には、つつこみどころが多すぎるだろう。

大きいところで二つ。時の流れの違う空間はいいとして、虚数空間から脱出した方法が不明だ。保護した人物を戦力として六課に組み込むのもわからない。特例という形をとってまで、だ。

わざとぼやかしてあるんだろう。ならば今ここで私が尋ねても無駄だろう。下手に情報を与えられたため、余計に混乱した。

だが、とどのつまり、アイツは特別な存在だということだろう。

六課にふさわしい特別な存在。凡人の私とは、違う。

でも、私には諦められない目的がある。負けられない理由がある。自分に高町教導官やスバルたちのような才能がないことはわかりきっていたことだ。今さら特別な存在が増えたって、私のやることに変わりはない。

と、ユーイチがシグナム副隊長に近づいて行く。

「シグナムさん、助けていただいたお礼がまだでしたので、ありがとうございます」

「いや、気にすることはない。当然のことをしたまでだ」

そこで私は気づいた、ユーイチの口元は笑みの形だが、目が笑っていない。

「シグナムさんやヴィータさんのことは、はっちゃんから聞きました。はっちゃんが巻き込まれた事件のことも」

「……何が言いたい？ 言いたいことがあるなら、ハッキリ言ったらどうだ？」

空気が重たくなっていく。なんであのガキは初対面の、しかもシグナム副隊長にケンカ腰なの！？

「いやね、友達が危険な状態にあったというのに、その事実さえ知らず助けになれなかった、って、なんとも間抜けな話だと重いませんか？」

ユーイチはそこでいったん区切ると、シグナム副隊長の目をまっすぐに見据えた。

「はっちゃんを守ってるというなら、ぜひお力を見せていただきたいです。お手合わせ願えませんか？」

って、マジでケンカ売ってんじゃない！？

「……いいだろう、お前がその気なら、私には断る理由がない。それに……」

シグナム隊長の視線が私を捉える。

「お前の实力を見たがっている者もいるみたいだから」

疑いの視線に気づかれていたのか。私は気まずくなって視線を逸らす。

「ちょ、ちよつとシグナムさん、何考えてるの！？ いきなり模擬戦なんて……」

「落ち着きや、なのはちゃん。ゆーくんの实力を知っておかんとアカンのは事実やろ？ ちゅーわけで部隊長の名を持って、模擬戦を許可する」

高町教導官は、はやてちゃん！ と声を上げるが、八神部隊長はそれを平然と受け流す。

こうして、ユーイチ対シグナム副隊長の模擬戦の火ぶたが切つて落とされたのだ。

廃墟の街を模したシュミレータで、私、シグナムと花咲は対峙している。

奴は主はやてのご友人だった男。確かに奴の境遇には同情すべき点はあるが、同時に不明確な部分も多い。

花咲は主はやての後押しもあつたが、自ら志願して六課に配属されたと聞いた。主はやての考えを否定するわけではないが、私は自身の目で奴の心算を判断する必要があると考えている。

私は、言葉で語らうのは得意ではない。互いを理解するには、武を競い合わせるのが一番だ。その点では今回の機会は御あつらえ向きと言えるのだが……。

騎士甲冑を纏い、片手でレヴァンティンを携える私の前で、柔軟

を終えた花咲は静かにたたずんでいる。

「どうした？ 速くデバイスを起動させろ。それともその腕輪はただの飾りか？」

花咲は足を軽く前後に開き中腰に、右腕は脇を締め引くように腰に、左腕は軽く前に垂らすように構えている。

安い挑発には乗らぬ、か。

「これはぼくの憂さ晴らしの場です。様子を見るのは貴女ではありません。さあ、かかってきなさい」

真っ直ぐにこちらを見据える。構えにも揺らぎはない。逆に挑発してくるとは…… ならば私はあえて乗ろう。

「ほざいたな、後悔するなよ！」

吼えて、私は駆け出す。身体強化は使わずに、されど数歩で距離を詰める。

魔力を纏わず、右手に握ったレヴァンティンを峰打ちで振り下ろす。

反応がないのなら寸止め。だが！

花咲は左腕でこちらの攻撃を阻まんとする。

防御を固めるのなら、腕一本はいただく！

骨折程度なら、シャマルが治せばいい。

レヴァンティンは花咲の左腕に振り下ろされ、

「な、に……？」

鈍い音がした。花咲の腕を砕くはずのレヴァンティンは、その腕

に阻まれている。

私の腕に伝わってきたのは。肉を、骨を殴った感触ではなく、まるで、

岩を殴ったかのような……。

不覚にも嘔然としてしまった。そのような隙を見逃す者がいるはずもなく、花咲は一步踏み込み右手で掌底を打つ。その掌底は騎士甲冑に阻まれ、

「かつ……！」

されど衝撃が右脇腹を貫く。

危機感が過ぎる。込み上げる吐き気を飲み込み、折れそうになる身体に無理矢理力を入れる。

次撃の構えをとる花咲から私はバックステップで距離を取る。

……どうやら、追撃はないようだ。

「ハッ……おどろいたな」

腹部が痛むが、動けないほどではない。

しかし解せない。騎士甲冑にしろバリアジャケットにしろ、物理的衝撃の一切を遮断する、はずなのだが……。

疑問が顔に出ていたのか、花咲が口を開いた。

「浸透頸、まあモドキですね。簡単に言えば内部破壊の技です。バリアジャケットの特性は、ぼくも知っていますから。ちなみに、ぼくは『移り気』と呼んでいます」

「……攻撃が通らなかったのは何故だ？ 魔法を使っているのか……あるいはこれもなにかの技か？」

「『移り気』を含め、ぼくの持つ六つの奥義が一つ『我慢』を使いました！」

なるほど。理解はできない。だが、納得はしよう。奴の攻撃に対して、騎士甲冑は意味を成さず、肉体は物理攻撃に耐性がある。つまりはそういうことだ。

「そうか……非礼は詫びよう。貴様を侮り過ぎていたようだ。私も心しよう、騎士としての誇りを持って貴様の相手をする。ならば貴様も全力で来い」

「貴女が一撃を入れられて本気になったのなら、ぼくに言葉だけで促すのは見当違いでは？」

「フ、ハハハッ！ そうだな、それが道理だ！ ならば」

全身に魔力を巡らせ、レヴァンティンにも魔力を纏わせる。

口角がつり上がるのが分かる。心が躍り、生意気な口ぶりが私をたぎらせる。

そうだ、見極めねばならぬ。奴が真に強者たる存在かを！

「ヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナム！ 参る！！」

飛びつくようにレヴァンティンで斬りかかる。花咲は半身をずらすだけでかわしてみせる。そしてカウンターで放たれる左掌打。

受ける理由はない、私は半歩下がって避ける。リーチは短いため、避けるのは難しくない。が、それ故に一つ一つの動きが素早い。

時に袈裟斬り、時に横薙ぐ。フェイントを混ぜ、一撃に必殺の力を込める。

花咲はいなし、掻い潜り、身体の小ささ、固さを活かしてこちら

の斬撃をことごとく避けてみせる。そして、斬撃の合間を縫うように放たれるカウンター。こちらの防御を無視する一撃は、容易に受けるわけにはいかず、私は身を捻る。すると間髪入れず放たれる次撃。掌を、拳を、肘を、肩を、膝を、足を、全身を使い、ギアを上げるように速くなつていく連撃は、ハッキリ言つて脅威だ。

低い位置から、軽業師のようにさまざまな角度から放たれる攻撃。捌きにくい事この上ないが、小さいが故に弱点もある。

レヴァンティンの大振りに、懐に入り込むようにかわそうとする花咲。私はそれを読み、左足で蹴りを放つ。

ガードは間に合ったようだが、。勢いを殺しきれず、花咲の身体が浮く。

小さい故に、奴の体は軽い。

蹴り上げた足で踏み込み、前へ。その勢いのまま、

「ハアアアッ！」

両手で握ったレヴァンティンで突く。

まともに腹に受けた花咲は吹っ飛んでいき、轟音を立てて瓦礫の山に突っ込んだ。

モクモクと埃が舞う。

よい入り方をしたが、これで終わると思つていない。改めてレヴァンティンを構えなおす。

瓦礫が音を立てて崩れる。中から、パラパラと瓦礫の破片を落としながら花咲が出てくる。服はボロボロで、されど足取りは軽く、肉体へのダメージは見受けられない。

うー、と、うめきながら、不満顔な花咲に私は声をかける。

「どうやら、我慢も限界のようだな」

「ぼくの体は、姉上の加護を受けていますから、岩のように固いん

です。でも、痛みはちゃんとあるんですよ？　でも、まだまだいけます！」

やはり、意味がわからない。

だが、そんなことはどうでもいい。これよりこの戦いは、一つ位を上げるのだから。

より強く、抗ってくれることだろう。

視線が合わさる。互いに笑みを浮かべている。言葉にしくなくても昂ぶっているのが分かる。私の心も、正しく花咲に伝わっているだろう。

「さあ、行くよ、アナ」

我が君のお心のままに、と答えるアナスタシアを花咲は高く掲げる。

そうだ、そこなくては！

「アナスタシア、セツトアップ！」

灰色の魔力光が花咲からあふれる。それも一瞬、次には騎士甲冑に身を包んだ花咲が立っていた。

重厚かつ鋭角なフォルムの白銀の鎧。ところどころ金の装飾の施され、見るものを魅了する美しさを兼ね備えている。頭部以外を丸々覆い、長かった黒髪は、ポニーテールの形にまとめられている。そして右手に握られた長槍。２メートルを超える白銀の柄に、同じく白銀の機械的な穂先。穂先の脇には金色の二枚のウィングが付けられている。

しかし、デカイ。１３０前後の身長の花咲に対し、アナスタシアは二倍以上の長さを誇る。花咲の体格で扱うには少々骨が折れるだろう。

「槍は、コルセスカに近いですね。この鎧は……？」

私がマスターの身体に合わせてデザインさせていただきました。よく、お似合いです

軽く身体を動かして動作を確認する花咲。見た目に反して動きは滑らかで、行動が阻害されるということとはなさそうだ。騎士甲冑である以上重いということもないのだろう。

「うん、ありがとう。えっと、アナ、キミの形なんだけど腕輪の状態に戻る？」

……なぜですか？

「経験的にも体格的にも、さすがに長柄を扱うのは無茶ですよ。練習するまでは待ってくださいね？」

……わかりました。待機フォルムでサポートさせていただきます。でも、必ず練習してくださいね？ 約束ですよ？

トーンの下がった音声で話すアナスタシアは、花咲の、約束ですー、の言葉を受けて腕輪に形を戻した。

それにしても、感情豊かなデバイスだと思う。聖王が扱ったとされるデバイスで、融合派生試作型アームデバイスといったか。

優秀な魔力資質を持ちながら、肉体的にそれを扱えぬ者からリンカーコアを摘出し、デバイスに移植する。ユニゾンデバイスのように直接的な融合はないが、所有者のリンカーコアとデバイスのリンカーコアをリンクさせ、出力を増幅させる。扱うのには適正がいるが、ユニゾンデバイスと同様、高度な意思を持ち、魔法の管制、補

助を行う。

しかし、リンカーコア摘出、移植の難しさ。融合事故こそないが、魔力の共鳴、反発による暴走など危険性が高かったため、数少ない成功例が伝承として伝わり、現物は存在しないとされていた。

それが今、私の目の前にいる。刃を交わそうと対峙している。なんと心躍ることだろうか。

「さて、お待たせしました」

「いや、かまわんさ。さあ続けるぞ！」

互いに駆け出し、私たちは再び激突する。

「スゴい……」

ユーイチとシグナム副隊長の戦いを見ながら、スナオマルを抱いた私、スバル・ナカジマは思わずつぶやいていた。

二人の戦いから目を離せない。

魔法を使い出したユーイチの攻撃は積極性を増した。

シグナム副隊長の逆袈裟斬りをいなし、懐に入り込んだユーイチは右手で掌打を叩き込む。胸で受け、仰け反るシグナム副隊長の右脇腹にさらに一歩踏み込んだユーイチの右肘が入る。

追撃で放たれた左拳は、されどレヴァンティンの柄で弾かれる。体勢を崩されたユーイチの即頭部に、左手で握った、魔力で包まれたレヴァンティンの鞘が叩き込まれる。

シグナム副隊長は続けてレヴァンティンで突きを放つが、ユーイチは体勢を低くして避ける。シグナム副隊長はそれとどまらず、更に斬撃を繰り返す。

目覚ましく入れ変わる攻防に、一瞬たりとて目が離せない。
最初はユーイチのことを心配そうに見ていたエリオとキャロも、
今では真剣な表情で行く末を見守っている。

「しかし、アイツすげーな。本気だしてねーとはいえ、シグナム
相手にあそこまでやり合うなんて……アイツまじで9歳か？」

「うん、悠一君はちょっと特殊な環境で育ったから……」

なんだよ、それ？ と聞き返すヴィータ副隊長に、なのはさんは
答えることなく黙り込む。ヴィータ副隊長はそもそも興味が薄かつ
たのか、深く聞き出すことはせず、模擬戦へ視線を戻した。
と、なのはさんが私に目を向けた。

「スバルだったら、シグナムさんとどう戦うかな」

「私だったら……」

私じゃ、ユーイチのようにには戦えない。たしかに私はシューティ
ングアーツを用いた近接格闘主体の戦い方で、戦法としてはユーイ
チと似ている部分がある。だけど私じゃユーイチのようにシグナム
副隊長の攻撃は捌けない。

「私なら、まず距離を取ります。タメを作って、一気に懷に飛び込
みます。……でも、今の私じゃまだシグナム副隊長に一撃を入れる
ことも難しいと思います」

これが私の正直な意見。でも、あくまで今はまだ、だ。
なのはさんの教導を受けて、新しい仲間であるユーイチの戦い方
を見て、私はもっと強くなれるはずだから。

「じゃあ、あの二人のどっちが勝つと思う？」

「それは……」

ユーイチとシグナム副隊長は一進一退を繰り返しているように見える。後半に入ってから、どちらも攻撃を貰うようになっていた。それでも、その多くは騎士甲冑で弾かれ、拳に剣に阻まれ、紙一重で避けられている。

と、答えたのは、なかなか考えが纏まらない私ではなく、

「シグナム副隊長だと思います」

ティアだった。それも、キツパリと。

なのはさんはティアに、どうしてそう思うのかな？ と聞き返した。

「空戦や遠距離からの攻撃は、シグナム副隊長の性格を考えると、ありえません。あくまで同じ土俵で戦おうとするはずです。だから、その考えは置いておくとして……。近接戦闘の技術でいえば、ユーイチはシグナム副隊長に負けないものを持っていると思います。でもそれだけです。体格で勝っている上に、扱っている武器でも、シグナム副隊長が有利です。魔法技術でいえば、ユーイチが圧倒的に不利でしょう。二人とも使ってる魔法は、身体強化と、魔力付加のシンプルな物だけです。シグナム副隊長はユーイチに合わせているだけでしょけど、ユーイチはそれ以外の魔法が使えない、あるいは使う考えが浮かんでいない」

そこで一端区切ると、ティアは模擬戦に視線を戻す。

「魔力を扱うという点では、シグナム副隊長とユーイチの間には天と地ほどの差があるんじゃないでしょうか？　そう考えると……互いが勝負を決しようとするとき、勝つのはシグナム副隊長です」

結果はすぐに出るようですよ、と続けられた言葉に、私も模擬戦に視線を戻す。

私の目に映ったのは、距離を取って対峙するユーイチとシグナム副隊長だった。

幾度となく斬り合い、殴り合った私たちは、距離を置いて視線を交わす。

花咲の騎士甲冑はボロボロ、美しかった装飾はもはや見る影もない。対して私は、騎士甲冑に傷こそ少ないが、それは内部にダメージが入っているからだろう。

そして何より、互いに浮かぶ獰猛さを増す笑み。

たまらない、たまらなく楽しいのだ。こうして力を交わすことが！　いつまでもこうやって戦っていたい。

だが。

今ではない。花咲はまだ未熟だ。

この先、まだまだ強くなるだろう。

ならば、すべきことはいたずらに戦いを長引かせ、つまらない終わり方をせぬよう。

今、この時の全力を私に見せてくれ！

この想いは伝わるだろうか？　私は瞳だけで物語る。花咲は確かに頷いた。

ああ、そうだ……もはや言葉など無粋！

花咲は体勢を低くし、右腕を引き腰横に、左腕は真っ直ぐ前に。右腕付加された魔力量が増え、強く光る灰色の魔力光に包まれる。

もはや小手先の技などいらぬ、ただ全力でぶつかるのみ！

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

Explosion.

下段に構えたレヴァンティンから、ガシヨンとつばの部分がスライドし、空薬きょうが排出される。

両手に持ち直したレヴァンティンの刀身を、炎が包む。

互いだけを見つめ、同時に駆け出す。

距離は一瞬でゼロに。そして、

「紫電——」

SteinFaust.

「——閃！」

「ぐー、ぱんち！」

レヴァンティンと花咲の拳が激突する。

拮抗する力。

紫と灰色の余剰魔力が、奔流となって爆散する。

「ダアアアアリヤッ！」

花咲が吼える。

レヴァンティンの刀身にヒビが走る。

だが、それだけだ。

「ハアアアアアッ！」

気合一閃。

叫びとともにレヴァンティンを振り下ろす。

炎が花咲の身体を舐め、衝撃が白銀の騎士甲冑を砕く。

勢いよく吹き飛んだ花咲は、仰向けに地面を滑る。

「ハッ……フウ」

レヴァンティンを握る手に痺れが残っている。身体を心地よい疲労感が包んでいる。

わずかに残る高揚感と清々しい笑みとともに寝転がったままの花咲に歩み寄れば、花咲の嬉しそうな顔がある。

「ふがないなー……うん、ふがない」

空中を眺める花咲は、やはり清々しい笑みを浮かべ、

「シグナムさんみたいな人がはっちゃんに付いていてくれるなら、安心ですねー」

楽しそうに告げるのだった。

「そうか……立てるか？」

私が差し出した左手を掴む花咲を、私は引つ張り起こす。

立ち上がった花咲に、元のサイズに戻ったスナオマルが寄り添うように近づいて来る。花咲の頬を舐めるスナオマルに、心配してくれてありがとう、と頭を撫でてる花咲。

先ほどまで死闘を繰り広げたとはおもえないほど、和やかな空気だ。

スナオマルの身体に一度頼ずりをする、花咲はこちらを向いた。

「シグナムさん……ん、ナムナムさんって呼んでもいいですか？」

「私にまであだ名をつける気か？ まあいい好きに呼べ」

「では、お言葉に甘えます。えっと、ナムナムさん。ぼくのわがままに付き合っていただいて、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる花咲。

「気にするな。私も楽しんだしな」

偽らざる本心を言葉にし、告げると花咲は顔を上げる。

埃やススで汚れた顔には、しかし綺麗な微笑みが浮かんでいて。

なんとなくではあるが、主はやてが花咲を気に掛ける理由が分かる気がする。

気がつけば、自然な動きで花咲の頭に手を伸ばす自分がいるのだった。

彼女に慈悲はなく。名がそれを表す（後書き）

うちのシグナムさんは、シグシグではありません。

南無南無三です。

ツンデレは好きですか？（前書き）

私は好きです。大好きです。

ツンデレは好きですか？

早朝訓練の後、汗を流した僕たちは朝食を取るために再び集合していた。

機動六課内の食堂。

幾人もの隊員たちがにぎやかに食事をしている一角で、僕は、エリオはフォワードの皆さんと、新しい仲間であるユウ、スナオマルの、計五人と二匹で一つのテーブルを囲んでいた。

僕を挟む形で右にキャロ、左にユウ、向かって右にティアナさん、左にスバルさんが座っている。

それぞれの前には朝食が置いてある。ティアナさんがBLTサンド、ユウがオムライス、キャロがトースト、スクランブルエッグ、ベーコン、サラダのモーニングセット、そして僕とスバルさんの前にはパスタの山。僕のがナポリタンで、スバルさんのが山菜とキノコを使ったパスタだ。

「スバルさんとエリりんは朝からそんなに食べるんですか……？」

ユウが不思議そうに聞いてくる。

変かな？ 朝あまり動いてない分、今日はいつもより少なめなんだけどな……。

そのままをユウに伝ええると、スゴイですねー、と感心された。スゴイなんて……、少し恥ずかしいな……。

照れを隠すようにパスタを口に運ぶ。

うん、今日もおいしい。

僕を皮切りに、皆さんそれぞれが食事を開始します。

ユウとキャロは、自分の食事をそれぞれスナオマルとフリードに分け与えます。

……トラってオムライス食べれたんですね。……あ、守護獣だっ

た。

「それにしても、さっきの模擬戦は凄かったよね」

スバルさんが口をモゴモゴさせながら言う。少し、はしたないです。

「シグナム副隊長とあれだけ戦えるなんて、凄い事だよ！」

「ん、結局負けちゃいましたし、ナムナムさんも本気じゃなかったでしょうから……でも、次は負けません！」

スプーンを握り締め、意気込むユウ。それを見るスバルさんの目がキラキラと輝いている。

「ね、ね、ユーイチ。私とも模擬戦しょ？」

「あ、僕もお願いしたいな。ユウ、僕とも模擬戦してくれない？」

先ほど行われたユウとシグナム副隊長の模擬戦を思い出す。

正直、圧倒された。楽しそうに互いを傷つけ合う二人に。

僕にも強くなる喜びはある。強くなるための努力を惜しむつもりはない。けど戦いの中であやって笑い合うという感覚は分からない。

ただ、知りたいって思った。ユウは僕のことを友達って言うてくれた。友達と呼べる存在が少ない僕は友達がどういったものかもよくわからない。何をもって友達とするのか、友達とは何をするものなのかを、僕は知らない。でも、それが良いものだとはフェイトさんから聞いた。漠然としたイメージで、ただ憧れがあった。

そして、たしかに嬉しかったのだ。ユウが僕のことを友達だと言

ってくれたことが。

恥ずかしいような、嬉しいような、そんな気持ちが込み上げてきて、ユウと友達でいたいと、強く思ったんだ。

いいですよー、と笑うユウを見る。

期待してしまっている事があるんだ。

ユウはなのはさんや、はやて部隊長と幼馴染だという。とするならば、フェイトさんとも交友があったのかもしれない。フェイトさんの秘密も知っているのかもしれない。そして、ユウはそれを受け入れているのかもしれない……。

ただ、確かめる勇気は僕にはない。けど、きっといつかは、って思うんだ。

ユウと目が合う。なんだか気恥ずかしくて目を逸らしてしまう。

ちらりと、ユウの顔をうかがう。よかった、どうやらあまり気にした様子はなさそうだ。

「ところで、なんでなのちゃんたちはあんなトコで食べてるんですか？」

一緒に食べればいいのに、とユウは離れた所にあるテーブルに視線を向けます。

そこでは、なのはさん、はやて部隊長、リインフォース・？曹長、ヴィータ副隊長の四人が食事を取っている。

「……気を使わせないようにしてくれてるんですよ。てか、アンタこそ部隊長たちと一緒に食べた方がよかったんじゃないの？」

ティアナさんがそっけなく言います。なんでしょう、今日は、ティアナさんの機嫌が良くない気がします。

「んー、ぼくはみんなとご飯が食べたかったですから」

大勢で食べた方が美味しいのになー、と、つぶやくユウは少し寂しげです。

言葉の内容自体は喜ばしいことだが、素直に喜んでいいものか悩んでしまう。

「まあ、私たちに聞かせられない話とかしてるかもしれないし」

スバルさんがフォローを入れます。でも、スバルさんが一番なのはさんと食事をしたがっているのを、ユウをのぞいた、この場にいますみんなが知っています。

……スバルさん、空気とか読めたんだ……。
少し、驚きました。

「ね、ユーイチ。ユーイチはなのはさんの幼馴染なんだよね？ 小さい頃のなのはさんって、どんな感じだったの？」

けど、欲望には忠実なようだ。

「なのちゃんは、大人しい子でしたね。運動がちょっと苦手で、寂しがりやで、けどすごい頑固なところがあって、友達想いで……友達泣かされたら、真っ先に泣かした子を殴りに行く子でした。あとはっちゃんはおっぱいがとにかく好きな子でした」

最終的に大人しいというイメージを180度くつがえす結果になったけど、友達想いなところとか、頑固なところとかはフェイトさんからも聞いたことがあって、なのはさんらしいと思った。

後半はスルーで。

「ユウくんは、フェイトさんとも幼馴染なんですか？」

「はい。なのちゃんやはつちゃんと違って付き合いは短いですけど、ふーちゃんも大切な友達です」

……ねえ、ユウ？ ユウは知ってるのかな？ フェイトさんやぼくの出生の秘密を？ 知っていてなお、フェイトさんを大切な友達だつて言っているのかな？

想いはけつきよく口に出ることはなく。ぐるぐると僕の胸中に渦巻くのだった。

私、キャロ・ル・ルシエは隣で固い表情をしているエリオくんを見ます。

同じくフェイトさんに保護してもらっているといっても、エリオくんと付き合いはそれほど長いわけではありません。付き合いでいったら、スバルさんやティアナさんとそう変わりません。でもエリオくんは同じ年でお友達とも呼べる存在。六課内では一緒にいる機会が多く、人見知りをしてしまう私のこと優しくフォローしてくれます。

いつのまにかエリオくんの存在は、大切と呼べるものになっていました。

だからエリオくんが悩んでいるのなら力になってあげたいと思うんです。でも、自分に自身がない私には、悩んでるなら相談に乗るよ、の言葉がなかなか口に出せません。

エリオくんから視線を外して、奥へ。

新しい友達のユウくん。初めて貰ったあだ名は、恥ずかしかったけど嬉しくて。いきなり抱きしめてきたユウくんの体は暖かくて、取り乱してしまっても、やっぱり嬉しかったんです。

常にニコニコと笑っているユウくん。その笑顔を見ていると、こ

こちらまでポカポカした気持ちになってくるから不思議です。

でも、あの模擬戦で見た笑顔はまったくの別物です。正直私には理解できません。自分の持っている力を、あんなに嬉しそうに使うなんて。

優しいな笑みと凶暴な笑み、どちらがユウくんの本当の顔なのか、私には判断が付きません。まだユウくんのことをよく知らないからだ、と決めつけてしまったのは、私の逃げなんでしょうか？

私まで固い表情になってしまい、心配そうにこちらを見るユウくん。慌てて何か言おうとする私ですが、なかなか言葉が出てきません。

と、助け舟はスバルさんによって出されました。

「なのはさんが、なのちゃん。はやて部隊長が、はっちゃん。フェイト隊長が、ふーちゃん。エリオとキヤロが、エリリンとキヤロりん。シグナム副隊長がナムナムさん。ね、ユーイチ、私たちにもあだ名をつけて欲しいな？」

ティアもそう思うでしょ？ と隣に座るティアナさんに問いかけるスバルさん。ティアナさんは、変な呼び方したら承知しないわよ、と答えます。

気を使わしてしまったんでしょうか？ でも、スバルさんってこういうった気遣いができたんですね……。

少し驚きです。

「いいですよー。えーっと、スバルさんスバルさん……スバルスバルスバルスバルスバルスバルス……バルス！」

「目があ、目があ~~~~~」

『ぶふう！ー！ー！』

な、何が起こったんでしょうか？ ユウくんが何か叫んだと思ったら、リイン曹長が渋い男の人の声で悲鳴を上げます。すると、なのはさん、はやて部隊長、ヴィータ副隊長の三人がいつせいに噴き出しました。はやて部隊長は口に物を含んでいたらしく、ヴィータ副隊長がとても悲惨なことになっています。

食堂全体が固まる中、ユウくんとリイン曹長は視線を合わせると互いにサムズアップして頷きました。

「じゃあ、スバルさんはスバルんって呼ばしてもらいます」

え！ 何事もなかったかのように進めるんですか！？

「ティアナさんは、なーさんでどうでしょう？」

ティアナさんは、う、うん……、と控えめに返事をしました。

そして妙な沈黙が場を支配します。

けっきょく皆がそれに触れるのを恐れるように、それぞれの食事を再開しました。

ただ一つ言わせてください。

……ヴィータ副隊長に、幸あれ。

再びの訓練場。

私、ティアナを含めたフォワード陣五人が横に一列に並んで、高町教導官と向き合っている。

高町教導官の隣には、ぷかぷかと浮かぶカプセル状の物体。

ガジェットドローンと名付けられたそれが、目下私たちの敵だった。

機体正面に黄色いセンサー状の射撃装置があり、この装置から熱光線を放つ。また、収納されているアームケーブルを振り回し、先端に付いたアンカーで攻撃してくる。

そして何より凶悪なのは、それぞれが標準で装備しているフィールド系の魔法にある。

「みんな集まったね。じゃあ訓練を始める前に……悠一くん、前に出て、デバイスを起動してくれるかな？」

はい、という返事とともに一步前に出るユーイチ。肩に乗っていたスナオマルは、飛び降りると3メートルを超える大きさにまで姿を戻し、ユーイチに寄り添う。

セットアップの掛け声とともに灰色の魔力光がユーイチを包む。次の瞬間には白銀の騎士甲冑を纏い、長槍へ形を変えたアナスタシアを携えた姿を現した。

「うん……じゃあシャーリー、AMF展開して」

眼前に展開された、空間モニター越しにシャーリーさん話しかける高町教導官。

そして、シャーリーさんの返事とともに展開されるAMF。すると、ユーイチの纏っていた騎士甲冑が空中に溶けるように消えていった。

「これは……？」

「Anti Magilink-Field。魔力結合、効果発生を無効にするフィールドで、このフィールドを展開する能力をこのガジェットドローンと呼ばれる機体は装備しているの。近接戦闘を行う時だけじゃなく、ガジェットと戦う際にはこのフィールドに引

つかからないように気をつけて」

と、高町教導官は私たちに視線を向けます。

「じゃ、今から10分後に対ガジェットの模擬戦を始めるよ。それぞれ準備しておいて」

そう告げると、高町教導官はモニタールームへと姿を消す。私たちは互いの顔が見渡せるように円になる。

それにしても、無茶を言ってくれるものだと思う。

今朝会ったばかりの人間と連携して戦うなどと、四人で組み上げてきたコンビネーションを、一人増えたことにより組み直さなくてはいけないのだ。

たしかに人数が増えれば戦略の幅も広がるだろう。だがその戦略を考える時間が10分しかないのはいかなものだろうか？

実力の程は、先のシグナム副隊長との模擬戦であるていど把握している。が、だからといって急すぎるだろう。いったい隊長陣は何を考えているのだろうか？

そう、何を考えているか？ だ。

スペックで圧倒的に劣る私は、思考を停止させてはならない。何か思惑があると見て間違いはないだろう。

訓練を急ぐ理由……近いうちに大きな事が起こるというのか？

とにかく、ユーイチが何かしらの鍵を握っているのは間違いないだろう。多少は構えておく必要がありそうだ。

と、考えがだいぶ逸れた。今は目の前の模擬戦に集中しなければ。

「で、まずはユーイチ。アンタは何ができるの？」

自分でも棘のある言い方だったと思う。だがユーイチは気にした様子を見せず、そして言葉の意味を正しく理解したようだ。

こいつもエリオやキャロと同じで、ガキらしくないガキってわけね。

私は改めて認識する。

「槍は……技量的にまだ扱えません。ナムナムさんと戦った時のように、基本的には近づいて避けて殴るがぼくの戦法です」

即席ではありますが、砲撃魔法を用意しておきました。主のお心のままにお使いください

アナ、ありがとう、とアナスタシアに笑顔を向けるユーイチ。お褒めいただき、光栄です、と返す電子音からは喜色がかいま見れた。考えてみれば、あのデバイスもおかしい。

あのデバイスは凶器だ。

本来、デバイスの役割は、術者の補助が主である。そのため、求められるのは高度な演算能力であり、処理能力だ。インテリジェント型なら更に気の合う人格といったところか。アームド型の多くは武器のとして様々な形をとっているが、それは術者の取り回しやすさだったり、魔法術式構成のイメージの象徴にしたりと、けっして殺しの道具として武器の形を取っているわけではないのだ。

アナスタシアに付いている二枚の鋭利なウイングは、穂先が深く刺さり過ぎるのを防ぐためのものだ。それはアナスタシアを実刃で突き刺す事を目的として造られたということに他ならない。

魔力による物理破壊だけでなく、凶器としての殺傷能力。非殺傷を謳う管理局の人間なら、こんなデバイスは造らない。このデバイスは敵を殺す必要のある世界、あるいは時代で造られたのだろう。

問題はなぜユーイチがアナスタシアを所持しているか？ だ。魔法技術がないはずの管理外世界出身者。しかも9歳という若さ。管理局の部隊である機動六課に所属するというのに、殺傷能力の高い

デバイスを所持したままのユーイチ。

……なによ、けつきよく分らないことが増えただけじゃない。
模擬戦に集中すると決めただけじゃないか、と私は目を瞑って
思考を整理する。とりあえず分らないことは、頭の片隅に置いて
おく。

「分かった。なら今回はとりあえず好きにやりなさい。私がフオロ
ーに回るから」

「……まかせて大丈夫なんでしょうね？」

問うユーイチは、心配している風でも、かといって侮っている風
でもない。言葉のままに問うているのだろう。信用してもいいの
か？ と。

……上等じゃない。

「ガキはガキらしく大人の言うこと聞いてりやいいのよ」

口から出たのは憎まれ口で、だけどユーイチは嬉しそうに笑うの
だった。

何よ……調子狂うじゃない。

「……念話は分かるわね？」

（こうですか？）

「そう。念話もAMFの影響を受けるから、使うときは気をつけな
さい。じゃあ、」

私はスバルたちに視線を移し、

「スバルは前に出過ぎないようにエリオと連携して、キャラは二人から目を離さずに指示してあげて。後は、いつも通りに」

「うん！　じゃ、みんな、気合入れていくよー！」

『はい！』

スバルの掛け声に合わせて、三人が元気良く声を上げる。それぞれが自分のデバイスを起動させバリアジャケットを展開する。

「アナ、騎士甲冑なんだけど、ぼくのイメージを反映できるますか？　接近戦するにはちょっとゴチャゴチャしすぎてるから」

……はい、可能です。では騎士甲冑を変更します

再び灰色の魔力光がユーイチを包んだと思ったら、纏った騎士甲冑は白銀のそれではなかった。

黒いインナーに、白いホットパンツ。髪は相変わらず後ろでくっついてある。両腕を肘まで覆うのは無骨なガントレット。黄金に輝き、ユーイチの腕を一回りも二回りも大きく見せている。そして膝下まである、こちらも黄金色の足具だ。

それにしても、可能ですと答えたアナスタシアの電子音に悲しげ響きがあったのは私の聞き間違いじゃないだろう。なんとも人間くさいデバイスだ。

以降、こちらを軽装態、私がデザインしたものを重装態として登録しておきます

「うん、ありがと、アナ。AMFの対策はどうしようか？」

コアリンクシステムを用いて私の方で制御させていただきます

「わかった。お願いしますね、アナ」

コアリンクシステム？ 聞き覚えのない単語が出てきた。

シグナム隊長の時のようにアナスタシアは槍から姿を戻す。重装態時と違い、赤い宝玉がガントレットの右手首の部分にはめ込まれる。

ユーイチが、う、と小さくうめくと赤かった宝玉が灰色に染まった。

何だ？ という思考は訓練場に響いた放送にかき消される。

『みんな、準備はいい？ 模擬戦を始めるよ』

訓練場のフィールドが市街地に設定され、風景が変わる。

『目的は二箇所に分かれて展開しているガジェットの部隊の、全無力化、または全破壊。制限時間は20分。じゃあ模擬戦……スタート！』

開始と同時に左右別々の遠い距離から、爆発音が聞こえた。誘っているのだろう。これはそういう訓練だと。

「私とユーイチは左に行くから、スバルたちは右をお願い！」

『了解！』

駆け出す三人に習って私も走り出そうとすると、隣にスナオマル

にまたがったユーイチがやってきて、

「お姉さん、乗ってかない？」

断ってやろうかとも思ったが、速いにこしたことは越したことはないか、と考え直す。

またがってみて気づいたが、つかまる所がない。毛をつかんでいものか悩んでしまう。なのでバランスを取るためとはいえかなり年下の腰に手を回す結果になってしまった。本格的に後悔したのはスナオマルが走り出してからだった。

なぜか完全にバランスの取れているユーイチを少し怨んだ。それにしても速い。あっという間にガジェットが視認できる位置に着く。

「じゃ、まずはどーんと行きますよ！」

スナオマルから降りた私を置いて、ユーイチはさらにガジェットに接近する。

「全身全霊をもって、今必殺の！」

大きく口を開くスナオマル、その前に展開された灰色の魔方陣に魔力が圧縮されていく。

魔力反応にガジェットたちのセンサーがユーイチを捕らえるが、遅い。

Tiger Balken .

「てエエエエッ!!」

ユーイチの咆哮とともに、一条の光線が走る。

直射の砲撃が怒濤の勢いをもってガジェットを呑み込む。

灰色の奔流は数体のガジェットをまとめて破壊した。

が、ユーイチはそれだけでは止まらない。

スナオマルから飛び降りたユーイチはその勢いのままガジェットに殴りかかる。ガジェットはクシャッと小気味よい音を立てて潰れた。

ガジェットがAMFを展開する。力場が一带を包むが、そんなもの関係ないとばかりにユーイチ次々とガジェットに踊りかかる。

青い直射弾をかわしては掌底を叩き込む。伸ばされたアームケールを掴んでは手繰り寄せ、カウンター気味に拳を食らわせる。ガジェットを踏み台ににしては跳躍、たて回転で蹴りを放つ。

ユーイチは止まること拒むように動き続け、ガジェットを破壊し続ける。

スナオマルも負けてない。

ガジェットの装甲をその爪で紙同然に引き裂き、巨体を活かしてのしかかり押しつぶし、鋭い牙が並ぶ顎で噛み砕く。

一人と一匹は軽快に敵を殲滅していく。

私もただ黙って見てなんかいられない。

両手に握ったクロスミラージュを構える。

「クロスファイアッ、シューッ！」

四つの魔力スフィアを形成して、同時に発射する。左に大きく弧を描いて進むもの、右に上方と下方に分かれゆるやかな弧を描いて進むもの、そして真っ直ぐ進むものの四つだ。

AMFの効果範囲に入った魔力弾が掻き消える。

だが、それでいい。

狙いは誘導弾の中に紛らせた、弾を外殻の膜状バリアでくるんだヴァリアブルバレットにある。

弧を描いた三つの魔力弾は消滅したが、直射で放った一発は、ガジェットのアーマーを貫く。

動き回りながら、次々と魔力スフィアを作り出す。

私はクロスファイアシュートとヴァリアブルバレットを織り交ぜながら撃ち続ける。

打撃の入りが浅いガジェットや、上空から一人と一匹を狙うガジェット。ユーイチやスナオマルの死角を補うように敵を撃ち落とす。そして、

「ラストオ！」

ユーイチが打ち上げるように放った掌打により体勢を崩したガジェットを、私は多重殻弾で撃ち抜いた。

「ふう……」

呼吸を落ち着けるように息を大きく吐き出す。

と、スナオマルにまたがったユーイチが近寄ってきた。

「お疲れ様ですー」

「ええ、お疲れ様」

あれだけの動きを見せたにもかかわらず、疲れを感じさせない笑顔のユーイチ。

「まったく規格外め……」。

笑みに凶暴な色がないのは、バトルマニアは強者との戦いじゃないかなきゃ燃えないということだろうか。

くだらないことを考えた、と視線を外す。と、スバルのウイングロードが空に向かって伸びているのが見えた。

「あれは……?」

ユーイチも気づいたようで疑問を漏らす。

「あれはスバルの魔法で、ウイングロード。飛行魔法が使えないスバルが空中戦を行うためのものよ」

「へえ、おもしろそうですね。……っと、敵さんが来たようです」

ユーイチの視線を追うと、こちらに向かってくるガジェットの群れが。先ほどよりも規模が小さく、十数体ほどしかない。

「ナーさん」

ん? と返す私とユーイチの目が合う。

「信頼してますよ。背中任せます」

言うが早いか、スナオマルが駆け出す。

数歩で距離を詰め、手前にいたガジェットをすれ違いざまに殴り飛ばすと、跳躍。そして、

「ウイングステップ!」

何もないはずの空中でスナオマルがさらに跳んだ。

よく見てみると、空中に小さな灰色の足場が形成されている。

ウイングロードを見て思いついた事を、ものの数秒で実演してみせたというのか?

「これだから天才ってやつは……」

ばやきが漏れる。だがそんなものは六課に来てからなんとも味わったものだ。

今さらか、と不平を切って捨てる。

「さて……」

それにしてもと思う。

信頼。なんと重たい言葉だろうか。

あまりにも軽々と放り投げられたそれ。再び思う。上等じゃない、と。

「背負ってやろうじゃないの！！ クロスミラージュ！」

YES .

クロスミラージュがカートリッジをロードする。

言葉を重ねることなく分かり合える相棒を頼もしく思いながら、銃口をガジェットに向ける。

多くのガジェットは空を駆け昇るユーイチとスナオマルを追う。

こちらに向かってくるガジェットは三体。

まずはそいつらを叩く！

「ヴァリアブル！ シューーーーーーッ！……」

三つの多重殻誘導弾がそれぞれの機動を描いて奔り、三体を同時に破壊。

ガジェットの装甲を貫通した魔力弾を操作して、空を行くガジェ

ットに向かわせる。

仲間が壊されたからか、魔力反応を感知したからかは分からないが、ユーイチの後を追っていたガジェットの数体がこちらを振り向く。

私は、口元が嘲笑の形に変わるのを自覚する。

しょせん鉄屑ね。アンタらが追っていた獲物は、一瞬たりとも目を離していいものじゃない！

スナオマルは空中に作った足場を使い真下に跳ぶ。ユーイチはさらにスナオマルから跳ぶ。ガジェットの群れを掻い潜り、私に注意を向けたガジェットに迫る。

私の魔力弾は数体のガジェットを追い抜き、ユーイチを追っていたガジェットに迫る。

あとは実に簡単だ。

降下の勢いを利用した一撃がガジェットを碎き、旋回しようとする隙を突いて魔力弾がガジェットを貫く。

数瞬の後に、ガジェットのオールデリートを確認した。

これで終わりかな？ と、ガジェットの破片を避けて降りてくるユーイチとスナオマルに視線を向ける。

「うわっ、ぷ！」

先に地面に降り立ったスナオマルがユーイチを受け止める。

スナオマルの背中に覆いかぶさるように着地したユーイチはそのまま顔をうずめる。

ぐりぐりと顔を擦りつけ、んっ、と気持ちよさそうに唸るユーイチに、スナオマルは目を細めてグルウと鳴いた。

「まったく、締まらないわね」

言いつつ、私の頬も少し緩む。

ガジェットの残骸が落ちて来る音を背中に受けながら、私はゆつくりとユーイチたちに近寄っていく。

近づく私に気づいたのか、ユーイチは顔を上げ、

「やりましたね、ナーさん」

私の目を真っ直ぐに見ながら拳を突き出してきた。

「つたく、ガキのくせに生意気なのよ」

なんとなく癪だったので、拳を合わせるではなくユーイチの頭をガシガシと乱暴に撫でてやる。

嬉しそうにきゅっ、と悲鳴を上げるユーイチを見て思う。

謎が多く小生意気なガキだけど、こうして言葉を交わし行動をとにしても、不思議と悪い気持ちにはならないな、と。

言葉にはしないけどね、と私はさらに強くユーイチの頭を撫でるのだった。

ツンデレは好きですか？（後書き）

多くの方に読んでいただけているようで、感謝のきわみです！
ありがとうございます！！

これからもより良い品質の作品をお届けできるよう精進いたします
ので、応援してくださいと嬉しいです。

最後にもう一度、『ありがとうございます！！』

えりお・もんでいあるのいちにち（前書き）

さあ、お前の罪 フラグ を数えろ！

えりお・もんでいあるのいちにち

頭上で鳴るけたたましい電子音に、徐々に意識が浮上する。
気だるげに伸ばした手は、無意識に真っ直ぐ音源を捕らえた。

枕元にセットしたアラームを停止させ、僕、エリオは目を覚ます。
あくびを一つ。

数秒間ボーっとした後、この数日で慣れ親しんだ右側の温もりを見る。

そこにはアラームの不快音を受けてなお、僕に抱きつきながら気持ちよさそうにスヤスヤ眠るユウの姿があった。

ユウと初めて会ったあの日から、機動六課男子隊員寮の一室で共に過ごしている。

元々は僕が使っていた部屋だが、二人部屋を一人で使っていたため、二人で使う分には何の問題もない。なんだけど……。

「ほら、ユウ起きて……朝だよ」

当然ベッドも二人分置いてある。しかし、ユウの一緒に寝てください、の要望を受けてこうして一つのベッドで一緒に寝ている。ユウは何かを抱きついてないと安眠できないらしく、こうした形を取っている訳だ。最初は恥ずかしかったが、数日を一緒に過ごす内にだんだんと慣れてきた。それに僕自身もユウと一緒にベッドを使うと寝付きがいいのだ。

右半身はユウに掴まれているため使えない。なので、左手でユウをさすりながら声をかける。

ん、んう……、と呻くだけでなかなかユウは起きない。朝に弱いらしく、このやりとりはもう何日も繰り返している。

さらに強めに揺ると、ユウは徐々に覚醒する。

「ん……朝あ……?」

「そつだよユウ。早く起きてね」

そつは言っても、ユウが完全に目を覚ますまでまだ時間がかかるだろう。

ユウをベットに残し、上半身だけを起こし目を擦るユウと、その顔を舐める小さいサイズのスナオマルを横目で見ながら着替えを始める。

着替え終わると洗面台に向かい、顔を洗い、軽く寝癖を直し、歯を磨く。

寝室に戻ると、やはりまだ寝ぼけ眼のユウ。

「エリりん、おはようございます……」

「うん、おはよう。ほらユウ、起きて起きて」

せつつくと、もぞもぞとベッドから降りるユウ。

おぼつかない足取りのユウの手を引っ張って洗面台まで連れて行ってあげる。

こうして、今日も僕たちの一日が始まる。

元のサイズに戻ったスナオマルに跨ったユウと僕は、訓練場に向かうために六課内を移動している。

キャロがいる場合はよく三人でスナオマルに跨って移動するが、早朝訓練に向かう場合は大概こうして二人で移動する場合が多い。

隊舎内を闊歩する虎の姿は当初は隊員の驚きを生んだが、今では六課の名物のような物になっていて、多くの隊員達から微笑ましい

視線を受けている。

今も視線を感じる。だが、このねっとりとした視線は、

「……ふふふ」

振り返って見れば、曲がり角に隠れてこちらを眺めるシャルさんの姿があった。

最近こういった事がよくある。僕とユウが二人でいると、いつのまにか現れたシャルさんがこちらを、なんか、こう……ニヤニヤした笑みを浮かべて見ている。その笑顔のシャルさんを見るたびに背筋がゾクリとするのだ。

と、僕に続くように振り返ったユウが肩越しにシャルさんに気づいた。

「あつ、シャルさん。おはようございます」

「ええ、おはよう。ユウくん。エリオくん」

打って変わって爽やかな笑みを浮かべて歩み寄ってくるシャルさんに、僕も、おはようございます、と挨拶を返す。

「ふふつ、相変わらず二人とも仲がいいのね」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに言うシャルさん。

ぼくとエリりんは仲良しさんですー、と笑うユウの頭を撫でるシャルさんは最後にニヤリと一度笑うと、

「じゃあ、訓練ガンバってね？」

そう告げて去っていきました。

……本当に何なんでしょう？

訓練場に着くと、他のフォワードの皆となのはさん、ヴィータ副隊長が揃っていました。

僕たち二人は皆と挨拶を交わす。と、ユウはスナオマルからピヨンと飛び降りると、ヴィータ副隊長に駆け寄り抱きつきました。

「おはよーです！ ヴィーちゃん！」

「……ああ、おはよーさん」

嬉しそうなユウに、若干グツタリした様子のヴィータ副隊長が対照的です。

これは最近ずっと繰り返されているやりとり。

事の顛末はユウが配属された翌日。

うずうずと何かを抑えるようにヴィータ副隊長を見るユウ。しばらく我慢していたようだが、威を決したようにヴィータ副隊長に声をかけます。抱きしめてもいいですか？ と。すると、どこからともなく現れたはやて部隊長の、ええでーのお言葉。ちょ、はやて！？ というヴィータ副隊長の抗議も虚しく、ユウに抱きしめられる結果になりました。

それ以降、ユウはヴィータ副隊長を見かける度に抱きつくようになりました。なんでも、ヴィータ副隊長の抱き心地は異常だそうで至福を体現した、天上に昇るかの如き抱き心地と熱く語るユウの姿は記憶に新しいです。

今日も今日とてヴィータ副隊長に抱きついたユウは、とろけたような笑顔を浮かべています。

「エリオくん……えいつ！」

スナオマルから降りてヴィータ隊長とユウを見ていたら、いつのまにか隣に来ていたキャラに抱きつかれました。

「……どうしたのキャラ？」

「えっと、なんだかエリオくんが寂しそうだったから……」

寂しそう？ そうなのかな……？ ただ二人の事を考えてただけなのにな。

「私じゃダメだった？」

「ううん、そんなことないよ。心配してくれてありがとうキャラ」

ただ、なんだろう……物足りなさを感じてしまうのは。

「あゝ、ぼくも仲間にいらてくださーい！」

ヴィータ副隊長から離れて、僕とキャラをまとめて抱きしめるユウ。

ユウとキャラが互いに笑い合うのを見ながら、僕も自然に笑みがこぼれる。

ああ、やっぱりこっちの方がいいな、と思いながら、僕は温もりを感受するのであった。

書類仕事を終えた僕たちはフォワード陣四人と一匹は、ランチを

取るために連れ立って食堂に来ていた。

お昼時だけあって、食堂は一番の賑わいを見せている。

ユウは民間協力者であるため、書類仕事を回されることはない。そのため、午前中は暇が与えられている。が、六課は24時間体制のため、正式な休みでない以上外出は許可されておらず、大方自主訓練でもしているのだろうと踏んでいたのだが……。

四人と一匹で一つのテーブルを囲う。

皆の前にはそれぞれが頼んだ料理。そして、それとは別にユウによつて配膳されたアップルパイが並んでいる。こんがりと焼き目がつき、バニラのアイスが添えられたそれは、香ばしい匂いを漂わせている。

「ぼくの六つある特技の一つ『秘伝 アップルパイ』です！」

ひよこ色のエプロンを身に着けたユウが自慢げに告げます。

六つある特技、模擬戦の時に言ってたやつかな？

「これ、アンタが作ったの？」

ティアナさんはどこか訝しげです。

「はい！ 冷めないうちに、さあ召し上げ！」

食欲を誘う香りに、言われたとおり手を伸ばす。フォークを持ち、アップルパイに突き立てる。サクツと小気味よい音とともに一口大に切り分け、アイスを付けて口に運ぶ。

「これは……好きな味だな……」

「ホントに、美味しいです！」

「まあ、たしかにイケるわね……」

僕と、キャラと、ティアナさんが三者三様に賛辞を送ります。ティアナさんはなんだか納得いかないような表情をしています。ユウは自分の分につけることなく、ニコニコとても嬉しそうです。

そしてスバルさんは、

「サクサクとしたパイ生地、しっとりとしていながらもしやきしやき感を失わないリング……。香ばしさと瑞々しさが織り成すハーモニーが、旨みを更なる高みへと昇華させる！ アップルパイ自体の控えめな甘さは、バニラアイスの甘さを邪魔することなく互いを高め合っている。アップルパイだけが主役なのではなく、すつきりとした後味のアイスはまさに手作り！ このアップルパイのためだけに作り出されたようで、故にこのバニラアイスもまた主役！ 暖かさと冷たさという二律背反を兼ね備えたこの味は究極！ ああ、よって至高！ 私は今、幸せにいる……！」

スバルさんが壊れました。

まあ放っておけばすぐに直りますよね。

「アイスの香りがあたしを呼ぶぜ！ つと、美味そうなの食ってるじゃねーか。なあ、あたしの分はないのか？」

どこからともなくヴィータ副隊長が現れました。

「ごめんなさいー、五人分しか用意してないんです……」

「そんな……」

ヴィータ副隊長は目に見えて落ち込みます。悲壮感が半端ないです。

「んー、じゃあ、ヴィーちゃんにはぼくの分をあげますよ」

「いいのか!？」

「はいー、実はぼく、作っているときにつまみ食いしてしまっ
て、お腹いっぱいなんです」

いや、明らかに嘘だよね? ユウ。本当にお腹いっぱいなら、切
り分ける段階で配慮するはずだよ。

ヴィータ副隊長も感づいたのか、

「……じゃあさ、半分こにしよーぜ」

「いんですか? ……ありがとうございます」

ヴィーちゃんは優しいですね、と微笑むユウにヴィータ副隊長は、
うつせえ、と照れたように顔を赤くしています。

ヴィータ隊長がユウの隣に座る。するとまるでタイミングを見計
らったように、

「アイスの香りが私を呼ぶで!」

「アイスの香りがリインを呼ぶです!」

どこからともなく現れたはやて部隊長とリイン曹長。

……シャマルさんもそうですが、なんでしょう、八神家の皆さん

には神出鬼没のスキルが備わっているのでしょうか？

「ええなー、私も食べたいなー」

「リインも食べたいなーです」

ユウに詰め寄る二人に困った表情を浮かべるユウ。それを見かねたのか、

「私のぶんでよかったら、どうぞ」

「あ、私のも食べてください」

ティアナさんとキャラが二人に声を掛けます。

「ほんまか？ 私はエエ部下に恵まれて幸せモンやなあ」

ありがとですー、ありがとな、と感謝を述べるリイン曹長とはやて部隊長は、それぞれキャラとティアナさんの隣に腰を下ろします。出遅れてしまう形になってしまいましたが、しかたないですね。だって、スバルさん曰く、至高の味なんですから。

午後は戦闘訓練です。

市街地を模したシュミレータ内で、僕は遠くでぶかぶか浮かんでいる球体状の大型な物体、ガジェットドローン？型を睨む。

ガジェット？型よりもだいぶ大型のそれは、大きさに見合った実力を持っている。

？型と違い、砲門数が三つに増えていて、アームケーブルとは別

のベルト状の腕を使い格闘戦も仕掛けてくる。危険際ならない敵だが、幸いにもまだこちらには気づいていない。
なら、一気に決める！

「行くよ！ ストラダー！」

Speerangriff.

ストラダーの電子音声とともに駆け出す。
槍の穂から魔力を噴射して加速する。
身体が浮く。

翼を持たぬ僕が、風を切り裂くための術。
こちらに気づいたガジェット？型から、？型よりも強力なAMF
が展開される。

だが無駄だ。なぜなら破壊は僕の役目ではないのだから。
加速のままにガジェットにぶつかる。

「ストラダー！ カートリッジロード！」

Explosion.

湧き上がる魔力を使って、無理矢理に加速する。

高速を持つて、ガジェット？型を押すように突き進む。

球体という性質を持っているガジェット？型は、直線的な、点での攻撃では簡単に弾かれてしまう。

なので、刺突の形で突撃を仕掛ける僕には高度なバランス感覚が
要求される。

難しいが、簡単だ。成し遂げる理由があるなら、成し遂げる。ただ、それだけ。

ユウに、届けるために！

前方、進む先には軽装態のユウが立っている。

「さあアナ、判子の準備はいいかい？ 荷物が届くよ」

お心のままに、我が君

ユウは右手を突き出す。

G i g a n t F a u s t .

灰色の魔力光に包まれた右腕のガントレットは、次の瞬間には巨大化して現れた。

ユウは、右腕を引き、力を溜める。

僕は魔力の噴出を止める。と、僕のバリアジャケットの襟が引つ張られる。スナオマルにくわえられ、ガジェット？型から大幅に距離を取る。

そして、

「巨人拳ッ！！」

ユウの叫びとともに揮われる巨人の一撃。

ガジェット？型の分厚い装甲をたやすく貫き、致命的なまでに破壊する。

身体ごと通り抜けたユウの背後で、ガジェット？型は爆散。ミッショントーゲットの破壊を確認。

ミッショコンコンプリートだ。

スナオマルと一緒にユウに近寄っていく。

こちらに気づいたユウは、元にサイズに戻した右腕を軽く突き出す。僕はユウの拳に軽く自分の拳を合わせて、そして笑い合う。

「やりました！ 成功です！」

「うん。……でも、離脱するのにスナオマルの力を借りなきゃいけないのは直したいかな」

ユウに寄り添うスナオマルの頭を撫でる。

改善すべき点はまだまだあつて、試したいパターンもいくつかある。

意気込みは衰えることなく、あーだこーだと改善点について話しながら僕たちはなのはさんの指示を待つのだった。

訓練を終え、夕食。

気だるげな疲労感に包まれながら、フォワードの皆で席に着く。ぼくとキャロが隣り合わせに座り、対面に向かって左からユウ、ティアナさん、スバルさんという形だ。

僕とスバルさんの前には例のごとく山盛りのパスタ。僕がミートソースでスバルさんがペスカトーレ。ユウはカレーライス。キャロはベーコン、たまねぎ、ピーマンのホットサンドにコーンポタージュ、サラダ。ティアナさんはペロンチーノにコーンチャウダーだ。それぞれが食事を始める中で、ユウとティアナさんが二人で小型端末を弄っています。

「このフォーメーションだと、スバルさんの負担が大きすぎるんじゃないですか？」

「じゃあ、こっちのパターンは？」

二人はよく戦術について意見を交換しています。

ユウ曰く、なのちゃんの教導では座学を行わないみたいなので、自主的に行っておく必要があると思うんです、だそうで、僕も寝る前にはユウとモーシヨンパターンの確認をしたりしています。

「二人とも、早く食べないとご飯が冷めちゃうよ?」

スバルさんの軽い叱咤をもって、ようやく二人も食事を始めました。

「そういえばさ、なんでアンタ初っ端からシグナム副隊長にケンカ売ったの?」

軽い雑談を交えながら食べていると、ふと思いついたようにティアナさんが言いました。

「あつ、それ僕も思いました。ユウ、いきなりケンカ腰だったよね」

内容が刺激的すぎて、模擬戦に至った経緯の疑問は今の今まで忘れていた。確かに、唐突だったと記憶している。

「えっと、あれは、ぼくも後先考えてなかったですから……。ただ」

恥ずかしそうに笑うユウは、一転して悲しげな表情を作る。

「僕が守ってあげたかったです。はっちゃんが困っている時に、ぼくが助けになってあげたかったです。でも、離れていた間にはっちゃんは事件に巻き込まれていて、はっちゃんを守る存在が出来ていて、結局あの模擬戦はぼくのわがままをナムナムさんにぶつけただけなんです」

ユウはうつむいて目を閉じます。まるで何かをこらえるように。
ユウの膝に乗っているスナオマルが、くるうと鳴くのがかすかに聞こえた。

「はっちゃんだけじゃありません。なのちゃんや、ふーちゃんだってそうです。大切な、本当に大切な友達だったんです。でも、気が付けばぼくの知らない年月を過ごしていて、ぼくの知らない姿になっていて……まるでぼくだけが取り残されてしまったみたいで……やっぱり、寂しい、ですよね」

涙を流しているわけじゃないのに、僕にはユウが泣いているように見えた。だからだろうか、

「ユウには、僕がいるよ」

考えるでもなく、口が勝手に言葉を紡いでいた。

え？ と若干潤んだ目でこちらを見るユウ。ユウだけじゃなくて、皆の視線が僕を捉える。

僕は急激に顔が熱くなるのを感じた。

「いや、あの、ぼ、僕だけじゃなくって、キャロもいるんだし、過ぎてしまった事ばかり気にしてもしかたないっていうか……その、付き合いが長いわけじゃないけど、僕たちだってユウの事は大切な友達だって思ってるから、一緒にいたいって思ってるから……だ、だよねキャロ!？」

「ええう！ 私ですか！？ ……わ、私にとってもユウくんは、大切な友達です。だ、だからユウくんが悲しいのはダメだと思います！」

どもりながらもなんとか言い終える僕とキャロ。お互いに顔が真っ赤です。……ごめんねキャロ。

チラリと見ればポカーンとした表情のユウ。

うっ、お願いだから何かリアクションを……。

と、ティアナさんがユウの頭をポンポンと軽く撫でた。

「いい友達じゃない」

はいっ！ と咲くように笑うユウ。

他所のテーブルからも生暖かい視線を感じて、僕は真っ赤な顔のままうつむいてしまう。

浮かんだ笑みを、隠すように。

夕食を取り終え、ユウと二人でお風呂に入ってきて、あとは寝るのみとなった。

互いに寝巻き姿で歯を磨き、トイレを済ませ、室内灯を消し、今夜も同じベッドに入る。

「あゝ、今日も疲れました」

隣でだれた声を上げるユウに、思わず笑みがこぼれる。

「うん、でも充実した一日だったよ」

六課に来てから、退屈だった日など一日もない。ユウが来てからはさらに一日一日が色濃くなった気がする。それが良いか悪いかと聞かれれば、僕は迷うことなく良い事だと答えるだろう。それぐら

いユウと過ごす日々は楽しいのだ。

「じゃあ、電気消すよ?」

はい、という眠気を多分に含んだ声を聞きながら、電気スタンドに手を伸ばす。

ふと、ユウの枕元で丸くなっているスナオマルを見る。
もしかして、抱きつくのならスナオマルでもいいんじゃないかな?
考えは、しかし口に出ることはなく、多分、この先も言葉にすることはないんだろうなと思った。

「おやすみ、ユウ」

「おやすみなさい、エリりん」

スタンドの電気を消してベッドに潜り込めば、布団の温もりとは違う温もりに包まれる。

ああ、今日も良い夢が見られそうだな、と思いつつ、僕はまどろみに身を任せるのであった。

10年ぶりの帰郷。だが少年にとっては2週間ぶりくらいのこと（前書き）

お風呂のシーンは書いてとても楽しかったです。今まで書いた中でも、一番かもしれません。

10年ぶりの帰郷。だが少年にとっては2週間ぶりくらいのこと

転送ポートを抜けた先、私、シヤマルを出迎えたのは湖から吹く清々しい風と、濃い緑の香りだった。

第97管理外世界『地球』の、海鳴市。はやてちゃんとなのはちゃんの出身地でもあるこの場所でロストロギアが存在が確認されたため、機動六課メンバーは出張任務としてこの地に訪れていた。

なのはちゃんにフェイトちゃん、フォワード隊員五人にお供が二匹、さらにリインちゃんと私という九人と二匹の大所帯だ。あきらかに戦力過多だが、これはこの任務が半分休暇を兼ねているからではやてちゃん、ヴィータちゃん、シグナムも後から合流する予定だ。私たちがいるのは現地の協力者が提供してくれているコテージで、豊かな自然に囲まれた綺麗な場所だ。エリオくんは物珍しげに辺りを見渡しているし、キャロちゃんは嬉しそうな声を上げている。

と、遠くから四輪車が近づいてくるのが見えた。

私たちの脇に止まった車から、現地協力者であるアリサ・バニングスちゃんが降りてきた。

「なのは！ フェイト！」

アリサちゃんは、なのはちゃん、フェイトちゃん、それからはやてちゃんと小学生からの付き合いで、互いに絆は深く、親友といってもいい関係だ。そして、我らが隊長陣の三人とは幼馴染になるアリサちゃんは当然ユウくんとも交友があったわけで、

「それに……ユウ、なのね？」

「はい。久しぶり、になるのかな？ ただいまアーりん」

感動の再開と相成るわけだ。

「まったく……あんまり心配かけんじゃないわよ」

ぶつきらばうな口調には確かな暖かさがあって、ユウくんの頭を撫でるアリサちゃんの目には光る物が浮かんでいる。あ、フェイトちゃんももらい泣きしてる……。

よい事だと思う。はやてちゃんを通して、私もアリサちゃんとの付き合いは長い。激情家で、なにより友達想いのアリサちゃんだ、感動はひとしおだろう。

……だが、それでも！今の私には感動に浸ってる暇はないのよ！談笑を交わし始めた幼馴染四人と、いつのまにか混ざったリインちゃんから視線を外し、空気を読んでいるのか黙り込んでいるフォード隊員四人、正しくはエリオクんに目を向ける。

私の頭を占めるのは、ある大事な任務の事。

ロストログアの確保という六課の任務とは別に、私は一つの任務を帯びているいるのだ。

SYAマル秘婦女子会の会長としての任務を、ね……。

SYAマル秘婦女子会とは六課の女性陣で構成された、ユウくとエリオクんの行動を見守る会の事だ。幼い二人の絡みは瞬く間に多くの女性隊員を魅了し、今では六課のアイドルとしての地位を確立しつつある。ある者は仕事での疲れの癒しとして、またある者は日々を生きる糧として、二人を見守っているのだ。

ちなみにSYAとは、『少年たちの、欲望のままの、愛を見守ろう』の頭文字を取ったものだ。

環境が変われば行動も変わる。私はこの出張任務におけるユウくとエリオクんのやり取りを、余すことなく会員に伝える役目を負っているのだ。

はからずとも、ユウくんの頼みによっておもしろい事になりそうなネタがあるのだ。

「ふふふ……」

思わず漏れた笑い。

いけないいけない、ただでさえ最近エリオくんの視線に不信感が込められているのだ。迂闊な真似はできない。あくまで私たちの目的は、ユウちゃんとエリオくんの自然なままの成長を見守る事にあるのだから。

そう思いながらも、漏れ出るニヤニヤは止まらないのであった。

海鳴市市内及びその付近に、サーチャーを不可視魔法で隠蔽設置し終えた私、ティアナと、スバル、ユーイチの三人は、高町教導官の提案で教導官の実家である喫茶『翠屋』に来ていた。

お昼ぐらいから始めて、今はもう夕暮れ時。

八神部隊長からの連絡で、ロストログアの所有者が判明したとの事。運搬中に紛失したそうで、事件性はなし。本体の性質も逃走のみで攻撃性はないそうだ。

危険性が薄いと分かり、ひと段落も着き、そろそろ待機所に戻るうかというところで、せっかくだからお土産でも買って帰ろうという事になったのだ。

お洒落な外観のお店に、軽快なベルの音とともに入店する。

「お母さん、ただいまー」

「ただいまーですー」

私たちを出迎えた、美人の店員さんに声を掛ける高町教導官とユーイチ。

って、お母さん!?

「わっか……」

ポロつと漏れたつぶやき。隣のスバルはポカーンと口を開けている。

「おかえり、なのは。それに、ゆう君も!」

トテトテと駆け寄ったユーイチを抱き上げ、くるくると回るお母さん。きゃーっと声を上げるユーイチは、バニングスさんの時のように嬉しそうな表情をしている。

「本当に無事でよかったわ……。また元気なゆう君に会えて、嬉しいわ」

「ぼくもですよー。桃ちゃんは変わらずに美人さんです!」

ありがとゆう君ー! と抱き上げたまま頬ずりをするお母さんと、奥から店員さんが二人出て来た。

「お帰り、なのは、ゆう君」

「二人ともお帰りなさい!」

「うん、ただいま。お父さん、お姉ちゃん」

お父さんも若く、さらに渋い魅力に溢れている。お姉さんも綺麗で、高町教導官が美人なのは遺伝かと思わせるほどだ。

外見のスペックの違いまで、まじまじと見せ付けられた感じた。

少し、凹むわ……。

「ただいまです！　しろーさん、みゆちゃん」

お父さんとお姉さんはユーイチの頭を撫でながら微笑んでいる。
こうして見ると、中の良い家族みたいで、

……ここにはユーイチの家族がいるはずよね。10年間離れていたはずの……。

いや、私が口に出すことじゃないだろうと、考えを振り払う。

「積もる話があるのは分かるけど、私たちの事も無視しないで欲しいの」

高町教導官はこちらに視線を寄越します。

「こっちの二人は私の生徒で」

「あつ、スバルです！　スバル・ナカジマって言います。なのは隊長にはいつもお世話になってます！」

「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

頭を下げる私たちに、お母さんはふんわりと綺麗な笑みを見せ、

「いえいえ、こちらこそ娘が迷惑をかけてないか……。せつかくですから、お茶でも飲んでゆっくりしていつてね？」

いえ、そんな……。と二つの意味で恐縮している私たちは、なのはさんの薦めもあって、結局テーブルに着くことになった。

ユーイチはお姉さんに連れられて奥に行ってしまう、高町教導官

とスバル、私の三人でテーブルを囲んでいる。

「二人とも、紅茶はいけるかい？」

はい、と答える私たちに、お父さんが直々に紅茶を淹れてくれた。そのまま口を付けるスバルと、添えてあった角砂糖を溶かし入れてから口を付ける私。

「あ、おいしい……」

「わあ……初めて飲む味。とってもおいしいです！」

気にいってくれて嬉しいよ、と笑みを浮かべたお父さんは、ごめつくり、と奥へ下がっていった。

ホント、様になってるな……。思わず、後姿を見送ってしまうほどだ。

「お父さんじゃないけど、気に入ってくれて嬉しいな」

にやはは、と笑った高町教導官は自分に淹れられた紅茶に口を付けます。砂糖は入れずに、そのまま。……わ、私は二人ほど紅茶を飲みなれてないのよ。

妙な疎外感を味わった私はふたたび紅茶を口に含む。うん、ほんのりとした甘さが美味しいわ。

気持ちを落ち着かせて、私はこの機会に疑問を口にしてみた。

「あの、高町教導官。質問があるんですけどいいですか？」

何かな、と首を傾げる高町教導官。

「ユーイチは任務という名目がなければ故郷に帰ることもできないんですか？」

高町教導官の表情が固くなるのが見て取れた。

ユーイチの話では、保護されてから一度も地球には帰ってないらしい。バニングスさんやお母さんの反応を見るに、生存は知っていても通信などですら顔を合わせていないようだ。

いくら幼馴染が周りにいても、9歳児の処遇としては厳しすぎるんではないか？

「うん……、悠一くんが虚数空間からの帰還者だっていうのは知ってるよね？ なにぶん前例がないからね、詳しいことが分かるまで安全策としてミッドから易々と出す訳にいかなかったんだ」

高町教導官が語った理由は、もちろんあるだろう。だが、それは数ある理由の一つなんじゃないかと私は思う。

今回の出張任務にしてもおかしい点がある。

まず戦力過多な点。六課の戦力のほとんどを費やして当たるほどの任務だとは思えない。ロストログアの危険性が薄いと判断された今でも、戦力を下げるつもりはないようだ。

次に、六課が出向いた点。これは、海鳴市出身者が二人もいるため、それほどおかしいわけではないが、本局所属とはいえ地上部隊である六課でなくてもよかったのではないかと思う。レリックの可能性があると言われたが、取って付けた感が否めない。

これは私の推測でしかないが、この任務はユーイチを帰省させようという思惑があるように思える。まあ根拠があるわけではないが……。

私はそれが悪いとは思わない。どんな事情があるかは知らないが、このていどの温情なら与えられて然るべきだろう。ただ、私が気になっているのはこの任務が聖王教会からの依頼だという事だ。八神

部隊長が聖王教会と懇意にしている事は知っている。そのつながりかとも考えられるが、それだけではないように思えてならないのだ。私は、ユーイチと聖王教会には何かしらのつながりがあると考えている。

と、私の思案顔に何を思ったのか、高町教導官は笑みを含んだ問いかけを投げてきた。

「ふふつ、悠一くんの事が心配？」

心が、ざわついた。

心配？ 私が？ 誰を？ ユーイチを？

アイツより、弱いはずの私が？

……ああ、そうだ。私は心配している。何よりも恐れているのだ。アイツの成長速度は私の想像を遥かに超えていた。素人同然だった槍の扱いしてもそう、シグナム隊長に負けた原因でもある魔法技術にしてもそう。この2週間あまりで、一を聞いて十を成す才能をまじまじと見せ付けられた。

ユーイチだけじゃない、スバルにしてもエリオにしても、キヤロだってそうだ。訓練を重ねる毎にめきめきと頭角を表してきている。対して私は？ ……ちゃんと成長できているの？

私が凡才なのは知っている。だから、一歩ずつでも確実に進んでいけたらと思っている。でも、それさえも許されないのだとしたら？ 私はどうやって強くなれというのか？ 凡人は凡人らしく地べたで足掻いているとでもいうのか？

努力なんてしないでと叫びたかった。努力を怠らぬ天才に、凡才がどうやって勝てというのか？ 努力は凡人である私が、天才に抗うための唯一の手段だというのに。

「……弟分みたいなものですから」

私の吐いた言葉は、自分で思った以上に白々しかった。

遠くからフェイトちゃんの運転する車が近づいてくるのが見える。私たちは疲れて帰ってくるだろうユウくんたちのために食事の用意をしていた。

私、シャマルを含め総勢八人。合流したはやてちゃんにヴィータちゃん、シグナム。幼馴染であるアリサちゃんに月村すずかちゃん。そして、はやてちゃんとも古くからの友人である梶丸太くと紫藤雪道ちゃん。

近くに止まった車から降りてきたユウくんが、すずかちゃんたちの元へ駆け寄っていく。

「すずちー！ かじゅまる！ ゆきぼん！」

「久しぶりだね、ゆうちゃん」

「おー、マジでガキのまんまかよ……」

「まあ、まるくんイジワル言わないの。うん、久しぶりだね悠くん。心配してたんだよ？」

久しぶりに会ったとは思えない和やかな雰囲気で笑いあう四人。と、車から降りてきたのはちゃんとフェイトちゃんが驚いた顔をしているのが見えた。

「どうして丸太くと雪ちゃんがここに……」

「ん？ なんだよ、久しぶりに会ったつてのにずいぶんと間抜け面

晒すじゃねーか、中卒トリオその一、その二」

なのはちゃんたちが驚くのも無理ないと思う。梶君と紫藤ちゃんは数時間前まで魔法の存在を知らなかったのだから。

海鳴への出張任務が決まり、ユウくんにはアリサちゃんとすずかちゃんは魔法関係の話を知っているよと教えたとき、ユウくんがぜひ二人にも会いたいと言ったのだ。

はやてちゃんは少し悩んだようだが、あっさりと許可し、コテージに呼んだ二人の前で魔法を使って見せた。

目の前で人が浮くのを見たのは初めてなのだろう。アリサちゃんとすずかちゃんの口添えがあっても戸惑が抜けない二人に、はやてちゃんはこう言っただけだ。

「ゆうくんが、二人に会いたがつとるんよ。そして、ゆうくんも私と同じ力を持つとる。この力が怖いなら、悪いけどゆうくんが来るまえに帰ってくれんか？」

対して二人は即答だった。なめんじゃねえ、と。

「ゆうの事を心配してたって年月なら、俺らもテメエらと変わらねえんだよ」

「そうだよ。それに、高等部に進学した途端になくなった三人のことも心配してたんだよ？ アリサちゃんとすずかちゃんは何か知ってる風だったけど、いくら聞いてもはぐらかされるだけだったし……。こんな事情があったのね……」

苦笑いのアリサちゃんとすずかちゃんに、そか、と嬉しそうに笑うはやてちゃん。

その後は、学生時分に戻ったようにほのぼのとした空気で近況報

告を交わす五人。が、なのはちゃんとフェイトちゃんはそんなやり取りを知るはずもなく、梶君と紫藤ちゃんの事も二人には完全なサプライズだ。

フェイトちゃんは、知ってるの……？ とつぶやいた。

「さつき八神からな。中卒で魔法使いやってんだろ？ 驚いたっつか、呆れたっつか……なあ？」

「うん、小学生の頃から働いてたんだって？ 言ってくればよかったのに。皆水臭いんだから」

「まあ、私にもいろいろ事情があつたんよ」

とりあえず自己紹介だけして、ご飯食べよかー？ というはやてちゃんの言葉に、エリオくんたち隊員四人と、面識のなかったリインちゃんが軽く自己紹介をして、すずかちゃん、梶君、紫藤ちゃんもそれに続きます。

それが終われば、お楽しみのお食事タイムです。

「私も手伝つたんですよ」

「食材切っただけだけどな」

ヴィータちゃんうっさい。

バーベキューなどの網焼きに、焼そばなどの鉄板焼きがテーブルとともにいくつか設置されていて、小皿を片手に立食形式で食べるのだ。

幼馴染たちとテーブルを囲うユウくんを、付かず離れずの位置からうかがうエリオくんがいるのを確認する。私は思わずほくそ笑むと、そそくさと二人がよく見える位置をキープした。

「かじゅまるとゆきぽんは今何してるんですか？」

「私はアリサちゃんたちと一緒に大学に通ってるんだ。学科は違うけどね。で、丸くんは少女漫画家。けっこう人気者なんだよ？ ドラマ化の話もあるんだよね？」

「まあな。仕事は順調なんだけどよ……」

「ちなみにこいつら、同棲してんのよ」

同棲！？ とユウくんだけじゃなく、なのはちゃんとフェイトちゃんも驚きの声を上げます。

口を尖らせる梶君に照れたような笑みの紫藤ちゃん。それをニヤニヤした笑みで見るのは、はやてちゃんとアリサちゃん。ちなみにすずかちゃんは一步離れた位置で苦笑い。

「結局くつつきやがったの！？」

「んだよ、それ……。つかウチの親父は俺が漫画描いてんの反対しててな、半ば勘当されたようなモンなんだよ。で、一人暮らししてた雪んトコ転がり込んで……。まあ付き合ってたけどな。雪の親父さんとかも何でか俺の事気に入ってくれて、早く籍入れるって言われて……。あー、今俺の親父を説得中でな、それが終わったらす、式、挙げるつもりなんだよ」

真つ赤な顔の梶君のいきなりの爆弾発言に、みんなの思考が止まります。が、徐々に理解が及んできて、皆で一斉に歓声を上げます。プロポーズは？ 式場とか決まってるの？ と女性人は紫藤さんに詰め寄ります。

と、ユウくんがグラスを掲げます。

「皆々様！　ここにおわす梶丸太くんと紫藤雪道ちゃん。二人のことをよく知らぬ方もいらっしやるかとも思いますが、結婚という門出が、どれほどめでたい事かはご理解いただけたと思います！　皆様、グラスをお持ちください。幸せな二人を祝して！　乾杯の音頭とさせていただきます！　それでは、乾杯！！」

『かんぱーい！！』

私も例に乗っ取って杯を空けます。

面識の薄い、他のテーブルの皆さんもおめでとうございます！と声上がる。

まだ正式に決まったわけじゃねえよ、と照れる梶君は確かに嬉しそうです。

「いやあ、かじゅまるが結婚ですか……。もうおっさんですね！」

「だ、誰がおっさんか！？　まだ二十歳前だっつーの！」

「9歳児から見たら十分おっさんですよ！？」

「……っ！かその考えだと、なのはたちもおばさんって事になるじやねーか」

「うつわ、女性に対する発言だとは思えませんね。さいてー、かじゅまるさいてー」

キツくなった女性の視線に、梶君はうぐ、と呻きます。

「……あー、あれだ、な、なのはたちはそーゆー相手はいないのか？ そっちがどーゆー世界かは知らんが、出会いくらいはあるだろ？」

「えー！？ ……し、仕事が忙しいからね！ 彼氏とか作ってる余裕がないんだよ。決して出会いがないからじゃないんだよ！？ ね？ フェイトちゃん！」

「私！？ ……えう……、私はあんまり興味がなかったから……でも、幸せそうなユキミチを見てたら、恋人同士っていうのもいいものかなって思えたよ。はやてはどうなの？」

「私もか！？ ……私は夢やった自分の部隊持つためにいろいろ駆け回ったからな。私も忙しくて男作るヒマなんてなかったなー……。ちゅーかこんなええ女やのに周りがぜんぜん声掛けてこへんってのはどーゆーことや！？」

「……なのは見栄はんな。フェイトは相変わらずで安心した。八神はがんばれ、超がんばれ。三人に対してプチ優越感を抱いたところで、ゆうはどうよ？ 周りは美人ばかりだろ。シグナムさんだっけ？ あの何とか凄くね？ 同年代の可愛い子とかもけっこういるみたいだしな」

「……アンタ、婚約宣言した傍から他の女の人褒めるってどうなのよ？」

「……」

「ゆきの無言の圧力が恐ろしいが、その考えは浅はかだと言わざるをえないな、アリサ！ 心に決めた奴がいようと、そこに美人が

いるならば目を奪われるのが男つてもんだ！　なあ、ゆう！」

「おんなごころが男に分からないようにー、おとごころも女には理解できないんですよー！」

いえー、と片手でハイタッチを交わすユウくと梶君。これだから男つて奴は……、とアリサちゃんが毒づいています。

が、私の視線を奪うのは二人のやり取りを詰まらなそうな目で見るエリオくんだ。

私のデバイスのクラールヴィントに新しく搭載したカメラで、口を尖らせるエリオくんを撮る。

私の読みどおりだ。私は梶君が、ユウくとエリオくんの関係によい刺激を与えるスパイスになると踏んでいたのだ。

と、梶君がエリオくんの視線に気づいたようだ。

「ん……？　……なんかあの坊主にすっげー睨まれてんだけど」

「え？　エリりん？　どうしたんですか？」

「へえ、エリりんってゆーのかあの」

「——違います」

梶君の言葉の途中で、エリオくんの否定が入ります。あ？　と疑問とも威嚇とも取れる声を上げる梶君に、表情を消したエリオくんが続けます。

「エリオです。そう、名乗ったはずですよ」

「へえ……」

睨み合う二人。だが、険があるのはエリオくんだけで、梶君はうかがうような視線だ。

すばらしいと思った。

一人の男の子を挟んで睨み合う二人に脳内で妄想が展開する。エリオくんがここまでの行動に出るなんて、嬉しい誤算だった。

「ハアハア……ふふふ」

呼吸が乱れて、ニヤニヤが止まらない。

しかし、このステキ空間は無粋な怒声によって破壊された。

「やあつと帰ってきやがったか、クソガキ！」

「お姉ちゃん!？」

いつの間にかその人はいました。

赤毛の長髪に切れ長の瞳。眼光鋭く、口元は不満気に歪められている。タンクトップにジーパンというラフな格好の仁王立ちの女性。ユウくんがお姉ちゃんと呼ぶということはユウくんの親族だろうか？ という私の考えは次の瞬間疑惑に変わった。

お姉さんに駆け寄って行くユウくん、吸い込まれるように回し蹴りが叩きこまれた。ユウ君は綺麗に十数メートル吹っ飛んだ。

「ちょ！ 紗枝さん!？ いきなり何してるんですか!？」

「ああ？ 誰だテメー?」

なのはちゃんはお姉さん——紗枝さんを知っているようだ。

「あの、高町なのはです。ゆう君の友達の」

「知らん」

紗枝さんはそうでもないようだ。

というか、紗枝さんの睨み方が様になり過ぎている。うう、となのはちゃんがりごむほどに。

皆が紗枝さんの存在感に圧倒され、アクションが起こせない中、起き上がったユウくんが服を叩きながら紗枝さんに近づいていく。

「ぶー、いきなりひどいですよお姉ちゃん」

「うっせ、10年も連絡の一つも寄越さねえテメエがわりい」

ガシガシと強めにユウくんの頭を撫でる紗枝さん。相変わらずの不機嫌顔だが、ユウくんはニコニコと嬉しそうだ。

「咲耶様も会いたがつてるからな、ちよつと待ってる。すぐ準備する」

紗枝さんはジープンのポケットからお札のような物を取り出すと、地面に置いて何かつぶやきだした。しばらくするとお札に書かれた文字が光り出し、地面に見たこともない魔方陣を描いた。

お札が一層強く輝くと、そこに半透明の姿で女性が現れた。

艶やかな黒の長髪に、白い肌を包む真紅の着物。幼い印象を受ける顔立ちの女性は、髪と同じ色の瞳でユウくんを捉えた。

「母上！」

ユウくんが咲耶と呼ばれた女性に抱きつきます。

咲耶さんはぎゅっとユウくんを抱きしめ返し、おかえりなさい、と囁きます。その声音にはありありとした慈愛が込められています。

「悠一、体に大事はないか？」

「はい、姉上が守ってくださってますから。母上こそお変わりないようで安心しました」

「……あの、貴女がゆうくんのお母様ですか？」

互いが互いを慈しむように語り合う二人に話しかけるはやてちゃん、どこか恐る恐るといった様子です。

着物に顔を埋めるユウくんから視線を外し、咲耶さんははやてちゃんを捉えた。

「そうだ。……そなたは？」

「私は八神はやてといえます。ゆうくんを保護させていただいてる者です」

「そうか、そなたが……悠一からあるていど話は聞いておる。そしてそなたは幼少期に悠一と懇意にしておった童じやな？ 八神はやて殿。その事も含め礼を言おう」

「い、いえ、そんな……」

咲耶さんはどこか威厳に溢れていて、はやてちゃんが恐縮するのも分かるというものだ。

「悠一がこちらに長く滞在できぬ訳も理解した。何より悠一が納得している事も、な。ならばそなたらには悠一の事情を知っておいてもらいたいと思うのじゃが……悠一よいか？」

かまいません、と答えたユウくんはそつと咲耶さんから身を離しました。

「中には知っている者もいるが、私は人間ではない。そして悠一とも血のつながった親子ではない」

咲耶さんが血のつながりがないと言った時、ユウくんが一瞬表情を歪めました。

「この世界出身の者には、妖怪、化生といった表現であるていど察する事が出来ると思う。じゃが、他世界の物には、そうじゃの、単純に化け物と思ってもらってかまわん。それが我だ」

咲耶さんは一呼吸置くと、ユウくんの頭を一撫でして、

「化け物を、普通の人間であつた悠一がなぜ母と呼ぶようになったのかを、今から語らせてもらおうかの」

日本の地に古くから続くとある名家があつた。

今から20年近く前、当主の妾が男子の双子を身ごもつた。めでたいはずのその出来事はその家に騒乱を呼んだ。その家ではある言い伝えが現代にまで存在していた。

『双子の男児は凶兆の証。生まれし代にて災いをもたらす。妖の者に捧げよ。災厄の芽は摘み取られねばならぬ』

言い伝えを信じる者と信じぬ者。その家は二つに分かれ激しい論争が交わされた。

結果、当主は言い伝えを守ることを選択した。

生まれた双子の弟を、古くから関係のあった妖怪に生贄として捧げたのだ。

妖の世に送られた赤子は、当然殺されるはずだった。だが、その時誰も予想していなかった事態が起こっていたのだ。

その妖怪は別の妖怪と争っていた。

赤子見守る激戦の末、その妖怪は倒され、勝利したのは岩長と呼ばれる妖怪だった。

だが、結果は変わらないはずだった。妖の世に入り込んだ人間の末路など決まっている。

大概は妖怪のエサとなるのだ。

しかし、岩長はその赤子を住処に持ち帰り、仲間に私が育てるとのたまったのだ。

当然多くの者が反対した。岩長の妹であった咲耶も反対した者の一人だ。

人の世と妖の世には互いの世に干渉しないという理が敷かれている。例外はあるが、人の世に紛れ込んだ妖怪は討伐されるし、妖の世に迷い込んだ人間は餌食になる。それが当たり前だった。

結局岩長は仲間から外れ、一人で赤子を育て始めた。

姉の身を案じた咲耶と、岩長に恩のあった紗枝も時々様子を見にいたりしながら、1年の時が流れる。

悠一と名付けられた赤子はすくすくと成長し、そして悲劇は起こった。

岩長は悠一を排除せんとする妖怪たちによる襲撃を受けたのだ。

悠一を排除。これは岩長を殺すための態のよい大義名分に過ぎなかった。

岩長は強大な力を持っていた。そのため、岩長を目障りに思う輩がたくさんいたのだ。

悠一を庇いながらも岩長は多くの敵を屠った。
しかし。

駆けつけた咲耶と紗枝が目にしたのは、血だまりの中に横たわる、悠一を抱きしめて事切れた岩長の姿だった。

咲耶たちは悲しんだ。愛する家族の死に。そして涙が枯れ果てたとき、残ったのは悠一をどうするかという問題だった。

悠一を生かしておけば、禍根が残るだろう。岩長は良くも悪くも影響力の強い妖怪だった。

咲耶には私怨もあった。愛する姉を殺したといっても過言ではない人間の悠一。

でも。

姉が、己の命を賭してまで守った命を、どうして蔑ろにできるのだろうか。

咲耶は決意する。岩長に変わり悠一を育て上げる、と。

悠一は、死ぬ直前の岩長に能力を授けられていたらしく、その肉体を岩の如く硬さする術を見につけていた。

だが、それだけでは生き残る事は出来ない。

悲劇を繰り返さぬために、咲耶は悠一を物心つかぬ内から鍛え上げた。

天賦の才とでもいうのだろうか。悠一はめきめきと力を付けていった。

厳しい教育を乗り越え、やがて悠一は咲耶を母と呼ぶようになった。咲耶も悠一を本当の息子のように可愛がるようになっていった。時を重ねる毎に敵は増えた。争いに巻きこまれることもしばしばだった。その度に咲耶と紗枝と、そして悠一とで抗っていた。

傷ついて傷ついて、それでも三人は幸せだった。

だが、いつしか悠一は一つの決意をすることになる。

人の世に移住する、と。ばくのせいで母上たちが傷つくのは見てられない、と。

咲耶は反対した。その必要はない、と。悠一を守ることは私たち

の幸せでもある、と。

悠一の決意は堅かった。何も二度と会えなくなるわけじゃない、と。

咲耶はその悠一の姿にかつての姉の姿を重ねた。結局、折れたのは咲耶のほうだった。

妖怪と人間のハーフである紗枝をお供に、人の世に旅立とうとする悠一に、咲耶は初めて岩長の全てを語った。

岩長は生贄として捧げられた悠一を救ったのだと。悠一と名付けたのは岩長なのだ。岩長は悠一を命を賭けて守ったのだと。始め悠一の母であろうとした岩長は、短い間だけど、確かに悠一のことを愛していたのだと。

そして、最初私は悠一のことを怨んでいたのだという事も咲耶は語った。

それでも、と告げられた、あなたはぼくの母上ですからという言葉は、咲耶の長い人生において、これほど心が振るえることはなかったと言わしめるほどの物だった。

「——と、こういった経緯があつて、悠一は今に存在しておる」

一通り語り終えた咲耶さんは、一息つくと皆の顔を見渡す。

「我からの無粋な願いじゃが、どうか悠一と仲良くしてやってくれるかの？」

話に圧倒され、皆がなかなか声の出せない中で、一歩前に進み出したのは梶君だった。

「実は魔法使いでしたって暴露されて、10年経って戻ってきたら

ガキのまんまで。いまさら妖怪に育てられましたなんかじゃ驚きませんよ。仲良く？　んなもんは10年前から決めてる事ですよ」

続いて、どこか張り合うようにエリオくんが進み出る。

「ユウは大事な友達だから。友達だって言ってくれたから。僕はユウを信じてます」

二人の言葉に、皆が頷いてみせます。もちろん私もです。私の、いや私たちの癒しに、生まれなど関係ありません。

「ほっほ……そうか、悠一は良い仲間を持ったの」

咲耶さんは朗らかに笑うのだった。

メシを食い終えた俺、丸太たちは、風呂に入るために近くの銭湯まで来ていた。十六人という迎えた店員が驚くほどの大人数だ。さあ入浴だ、と意気込む俺たちに、一つ問題が発生した。

『女湯への男児入浴は11歳以下のお子様のみでお願いします』という注意書き。

「ね、エリオくん、ユウくん、一緒に入る？」

「ええっ！？　い、いや、ダメだよ！」

キャロちゃんが小首を傾げ、どうしてと聞きます。

「だ、だって……キャロがよくったって、た、隊長たちとか、スバ

ルさんとかもいるわけだし！」

「おーおー、ウブだねえ。俺なら喜んで一緒にさせてもらうのに。そう思っていたら、いつの間にか後ろにいた雪に思いつきり抓られた。」

「な、なぜバレたし……。」

「私たちは別にかまわんけどなー。なあ皆？」

そこかしこから気にしない、の聲が上がる。

「ダメですよ、はっちゃん。男女七歳にして席を同じうせず、ですよ。かじゅまるも一人になってしまいますからね」

「……ゆーくん、まさかこの事態を見越してまるたくん呼んだんか！？」

「ちょっと待て！ 聞き捨てならなすぎるだろ！？ このためだけにか！？」

「だってラブラブやしなー、ねー？ とニヤニヤし合う八神とゆういや、理由になってねえよ。」

「と、いうことでぼくたちは三人でお風呂に」

「——ダメよ！ みんなで一緒に入るべきだわ！！」

ゆづの発言を遮って、シャルマルさんが声を上げた。つーかあの人、

「……シャルマル、鼻血出とるよ？」

「ハッ！ ……私としたことが……！」

「ゆう、坊主、さっさと行くぞ」

あの人に二人を渡してはいけない気がして、俺は二人の手を引っ張って男子脱衣所まで急いだ。

服を脱ぎ、脱衣所を抜け、軽く身体を洗って湯に浸かる。

あゝ、と意図せず声が漏れる。他の利用客が少ないため、湯船を広々と使えて気持ちがいい。

三人で並んで座っていて、どいつの顔も蕩けている。しばらくボーっとしていたら、ゆうがポツリとつぶやいた。

「ねえ、かじゅまる？」

んゝ、と間延びした声で返す。

「……びつくりした？」

何がだ？ と聞き返そうとゆうの顔を見ると真面目な面をしていやがった。

びつくりした、か。まあ言ってみりゃ全部、だよな。

「そりやな、驚いたさ。お前がいなくなつて、先生は突然引越したって事しか知らなくて、事情知ってそうなのははいつか話すつて言つて口割らねえし……もお会えねえんじゃねえかとも考えたさ。だから、驚いてるし、まあよかったって思ってる」

「……怖く、ないの？」

……んだよ、詰まんねえツラしやがって。

「魔法つてモンはいまだに想像つかねえし、妖怪つていわれてもいまいち実感湧かねー。怖いっつか、分かんねえって思いはつえーよ。でもな」

これだけはテメエの目え見てはつきり言える。

「テメエに傷つけられても仕方ねえって思えるくらいには、テメエのことを信頼してる」

湯に広がらぬようにアップで纏められた髪ごしに頭を撫でる。

「だから、似合わねーツラしてんじゃねえよ」

一転して、ニコニコとした笑みを浮かべるゆう。

ああ、やっぱりコイツはバカみたいに笑ってるほうがいい。

俺はそう思った。

ふと覗いた露天風呂で合ったキヤロと雑談を交わして、男風呂に戻った僕、エリオは今度はユウに捕まった。

髪を洗ってくれるらしく、洗い場に連れてこられた僕の頭を、ゆうがかき混ぜる。

自分で洗うのと違ってどこか気持ちよく、お湯で泡が洗い流されるまで至福の時間を味わった。

「じゃあエリりん、今度はぼくのを洗ってください」

「ええ！？ いいの！？」

ユウは髪を大事にしているらしく、お風呂に入る時でも気を使った洗い方をしていた。なんでも、母上が褒めてくれた自慢の髪らしく、そんな大事なものを僕が触ってもいいものか迷ってしまう。

「？ 変なエリりんですね。エリりんだから洗ってほしいんですよ？」

トクン、と胸が高鳴った。

いやいや、深い意味はないはずだ、と自分を落ち着けて、僕はユウと位置を交代する。僕の目の前には髪留めを解いた黒の長髪が広がっていて、そっと触れてみると、若干湿っているそれは、触っていて心地よいと感じた。

ドキドキの収まらない胸を押さえて、カランを捻りシャワーでユウの髪を濡らす。

シャンプーを手に取り、泡立ててユウの髪に絡ませる。恐る恐るといった手つきになってしまったのは仕方ないじゃないか。

「か、かゆいところはない？」

「んー、平気です。もっと強めでも大丈夫ですよ？」

言われても、うまく力が込められない。

なんとか満遍なく洗い終え、ぬめりが残らないようにシャワーで泡を洗い流す。

眼前にある、ユウの艶やかな黒髪。

視線が、外せなかった。

無意識の内に一房をすくって、顔に近づけていた。

スンッと鼻を鳴らすと、広がるのはシャンプーのものとは違う香

り。

鼻こうだけでなく、肺にまで染み渡るように感じたそれは、
ユウの……匂い。

かみ締めるように目を閉じ、

「って僕は何をしてるんだ！」

「うひゃあ！ な、なんですか！？」

慌てて、な、なんでもないよ！ と答える僕の顔は真っ赤で、の
ぼせちゃいましたか？ と心配してくれるユウ。

照れくさくて、ユウと目を合わせられなくて、やっぱり僕は、な
んでもないよと弱弱しく否定する事しかできなかった。

夜風が気持ちいい。二重の意味で火照った身体を程よく冷やして
くれる。

お風呂から上がった僕たちは、河川敷きグラウンドと呼ばれる場
所に来ていた。仕掛けたサーチャーが魔力反応を感知したからだ。

そして、僕たちの前には、半透明で不定形の物体がたくさん。

はやて部隊長からの報告だとこのロストロギアは、危険を感じる
と複数に分裂してダミー体を無限に増殖させるタイプで、本体は一
つらしい。

既に無数に分裂しているロストロギアの中から本体を見つけ出し、
封印するのが僕たちフォワード隊員五人と二匹に与えられた任務だ。
隊長たちは、シャマルさんが広範囲で展開した結界の中で、無数
に散らばったダミー体を掃討している。

僕たち五人は、本体を特定する役割としてキャロとティアナさん。
ダミー体と判断された不定形体を排除する役割としての僕、ユウ、

スバルさんに分かれていた。

僕たちはダミー体に攻撃を仕掛けるが、不定形体はふよふよと浮かぶ間抜けた様子からは想像できないほど手強かった。

そのぷるるんとした体は、こちらの物理攻撃を無効化するのだ。

どう攻略しようか悩む僕だが、ユウの判断は素早かった。

ユウは重装態から軽装態に騎士甲冑を変えると、スナオマルに跨り不定形体に接近する。そのまま拳を叩きつけると、ダミー体が内部から破裂した。

「エリりん！」

短い掛け声に、なんとなくが言いたい事を理解する。

後ろに下がるユウと入れ替わるように前に出る。刃が通らないなら、とストラーダでダミー体を弾き一箇所に集めていく。

「いくよ！ タイガービーム！」

「グオオオオオーンッ！！」

スナオマルの咆哮とともに灰色の光線が走る。

ユウの砲撃魔法が、数体のダミー体を纏めて飲み込んだ。

スバルさんも加わって、ユウの砲撃魔法を軸に三人でダミー体を倒していく。

あるていど数を減らすと、

「シーリングシュート！」

ティアナさんの掛け声とともに、魔法弾が一体の不定形体に飛ぶ。着弾を確認すると、他のダミー体が消えていった。

最後にキャラがロストログアに封印処置を行うと、はやて部隊長

から任務完了の報告が届いた。

ロストログアも確保し終わり、ミッドに帰ることとなった。

僕はユウに何か袋を渡している梶さんを見る。

『テメエに傷つけられても仕方ねえって思えるくらいには、テメエのことを信頼してる』

……僕はユウに同じ事が言えるだろうか？

あの時、僕は友達と親友の違いを見せつけられた気がした。

ユウの口からではないけど、ユウはあっさりと自分の秘密を打ち明けた。怖いって感情があるのに、ユウはそれでも自分を晒したんだ。

僕に同じ事が出来るんだろうか？

ユウは強いと思った。そして梶さんもまた。

「よう、坊主」

いつのまにか、目の前に梶さんがいた。

「……エリオです」

長身の梶さんを睨みつける。一目見たときから、なぜだかこの人に対して対抗意識が湧いてくきた。

ニヤけた笑みを見せる梶さんからはなんだか余裕が感じられて、無性に腹が立った。

「そうか、じゃあエリオ。……ゆうの事、頼んだぞ」

「……アナタに言われるまでもありません」

そうか、と笑って去っていく梶さんの後ろ姿を見ながら考える。
いつか僕も秘密を打ち明ける時がくるんだろうな、と。
思うことがたくさんあったけど、海鳴にきてよかったなって、そ
う思えた。

こうして、僕たちの出張任務は幕を閉じたのだった。

10年ぶりの帰郷。だが少年にとっては2週間ぶりくらいのこと（後書き）

心に闇を持つティアナ。

思いを募らせるエリオ。

そして影で暗躍するシャマル。

そんなお話でした。

戦闘シーンがやつつけになってる感がありますね。お風呂シーンで軽く燃え尽きましたから。

さて、次回はいよいよホテルアグスタ……ではなく、閑話を挟ませていただきます。

次回も楽しみにしていただければ幸いです。

では。

昔語り・支離滅裂は子どもと恋する乙女の特権（前書き）

子どもの思考じゃねえ！ というツツコミは、すでに私が自身にしておきましたのでご安心ください。

自分でもツツコミどころのある作品を、皆様の前にさらすという軽い羞恥プレイ。……興奮がとまらねえぜ！

昔語り・支離滅裂は子どもと恋する乙女の特権

私は独りぼっちだった。

人気のない公園のベンチで、私は何をするでもなく時間を潰している。

お父さんが仕事で怪我をして入院した。

すると、お母さんは仕事に追われるようになった。お姉ちゃんはお店を手伝ったり、お父さんの看病にと忙しくなった。お兄ちゃんは道場にこもるようになった。

ダレモ、ワタシニ、カマツテクレナクナッタ。

一人でいるのは寂しかったから、お母さんに手伝いを申し出る。

でもお母さんは、いい子で一人で遊んでね、と言って私を遠ざけるだけ。お姉ちゃんもお母さんと同じ事を言った。お兄ちゃんはないんだか怖くなったから、声を掛ける事さえ躊躇われた。

結局一人でいるしかなくて、もしかしたら、私はいらぬ子なんじゃないかとも思えて、それを振り払うように私は考えた。どうすればかまって貰えるようになるのかって。

考えて、考えて、考え抜いて、出た結論は『いい子』でいることだった。

お母さんも言っていたから。いい子にしててねって。

だから私は『いい子』でいようとがんばった。迷惑をかけないようにおとなしくしていたし、わがままだって言わなかった。心配かけないようにいつだって笑ってた。

私はいらぬ子じゃないって言って欲しかったから。寂しいのは嫌だったから。

『いい子』でいれば、いつか報われると信じてたから。でも、

私は今だ独りでの。

うつむいて座る私に影が差した。

反射的に顔を上げるとそこに、心配そうに私を見る男の子がいた。

「どーして泣いてるのですか？」

男の子が尋ねてくるが、私には男の子の言っていることが理解できない。

泣いている？ 私が？

頬に手を当ててみる。もちろん濡れた感触なんかなくて、

「私は、泣いてなんてないの」

「なにか悲しい事でもあったのですか？」

「だから私は泣いてなんてないの！」

男の子は噓つきだった。

私が、泣くわけなんてないのに。だって、泣いたら迷惑がかかる、『いい子』でいられなくなる。だから私が泣いているなんて噓だ。

「悲しい事があるのなら、話してみてください。ぼくでも力になれることがあるかもしれません！」

そう言って男の子は笑顔を浮かべる。

無性に、腹が立った。

何を楽しい事があるというのか？ 何を嬉しい事があるというのか？

私はどうしたって一人にいるのに。私はこんなにも寂しいという

のに。

なんでこの子はそんな綺麗に笑えるの？

「私はッ、泣いてなんてッ、ないのッ！」

ポロポロと頬を伝う物があつた。

何にも知らないくせに勝手なことばかり言つて。

悔しくて、悔しくて、悔しくて。

寂しいのはもう嫌で、一人ぼっちはもう嫌で、我慢なんてもうしたくなくて。

泣いちゃダメだって、ぎゅっとまぶたを閉じるけど、涙はそれでもあふれ出て。

「え……？」

泣いてる姿を見られたくなくてうつむく私を、そっとぬくもりが包んだ。

「ガマンなんてしなくてもいいです。ワ～って出しちゃえばいいんです」

我慢しなくてもいい？

「なんで？ なんでなんでなんでッ！？ なんで我慢しなくてもいいの！？ お母さんもお姉ちゃんも忙しくって！ お兄ちゃんも怖くなって！ 一人は嫌なのに！ 一人は嫌だけど……私は『いい子』でいなきゃダメなの！」

「……だったら、友達になればいいんです！」

……とも、だち？

「ありのままのキミと、ありのままのぼくとで、友達になるんです。そうすれば一人じゃなくなります。悲しみだって、きつと和らぎます。だから」

男の子と目を合わせる。やっぱり、その笑みは綺麗で、私に向けられるそれは暖かくて、

「ぼくと友達になってください」

ぬくもりが、染み渡る。

抱きしめられている事を今さらに実感する。

それは私が一人じゃない証。

それは私がずっと求めていた暖かさ。

私を、必要としてくれる人。

離したくなんてなかった。

「……うんっ！ わた、わたし、なる！ 友達になる！」

「うん、じゃあ改めて言うよ。ありのままのキミでいて？ 我慢なんて、しないで？」

向き合う男の子の微笑みに、込み上げてくるものがあつた。すごく安心できたから、

「あ……、ああうううううううう、つあああああ————
————」

堰を切ったように私は泣いた。声を上げ、思いつきり。

男の子は私をぎゅって強く抱きしめてくれて、嬉しいはずなのに
いつそう涙はあふれ出てくる。

泣いて、泣いて、やがて日が傾くまで泣いて、ひとしきり泣いた
後、私は急に恥ずかしくなって慌てて身を離れた。

「う、ごめんなさい！ あの、服汚しちゃって……」

男の子のシャツが涙でびしょびしょになってしまった。

嫌われたかもと体が強張り、再び涙がにじむ。だが男の子は、気
にしないよと涙を拭ってくれた。

「そういえば、名前もまだ聞いてなかったですね」

「あつ、うん。そういえばそうなの……私はなのは。高町なのはっ
ていうの！」

「ぼくの名前は悠一です。えっと、なのちゃんって呼んでいいです
か？」

「うん！ じゃあ、私はゆうくんって呼ぶの！」

にやはは、あはは、と笑い合う。

こんなに楽しい気持ちになったのは久しぶりだった。

「そういえば、何でなのちゃんは泣いてたんですか？」

楽しかった気持ちに、暗い影が差す。

語って、嫌われないだろうかと不安がよぎる。

それでも、知ってもらいたいって思ってしまったから、私はゆっ
くりと口を開いた。

お父さんのこと、お母さんのこと、お姉ちゃんのこと、お兄ちゃんのこと、そして私自身のこと。全部をゆうくんにぶちまけた。黙ったまま聞き終えたゆうくんは、少し考えた後、私の目を見てニツコリと笑った。

「いいことを思いました！」

いったん店を閉め、私、高町桃子は、夕飯を作るために帰宅した。閉店時間を迎えても、明日の仕込みや店の清掃などやらなければならぬ事は残っているが、家事をおろそかにするわけにもいい。

店を手伝ってもらっている娘の美由紀には、先にあがってもらって夕飯の買い物頼みである。作るメニューはもう決めてあり、後は急いで取り掛かるのみ。幾分か簡単な物になってしまっていて、子どもたちには本当に申し訳ない。

疲れもあると思う。暗くなってしまった考えを胸に秘めたまま、玄関の戸を開ける。すると漂う香りがあつた。

これは……。

「カレー……？」

そんなはずはないと思った。

家に料理の出来る人間はいない。こういつては何だが、美由紀の料理スキルは酷い物である。普段から一人での料理は控える様言っているし、仮に美由紀が作ったにしては、香りに焦げがない。長男の恭もありえない。そもそも料理している姿を見たことがない。単純に切ったり焼いたりなら出来るかもしれないが、カレーですら作れるか怪しい。となると残るは次女のなのはだが、火の扱いは禁

じているため、考えにくい。

とすると、誰が……？

匂いに誘われるようにダイニングへ。

「これは……？」

テーブルの上には、簡素だが色合いのよいサラダにフォークとスプーンが置かれている。だが、数がおかしい。それぞれ、五人分置いてあるのだ。

「あ、お母さんおかえり」

キッチンから美由紀が出てきた。

……まさか！？

「美由紀が料理したの！？」

「……いろいろとツツコミたいけど、巡り巡って後悔しそうだから止めとくよ。とりあえず私が言えるのは、なのはを怒らないであげて。じゃあ、恭ちゃん呼んでくるから」

美由紀は急ぎ目にダイニングから出て行った。

なのはを怒らないであげて、か。という事は、食事の用意をしたのはなのはということだろうか？

なのは一人で調理が出来るとは思えないが、と疑問を胸にキッチンに入る。

「あ、お母さんお帰りなさい……」

「お帰りなさい」

私を出迎えたのは、なのはと、見知らぬ子どもだった。

「えっと、どちらさまでしょうか？」

「これはすみません、紹介が遅れました。ぼくはなのちゃんの友達で悠一と申します。お見知りおきを」

「あ、これはどうもご丁寧に……なのはの母の桃子です」

お互いに軽く頭を下げ合う。いまいち理解が追いつかない。ただ、悠一君が友達だと言ったときのなのはの笑顔が印象深かった。そういえばなのはの笑顔を見るのはずいぶんと久しぶりな気がする。

と、悠一君が背中を押す形でなのはが前に出てきた。

「あの、お母さん！ わ、私も何かお手伝いしたくて、ゆうくんと一緒にカレー作ったの！」

どこか緊張した様子のなのはと、目線を合わせるように屈む。

「ありがとう、なのは。でも、火を扱っちゃいけないって言うておいたでしょ？ 下手をしたら怪我をしたかもしれないのよ？ なのはは無理なんて」

「——無理なんかじゃない！！」

なのはは真剣な表情で、私から目を逸らすことなく泣きだした。

「わた、私は、無理なんてしてないもん！ お父さんが入院しちゃ

って、皆が忙しいの知ってるけど、私ができる事なんて、全然ないかもしれないけど、けど！ 私だけ仲間はずれは嫌なんだもん！ 私だって家族だもん！」

私は気づいた。いや、気づかされた。大きな間違いを犯してしまったことに。

認めなければならない。私はなのはをおろそかにした。

士郎さんが入院して、仕事に家事に看病にと追われた。せめて幼いなのはには苦労を掛けまいと思っていたのだが、その考えがなのはをここまで追い詰めるなんて、思いも因らなかつたのだ。

うつん、そんなのいい訳ね……。

なのはに悲しみを与えてしまった。家族である事にさえ、疑問を抱かせてしまった。

私はなのはを抱きしめる。強く、強く。なのはの悲しみを、私の罪を拭えるように。

「ごめんね、なのは……寂しい思い、させちゃって」

「おかあさん……」

なのはがしゃくりを上げながらぎゅっとしがみついてくる。背をさすりながら、私自身もなのはのぬくもりを噛み締める。

「よかったですね、なのちゃん……」

もらい泣きか、涙ぐんでる悠一君を見る。

……彼のおかげ、かしらね。

何のきっかけもなしに、なのはが心情を吐露したとは考えにくい。きつと悠一君が背中を押してくれたんだろう。

もしなのはが、このまま悲しみを抱えたまま成長してしまったら

と考えると、怖気が走る。

ありがとう、悠一君。

心の中だけでお礼を言った。口に出すのは後でもいいだろう。今はただ、なのはを慰めるのに集中したかった。

部屋着に着替えて、テーブルに着く。

私を含め、五人で食卓を囲む。私の右斜向かいになのはと悠一君が並んで座り、その向かいに恭也と美由紀が座っている。

いただきます、の掛け声とともにそれぞれがポークカレーを一さじ掬い口に入れる。

程よい辛味とスパイスの風味が口いっぱい広がる。

市販のルウだろうが、いくつかのルウを組み合わせることによって味に深みが出ている。なのはのだけ色が明るいの、牛乳と混ぜて甘口にしてあるからだろう。

恭也は相変わらずの仏頂面だが、なのはも美由紀も美味しそうにパクついている。

「そつえば、悠一君はお家の方はいいのかしら？」

食べ初めてから聞く事ではないが、夜も更けてきた。親御さんに一報ぐらいは入れておくべきだろう。

「んー、ぼくは今日この町に来たばかりなんです。母上とお姉ちゃんと一緒に来たんですけど、二人とも用事があって、しばらく一人で過ごさなきゃならなかったんです。母上には連絡しておきましたけど、帰っても一人なんです」

それですね、と悠一君は続ける。

「また遊びに来てもいいですか？ ご飯作りますよ！」

正直に言えばありがたい申し出だ。なのはの心が理解できたのはいい事だが、色々忙しい事には変わりないのだ。悠一君がなのはと一緒にいてくれれば何かと心強い。が、炊事を任せるとなると話は別だ。なのはがどれだけ望もうとも、悠一君にどれだけ技術があるうとも、子どもたちだけで刃物や火を扱うのは問題がある。

葛藤が、それは……、と言葉に出る。

「ダメですか？ 一人でご飯は嫌なんですよ……」

悠一君と、そしてなのはの縋るような視線が私を貫く。

うつ、なんだか罪悪感が……。

何かいい案はないものかと考える。と、一ついい考えが浮かんだ。

「そうだ。ねえ恭也？ なのはたちを監督してくれないかしら？」

士郎さんが仕事で怪我を負ってから、恭也は鍛錬に余念がなかった。見ていて危なっかしいと思うほどに。

なのはが孤独を感じることなく、恭也の息抜きにもなる。まさに一石二鳥ではないか。

妙案に私は笑顔を浮かべるが、対して恭也は渋い顔だ。

「しかし……」

「いいんじゃないですか？ 雑魚がいくら鍛錬を重ねたところで雑魚は雑魚。時間は有意義に使うべきでは？」

「なんだと……！」

「あ、凶星を突かれて怒っちゃいましたか？ ごめんなさい、アナタがあんまりにも不甲斐ないんで、つい本音が」

「貴様……！！」

「語彙が乏しいですね。弱いのは頭もですか？」

突然の悠一君の変わり様に、なのはと美由紀が啞然としている。かく言う私も言葉が出ない。恭也が怒りを露にしている危険な状態なのに、してだ。

「よろしい。弱さが自覚できていないのなら、思い知らせてさしあげますよ。表、出ろって意味ですよ？ 理解できますか？」

「……いいだろう……道場がある、ついて来い」

悠一君を連れ立って恭也はダイニングから出て行く。しばらくして現状を把握した私たちは、慌てて後を追った。

家の道場で、俺、高町恭也と悠一は対峙していた。

木刀を二刀流で構える。

目の前で中腰で構えを取る悠一を睨む。

アイツは俺を弱いと言った。

親父のいない今、家族を守らなければならないのは俺だ。だから俺は強く在らねばならないのだ。

アイツは俺を弱いと言った。

鍛錬に鍛錬を重ねてきた。体を苛め抜いてきた。あんな子どもに

何が理解できるというのか。

アイツは俺を弱いと言った。

御神の剣士として、護るための力を振るう継承者として、俺は何者にも負けられない。

アイツは、俺を、弱いと言いやがった！

「さあ、ビビッてないで掛かってきなさい。稽古をつけてあげますよ」

「つあめるなああああー！ー！ー！」

一瞬で距離を詰め、右手で握った木刀を振るう。

木刀は、狙い通り悠一の即頭部に直撃し、瞬間、手が痺れた。

寸分も揺るがず、悠一は一撃を受けきった。

「軽い……アナタの一撃はあまりに軽い。防御する価値さえないほどにね」

愕然とする俺に、一步踏み込んだ悠一の拳が突き刺さった。

背中まで突き抜けた痛みに、膝が折れる。

吐き気をこらえる俺に、回し蹴りが叩き込まれた。

体が浮き、ろくに受身も取れずに床に叩きつけられる。

「ぐ、うう……」

痛みに呻きが漏れる。

体がに力が入らず、傍に立つ悠一を倒れたまま睨みつける。

「自分が弱いと、ご理解いただけましたか？ アナタはこの家の誰

よりも弱い」

「な、なにを……」

意識が朦朧としてきた。

「士郎さんが倒れて、大黒柱たらんとする桃子さんよりも。家族の支えにならんと身を粉にする美由紀さんよりも。家族に心配かけまいと、自分を殺して泣くなのちゃんよりも。……アナタは弱い」

視線の端で心配そうな顔で俺を見る三人を捉えた。

「さわりていどですが美由紀さんに聞きました。御神流という流派は護りの剣に重きを置いている、と。アナタが家族を護ろうとするならば、『護る』という言葉の意味を、『兄』という存在の意味を、考えてみてください」

……俺は……。

俺はそのまま意識を手放した。

それから、ゆう君は高町家に入り浸るようになった。

「ほんと、ゆう君には頭が上がらないわく、いつそなのはと結婚して婿に来ない？ 美由紀でもいいわよ？」

「ちょ、お母さん！ ダメなの！」

「それはどっちの意味でかしら？」

炊事だけでなく、ゆうくと私は洗濯や掃除もこなすようになりました。

「……たしかに少しでも料理が出来るようになればと、飾り切りを教えたのはばくです。包丁捌きを上達させれば自信につながると踏みましたよ、ええ」

「ア、アハハハ……」

「だからといって買ってきた野菜全部飾り切ってしまうのはやりすぎでしょう!？」

ゆうくんはお姉ちゃんともすぐ仲良くなって、ゆう君、みゆちゃんと呼び合うようになりました。

「悠一、俺と戦え!」

「戦意のない相手に刃を向けるのが『護る』ということなんですか? ……バカな事言っていないでそのボウル取ってください」

「くっ! ……これでいいのか?」

お兄ちゃんはまだちょっと怖いけど、穏やかな表情を浮かべるようになっていました。

そんなこんなで、ゆうくと出会ってからあっという間の2週間が経った頃、私たちにある報せが届きました。

「皆! 土郎さんの意識が戻ったそうよ!」

夕飯を食べ終えた私たちに、受話器を置いたお母さんから待ちに待った報告がなされます。

皆が一様にほっとした表情を浮かべます。

「病院に行くから、皆準備して！」

「あの、その前に一ついいですか？」

ダイニングから出て行こうとする皆を呼び止めたのは、どこか申し訳なさそうなゆうくんでした。

「実は今日でこの町を発つことになってるんです。なかなか言い出せなくて、すみません」

私は、喜びが急激に冷めていくのを感じた。
そんな、だって……。

「せっかく友達になれたのに……」

うつむく私はゆうくんの、なのちゃんという呼びかけにも顔を上げる事ができませんでした。

「……じゃあ、一つ約束しましょうか」

約束？ とそっとゆうくんをうかがう私の目の端に浮かんだ涙を、泣き虫さんですね、とゆうくんが拭ってくれる。

「手紙、書ます。きつとまた、会いに来ます。離れてたってずっと友達ですよ」

「……本当？ 私のこと忘れてたりしない？」

当然です、と大げさなくらい胸を張るゆうくん。

ゆうくんの言葉だから信じたい。ゆうくんの言葉だから信じられる。

私は、ゆうくんを信じるの！

涙をこらえて、必死に笑う。だって、さよならは言わないから。

「ゆう君、今までありがとね」

「また会いに来てね？ 私とも約束だよ」

「……世話になったな」

「はい。また会いましょう。絶対に」

「ゆうくん……またね！」

ゆうくんが浮かべたのは、私と初めて会った時のような綺麗な微笑みでした。

あれから幾年かの年月が流れた。

お父さんは順調に回復して、家族五人で過ごせるようになった。

私は小学校に入学して、新しい友達ができた。

始まりは過激だったけど、アリサちゃんともすずかちゃんともすくぐに打ち解けた。

家でも、学校でも、私は楽しい日常を送っている。

けど、事あるごとに私の頭に浮かぶのはゆう君のことだった。

手紙のやりとりはあったけど、実際に会うことはなかった。
会いたって思いは日に日に強くなっていったけど、私はそれを
言い出せなくて。

そして、私は小学二年生になった。
そんなある日の事。

「なんか、皆変じゃない？」

なんだか教室全体がそわそわしている気がする。

「なんでも、転校生が来るらしいわよ」

そういえば、本来ない場所に机が一つ増えている。

そして興味のなかった私は、どんな子が来るのかなというアリサ
ちゃんとすずかちゃんの会話を話半分で聞いていた。

転校生が、ゆう君だったらしいのにな……。

「はい、皆、席についてー」

ボーっとしていたら、いつの間にか教室に先生がいました。

着席を確認すると、先生は改めて口を開いた。

「今日は、皆さんに新しいお友達を紹介します。じゃあ、入ってき
てー」

ガラガラと音を立て、聖祥大学付属小学校の制服に身を包んだ男
の子が教室に入ってきた。

あ……、と意図せず声が漏れる。

私はあの男の子を知っている。成長していても見間違えるはずな
んでない。

感情が涙となって零れ落ちた。

私は立ち上がっていた。周りの視線など気にならない。
男の子はニコニコとした笑顔で教壇に立つ。

「なのちゃんは、相変わらず泣き虫ですね」

「つゆう君!!」

駆け出して、その勢いのまま私はゆう君に抱きついた。

それからはいつもゆう君と一緒にだった。

ゆう君はアリサちゃんともすぐかちゃんともすぐに仲良くなった。
私も、ゆう君を通して丸太君と雪ちゃんという新しい友達も出来た。

学校で、家で、ゆう君と過ごす毎日とはこれまでとは比べ物にならないほど楽しかった。

この幸せがずっと続くと信じて疑わなかった。
私たちが魔法と出会う、その時まで。

昔語り・支離滅裂は子どもと恋する乙女の特権（後書き）

中途半端に終わりましたが、この話にはまだフェイトちゃん編の続きがありますから。公開はまだ先になりますけどね……。

やっぱり尻すぼみ感が否めないですね。本当に申し訳ない。

さて次回は、ホテルアグスタ……はぶっちゃけそんな書くことないんですよね……多分ティアナ撃墜となのはとの和解まで一気に進むと思います。

さて、今回は楽しんでいただけたでしょうか？ 次回も楽しみにしていただければ幸いです。
ではでは。

立ち上がれティアナ！ 今、悔しさと悲しみの果てに！！（前書き）

あくまで独自解釈なので、あしからず。

やっぱり、難しいですよねこの話。どっちも間違えていて、でもどっちも間違いじゃないんですよ。

まあ、とりあえずどうぞ。

立ち上げれティアナ！ 今、悔しさと悲しみの果てに！！

私はどこまでも凡人だった。

スバルのような突破力があるわけでもなく、ユーイチのように万能にそつなくこなせるわけでもなく、エリオやキャロのように希少技能があるわけでもない。

隊長たちとは、比べることすらおこがましい。

周りは優秀な人間ばかりで、私の存在意義が分からなくなった。必死に考えても、分かるのは周りとの差だけで。

私の努力は無駄なんじゃないかとも思い始めて。

そんなの嫌で、無力を否定したくて、私はがむしゃらにがんばった。

——そして私は、ミスを犯した。

機動六課に舞い込んだ新しい任務。

オークション会場である、ホテルアグスタの警備任務。

六課に出動が掛かったのは、出品される骨董品をロストログアと勘違いして、ガジェットが現れる可能性が考えられたためだ。

そして、その考えどおり、ホテルアグスタにガジェットの部隊が現れた。

隊長たち三人はオークション会場の内部警護に当たっている。外部警護は残りの六課戦力で行われる。

前線に立つのは私たちフォワード隊員五人と二匹と、前日から任務に立っている副隊長二人に、さらに八神部隊長の守護獣であるザフィーラだ。

ロングアーチであるシャルさんからの指示を受け、副隊長とザフィーラたちがガジェット？型、？型の混成部隊を撃破していく。

圧倒的だった。

出力リミッターが課せられているにもかかわらず、無駄のない動きで次々とガジェットを破壊していく。

私たちの出番はないかと思われたその時、キャロが召喚魔法の反応をキャッチした。

シヤマルさんからの指示で、散らばっていた私たち五人と二匹は、防衛線を敷くために一つに固まる。

やがて展開した召喚魔方阵から、ぞくぞくと現れるガジェットの混成部隊。

私の指揮の下、ガジェットの迎撃に当たる。

ガジェットの動きは、訓練でのそれと違って機敏で、AMFも強化させているのか私の放った魔力弾はなかなか有効打にならない。

だが、他の皆は違った。

悠一はスナオマルに跨り、AMFなど関係ないとばかりにアナスタシアに巨大な魔力刃を纏わせて、広範囲の敵を一掃する。スバルは動きを止めることなく高速で敵を翻弄し、一体一体確実に敵に破壊している。エリオは遊撃として、前に出る二人を狙うガジェットの隙をついたり、二人の死角を補っている。キャロはサポートとして補助魔法に余念がなく、フリードも竜魂召喚により真の姿を現し、吐く炎でガジェットを落としている。

焦りが、生まれる。

やがて、ロングアーチから防衛線を維持せよとの指令が下る。

……それじゃダメだ！

私は指令に逆らって、全機撃墜してみせると吼える。

手柄が必要なのだ。特別な才能がなくてもできる事があるって、私はお荷物なんかじゃないって証明するために。

焦りが、生まれる。

ユーイチに下がるように告げる。私が前に出る、と。

振り返ったユーイチの、怪訝な瞳と目が合った。

それがなんだか、私の行動を否定されているような気がして。

焦りが、生まれる。

私の、クロスシフトA！ の掛け声とともにスバルがウイングロ
ードを展開し、ガジェットを引き付けながら走り貫ける。

ガジェットを睨みつけながら、クロスミラージュのカートリッジ
をロードする。その数、四つ。

誰かが、通信で無茶だと言ってくる。

無茶の一つや二つこなせなきゃ、私は皆に追いつけない！

焦りが、生まれる。

無数に形成した魔力弾を周りに浮かべて、更に魔力を込めていく。
扱いきれない余剰魔力が、クロスミラージュを握る私の手を焼く。
痛い……でも、心が痛いよりずっといい！

焦りが、生まれる。

銃口をガジェットに向け、クロスファイアシュート！ の掛け声
とともに引き金を引く。

魔力弾が、次々とガジェットに飛来し、ことごとく破壊していく。

……イケる！

魔力弾のコントロールに集中する。

だが、高速で動く無数の魔力弾にだんだんと意識が追いつかなく
なる。

私は、魔力弾の一つがスバルの進路上に向かっていているのに気づか
なくて、

そして焦りは、悲劇を生んだ。

結論から言えばスバルは無事だった。

魔力弾がスバルに当たる寸前、駆けつけたヴィータ副隊長によつ
て防がれた。

啞然とする私にヴィータ副隊長の叱咤が飛ぶ。

スバルがヴィータ副隊長に何か訴えているが、私の耳には入って

こない。

恐怖が私を支配する。

役に立たないどころか、足を引つ張ってしまった。

何か言い繕わねばと言葉を搜すけど、スバルを、親友を撃ちそうになったという事実は、予想以上に重たくって、考えが一向に纏まらない。

結局ろくに口を開く事なく、いつの間にか任務は終わっていた。

任務の終わった後、私は高町教導官のお叱りを受けた。

ティアナは一人で戦っているわけじゃないんだよ、と。

そして釘を刺された。

もう、あんな無茶はしないようにね、と。

高町教導官のいいたいことが分からないわけじゃない。同じミスはしない。絶対に。

でも、無茶はする。

無茶しなきゃ届かない場所があるなら、私はいくらかでも無茶をする。

私は役立たずではられないのだ。

叶えたい、夢があるから。

「ハア……ハア……」

深夜の訓練場で、一人荒い息をつく。

私には、兄がいた。

両親はまだ私が物心つく前に事故で亡くなった。なので、実質私を育ててくれたのはその兄だった。

兄さんは優秀な魔導師で首都航空隊の一等空尉だった。中でも精密射撃が得意で、私の射撃魔法は兄さんから教わった物が多い。

強い兄さんが私の自慢だった。執務官を目指していた兄さんは私の憧れだった。

でも。

兄さんは私が10歳の時、任務中に殉職した。

逃走した違法魔導師の追跡任務中、その魔導師と交戦になり、結果敗北した。

多くの人間が兄さんの死を悲しんだ。私だって泣きに泣いた。でも中には兄さんを悪く言う人がいて。

航空隊の上官の一人が、兄さんは無能だと言った。

不甲斐ない姿を晒して犯罪者一人捕まえられんとは、我が部隊の面汚しだ、と。

悔しかった。

兄さんは無能なんかじゃない。兄さんの魔法は弱くなんかない。悲しみの涙は、いつしか悔しさの涙に変わっていった。

だから私が証明するんだ。

兄さんの、ランスターの弾丸は敵を貫けるんだって。

兄さんの夢だった執務官になって、兄さんをバカにした連中を見返してやるんだって。

私はそう、兄さんの墓前で誓ったのだ。

だから。

次の任務、いや任務じゃなくてもいい。

次のチャンスで、私の实力を見せ付けなければならない。

私は誓いを胸に、一人訓練場で汗を流す。

「精が出ますねー」

汗だくでクロスミラージュを構える私に声が掛かった。

振り返れば、ユーイチの姿があった。スナオマルを肩に寄せ、手にドリンクボトルとラップに包まれた皿を持っている。

「……何しにきたのよ？」

息を整えながら言う。邪魔をするなと険を込めて。

「お夜食持って来ましたー。ナーさん、あまり根を詰めすぎちゃダメですよ」

「……いない。ほつといて」

冷たい言い方なのは分かってる。でも今は鍛錬に集中したかった。

「ほつとけませんよ。無理な鍛錬は体に毒ですよ？」

うるさい。

「キッチンと休息をとってこそ、心身の成長があるんです」

うるさい、うるさい。

「それに、食事だって大事なんですよ？ 栄養補給に、水分補給。どちらをおろそかにしてもいけません」

うるさいうるさいうるさい。

「その点、このサンドイッチとドリンクはぼくの手作りで」

「——うるさい！！ ほつておいてって言うてるでしょ!？」

叫んだ。

たまらなくうつとおしかった。

アンタに何が分かるというのか、天才のアンタに、私の気持ちなんて分かるはずがない。

イライラする。

何より、その面に腹が立つ。

怯えるでもなく、怒るでもなく、悠一は困ったような表情を浮かべているのだ。

まるで聞き分けのない子どもを見るかのように。

「分かったような口利かないでよ！」

気づけば、クロスミラージュの銃口をユーイチに向けていた。

「アンタの実力を見せ付けられるたび、どれだけ自分を惨めに思ったか、アンタに理解できる！？ その上、説教ですって？ さぞや気分がいいことでしょうねえ？ —— ガキがッ！ 大人をなめるんじゃないわよ——！」

ユーイチを睨み付ける。

まくし立てたため、息が乱れる。

心がざわついて、整理できない感情は瞳を潤ませる。

対峙は、ユーイチがごめんなさい、とつぶやくまで続いた。

「置いておきますから、せめて水分だけでも取ってください」

脇に皿とボトルを置いたユーイチは一度だけ悲しい表情を浮かべると、訓練場からさっていった。

「……………」

膝が折れる。

クロスミラージュが手から滑り落ちる。

吐き気が込み上げてきた。

うつむいて、地面を殴りつける。

何度も、何度も、何度も。

「……ちくしょう」

なにが大人だ。

不満をわめき散らすのが大人だというのか？
あまつさえ子どもに当たるのが大人だというのか？

「ちくしょう……ちくしょう……」

純粹に心配してくれただけなのに。
氣を使わせたのは私なのに。
全部分かってたはずなのに、私はユーイチの優しさに甘えるだけで。

「ちくしょうッ……！」

やがて拳の皮膚が裂け、血がにじむ。
不思議と痛みはない。
ただ、ひたすらに胸くそ悪かった。

ホテルアグスタでの任務から数日後。

今日の訓練は、高町教導官との二対一での模擬戦。
汚名を返上するにはいい機会だ。

ユーイチとはあれからろくに口を利いてない。
なめるな、と啖呵まで切ったのだ、今さら後戻りなんてできない。
あれから今まで以上に鍛錬を重ねた。
スバルと相談して新しいコンビネーションパターンも考えた。

使いこなせるように、二人で特訓した。

この模擬戦で、私は私の実力を証明してみせる。

「行くわよスバル！」

おう！ と、スバルが、廃墟の街に浮かぶ高町教導官向けに走り出す。

私は周囲に魔力弾を展開し、高町教導官めがけて発射する。

迫り来る魔力弾を難なくかわしてみせる高町教導官。しかし、魔力弾は高町教導官を追尾し続ける。魔力弾の目的はあくまでスバルが接近するまでの時間稼ぎだ。

スバルが突っ込んで、私が援護する。私たちコンビが最も得意とするパターンだが、これでは高町教導官に簡単に読まれてしまう。

高町教導官の意表を突く作戦が必要なのだ。

そして私が考えたのが、クロスシフトC。

ウインググロード上を疾走するスバルが、高町教導官に迫る。

迎撃せんと、高町教導官がスバルに向けて魔力弾を放つが、多くはスバルの張ったシールドに阻まれ、シールドを貫通した魔力弾もスバルの体を掠める程度だ。

高町教導官の意識が私から逸れた事を確認し、近くの廃ビルにアンカーショットを打ち込み、屋上に飛び乗る。

高町教導官に接近したスバルは、リボルバーナックルを振り下ろす。が、高町教導官のシールドに防がれてしまう。なんとかシールドを破ろうと、リボルバーナックルのスピナーが唸る音を聞きながら、私はさらに飛ぶ。高町教導官のはるか頭上に展開されたウインググロードへと。

降り立った私は、動きを止め、意識を集中する。ここまでは順調だ。

高町教導官は握ったレイジングハートを振り下ろし、スバルを弾き飛ばす。

悲鳴を上げながらも、スバルはなんとかウイングロード上に着地する。

「こらスバル！ ダメだよそんな危ない軌道！」

「すみません！ でも、ちゃんと防ぎますから！」

高町教導官が怪訝な表情を浮かべる。

辺りを見渡す高町教導官はやがて廃ビルの上の『私』を見つけた。

『私』が握るクロスミラージュからはレーザーポインタが伸び、高町教導官を捉えている。

砲撃魔法の準備をしている『私』を、眉をひそめた高町教導官が見る。

（特訓の成果、見せるわよ！ スバル、クロスシフトC！！）

「おおおおおッ！！」

吼えるスバルは、リボルバーナックルのカートリッジをロードする。マッハキヤリバーのローラーが激しく回転し、スバルの体を高速で運ぶ。

ふたたび高町教導官に突進するスバル。

向けられた魔力弾をアッサリと掻い潜り、スバルは高町教導官に踊りかかる。

突き出す一撃は、またもや高町教導官の張ったシールドに防がれる。

両者の間に火花が散る。スピナーの回転数が増すが、しかしシールドは破れない。

突破不可能と踏んだのか、高町教導官は視線をスバルから外し『

私』を見る。

それこそが私たちが待ち望んだ好機だった。

『私』——フェイク・シルエットを消し、私はウイングロードを高町教導官目指して駆ける。

クロスシフトC。これはスバルが突撃し高町教導官に食らい付き、更に幻術魔法を使って錯乱させ、足止めされた高町教導官に私が近接攻撃を仕掛けるといふもの。

これで、決める！！

私は、クロスミラージュの銃口から魔力刃を生やし、高町教導官に切りかかる。

私に気づいた高町教導官は、

「レイジングハート、モードリリース」

レイジングハートを待機状態に戻した！？

不審に思うが、今さら止まらない。

高町教導官に刃を突きたて、そして、

衝撃は爆発となり、爆煙が視界を覆う。

クロスミラージュは何かに阻まれて動かせない。

やがて晴れた視界で目にしたのは、

「……おかしいな。……二人とも、どうしちゃったのかな？」

左手でスバルの拳を受け止め、右手でクロスミラージュの魔力刃を握る高町教導官の姿だった。

「がんばってるのはわかるけど、模擬戦はケンカじゃないんだよ？」

うつむく教導官の表情はうかがえない。声音は淡々としていて、感情は伝わってこない。

けど、

「練習のときだけ言う事聞いている振りで、本番でこんな危険な無茶するんじゃ、練習の意味、ないじゃない」

高町教導官が怒りに震えているのが理解できた。

「私の言ってる事、私の訓練……そんなに間違ってる……？」

怖い、怖い、怖い。

高町教導官の怒りが、不甲斐ない自分が、周りの才能が。怯えが心を支配する。

私の力が通じなかったのが。私を否定されるのが。たまらなく怖いのだ。

「でも！ 私は強くなんなれなかった！」

魔力刃を解除して、後ろに飛ぶ。

ウイングロードに着地してクロスミラージュをツーハンドモードで構える。

「私は、弱いままは嫌なんです！ 悔しいままは嫌なんです！ だから、だから！」

涙が堰を切ったように流れる。

思い出すのは兄さんの顔。兄さんを馬鹿にした上司の顔。迷惑をかけ続けてる相棒の顔。心配をかけた小さな仲間の顔。

……認めて、ほしいから！

魔方陣を展開する。砲撃魔法を持って押し通す。

「私は！ 強くなりたいんですッ！！」

対する高町教導官は冷ややか瞳。
左腕を上げ、私を指差し、

「少し……頭、冷やそうか」

展開する魔方陣。

そして、

「クロスファイア」

唱えられる攻撃魔法。

なんで…… どうして認めてくれないんですか！？

「うああああッ！ ファントムブレ」

「——シュート」

迫る魔力弾。

私の砲撃魔法は発動することなく、魔力弾は私に直撃する。
爆煙に包まれる体に痛みが走る。

苦しくて、意識が朦朧とする。

体の感覚がなくなっていく。

自分が立っているかどうかさえわからない。

そして、煙が晴れる。

私が最後に見たのは、視界を覆いつくす桃色の光だった。

私、ヴィータは目の前で繰り広げられる模擬戦について思考する。ティアナの射撃魔法にいつものキレがない。思えばそれがケチの付け始めだった。

少ない援護でスバルを突撃させ、教えてもない砲撃魔法を叩にし、ろくに訓練を積んでないはずの近接戦闘を仕掛ける。

そんな付け焼刃の戦法が、本当に通じると思ったか？

齒がゆさに唇をかみ締める。

ティアナの長所はその射撃の精確さと、広い視野にある。

なのに自分からそれらを活かせぬ位置で戦おうとするのは何事か。二つの才能に、幻術魔法と柔軟な思考を合わせれば、ゆくゆくは優秀な指揮官として育つであろう事を予感させた。

今はまだ基礎を固めることに重きを置いているが、その才能を伸ばせるよう、なのはと相談して訓練メニューを組んでいたのだ。

だが、この状況を見るに、訓練を次の段階に移すのはティアナにはまだ早いといわざるをえない。

「私は、弱いままは嫌なんです！ 悔しいままは嫌なんです！ だから、だから！」

涙ながらに訴えるティアナを、冷たい目で見るなのはを見る。

なのはの最近の訓練密度には、気がかりな部分がある。さらには夜遅くまで訓練メニューを調整したり、訓練内容をビデオで確認したりと、オーバーワーク気味なのだ。

私がいくら休めと言っても、なのはは大丈夫と言っただけで、一向に休暇を取る気配がない。

どいつもこいつも無茶しやがって……。

「私は！ 強くなりたいんですッ！！」

なのはがどれほど新人たちを想っているのかは、訓練でのなのは

を見れば一目瞭然だろう。ティアナだってそれはわかっているはずだ。

だからこそティアナの態度は気に入らない。

「少し……頭、冷やそうか」

なのはクロスファイアがティアナを襲う。

魔力弾が被弾して、ティアナを中心に爆発が起こる。

スバルはティアナの元に駆け寄ろうとするが、なのはのバインドに捕まって動けないでいる。

ふと、隣のユーイチが気になった。

なのはの幼馴染で、ティアナとも仲がよいユーイチ。あの二人をどう見ているかが気になった。

ユーイチは、無表情で模擬戦を見ていた。

「なあ、お前はあれを見てどう思った？」

「……あれこそが高町なのは教導官の教導だというのなら、ぼくが口出すことはありませんよ。わからずやを頭ごなしに殴りつけることが、必要なことだってありますから。ですが」

模擬戦から目を離すことなくユーイチは言う。

「殴るというなら、絶対に必要なものがありますよね。この後ナーさんが納得できていないなら、それはなのちゃんが未熟だということですよ」

フラフラのティアナに追撃でクロスファイアを撃つのは。

ろくにガードもせず受けたティアナは、ウイングロードの上に倒れ付す。

「未熟？　なのは何が未熟だったんだ？」

「自覚しなきゃいけないのは、ヴィーちゃんだって同じですよ？」

スナオマル、とユーイチが声をかけると、肩に乗っていたスナオマルは地面に下り立ち元の姿に戻る。

「早く医務室に連れてってあげなきゃですねー」

スナオマルに跨ったユーイチは、そのままティアナの元まで駆けていく。

「なんだってんだよ……」

私のつぶやきに答える者はいなかった。

真っ暗な空間がある。
四方八方闇に包まれていて、私はその中でふわふわと浮かんでいる。

……ここは、どこ？
手を伸ばそうとしても手の感覚がなく、足を進めようとしても足の感覚がない。

ただ視界だけは広く、どこまでも続く闇を捉えている。
と、目の前に淡い光が浮かび上がる。光は徐々に人型を作り上げ、やがて光は高町教導官の姿に変わった。

「ティアナ……少し……頭、冷やそうか。そんな腕じゃ、執務官に

なんてなれないよ」

え？……何を言ってる……。

眉をひそめた高町教導官から告げられた言葉は、受け入れるわけにはいかないものだった。

「ティアナさん」

声に振り返る。エリオとキャラコが立っている。

「ティアナさんじゃ無理だったんですよ」

「そうですよ。私たちみたいに希少技能があるわけじゃないんですから」

何で、何でそんな事言うの！？ 私だって、努力を重ねればきつと！

「ティア」

振り返る。スバルがいる。

「ごめんね、ティア。私はもうティアとコンビは組めないよ。だって足手まといはいらないから。打ち落とされるのは嫌だからね」

そんな……あんなミスもうしないから！ お願いだから私を見捨てないで！

「ナーさん」

振り返る。今度はユーイチ。

「無様な姿を晒すのが大人って事なんですか？　だとしたらアナタにぴったりですね」

私は……私は情けない姿を見せたかったわけじゃない！　私は認めてほしかっただけなの！

「ティアナ」

振り返る。そこにいたのは、

兄、さん？

うつむいていて顔は分からないがその姿には見覚えがあった。

航空隊の制服にアレンジを加えたバリアジャケットを身に纏い、私と同じ色の短髪。その姿は確かに私の兄であるティード・ランスターのものだった。

「ティアナ、無茶はしないでくれ。無茶を続ければ、俺の二の舞になってしまうぞ。だって……」

兄さんが顔を上げる。

「俺たちは無能なんだから」

ソコニハ、チマミレノ、ニイサンノカオガアッタ。

「イ、イヤああああッ!!」

「イ、イヤああああッ!!」

悲鳴をあげながら、跳ね起きる。
ハアハアと荒い息をつく。

不快感が込み上げてくる。

気持ち悪い。吐き気がする。

あれは、夢。あれは夢。あれは夢!

必死に自分に言い聞かせる。

震える体を抱きしめる。と、さらに上から私を抱きしめるぬくもりがあつた。

えっ? と視線を動かすと、ベットの脇に立って私を抱きしめるユーイチがいた。

「大丈夫、大丈夫です」

言い聞かせるように、ゆっくりと私の背を撫でるユーイチ。

何も知らないくせに、という思いは口に出ることはなく、不思議と心が落ちついていくのを感じた。

「……分かったから離れなさいよ」

落ち着いた心に湧き上がったのは、罪悪感だった。私はこいつに優しくされる資格なんてないのに……。

謝りたいって思っても、口に出るのはそっけない言葉だけ。

だけどユーイチは気にした様子を見せず、そっと私から離れる。

ユーイチは医務室に備え付けられている冷蔵庫から、ミネラルウォーターのペットボトルを取り出すと、私に飲みますが、と差し出した。

うなづき受け取ると、思い出したかのようになどが乾きを主張する。

四分の三ほどを一気に飲み、ほっと息をつく。
と、今さらながらにここが医務室であると気づいた。

「……シャルさんは？」

医務室といえばシャルさんの居城だ。しかし、周りを見渡しても、この部屋には私とユーイチ以外の影はない。

「マロマロさんはシャーリーさんに呼ばれて、ここにはいませんよ。たまたま居合わせたばかりが留守を頼まれたんです」

「……まさか、ずっと付いててくれたの？」

「はいー。ナーさんうなされてましたから。ほっとけませんよ」

そう、と返事をするだけで、私はろくにお礼も言えなかった。ほんと、情けない……。

ごまかすように水ををあおり、ペットボトルに残った分を飲み干してしまう。

「そうとう疲れが溜まってたみたいですね。もう夜ですよ？ 朝まで寝ちゃうかと思いました」

ベットの脇に置いてあったパイプ椅子に腰掛けながらユーイチは言う。

「心配したんですからね？ あんまり、無茶しないでください」

「……うっさいわね……分かったような口利かないでって言ったでしょ。私のこと、何にも知らないくせに……」

「そうですね……確かにぼくはナーさんの過去とか、がんばる理由とか、知らないです。でも、知りたいとは思ってるんですよ？」

予想していなかった言葉にユーイチを見る。

ユーイチは真剣な表情をしていた。

視線が合わさる。けど、なんだかいたたまれなくなって、私は視線を逸らしてしまう。

「私の事を知ったって、どうしようもないでしょ……私はしよせん凡才なんだから」

「ナーさんがただの弱者なら、ぼくはアナタに背中を任せるようなマネはしません」

そつとユーイチの顔をうかがう。やっぱり真剣な顔で、嘘をついているようには見えない。

「戦闘技術を褒め称えて欲しいなら、ぼくは喜んで言葉を紡ぎましよう。でもそれ以上に、ぼくが魅力的だと思うのは、ナーさんが心を奮い立たせる事が出来るということです」

心を奮い立たせる？

「なによそれ……私はただ、見栄を張ってるだけよ。自分をごまかさなきゃ、私は戦えないから……」

みつともない虚栄心からくる行動なのだ。褒められることなんかじゃない。

「見栄？ 上等じゃないですか。見栄を無様と笑いますか？ どれだけバカにされても見栄を張り続ける者を、ぼくは気高いとすら思いますよ」

ユーイチは一呼吸置き、

「今日の模擬戦。ハッキリ言って酷い有様でしたよ。自分の長所を殺しきる戦法。ナーさんらしくないじゃないですか。あんな醜態晒して……でも、これで終わりですか？ このままで終われるんですか？ それこそ、ナーさんらしくないんじゃないですか？」

「私らしさって、なんなのよ……。私が気高い？ 私はそんな立派な存在なんかじゃない！」

「……しよせん、これはぼくの勝手な思い込みに過ぎないかもしれませんが。でもこれだけは言っておきます。ぼくはナーさんの強さを知っています。そしてナーさんの弱さを知りました。ナーさんはぼくの『仲間』です。これだけは絶対に譲らない。今度バカな無茶をするようなら、全力で阻止します」

「仲間……私は」

紡ごうとした言葉は、されど突然鳴り響いた警報によって遮られた。

警報鳴り響く中、フォワード陣は通信でヘリポートに集められた。スバルやエリオ、キャロが心配そうな表情で大丈夫か、と尋ねてくる。

素直に受け取って、私はなんとか笑顔で平気よ、と返す事ができた。

今回の任務は、航空型であるガジェット？型の撃墜。
なので、必然的に出撃するのは空戦が可能な人員になる。

高町教導官にフェイト隊長、ウィータ副隊長の三人が出動し、私たちフォワード隊員五人と二匹には、シグナム隊長と共にロビーでの待機が言い渡された。

そして高町教導官は、さらに私にこう告げた。
ティアナは出動待機から外れとこうか？ と。

納得なんてできなかった。

長時間休んだことで体力、魔力ともに回復している。目立った異常もない。

私は戦える。

私は高町教導官にそう言うが、高町教導官は首を横に振るだけ。

「……言う事聞かない奴は、使えないって事ですか？」

高町教導官の顔が歪む。

「……自分で言ってる分らない？ 当たり前のことだよ、それ」

この人は私を認めてくれない。

この人は私を否定する。

だったら私だってこの人を否定する。

「現場での命令や指示は聞いてます！ 教導だって、ちゃんとサボらずやっています！ それ以外の努力まで、教えられた通りじゃないやダメなんですか！？」

高町教導官を睨みつける。

意地がある。認めてくれる人がいるから、なおさらに。

「私は、隊長たちみたいにエリートじゃないし、ユーイチやスバルみたいな才能も、エリオやキャラみたいなレアスキルもない！ 少しくらい無茶しなきゃ、死ぬ気でやらなきゃ強くなてなれないじゃないですか！！」

吐き捨てるように言う。

と、肩を掴まれた。振り返れば、拳を振り上げたシグナム副隊長がいる。

衝撃に怯え目を閉じる。が、いつまでたっても衝撃が来る事はない。

恐る恐る目を開けると、私を写す白銀の刃が目の前にあった。

「……なんのマネだ、花咲」

私とシグナム副隊長の間に、いつのまにか起動させたアナスタシアが差し込まれた。

アナスタシアを握るユーイチを睨みつけるシグナム副隊長。その二つ名の如く、剣のような鋭さをもつシグナム副隊長の眼光を受け、ユーイチは平然としている。

「今のやりとりで、ナーさんだけお咎めを受けるのは納得できないですね。ましてや、ナムナムさんが出しゃばる場面じゃないですよ」

ユーイチはシグナム副隊長を見ていない。ましてや、私を見ているわけでもない。

ユーイチは高町教導官と見詰め合っている。

「ゆう、いち君は、私が間違ってるって言うの？」

「……なのちゃんは憶えてますか？　なのちゃんにとっては遠い思い出でも、ぼくにとってはつい最近の出来事です。何度目になるか……ふーちゃんと対峙した時のことです。なのちゃんは言いましたよね？　『言葉にしなきゃ伝わらないこともある』って。ぼくも、その通りだと思います」

高町教導官が小さく、言葉にしなきゃ伝わらないこともある……、とつぶやく。その言葉は、私の胸にも突き刺さる。

ユーイチはああ、そうでしたと前置いて、

「なのちゃんが間違っているか、ですか？　——教師が！　教師子に！　自分の教えは間違っているのかと聞くんですか！？　教師が自信の正当性に自信が持てないなら、生徒は何を信じればいいんですか？　教え、導く立場の人間が、簡単揺らぐ信念しか持たないんですか！？」

ヘリポートが静まりかえる。

ユーイチから視線を逸らした高町教導官は、何か言おうとしていいのか、何度も口を開くが、結局まともな言葉は出てこない。

やがて沈黙を破ったのは、沈黙の原因であるユーイチだった。

「……ヴァイスさん」

「へ、へい！」

ユーイチの間延びした声に、ヘリパイロットであるヴァイスさんが上擦った声を上げる。

ユーイチの変わりように驚いているのはみんな同じだ。無表情から一転して、ニコニコと笑っている。

「ヘリの準備はいかがですかー？」

「乗り込んでいただければ、いつでもどうぞ！ よろこんでー！」

ヴァイスさん……完全にてんぱってるじゃないですか……。

「まずはお仕事をちゃんとやらなきゃですよー。考える時間が必要ですしね」

「……そ、そうだね、まずはお仕事だよね！？」

フェイト隊長が、逃げ出すように高町教導官とヴィータ副隊長の手を引っ張ってヘリに乗り込む。

高町教導官はヘリに乗り込む直前、私と目を合わせて、

「なにやってんだ、急ぐぞなのは！」

そのまま、ヴィータ副隊長に背中を押されて高町教導官はヘリに乗り込んだ。

そしてすぐに飛び立つヘリ。

残された私たちに、

「あの！ ……知っておいてもらいたい話があるんです。特に、ユイチ君とティアナちゃんに」

シャーリーさんの声が掛かった。

ロビーに集まった私たちに、シャーリーさんとシャマルさんが映像交えた昔語りが始まった。高町なのはという少女の、魔導師として歩んだ10年の物語が。

魔法とは何の関係もない生活を送っていた少女は、ある日偶然魔法と出会う。少女の幼馴染だった少年と一緒に。

高い魔力を持っていた少女と少年は、やがて事件へと巻き込まれる。

ジュエルシードと呼ばれるロストログアを巡って起こった事件だ。大型モニターに、ある戦闘風景が映し出される。

幼い高町教導官と手をつなぎ、今と変わらぬ姿で空を飛ぶユーイチ。そして対峙するのは幼い姿のフェイト隊長だった。

後にジュエルシードの頭文字を取ってJS事件と呼ばれるようになるこの事件は、フェイト隊長の保護、フェイト隊長の母親であるブレシア・テスタロッサの逮捕。そして、民間協力者であるユーイチの行方不明という形で幕を閉じた。

映像が切り替わる。映し出されたのは幼い高町教導官と対峙するヴィータ隊長。

闇の書事件で、高町教導官は手痛い敗北を味わい、危険な橋を渡る事を決意する。当時まだ安全面に不安のあったカトリッジシステムの採用と、自分の限界を無理矢理引き出すフルドライブ・エクセリオンモードの使用。どちらも、幼い高町教導官の体に多大な負担を与える。けど、高町教導官は、もう何もなくていいから、無茶を重ねた。

そして入局から2年後、悲劇が起こった。

任務の帰り、現れた正体不明機により、高町教導官は撃墜される。本来なら、反応できたはずの一撃。けれど溜まっていた疲労と、無茶を重ねた体は、高町教導官の意思を裏切った。

映し出されたのは血まみれの高町教導官に向かって必死に呼びかけるヴィータ隊長。

場面が変わる。

苦しげに呻く、包帯まみれの高町教導官。

もう飛べなくなるほどの、もう歩けなくなるほどの大怪我。それでも高町教導官は笑ってみせたという。

シャーリーさんは語る。高町教導官は、自分のようになる子を減らしたいから、教導官を目指したのだと。一人一人のことを想って、一生懸命考えて、教えてくれているのだと。

無茶をしてミスショットをした私。自らを省みる事なく、無茶な戦法を採った私。

高町教導官がどうしてあれほどの怒りをみせたのか。

死ぬ気でやらなきゃ、なんて、どれだけ甘ったれた考えだったか。私はようやく、自分の愚かさに気づいた。

任務から戻った私、なのははヘリポートで待機していたシャーリーから事情を聞いた。

何でも、皆の様子があまりにもいたたまれなくて、ついしゃべってしまったそうだ。

勝手にしゃべってしまったのは褒められる事ではないが、あくまで私を想っての行動。あまり怒る気にもなれない。

ただ、とてつもなく嫌な予感がするのだ。

シャーリーを軽く叱って、私は皆がいるというロビーへ急いだ。まるで葬式が行われているかのように暗い雰囲気。のロビー。

その中で、無表情のゆう君と目が合った。

私には、分かる。先ほど比じゃないほどに、ゆう君は怒っている。

「……三つ、三つ許せない事があります」

ゆう君がそつと口を開く。

体が、ビクッと震えた。

他の皆も私に気づいたようで、私たちを交互に見ている。

「一つはなのちゃん自身の事。自身の度を超えて、無茶を重ねて……。なのちゃんが傷ついて、どれだけの人間が心を痛めたか……。分からないなんて、言いませんよね？ 一つは、しろーさんときよーやくんの事。二人がいながら、あんなにボロボロになるまでなのちゃんを放っておいたなんて……。特にきよーやくんにはあれほど言うてあったのに……。そしてなにより不甲斐ないのが、ぼく自身……。！ なぜ付いていてあげなかったのか。守ってあげられたはずなのに、そこにぼくがいないのが、8年もの間事実を知る事すらなかった自分が、たまらなく腹立たしい……。！」

ゆう君には知って欲しくなかった。きっとそれは、ゆう君が自身を責める事が分かっていたからかもしれない。

私の目の前まで歩み寄るゆう君。

10年前ではありえなかった形、私がゆう君を見下ろしている。

ゆう君にとっては数日で変わってしまった、けれども決して数日では埋まらない差。

ゆう君は変わってなんかなかった。変わったのはきっと、私の方。

「これ以上、昔の事をとやかくは言いません。だから、ぼくは『今』の話をします」

数秒間、無言で見つめ合う。

これから行われるのは、きっとただの確認作業。

「なのちゃん。過去を晒す事でしか自分の気持ちを伝えられないのなら、アナタは教導官なんて辞めるべきです」

驚きはない。だって、答えはもう教えてもらってあるから。

「一歩間違えれば、取り返しのつかない事態になっていた。教師が、初めての長期指導だからなんていい訳は出来ないですね」

言わなくても伝わるって思ってた。一生懸命教えれば皆も応えてくれるんだと思ってた。けどそれは、ただの甘えだった。

「運よく手遅れにはならなかった。ならばなのちゃんはどうしますか？」

ゆう君はロビーから立ち去る。

私がすべき事。知っていたはずなのに、忘れていた事。言葉の、大切さ。

私は、申し訳なさそうに私を見るティアナと視線を合わせる。

「ティアナ。私と、少しお話しよっか？」

ティアナと話終えた私は、ゆう君を探していた。

とりわけ話したい事があるわけではないが、無性にゆう君の顔が見たかった。

やっとのことで見つけたのは、隊舎裏。ゆう君は、元のサイズで座るスナオマルに寄りかかり、夜空を見上げていた。

足音で私に気づいたゆう君は、柔らかに微笑むと自分の隣をポンポンと叩いた。

断る理由もないので、私はゆう君の隣に腰掛け、スナオマルにありがとつ、と言って寄りかかる。

私もゆう君に倣い、夜空を見上げる。

地球では見られない景色。満天の星空に、輝く二つの月。素直に

綺麗だと思った。

言葉を交わす事なく、心地よいしじまが私たちを包む。
ふと、昔を思い出す。

昔は、朝から晩までゆう君と一緒にだった。二人っきりの時間も多かった。意味もなく、ただ二人だけで空を見上げる事もたくさんあった。今だつてスナオマルはいるが、二人っきりのようなものだ。
なつかしいの……。

「ねえ、なのちゃん」

何？ ゆう君、と返す。私もゆう君も空を見上げたままだ。

「あれから10年経って今がある……じゃあ今から10年後には、ぼくたちどうなってるんでしょうかね……？」

今から10年後の未来。私も考えた事がないわけじゃない。

10年が経って、私はゆう君の知る『なのちゃん』じゃなくなつた。

いろんな責任を背負ってる。『エースオブエース』の称号を背負う者としての責任。改めて気づかされた、教官としての責任。そして、機動六課の隊長としての責任。私は、泣き虫の『なのちゃん』ではいられなくなった。

ゆう君との関係だつて変わった。私は大人で、ゆう君は子ども。

私は先生で、ゆう君は生徒。私は上司で、ゆう君は部下。簡単にゆう君に甘えられる立場じゃなくなった。

なくなった、はずだった。

私がどれだけ変わっても、ゆう君にとって私は『なのちゃん』のまま。それが嬉しくもあり、悔しくもあった。

再開したとき、わたしは『なのちゃん』に戻ってしまった。恥も外聞も気にせず、ゆう君に甘えてしまった。

泣き虫に戻ってしまう気がして怖かった。そして、私が変わっても、すぐに受け入れてくれたゆう君が怖かった。

何より、このまま欲望をぶつけてしまいそうな自分が怖かった。

私は、だけど、と考えた。

ゆう君が今の私と同じ年齢になれば、この恐怖は消えるんじゃないだろうか。

でも、そうになると、今度は私の年齢がヤバイ事になって、ゆう君につり合わなくなるんじゃないかって、また別の恐怖が私を襲うのだ。

だから結局、

「……わからないの」

私はいつも答えを濁してしまう。

「そうですか……だったらせめて、今を楽しみましょうか」

うん、とうなずくとそれっきり会話が途切れる。が、やはり不快感も、緊張感も湧いてこない。ただあるのは、穏やかな空気だけ。

私たちはしばらくの間、ただ静かに夜空を見続けた。

立ち上がれティアナ！ 今、悔しさと悲しみの果てに！！（後書き）

ユー……ノ……？

なんで私はこの話を一話に纏めたんでしょうかね……？ ちょっと後悔しております。

さて、これで一つの問題が解決したわけで、ようやくティアナの魔改造ができるぜ！ と張り切っております。

今のところ、エリオの『友愛＋＋』、シャルの『腐っても乙女』が付加されているわけですが、さてティアナにはどんな魔改造がなされるのか…… まあ二人ほど突拍子もないものではなく、普通の属性なんですけどね。……多分。

ま、まあ次回も楽しみにしていただけたら幸いです。
では。

おねシヨタが世界を救う。かどつかは分からないが、おねシヨタによって救われ、私にとっては間違いなく楽園。

むしろジャスティス！！

おねシヨタが世界を救う。かどつかは分らないが、おねシヨタによって救われ
「由々しき事態だよ！」

始まりはスバルのそんな一言だった。

模擬戦から数日後。

なのはさんの過去を知った後、なのはさんは私に教えてくれた。
なのはさんの教導の意味、そして想いを。

私もなのはさんに全てを話した。私が強さを求める理由、そして
想いを。

なのはさんは言うてくれた。ティアナの夢を叶えるために、私は
全力で応援するし、努力を惜しまない、って。

私は、どれだけ想われていたのかを知った。だから、なのはさん
を信じたいと思った。この人に付いて行きたいって、そう思えたん
だ。

こうしてなのはさんと話し合って、私の無茶が巻き起こした事件
は終わりを迎えた、かに見えた。

しかし、一つだけわだかまりが残ってしまっているのだ。

といっても、わだかまっているのは私なのだが。

スバルの言葉には、当然心当たりがあった。でも、

「なによ、いきなり……」

なぜだか、濁してしまう。

女子寮の一室。私、スバル、キャロの三人の私室で、もう寝よう
かという時にスバルが騒ぎ出したのだ。正直、もう休みたいという

気持ちもあつた

「何って……ティアとユーイチの事だよ！　なんだかティア、ユーイチに対して余所余所しくない？」

……そうなのである。

あれ以来、ユーイチとまともに会話をしていない。

なんだか気恥ずかしくて、距離感が掴めないでいるのだ。

暴言吐いて、慰められて、庇われた。

情けない姿ばかり見せた。迷惑ばかりかけた。ろくにお礼を言う事もなく、謝る事もしていない。なのに、ユーイチは気にしていないかのようにニコニコと笑うだけで。

言葉にして伝えなきゃいけない事があるのは分かっている。だが、言葉にするタイミングが掴めない。

「ティアナさん、ユウ君とケンカでもしたんですか？　私にも、ユウ君の事避けてるみたいに見えました」

うう……キャロにまで……。

二つある二段ベットの、下の段の二人からツッコまれて、いたたまれなくなってくる。

「……何でもないわよ。二人とも明日も早いんだから早く寝なさいよね」

いたたまれなさのままに、私は、おやすみ、とベットに潜る。

訓練の疲れもあつて、私の意識はすぐにまどろんでいく。

だから私は気づかなかった。下で二人がコソコソ画策している事に。

それから数日後の事。

デスクワークを終え、スバルと二人で食堂に向かう道すがら、スバルがとんでもない事を言ってきた。

「あ、ティア。今日ね、ユーイチが泊まりに来るから」

は？ と私の口から間抜けな声が漏れる。

「キャロとエリオはフェイトさんの所に泊まるんだって。で、晩御飯も三人で食べるらしいよ」

「ああ、そうなの……通りでさっきから二人の姿が見えないわけね……って、違うわよ！ どうしてそれでユーイチが泊まりに来る事になるのよ！？」

私はスバルに詰め寄る。がスバルは平然とした顔で、

「……何があつたかは知らないけど、仲直りしたいんじゃないの？ ユーイチと」

う、と言葉に詰まる。

結局、話の取っ掛かりが掴めず、今も気まずいままなのだ。

スバルの視線は真剣で、言い逃れは許さないとやっているかのよう。

いつの間にか歩みは止まっていて、廊下の真ん中で私とスバルと向き合っている。

「私もキャロもエリオも、二人には仲良くして欲しいって思ってる。少し前までは出来ていた事だからなおさらにね。しない方がいいっ

て事は絶対にないから、遅い方がいいって事も、多分ないから」

もう長い付き合いになるスバルは、いつだってこうだった。

私に、真っ直ぐにぶつかって来てくれる。

……このおせっかいめ……。

悪態をついて、でも、と思う。

私を想ってくれているのが分かるから、嬉しくなる。報いたくなる。

少しくらい、素直にならなきゃって気になるんだ。

「分かったわよ……。けど、今度からは先に言っておきなさいよね」

……あくまで少しだけだけどね。

私が先に立つ形で歩みを再開して、食堂に向かう。

「ちなみに、私はシャーリーさんの所に泊めてもらうから」

「ちょ、二人つきりって事！？ アンタ、ちょっと、……バカスバル……！」

いきなり過ぎるじゃないのよ……。

……まあ、でも他の人がいないほうがいいのは確かだし、むしろ望むところじゃない……。

……そうよ、上等じゃない。ちよろつと謝って、ぱぱつとお礼を言えばいいんだから。……兄さんの事も、言っただほうがいいのかな……。なのはさんにも話したんだし……いや、なのはさんは元々知ってたみたいだから……でも……。

「……ティア、いつまでもボーっとしてないで、ほら、食堂着いたよ」

え？ と顔を上げると、目に入る食堂の様子。喧騒に、食欲を誘う匂いにも気づいた。

考えこんでいるうちに食堂に着いたようだ。

人の姿がまばらな食堂で、先に来て場所取りをしているはずのユーイチの姿を探す。

すぐに、隅のテーブルを確保しているユーイチと、その頭に乗るリイン曹長を見つけた。

リイン曹長は八神部隊長の所有するユニゾンデバイスだ。

今見せている三十センチほどの姿のほかに、出張時に見せた子どもになることが可能だが、本人によると燃費があまりよくないため普段は小さいままでいるほうが楽しい。

二人に近づいて行くと、歌声が聞こえた。

「ですー、ですー、ですー、ですーです、ですっ！」

「ですー、ですー、ですー。ですー、ですー、ですーですっ！」

『DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！
DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！
DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！
DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！ DEATH！
GO！ TO！ HEL
L！』

「何でポップ調からいきなりメタル調になるのよ……」

YEAHー、とハイタッチを交わす二人に、私はため息をつく。
年が近いからなのか、この二人、非常に仲がいい。

ユーイチの頭やら肩に居座るリイン曹長に、どけとばかりに唸るスナオマルの姿を度々目にする。

仲がいい理由かどうかは分からないが、二人には似ている部分が多くある。天真爛漫な性格や、ころころ変わる表情。そして何より、見た目がそっくりなのだ。髪と目の色が同じなら、兄妹に間違えてしまうほどに。

最近では、よくこうして一緒に食事を取っている。

「あつ、ナーさん、スバルん。お疲れ様です！」

お疲れです！ と続けるリイン曹長から視線を外し、私はユーイチに集中する。

こいつは、ホントになんなんだろうな、と思う。

子どもらしく無邪気にふざけてみたり、ふとした事で一喜一憂したかと思えば、説教じみた事を言って場を掌握してみせる。

子どものくせに妙に落ち着いていて、子どもなのに頼りがいがある。

扱いにくい事この上ない。

「今日はよろしくお願いしますね。ナーさん」

笑顔のユーイチに、一抹の不安が頭を過ぎるのであった。

夕食を終え、私はユーイチ、スナオマルを連れて自室に戻ってきた。

スバルとリイン曹長とは食堂で別れたので、早々と二人つきりになってしまった。正確には二人と一匹、だが。

ユーイチは部屋の隅に置かれた、見覚えのないポストンバッグに近づいていった。どうやら、着替えやら何やらがそれに入っているらしい。

「私、今からお風呂行くけどアンタは……」

この時、私の頭にひらめく物があつた。

「お風呂は男子寮でいただいて」

「——一緒に行くのよ」

ふえ？ と間抜けな声を漏らすユーイチ。

このままではユーイチのペースに飲まれてしまう。すると、いつもの二の舞になってしまい、話を切り出せなくなるだろう。ならば、こちらで主導権を持てばいいのだ。

「いや、ぼくは男子寮で入ってきますよ。男女七歳にして席を同じうせずっていうことわざが」

「——うっさい。ごちゃごちゃ言っでさっさと行くわよ」

でも、と言いよどむユーイチの手を引っ張って、大浴場に向かう。これはチャンスだ。多少、強引にでも私のペースで事を運ばせてもらう。私だって、このままウジウジ悩むのは嫌なのだ。

ユーイチの言を無視して突き進み、脱衣所ではユーイチの服を剥ぎ取る。

思いつきだけで動くのは危険だと気づいたのは、ユーイチと並んで湯船に浸かった後だった。

「……ナーさんがそんなに破廉恥だとは知りませんでした」

「う、うっさいわね！ アンタがいつまでも女々しい事いつてるの

が悪いんでしょう!？」

……剥いてる時、ちょっと楽しかったのは口が裂けても言えないわね。

ちなみに、ユーイチの着替えなどは、風呂桶に汲んだ湯の中でくつろいでいるスナオマルが、後から銜えてきた。

私はシャマルさんの言っていた言葉を思い出した。アナタには素質があるわ。私なんかを遥かに凌ぐ、ね。もし本当の自分に気づくことがあったなら、SYAマル秘婦女子会の門を叩きなさい、と。当初は何言ってるんだろうこの人は? と思っていたが、今なら何が言いたかったのか少し分かる気がする。

ユーイチはその、可愛いのだ。そこいらの女の子よりよっぽど。

だからどうしたって訳ではないけど、でも、その、というか私は何を考えてんのよ!？」

「そ、それにしても、綺麗な黒髪よね……」

いろいろと誤魔化すように私は言う。視線は合わせず、アップで纏められた髪を突きながら。

……うなじ……。

「はい、母上が好きだって言ってくれた、自慢の髪の毛なんです。……でも」

嬉しそうに話すユーイチは、しかし表情を一変させた。

「ぼくはこの髪が嫌いだったんです」

視線を落として空を見詰めるユーイチ。

スナオマルが心配そうに、くるう、と鳴いた。

「海鳴での話を憶えてますか？ …… ぼくは、生みの親に捨てられたんです。それを知った時、この髪が、この顔が、捨てた人間とながりのあるこの体が、嫌で嫌で仕方なかったんです。でも、母上は言ってくれたんです。見た目の美しさだけで好きと言ったわけではない。悠一の髪だからこそ、我は好きだと言ったんだ、って。…好きな人の、『好き』って言葉はホントにスゴイですよ。あれだけ嫌がっていた物を、今では自慢ですって言えるんですから」

はにかむように笑うユーイチ。

火照った頬が、妙に色つぽかった。

「……私も好きよ、アンタの髪。綺麗って思って、でも言葉にできたのは、きつとアンタの髪だからよ」

顔が熱くなってきたのを自覚する。

ちらりとユーイチの顔をうかがうと、きよんとした表情を浮かべていて、しかし次の瞬間には、えへへ、と口元をほころばす。

と、脱衣所から物音が聞こえた。なんだから、さっきから脱衣所の方が騒がしい。

まあ、気にする事もないかと意識から外す。

「いい母親じゃない……」

はい、とユーイチは自慢気に頷く。

私には母親の記憶がほとんどない。気づいた時には兄さんと二人暮らしで、両親の顔は写真で見た事があるぐらいだ。悲しいかと聞かれたら、首を傾げるだろう。だって知らないんだから。

両親との思い出がない分、私の記憶に色濃く残っているのは、

「家族……私にもね、大切な家族が、兄さんがいたんだ……」

ユーイチの顔が一瞬、悲しげに歪む。

本当に聡い奴だ。言葉尻から察したのだろう。兄さんはもうこの世にいない、と。

「兄さんは、優秀な魔導師だったんだ……。執務官になるんだっていつも言ってたね、悪い奴は皆、俺が捕まえるんだー、って。そんな兄さんが私の自慢で……。でも、結局兄さんの夢は叶わなかった。志半ばで倒れた兄さんを、バ力にする連中もいた。だから、私が代わりに執務官になるんだって、兄さんの夢を叶えてあげるんだって、そう思ってるんだ。……これが私が強くなりたい理由、かな」

「そうですか……。……ばくも、お兄さんに会ってみたいです」

そういえば、と思う。

最近、兄さんの墓参りに行ってないな……。

新しい仲間の事や、心優しい上司の事、そして私自身の事。話したい事がいっぱいある。

……今度の休みにでも、墓参りに行こうかな。

そして、その時には、

「……今度、ヒマなときにでも付き合いなさい。きっと兄さんも会いたいって思うだろうから」

「はい……。楽しみにしてますね」

ふう、と一息つく。

穏やかな雰囲気になり、満ち足りた物を感じながら、私は湯に身を委ね

た。

「アカン、アカンのよ、ユーイチくん……」

「シャ、シャマルさんが鼻血垂れ流しながら脱衣所で倒れてる！！
だ、誰かーーーーっ！！」

互いに寝巻きに着替えて、さあ寝るぞ、となった時、一つ問題が生じた。

どこで寝るんですかと問うユーイチに、キャロが使っている二段ベットの、上の段を使うように言ったのだが、

「ぼく、何かに抱きついてないと、ぐっすり眠れないんです」

という事らしく、いつもはエリオに抱きついて寝ているらしい。

当然私は渋ったが、涙目で懇願されては断るに断れず、結局、首を縦に振っていた。

電気を消してベッドに潜ると、先にベッドに入っていたユーイチが私に抱きついてくる。

不快ではないが、何だかこそばゆく、恥ずかしい。

「ん、もっとこっち寄りなさい。はみ出してたら風邪引くでしょ」

恥ずかしさは押し殺す。

明日も朝から訓練があるのだ。早く休みたいし、こんな事で風邪を引くのはあまりにバカらしい。

ユーイチは頷いたあと、えへへ、と笑った。

「……何がおかしいのよ？」

「いや、おかしいとかではなくて、何だか……ナーさん」

暗闇に慣れた目は、ユーイチの視線と合わさる。

「お姉ちゃんみたいだなー、って思って」

『——この時、ティアナ・ランスターの体に、電撃走る!!』

無意識のうちに、私からユーイチを抱きしめていた。

抱きしめたまま、ろくにリアクションを取らない私を不審に思っ
たのか、ユーイチが、ナーさん？ とつぶやく。

……違う、そうじゃない。

「……お姉ちゃんよ。お姉ちゃんと呼びなさい」

「……ふえ？ ……んー……。じゃあ、ティアお姉ちゃん？」

小首を傾げるユーイチに、私はさらに強く抱きしめる事で答える。

「ティアお姉ちゃん……えへへ……」

決めた。完全に決めた。

私はユーイチに、ありがとう、と囁いた。

お礼は一言で、謝りもしない。私の気持ちは全部、これからの行
動で示す。

ユーイチは子どもだ。どれだけ大人っぽくても、子どもには変わ

りない。大人っぽいという表現が、ユーイチが何よりも子どもだという証拠なのだ。少なくとも、私はそう決めた。

大人をなめるな、と見栄を張った。だったら私は、見栄を貫き通す。

貫き通すだけの価値が、あると思うから。

ここに誓いを立てよう。

私はティアお姉ちゃん。

ユーイチを護る存在である。

こうして、一連の事件は、一人の『お姉ちゃん』の誕生を以って、幕を閉じた。

平時には多くの姉妹がたむろう待機所の一角で、私は漫画を読んでいる。

「あまり、漫画ばかり読むのは感心しないな。せつかく皆が集まっているのだから、会話に参加したらどうだ？」

私は顔を上げて、話しかけてきた姉の顔を見る。

「私の能力を使う上での参考資料です。むしろ、褒められる行為ではないでしょうか？」

私はそれだけ言うと漫画に視線を戻す。

やれやれ、と遠ざかっていく姉の気配を感じながら、私はページをめくって、クスっ、と笑った。

おねシヨタが世界を救う。かどつかは分からないが、おねシヨタによって救われ
わっふるふざけ……。

フォローが欲しいです……。今回の話は特に……。

海鳴出張任務の時もそうだったんですが、ただお風呂場での話って
だけでテンションが上がります。

私は男子中学生か！？ っていう……。

厨二ではあるんですけどねー。

えー、いつにもまして余計な事を書いたかもしれませんが、次回は
リベンジマツチです。誰と誰かは……分かりますよね？

最後の文の彼女ですが、あと一人改造を加える気でいます。まあし
ばらくは明かされることはないと思います。

さて、楽しんでいただけたでしょうか？
次回も楽しみにしていただけたら幸いです。
では。

「ビーム」でも「ビィィィィム」でも同じでしょ？　って言った奴、ちょっと

寒かったじゃろう？　ささ、家にお上がんなさい。

「ビーム」でも「ビイイイム」でも同じでしょ？　って言った奴、ちよっ

市街地を模した訓練場で、私たち五人と二匹は輪になって向き合っている。

皆がそれぞれのデバイス、バリアジャケット、及び騎士甲冑を展開していて、いつでも戦える準備ができていた。

今から行われるのは、隊長陣との模擬戦。

エース級四人と戦うのだ。嫌が応でも気合が入るというものだ。どうせ戦うのなら、勝ちたい。これは私たちの共通の思い。

魔力リミッターを課せられているとはいえ、相手は歴戦の魔導師。生半可な作戦では勝てないだろう。

ならばどうすればいいか？　今それを話し合っているところなのだが、

「ま、ごたごた言っただけでしょうがないでしょ。小手先の技なんかじゃ隊長たちには通じないだろうし、下手な作戦なんかじゃ簡単に見破られる。だったら、私たちは私たちの全力を尽くす。今までの訓練で積み上げてきた物を出し切って、隊長たちに勝ってみせる。成長した私たちをその身に味合わせて、アナタたちのおかげですって気持ちを叩き込む。……異論はないわね？」

それぞれの頷く顔を見回す。覇気に満ち溢れたいい顔だ。

ただ、一人眉尻を下げた奴がいた。ユーイチだ。

ティアおねえちゃん……、と申し訳なさを滲ませるユーイチ。

なるほどね、と一考して、私はガシガシと頭を強めに撫でてやる。

「行つてきなさい。こっちの事は心配いらないから」

うん、とユーイチは目を細める。

笑顔を見せるユーイチを見て思う。

……やっぱり男の子ね。

と、視界の端に疑問符を浮かべるスバルが映った。

疑念のままに、何よ？ と問う私に、スバルは両側のエリオとキヤロも自分と同じ表情を浮かべているのを確認してから、やっと口を開いた。

「いや……二人だけで通じ合っちゃって、何の事かなーって」

何って……、と前置いて、

「シグナム隊長とリベンジマッチがしたいって事でしょ？」

「はいー。負けっぱなしじゃいられませんから！」

両腕でガッツポーズを作って、ユーイチは気合を表現して見せる。それに呼応するようにアナスタシアは宝玉をピコピコと点滅させる。

「いやいやいや、事前に打ち合わせしてたわけじゃないんでしょ！
？ 何で意思疎通できてるの！？」

そんなの……、とユーイチと目を合わせる。

「弟だからでしょ」

「お姉ちゃんですからー」

何を当たり前の事を聞いてくるのだろうか。心底不思議でならなかった。

スバルはあれー？ と頭を抱えていて、キヤロは苦笑い、エリオ

は何だか詰まらなそうな顔をしている。

エリオが少し気になるが、今はとりあえずスルーしておこう。

「ナムナムさんの所に行く前に、一仕事しますよ!」

後、どれくらいで模擬戦始まりますか? と聞くユーイチに、私はモニターを展開して確認する。

模擬戦まで、後3分。

「キャロりん、なのちゃんたちのいる方向を探っておいてください! 行くよ、スナオマル!」

輪から外れるユーイチの傍に付き従うスナオマルは、灰色の光に包まれると、その姿を二倍近くまで巨大化させた。

ユーイチは軽やかにスナオマルの背中に飛び乗る。

大きな背に膝立ちになり、アナスタシアを両手で横に構える。

アナ、という呼びかけに、アナスタシアは宝玉を点滅させ、

コアリンク、開始します。……人、機、獣、それぞれの接続を確認

電子音を響かせると、ユーイチとスナオマル、アナスタシアから灰色の魔力が溢れ出す。

「フルドライブ……『とらいあんぐるハート』!」

ユーイチの掛け声を皮切りに、さらに魔力は渦巻いていく。より多く、より濃厚に。

すごい、とつぶやいたのはスバルか、エリオか。もしかしたら私かもしれない。

「キャラりん、なのちゃんたちはどっちですか？」

「は、はい！ 12時の方向、そこから真っ直ぐです！」

ユーイチはアナスタシアの穂先を、キャラの示した方向に向ける。

「ありがと、キャラりん。では——聴け！ 我、『猛勇の虎王』の雄叫びをもって、開戦の合図とする！！」

灰色の魔力は、うねりながらスナオマルの眼前に収束していく。渦巻く魔力はやがて、巨大なスフィアを創り上げた。

「全て震えよ！ 頭を垂れよ！ 全震全礼……ッ！！」

スフィアは、まばゆい輝きを放つ魔方陣に姿を変える。スナオマルは引き絞るように身を締め、

「タイガアアアア……ッビイイイムッ！！」

咆哮。

耳をつんざくような轟音とともに、灰色の輝きが奔る。

強烈な閃光に、思わず目元に手をかざす。

反動が衝撃波となって、私たちの体をも舐める。

手で作った影の中から、砲撃のもたらす惨劇を垣間見る。

極太の砲撃がビル郡を破壊しながら突き進む。

周囲の魔力を喰らい、進むたびに幅を増す一撃。

後に残るのは、くり貫かれたように焼き尽くされた街並み。

痛々しいまでの破壊の爪あとを眺めながら、私はユーイチと、元のサイズに戻ったスナオマルに近寄っていく。

「……これで、終わったんじゃないの？」

声に呆れが混ざってしまったのは仕方ないと思う。

ユーイチは意に介した様子を見せず、焼け跡を見ながら答える。

「それはないですよ。チャージに時間が掛かってますから、事前に察知されたでしょうし、直射ですから避けやすいですしね」

私は、衝撃波で乱れたユーイチの髪を撫で整える。

ポニーテールもいいが、今度、私と同じ髪型にしてみるのもおもしろいかな、と思った。

……うなじ……。

「じゃ……しっかり、勝てきなさい」

「はいっ！ ティアお姉ちゃんもがんばってくださいー！」

後は頼みますね、とスナオマルに頼ずりをして、ユーイチは駆け出した。

迷いなく、跳ぶように走るユーイチの背はあっという間に見えなくなる。

そして私は、

「フ……フフっ……フフフ」

がんばって……、がんばって……、がんばって……。

思わず笑みも零れるというものだ。

「——『お姉ちゃん矜持』その一！ 『弟のがんばれの一言で、

お姉ちゃんパワーは倍にまで膨れ上がる』！」

さあ、これで負ける理由はなくなった。

後ろで、ティアが壊れた、と言っているスバルは後で殴るとして、

「負けてなんてらんないのよー！」

私はスナオマルに跨り、我先にと駆け出した。

ユーイチ君が放った一撃をモニター越しに見た私、シャリオ・フイニーノは、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

これが、アナスタシアの力……

幻とまでいわれた融合派生試作型アームデバイスのアナスタシア。リンカーコアを保有する、既存するものはないとされたデバイス。

アナスタシアの持つコアリンクシステムは、ユーイチ君のリンカーコアとアナスタシアのリンカーコアをつなげ、魔力を共鳴させ何倍にも増幅させてみせるというもの。当然リンクするリンカーコア同士には絶対の相性が求められるし、増幅した魔力の扱いは難しい扱いを誤れば、容易に自身を焼くだろう。今回はさらにスナオマルのリンカーコアともリンクし、凄まじい威力の砲撃魔法を使ってみた。あれだけの威力に対し、ユーイチ君自身が消費した魔力は少ないだろう。惜しむべきは、魔力の増幅に時間が掛かる事だろうか。かつて聖王が扱ったとされるデバイスのアナスタシアを預かるに当たって、私には緘口令が敷かれている。聖遺物扱いのアナスタシアに使われている技術は、聖王教会における機密で、信仰うんぬんにも関わってくる話らしく、固く他言を禁止されている。それほど物をなぜ六課で、しかもユーイチ君が所持しているのかは疑問だ。

が、あいにく私にはそこまで知らされていない。

整備に関しても、なるべく既存の状態で残しておいて欲しいらしく、あまり弄くる事が出来ない。非常に残念でならない。

あれほどの力を見せたアナスタシア。

素晴らしい技術だ。

恐ろしいまでの力だと思う反面、私はデバイスマイスターとしての胸の高鳴りを押さえる事ができなかった。

高町たち三人から離れた位置にある開けた場所で、私、シグナムは一人佇んでいる。

騎士甲冑を纏い、レヴァンティンを携え、静かに瞳を閉じ、私は花咲がやってくるのを待っていた。

自然と心が高まっていくのを感じる。

意中の異性を持つ乙女の心持とは、こういう気持ちかもしれない、と柄にもないことを考えた。

興奮していると言い換えてもいい。思わず口角がつりあがってしまっただけだ。

とくに約を交わしているわけではない。だが、模擬戦前に交わした視線で、私の気持ちは物語った。

私には確信がある。ユーイチは必ずここにやってくる、と。

そして私の確信は現実のものとなった。

近くなる足音に、そっと目を開ける。

絢爛雅たる鎧に身を包み、金と銀の輝きを放つアナスタシアの穂先は、私を向いていた。

「お待ちせしました、ナムナムさん」

「なに、私も今来たところだ」

逢引の定番とも言える軽口が漏れる。

ふわふわと心が躍り、浮ついているのを自覚する。

ああ、ダメだ……。

花咲の前口上はモニターを通して聞いていた。

次はこちらの番だろう。

「夜天の騎士王に仕えしヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナム！ 貴殿が王を名乗るなら、私は敬意をもって仇となろう！！」

剣先を花咲に向ける。

落ち着きなどいらない。心の赴くままに刃を交わす！

「参る！！」

駆け出して、レヴァンティンを振るう。

が、甲高い音を立て、両手で構えたアナスタシアのウイングに阻まれる。

突き出すようにレヴァンティンを弾かれ、数歩後退する。と、

速い！？

間髪入れずに突き出されるアナスタシア。

かわす私のすぐ目の前を、薄く魔力を纏わせた金色のウイングが通過する。

不安定な姿勢ながら、レヴァンティンを振るう。しかし、素早く引き戻されたアナスタシアを軽く打つだけで終わった。

バックステップで距離を離すが、花咲の追い討ちの手は緩まない。鋭い踏み込みから迫る一撃を、レヴァンティンで受かる。が、

重い……！

あれほどの大きさの長物を扱う者に、軽さは命取りだ。花咲の体格で意のままに振り回そうとすれば、逆に振り回される事になって

も不思議ではない。

身体強化で無理矢理、ではなく、よほど鍛錬を積んでいのだろう。それと、デバイスの特性を活かした、重量、質量変化といったところか。

どちらにせよ、心躍る相手だという事には変わらない！

「ハアッ！」

気合とともにアナスタシアを弾き返し、私は空へ行く。

此度の戦いは先日の模擬戦での、剣士対拳闘士の戦いではない。ベルカの騎士同士の戦いだ。空を翔る術を持つ私に、何も対策を持たぬのでは話にならない。

上空から花咲を見下ろす。

さあ、私にお前の力を見せてみる！

花咲は両手で握ったアナスタシアを体の前で縦に構える。

「おいで、灰冠の姫君」

花咲の眼前、地面に描かれる灰色の魔方陣。

淡く発光する魔方陣から、フードの付いた灰色のボロ布に包まれた人型が現れた。

百五十センチほどの身長で魔方陣の上にプカプカ浮かび、ボロ布は四肢すっぽりと覆っている。まるで幽鬼の様ないでたちだ。

「踊れ、シンデレラ！」

幽鬼はボロ布をはためかせ、私に向かってくる。

フードは目元までを覆い、覗き見る事のできる口元は真一文字に結ばれ、感情を読み取る事はできない。

不気味さを滲ませ、真っ直ぐ迫ってくる幽鬼に、私は迎撃を選択

する。

警戒しつつ振るったレヴァンティンを、しかし幽鬼はアッサリとかわしてみせる。

ゆらゆらと、ゆらゆらと。

纏わり付くように動き続ける幽鬼は、私の剣戟をことごとくかわす。

のれんに腕押し。そんなことわざが私の脳裏を過ぎった。

「着飾れ！ ドレス・アップ！」

遠くから、花咲の声が響く。

すると、幽鬼から灰色の光が放たれ、爆発。

私の視界を爆煙が遮る。

軽い衝撃が私を襲うが、爆発自体にそれほど威力は感じられない。ならば目的は、

目くらましか！？

感じた気配に、レヴァンティンを水平にして頭上で構える。

煙を切り裂いて、レヴァンティンにアナスタシアが振り降りされる。

とつさの行動は功を奏し、しかし、振りぬかれた一撃は私の体を弾き飛ばす。

崩された体制を空中で立て直し、数メートル地面を滑る事で勢いを殺し、着地する。

視線は花咲を捉えて外さない。

私は空より落ちてくる無防備な花咲に向け、

「ハアアアアッ！」

シュランゲフォルムに変形させたレヴァンティンの、連結刃を伸ばす。

私の意のままに滑るように花咲に迫る刃は、弾こうと動いたアナスタシアに絡みつく。

アナスタシアにグルグルと巻きついたレヴァンティンを、私は力いっぱい引く。

アナスタシアを握る手を離す事なく、引かれるままに花咲の体はビルに叩きつけられた。

舞う粉塵。

コンクリートとガラスの破片が落下するよりも早く、私は連結刃を引き戻す。

レヴァンティンを鞘に収め、カートリッジをロードする。そして、

「飛竜……一閃！」

連結刃を居合い抜く。

鞘内で圧縮された魔力を纏わせ、粉塵の中心へと撃ち出す。

炎を纏い、突き刺さる連結刃。しかし花咲を穿った感触はなく、

直後に粉塵から花咲は飛び出してきた。その姿は重厚な鎧姿ではな

く、無骨なガントレットを装備した黒いインナー姿に変わっていた。

連結刃のすぐ脇を通り過ぎる花咲を、操り、返す刃で狙うが、空

中に作った足場を蹴って加速する花咲にはかする事すらない。

刃は花咲に追いつかず、数瞬で、急斜面を下るように距離を詰める花咲に防御も間に合わない。

「ぐーぱんち！」

魔力付加により灰色に輝く拳をまともに受け、私は吹っ飛ばされる。

数回地面を跳ねて転がった体を、片膝を付いて停止させる。

横になるにはまだ早い、と私は立ち上がる。

笑みが漏れる。

凹み、砕かれている騎士甲冑。体に残る心地よい痛み。そして何より昂ぶる心。

何故だろう、何故だろうな。何故お前と対峙する時、私の心はこんなにも震えるのだろうか！？

視線は、遠い位置で構える花咲を捉えて離さない。

強さだけではない。ただ強いというだけで、私のこの感情に納得したりはしない。

お前だからこそッ！ お前だからこそ私はッ！！

「フッ！ フハハッ！ ハハハハッ！」

愉悦に歪んだ表情を自覚して、私はさらに声を上げて笑う。花咲の顔も、実に楽しげだ。

力と力。技と技。心と心。

高め合い。競い合い。通じ合う。

互いに魅了し、互いを尊敬し、真っ向からぶつかり合う。きっとこれが、『恋』というものか。

「さあ！ まだまだ求め合おうぞ！！ レヴァンティン！」

Explosion.

剣と鞘を連結させ、レヴァンティンは想いを届けるために形を変える。

ボーゲンフォームのレヴァンティンを構え、さらにカートリッジをロードする。

対する花咲は、伸ばした右腕のガントレットを巨大化させ、左手を添えている。

ああ……受け取ってもらえるのか、この想いを！！

私の足元に展開する魔方陣。余剰魔力が炎となってレヴァンティ

ンから溢れ出る。

称えよう！ 今この瞬間！ 向かい合う二人を！！

「受け取れ、我が賛辞！」

王を名乗った好敵手に、頭を垂れるが如く恭しさをもって、私は矢を生成し、引き絞る。

「翔けよッ！ 隼アッ！！」

S t u r m F a l k e n .

一閃。

放った矢は、瞬間で花咲に襲い掛かり、灰色の輝きを放つ拳に直撃。

そして、爆炎が踊る。

衝撃と爆音、噴煙が花咲を包みこむ。

花咲の姿が見えなくなると、私の心は幼子のようにワクワクしだす。

煙が晴れたとき、花咲はどういう状態にいるのだろうか？

傷一つないなんて事はないだろう。だが、倒れていては困る。

はやく、はやく、はやくはやくはやく！

やがて、待ちに待った瞬間が訪れる。

「……ああ……」

ゾクリとした。熱い吐息が私の口から漏れる。

薄れいく煙の中に立つユーイチは、拳を突き出したままの姿だ。

所々碎けたガントレット、ボロボロになったインナーに、白いホットパンツは黒いスス汚れが目立つ。髪留めが壊れたのか、長髪は

垂れ下がっている。

だが、ボロボロの体よりも何よりも、私の目を引くのは、つり上がっている口元だ。

……そうだ……そうだ、そうだ！ 私が楽しいのだ！ 貴方も楽しくなくてはならぬ！！

通じ合いを強く感じる。心のままに武を奮い、受け止めてなお笑い合う。

剣士として、騎士として、そして女として、貴方はなによりも私を燃え上がらせる！

お色直しのお時間ですね？

アナスタシアの電子音とともに、灰色の光に包まれた花咲は、鎧姿になって現れる。

私の残した爪あとが一瞬で消えてしまった事に物悲しさを覚えたが、次は私が受ける番だと気を引き締める。

私は、シュベルトフォルムに戻したレヴァンティンを構え直し、花咲が動くのを待つ。

「……宿れ、灰虎の剛爪」

アナスタシアの穂先から、巨大な魔力刃が伸びる。

向き合う私と花咲。

私は、かつての対峙を思い出していた。

あの時と違うのは、花咲の扱う得物に、振るわれるであろう一撃の威力か。

どちらにせよ、花咲は著しい成長を遂げたであろう。

ふと、冷静になった心は、私は花咲の攻撃を受けきれぬであろうかを危惧する。

前回は幾分かの余裕があった。だが、今回は違う。

私の必殺の一撃を受けてなお、花咲は笑ってみせたのだから。

はたして私に、花咲と同じ事ができるのだろうか。

冷や水を浴びせられたかのように、心が凍る。

私は……貴方に相応しい女でしょうか？

怯えすら含ませて花咲と視線を交わし、私は、そうではないと気づいた。

見詰め合う視線。語られる声なき言葉。

恐れるべきは勝てぬ事ではない。負けを享受せぬ事。負けを恐れ
て引かぬ事。

相応しい相手であらねばと、心を奮わせる事。

「行きますよ、ナムナムさん！」

「来い！ 花咲！！」

Explosion .

今一度、心を喜悦に染めて。

私は、レヴァンティンがカートリッジをロードする。

駆け出す花咲。

数歩で間合いを詰め、鋭く踏み込む。

迫る花咲に、私はレヴァンティンを振り下ろす。

「紫電！」 「猛虎！」

「一閃！！」

衝突する、炎を纏う刀身と灰色の魔力刃。

拮抗は一瞬。

競り負けたのは私。

レヴァンティンは二つに分かれた、魔力刃は私を貫く。
痛みに膝が折れる。

敗因を自覚しながら、私は地に伏せた。

ぐう、と呻いて、うつぶせから仰向けになる。せめてもの意地だった。

脇に立つユーイチの気配を感じながら、私はそつと目を閉じる。
言い訳を聞いて欲しかった。だが、口に出すのははばかられる。
私は無礼を働いたのだから。
しかし、

「次は、リミッターなしで、ですね」

ハッつと目を開ける。

目に映るのは、私に手を差し伸べる花咲。清々しいと思える笑顔
を浮かべている。

言葉にせずとも分かり合える。確かにそうだ、と思えた。
痛みを押し殺し、私は花咲の手を取り立ち上がる。

「アハハ、この前とは逆ですね」

次こそは非礼なき全力をここに誓って。

私もきつと、清々しい笑みを浮かべている事だろう。

『おまけ』

合体技って、かっこいいよね！

遠くに存在する、無数のガジェットの群れ。

対するのは高町なものと、スナオマルに跨る花咲悠一のみ。

なのははレイジングハートを、悠一はアナスタシアを構える。

「『魔砲の破壊王』が行使する。Full Power…… All D
estruction」

「『猛勇の虎王』が眼前ぞ。震えよ！ 頭が高い！！」

なのはの前にミッド式の、悠一の前にはベルカ式の魔方陣が展開する。

「全力全壊！」 「全震全礼！」

「スターライトオオオオオ……」 「タイガアアアア……」

『クラッシャアアアアッ！！』

奔る、桃色と灰色の二重螺旋。

一瞬。瞬く間をもって、二人の砲撃は数十のガジェットをまとめて破壊した。

破片すら残さず、圧倒的に。

「もう、私は魔王じゃないの！」

後に残ったのはふくれっ面のなものと、

「ノ、ノリノリだったじゃないですか……」

呆れ顔の悠一と、

「ぐるう……」

悠一に同意するように鳴くスナオマルだけだった。

「ビーム」でも「ビイイイム」でも同じでしょ？ って言った奴、ちょっと

ハッハッハ！ やーちまったー！！

何で自分から扱いにくいキャラにしちゃったんでしょね。……やっぱ戦闘描写は苦手です。

シグナムの考えが、全部一方通行だったら面白いと思った。

今回は、休日のお話……から、ヴィヴィオの話まで一気に飛ぶかも知れませんが。やっぱり原作の話って、書く事がないんですよねえ……やっぱ原作見たほうがいいのかなあ……。

さて、今回のお話、楽しんでいただけたでしょうか？
次回も楽しみにしていただければ幸いです。
では。

お笑い好きのクーデレとか大好きです（前書き）

もっと言えば、クーデレより素直クルのほうが好きです。

お笑い好きのクーデレとか大好きです

ただの訓練、そう聞かされていた第二段階クリアの見極めテストが終わり、フォワード隊員五人はこれから一日休暇を与えられた。第二段階終了のお祝いも兼ねての事らしい。

突然訪れた休日に戸惑いもあったが、喜びの方が断然大きい。私、ティアナとしてはテストに合格できた事も嬉しかった。

というわけで、休日。何はともあれ、休日。私は格納庫にて、ヴァイスさんから借り受けたバイクの調子を確かめながらスバルがやってくるのを待っていた。

「おっ待たせ、ティアナ！」

振り返れば、私服姿のスバル。

一見して読み取れる上機嫌で、まあ気持ちは分からはなくはない。それにしても、とニコニコとした笑顔のまま、声のトーンを若干落としてスバルは口を開く。意外だなー、と。

「何がよ？」

「てつきりティアはユーイチと出かけるもんだと思ってたから——
って、ティアから哀愁がだだ漏れてくる！？」

この、近づくなつ、やら、ティアから離れろ、って何もない空中に拳を振るうスバルを見ながら、私は大きくため息を吐く。

かねてより計画していた兄さんの墓参りに行こうと、ユーイチを誘おうとしたのだ。が、訓練後の朝食時からユーイチの姿が見えず、デートに出かけるらしいエリオとキャロに尋ねても、僕たちも誘おうとしたんだが、見つからないという答えが返ってくるだけ。デ

バイスはシャーリーさんに預けているため、ユーイチの小型端末に連絡してみるも、応答がない。出かけに居合わせたらしいリイン曹長の話では、どうやら市内に買い物に出かけたらしい。

一声掛けてくれればよかったのに……。私と一緒に嫌だったのかしら……。

でも、と思う。墓参りには一緒に行こうつと約束してあるわけ。つまり、私と一緒にだともずい物を買に行っただっていの！？

「ダメよ！ ユーイチにはまだ早い！！」

主に、お姉ちゃんに隠し事的な意味で。

「スバル、早く乗りなさい！」

「私の行動に対するツツコミが無い！？ ……うう、ティアが冷たい……」

「はいはい、後でアイスでも買ってあげるから」

「冷たさが嬉しいね！」

とりあえず街に出て探してみる事にする。当てがある訳ではないが、やる気だけはある。

スバルと二人でなら、探索範囲は単純に二倍。とりあえずアイスを与えておけばスバルは協力してくれるだろう。

待ってなさい、ユーイチ！ お姉ちゃんが必ず見つけてみせるから！！

薄暗い下水道の中で、少年は待ち続けた。

汚水の汚さや匂いにしかめられていた眉は、しかし一人の少女を視界に捉えることで笑顔に変わる。

ボロ布のみで見を包んだ、鎖に繋がれたケースを引き摺る金の髪の少女。

うつむき、顔色の伺えない少女は、少年の目前まで来ると気配を察知したのか、のろのろと顔を上げた。

「お待ちしておりました、『聖光の神王』陛下」

少年の漆黒の瞳と、少女の翡翠と紅玉のオッドアイが交わされる。少女は安心したような表情を浮かべると、少年に倒れこむ。気を失った少女を抱きとめた少年は、少女に微笑みかける。せめて、ひと時の安らぎを与えるように。

大事に、大事に抱きしめながら。

市街に出た私とスバルだが、結局ユーイチの姿を見つける事ができなかった。さすがにスバルに悪いな、と探索を諦めて、二人でぶらぶらと遊んでいた私たちに、ユーイチから通信が入る。

「こちらライトニング05。緊急事態により、現場報告をさせていただきます！」

通信は、機動六課全体に向けての緊急通信。

「サードアベニューF23路地裏にてレリックらしきケースを発見。ケースを所持していた少女を保護しました。目立った外傷はありませんが、少女は意識不明。指示をお願いします」

私たちの休日の終わりを告げる合図だった。

フォワード隊員は現場に急行。なのは隊長とフェイト隊長、シャルさんも現場に駆けつけた。

少女を診たシャルさんの診断では、容態に異常は見られないとの事。

ケースと少女はヘリで搬送される。ヘリの護衛には、ユーイチの口添えがあつてスナオマルも同行する事となった。

私たち五人と一匹はというと、現場の調査に下水道へと赴く。下水道へと降りた私たちに、シャーリーさんから通信が入る。

地下水路内、及び海上方面にガジェットの部隊を確認、と。

海上方面には隊長たちと、ロングアーチからリイン曹長が向かう。陸士108部隊の海上演習に出向いていたヴィータ副隊長が合流するらしい。

ヘリの護衛が手薄になるが、スナオマルが就いているのなら大分安心できる。

こちらには、陸士108部隊の隊員であり、スバルの姉でもあるギンガさんが合流してくれるようだ。何でも、別件の捜査中なのだが、こつちの事件と関連している可能性があるらしい。

とにかく、これで人手不足の心配はなくなった訳だ。

通信でギンガさんに合流ポイントを伝え、私たちは下水道の通路を駆け出す。

走りながら、私にはユーイチに聞いておかなければならない事があった。

「ユーイチ、今日は何を買いに行つてたわけ？」

とりあえず当たり障りのないところから。なぜ声を掛けてくれなかったのか、といきなり問いただすのは悪手だろう。

ユーイチは少し迷うそぶりを見せながらも、やがて口を開いた。

「夕飯の買い物に行ってたんです。せっかくですから、美味しい物でも食べてお祝いしたかったんです」

薄っすらと頬を染め、口を尖らせるユーイチ。

サプライズを実行せずにバラす事の恥ずかしさと、バラさずをえない事への不満といったところか。

まったく……そんな顔されたらこれ以上何も言えないじゃない。

「じゃあ、早く終わらせればユウのご飯にありつける、って事かな」

ナイスフォロー、エリオ！

それなら俄然やる気が出てくるというものだ。

皆の顔に、覇気が満ちてきた気さえしてきた。

いや、確実に走る速度は速くなってる。

「私は……早くお風呂に入りたいです」

口に出したのはキャラだが、気持ちは皆同じだろう。

任務である以上仕方ないが、できる事なら下水道に潜りたくはなかった。

整備が行き届いているためそこまで酷い衛生環境というわけではないが、お風呂に入って、下水道に入ったという事実ごと洗い流したかった。

お風呂……そうだ。

「ユーイチ、せっかくだから一緒に入りなさい」

ええ？ と困ったような表情を浮かべるユーイチ。

嫌がつている訳ではないようだ。だったらグイグイ行けよ。

「……男女七歳にして」

「——うっさい。私は気にしないって言ってるでしょ？」

風呂場に持ち込めればこっちのもんだろう。もう一度一緒に入っているのだから、そこまで気にするものでもないだろうに。

スバルとキャラの顔色をうかがえば、こちらも気にしている様子は見られない。

ただ、一人詰まらなそうな顔のエリオが、ぼそりとつぶやいた。痴女め、と。

「……何か言ったかしら、エリオ？」

「いえ、何も言ってますんよ、チジョナ……コホン、ティアナさん。ユウも嫌がってるみたいですし、諦めたらいかがです？　ぼ・く・が、ユウと一緒に入りますから」

エリオは、ニツコリ笑顔で言う。目はまったく笑ってないが。
……上等じゃない。

「エリオには嫌がっているように見えるの？　その節穴そこら辺で洗ってきたら？　嫌がってなんてないでしょ、どう見たって。恥ずかしがってるだけでしょ、どう見ても！　ほんのり頬を染めて！　はにかむキミは！　私の自慢の弟です！！」

「妄想だだ漏れですね、チジョナさん。恥ずかしいから遠慮してるんですよ。その点、僕と入れば満面の笑顔！　いつだって満面！　どこまでも満面！　花咲くように！　笑うキミは！　僕の自慢の友達です！！」

睨み合う私とエリオ。

これはもうただの言い合いではない。笑顔とはにかみ。どちらのユーイチがより可愛らしいか、優劣を決する時。

はにかみの神様、はに神様！ 私にお力を！

「もお！ 二人とも、ケンカはダメですよ！」

ユーイチにたしなめられたとあつては、口をつぐまざるをえない。私も、エリオもだ。

まあ結論を言えば、どちらも可愛いに落ち着くだろう。エリオも同じ気持ちのはずだ。

「ところで、ユウくんは何を作るつもりだったんですか？」

それは確かに気になるわね。

報酬が具体的になれば、モチベーションも上がるというものだ。

「お鍋です！」

私の頭に浮かんだのは、メタリックな光沢を放つ調理器具だった。

「一つの広い鍋の中にいろんな食材を入れて、スープで煮込んだものを皆で囲んで食べるんです」

「ふん……で、おいしいの？」

ユーイチが作る、という時点で半ば確信があるわけだが。

「もちろん！ 腕によりをかけて作らせていただきます」

——動態反応確認。ガジェットドローンです

ユーイチの言葉を遮って、キャロのデバイスであるケリユケイオンが警告を発する。

それぞれが足を止め、それぞれの得物を構える。

私は、任務だということを忘れてつぶやく。不粹な奴らだ、と。

「『お姉ちゃん矜持』その二！ 弟とのひと時を邪魔する奴は、馬に蹴られる前にお姉ちゃんが潰す』！」

暗がりから迫る六体のガジェットに照準を合わせて叫ぶ。

「負けてなんてらんないのよ！」

ギンガさんとの合流して、その後もポツポツと現れるガジェットを下し、レリックがあるだろうと予測された地点で、僕、エリオたちはレリックの探索に当たっていた。

それなりに広い空間、乏しい明かりの中を探し回る僕は、レリックとは違う事を考えていた。

ギンガさんが追っていた、別件の事件のこと。

ギンガさんが呼ばれた現場で発見された、ガジェットの残骸と壊れた生体ポット。

生体ポットは5、6歳の子供が入るくらいの大きさで、はやて部隊長とギンガさんは、この生体ポットに見覚えがあるらしい。

人造魔導師計画。その素体培養機。

人造魔導師とは、優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に、投薬や、機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を

持たせる、というもの。

ギンガさんは、残骸の近くにあった何か重いものを引き摺ったような後を辿っていこうとしたら、連絡を受けたらしい。

これらから導き出される一つの可能性。保護された女の子が人造魔導師の素体として造りだされた子である、ということ。

僕と同じ、だけど違う『技術』で生み出された子ども。

同情だとか、憤慨だとか、誰かに向けることのない感情が胸中を渦巻く。

あの子の生まれを哀れむほど、僕は不幸ではない。見えない相手に憤るほど、僕は向こう見ずではない。

それでも、湧き上がる不快感。ムカムカと胸が痛んだ。

不快感を拭うように、頭を振って思考を切り替える。

考えるのは任務のこと、そして任務後の食事のこと。

ユウが腕によりをかけて作ると言っているのだ。これが楽しみでなくてなんだというのか。

スバルさんを発狂させたアップルパイに始まり、ユウは暇を見つけては僕たちに料理を振舞ってくれる。スイーツの類を作ることが多いが、調理の種類に関係なくその腕は振るわれる。

簡単に言つと、べらぼうに美味しい、ということだ。

ただ、僕としては美味しさよりも、嬉しさの方が強い。

髪を後ろで縛って、ひよこ色のエプロンで配膳をするユウはステキで、お口に合いますか？　なんて上目遣いで聞かれたら……もう

……！

それだけでご飯三杯はいけるというものだ。

ユウのご飯にありつくために、急いでレリックを回収しなければ！

「あ、ありました！」

「キャロ、ナイス……！」

思わず叫んだ僕は悪くない。

後は封印処理をして、無事隊舎に持ち帰れば任務完了だ。よし、と安堵とも喜びとも取れる声を漏らした僕の耳に、ガツ、と何かを打つような音が聞こえた。

音の方向を見るが、何も変わった様子はない。

疑問符を浮かべて辺りを窺う。と、さらに強く響く打音。

今度は捉える事ができた。視界の端に映った違和。注視を向ければハッキリと見える異常。

空間が、歪んでる！？

景色の一部が揺らいでいて、その揺らぎの前に展開する黒い魔力弾。その数、四つ。

キャロに向けて放たれた魔力弾に、とっさに体が反応するが、いかんせん距離が離れている。

「キャロー！」

叫びは、負け犬のそれだった。

爆煙がキャロを包み、しかし一瞬で払われる。

吹き飛んだ煙の中には、キャロを庇うように立つユウの姿があった。軽装態でアナスタシアを構えている。

「いきなり女性を襲うなど……許容すると思いましたが？」

アナスタシアの姿が消え、右手のガントレットに紅玉がはめ込まれる。

キャロの無事を確認した僕は迅速に動く。

キャロを襲った敵、怒りを多分に込めて、揺らぎに向けてストライダを振るう。

穿った固い感触と、頬に痛みが走るのは同時だった。

地面を蹴って、ユウとキャロの近くまで距離を取る。と、キャロ

が駆け寄ってきた。

大丈夫？ と裂けて鮮血の滴る頬を心配そうに見るキャロに、頷くことで返す。キャロを背に庇いながら、視線は揺らぎから外さない。

やがて、徐々に揺らぎが消えていく。

「……」

現れたのは黒い人型の異形。

赤い五つの瞳に、黒い外骨格。異形は、紫のマフラーを棚引かせて、静かにたたずんでいる。

異形の放つ威圧感に、緊張が走る。スバルさんやギンガさんも警戒しつつ異形を睨みつけている。

張り詰めた空気の中、対峙する僕たち。最初に動いたのは、ユウだった。

一歩前に出るユウ。

その顔は……笑顔？

「こんにちは！」

「……何してるの？ ユウ」

「いつまでも睨み合ってたって仕方ないじゃないですか。お話できるならそれに越したことはありませんよ？」

……言いたいことは分かるけど、不意打ちかましてくれた相手にすることではないよね？

異形からの返答はない。意図して黙しているのか、それとも発声器官がないのかはわからない。

と、暗がりから異形に近づく人影があった。

紫の長髪の女の子だ。

僕たちと同じくらいの歳に見える少女に、異形がそつと寄り添うように立つ。

もしかして、異形の仲間？

少女に対しても警戒を強める。

そしてやっぱり動いたのはユウだった。

「こんにちは！」

……やっぱり挨拶からなんだね。

「……こんにちは」

驚いたのは僕だけじゃないはずだ。まさか挨拶で返ってくるとは。小さい、けどハッキリと言う少女。が、表情が無く、声音も淡泊で感情を読み取ることができない。

「ぼくは管理局機動六課所属、民間協力者の花咲悠一と申します」

「……私は、ルーテシア。この子たちはガリユー」

「ルーテシア、ルーテシア……ルンるんなんでどうでしょう？」

「うん……じゃあ、アナタはゆっぴーで」

……えつとなんだらうこの緩い空気は。

というか、ユウの笑顔に対して、少女——ルーテシアさんの表情が一向に変わらないのが……うん、ちょっとおもしろい。

「ルンるんは何でこんなところにいるんですか？」

「……それ」

ルーテシアさんが指差したのは、キャラが持つレリックケース。

「私たちが求めているのは、レリック」

弛緩していた空気が引き締まる。

あまりにも和やかに会話するものだから失念していたが、こちらは、異形——ガリユーから攻撃を受けたのだ。こうなる事態も予測して然るべきだった。

そして、警戒を怠らなかつた人物が一人。

「それ以上は、ゆつくり隊舎で聞いてあげるわ」

ティアナさんだ。

何もない空間からティアナさんが現れ、ルーテシアさんの首筋に魔力刃を当てる。クロスミラージユの形は、第二段階を終了したことによってリミッターが解除された、ダガーモードだ。

「……ティアお姉ちゃん、話の途中ですよ。少し、不躰じゃないですか？」

「私たちには早く帰らなきゃならない理由があるでしょ？ 話なら隊舎に戻ってからにしないさい」

…… かつこいいいこと言ってるつもりですかティアナさん。完全に私欲じゃないですか。

もう少しぐらい待ってくれてもいいじゃないですか、とぶつくさ言うユウを見る。どうしてくれるんですか、ユウの顔が不機嫌にな

つてるじゃないですか。

呆れがそのままため息となって漏れる、と、

「スターレンゲホイル！」

突然の閃光。そして、強烈な爆音が一带に響き渡る。

とっさに目を閉じ耳を塞ぐが、光は目を焼き音は耳を貫く。

やがて、閃光と爆音が収まる。

耳鳴りが鳴り止まないが、視界はだんだんと回復してきた。

霞む目で辺りを窺えば、吹っ飛ばされるティアナさんと、ティアナさんを受け止めるユウの姿が映った。

ルーテシアさんに意識を向けると、背に庇うように立つガリユート、

「ったく、もお。あたしたちに黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ？ ルールーも、ガリユーも」

ルーテシアさんの肩元に浮かぶ小さな人影。三十センチほどの大きさの女の子で、その姿はリイン曹長を彷彿とさせる。

つまるところ彼女は、

「ユニゾンデバイス……？」

ということになる。

「心配したんだからな？ ま、もう大丈夫だぞルールー。何しろこのあたし！ 烈火の！ 剣精！ アギト様が来たからな！！」

ユニゾンデバイス——アギトの周りを小さな花火がポンポンと上がる。

すごい演出だと思う。でも、僕が気になったのは、アギト、アギト……、とつぶやくユウだった。

「アギト、アギト……ギーとんなんでどうでしょう？」

「ハア！？ いきなり何言ってやがんだ！？」

「あだ名ですよ？ あ、ぼくは悠一っていいいます。よろしくお願いしますねギーとん」

「テメーら管理局の奴らとよろしくすることなんざねえ！ 変な名前で呼ぶな！」

「落ち着いて、ギーとん」

「ルールー！？」

体全体を使ってリアクションを取るアギトが混ざったことにより、漫才に深みが出ている！？

「雰囲気は飲まれないで。自分をしっかり持って、ギーとん」

「あたしのペースを乱してるの、ルールーだから！」

「まあまあ、ルンるんにも悪気があるわけじゃないんですから」

「テメエが言うな！ って、ルンるんって何だ！？」

警戒は緩めない。警戒は緩めない、けど……そろそろ話を進めようよ。

「……ん！？ ルーラー！ 何か近づいてきてる！！」

（おまえら！ 下がってる！！）

突然頭の中に響いた念話。厳しい訓練でしごかれた体は、無意識で反応して後ろに跳ぶ。

「魔力反応……でけえッ！？」

アギトの悲鳴と、天井が轟音を立てて崩れるのは同時だった。瓦礫と土埃が下水に降り注ぐ中からリイン曹長が飛び出し、ルーテシアさんたちに襲い掛かる。

「捕らえよ！ 凍てつく足枷！ フリーレンフェッセルン！！」

リイン曹長の手元に魔方陣が浮かび、向けられたのはルーテシアさんとアギト。

瞬間で周囲水分を凍らせ、二人を氷の中に閉じ込めた。

「ぶっ飛べええええっ！！」

続いて飛び出したヴィータ副隊長は、そのデバイスであるグラーフアイゼンをギガントフォームで振りかぶっている。

接近するヴィータ副隊長に気づいたガリユーが、とっさにガードを固めるが、グラーフアイゼンの勢いを受け止めることができず、そのまま吹き飛ばされた。

……もしかしてこれで終わり？

だが僕の見通しはあまりにも甘かった。

ちっ、とヴィータ副隊長が舌打ちをする。続いて、リイン曹長が、

こつちもです！ と声を上げた。

「逃げられた……ですね」

リイン曹長が拘束魔法を解除すると、そこにあつたのは下へと伸びる大穴。

その大穴を確認した次の瞬間、僕たちを大きな揺れが襲った。

下水道から脱出して、近くのビルの屋上から下界を見下ろす。
私、ルーテシアたちがいた場所の真上の地上に、巨大な甲虫――
地雷王が鎮座していた。

「だめだよルーラー！ これは不味いつて！」

地雷王は、生体電流によって放電し、魔力を使用して振動を起こし、局地的な地震を発生させる生体能力を保有している。

バチバチと絶え間なく電流を発しているのは、彼が作業中な証拠だ。

「埋まった中からどうやってケースを探す？ あいつらだって、局員とはいえ潰れて死んじゃうかもなんだぞ！？」

「……ケースは、クアットロとセインに頼んで探してもらえばいい。それに、あのレベルならこれくらいじゃ死なない」

少なくとも、あの黒髪の子――ゆっぴーは絶対に死なない。
完全に不意を突いたはずのガリユーの一撃を難なく止めてみせ、
その後もこちらが攻め入る隙をまったく見せなかった。

軽口を交わしながらも警戒を緩めず、ギーとんの錯乱や、オレンジ髪のカンナーを投げつけたときでさえ、こちらから意識を外すことがなかった。

ガリユーが怯えるほどの威圧感を放つゆっぴー。そのゆっぴーが警戒していたのは、第二、第三のカリユーの存在だろう。ブラフに引つかからなかったら、私たちはすでに捕まっていただろう。

辛くも脱出できたのは、ゆっぴーの援軍が来たからだろう。

私はゆっぴーに対して危機感を抱いているが、どうやらギーとんは違うらしい。

「よくねーよルルルー！ あの変態医師とかナンバーズ連中と関わっちゃ駄目だって！ ゼストの旦那も言ってたろ！？ あいつら口ばっか上手いけど、実際のところあたし達の事なんてせいぜい実験動物くらいにしか」

鳴り響いていた地響きが、一際大きな音を立てる。

地雷王を中心に円形に地面が陥没した。

「ああ……やっちゃった……」

左隣に浮かぶギーとんがうなだれる。

「視線を外しちゃダメ、ギーとん」

「は……？ いや、その前にギーとんは止めてくれ」

可愛いのに……。

と、地雷王の足元に桃色の魔方陣が展開された。

魔方陣から伸びる幾本もの鎖が地雷王の体に巻きつき、拘束する。あれは召喚魔法か。おそらく一番弱そうだった桃色の髪の子の仕

業だろう。ただの雑魚かと思ったが、とんだ伏兵だ。

少しでも戦力を削げればと思っていたのだが、この様子なら全員無事だと考えた方がいいだろう。

右隣に立っているガリユーに目配せをする。と、私たちに向かつて藍紫色と水色の帯が伸びてくる。

それぞれの道を走り来る二人のボクサーと、飛来せんとする赤い騎士を迎え撃つはガリユー。私は、

……気づいてる。

正面にあるビルからこちらを狙うガンナー。

撃ち出された魔力弾を大きく跳躍することでかわす。

私の後を追うギーとん——アギトがガンナーに火炎弾を飛ばすが、難なく避けられてしまう。

ガンナーからの追撃がないのを確認すると、私の視線は彼を捉える。

空中を蹴って迫る、ゆっぴーの姿を。

「トーデスドルヒ」

私は黒いダガーを五本召喚し、その内四本をゆっぴーに向けて放つ。

直射が三に、弧を描いて進むのが一。

一本、二本、と速度を緩めることなくかわし、三本目をかわしたところで、曲射の一本で隙を突く。

着弾。爆発。

爆煙がゆっぴーを包んだのは一瞬。すぐに煙を引き裂いてゆっぴーが現れる。

私は、高架の手摺部分に着地する。

眼前まで接近したゆっぴーに、隠し持っていたダガーを突き出す。が、ゆっぴーに手首をつかまれることで簡単に止められてしまった。すぐ傍に来たアギトに、赤髪のランサーが槍を突きつけるのは同時

だった。

ならせめて、とガリユーと地雷王を送還する。

「ここまでです」

寄ってきた銀髪のユニゾンデバイスが私とアギトをバインドで拘束する。

ぞろぞろと集まってきた敵が私たちを取り囲む。さすがに同じ手は使えないか。

隣でじたばたと足掻いていたアギトも、不利を察したのか地面に座り込む。

赤い騎士が私たちに近寄り、ため息を一つ。

「子供を虐めてるみてーで、いい気分はしねーが。市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

見た目とは違い、どうやら彼女がこの場での最上官らしい。

「で、だ。目的は何だ？ 何でレリックを狙った？」

目を瞑り、口を閉ざす。

答えるつもりは毛頭ない。

それよりも考えるべきは、ここからどうやって脱出するか、だ。あわよくばレリックを奪って。

警戒すべきはゆっぴーと赤い騎士。あのユニゾンデバイスも注意が必要か。やっかいな幻術使いのガンナーも念頭に置かなければならない。

さて、と考えたところで、クアットロから念話が届いた。

（ハア〜イ。ルーお嬢様。何やらピンチのよう。お邪魔でなけれ

ばクアットロがお手伝い致しますわ)

心底楽しそうな声が、何故だか鼻についた。

しかめた眉で開いた瞳が、私を囲う輪から外れたゆっぴーを捕らえた。ケースを持つランサーと召喚師に挟まれたゆっぴーは、不満気に口を尖らせている。

なんとなくだが、苛立ちの訳を理解できた気がした。

だが、自分だけではこの事態を好転させることはできないだろう。不機嫌を隠すことなく、私はクアットロに、お願い、と伝えた。

(はい)。ではお嬢様？ クアットロが言つとおりの言葉を、その赤い騎士に)

ゆっぴーから視線を外し、目の前の赤い騎士に。

「砲撃のチャージ確認！ 物理破壊型、推定Sランク！」

通信だろうか、彼女のデバイスから悲鳴にも似た声が上がる。クアットロたちが行動を開始したんだろう。

(逮捕はいいけど)

「……逮捕はいいけど」

クアットロの言葉どおりに、私は言葉を紡ぐ。

(大事なへりは、放っておいていいの？)

「大事なへりは、放っておいていいの？」

赤い騎士だけでなく、全員の顔が驚愕に歪む。ただ一人、ゆっぴーを除いて。

（アナタは、また）

この状況においてもマイペースを崩さず、警戒を強めるゆっぴーに戦慄が走る。

されど紡ぐ口は止まることなく、

「アナタは、また——守れないのかもね」

私は淡々と絶望を告げるのだ。

遠くで奔る閃光を啞然と眺める赤い騎士たち。そしてふたたび入る通信。砲撃……へりに、直撃、と。

赤い騎士の行動は素早かった。

「ッてめえッ!!」

私につかみかかる赤い騎士。

激しく揺さぶってくる赤い騎士は、しかしゆっぴーに羽交い絞めにされる。

「落ち着いてください、ヴィーちゃん!」

ゆっぴーのペースを乱すのが、常に味方だというのは、なんとも皮肉な話だろうか。

「離、ッせ! 仲間がいんのか!? どこだ!? 言えッ!!」

ゆっぴーの拘束を振りほどき、赤い騎士は私の胸ぐらをつかんで

持ち上げる。

首が絞まって息苦しい。

赤い騎士から視線を動かし、再度引き離そうと動くゆっぴーを見て、私の視線はさらに奥、ケースを持つランサーの足元。

「エリオ君！ 足元に」

異変に気づいたらしいボクサーの一人が叫ぶが、手遅れだ。

「——いただき！」

地面から飛び出したセインは、ケースを奪うとふたたび地面へと潜った。

ナンバーズ6のセインの持つ先天固有技能『ディープダイバー』は、無機物に潜行し、自在に通り抜けることが可能な能力。無機物内部を泳ぐように移動することで、地下や建造物の内部も自由に移動することができる。

なので、ガンナーがセインの潜った場所に魔力弾を打ち込もうとも、セインに当たることはない。

赤い騎士が私を離してセインを追う。

突然離されたことでお尻を地面にぶつけ、締め付けから開放されたのどからはケホッ、と咳きが一ツ零れた。

と、私の目の前にセインが現れる。

誰かが気づいて声を上げるが、もう遅い。

私を抱えて、セインが地面に潜る。

捕らえようと動く赤い騎士たちを尻目に、私は静かにたたずむゆっぴーを見る。

悪戯っぽく笑うゆっぴー。

私とその笑みの意味に気づくのは、そのすぐ後のことだった。

その後、結局アギトにも逃げられた。反応をロストしては、僕たち
に追いかける術はなかった。

悔やむ僕たちだったが、直後に朗報が届けられた。

ヘリのほうは何とか無事だったらしい。

スナオマルが身を挺して砲撃を受けたらしい。

軽傷を負ったものの、それほど大事には至っていないようだ。

しかし、砲手には逃げられてしまい、あちらもてがかりは無し。

さらに惜しむべきはレリックのことだが、こちらはなんとキャロ
とティアナさんの機転により、幻覚魔法でヘアバンドに姿を変え、
キャロの帽子の中に隠してあったのだ。

これにはヴィータ副隊長も驚いたようで、呆れた声を出しながら
も、次の瞬間には小さく笑うのだった。

新たな敵の存在に脅威を感じながら、それでもレリックを確保で
きた喜びを持って、休日は幕を閉じた、はずだった。

ことは隊舎に戻ってからの夕食時。ユウの手料理を食べられると
踏んでいた僕たちに告げられたのは、お話の途中で邪魔するような
不躰な人に作ってあげるご飯なんてありません、という一言。不機
嫌を隠さずに言い終えたユウは、さっさと自室に戻ってしまった。

しばらくの間、僕たちのティアナさんに対する風当たりが若干強
くなったのは、言うまでもないだろう。

『おまけ』

レリックケースの行方。あるいはアギトの悪夢。

レリックケースを開けて、中を覗き込むルーテシアとアギト。
中はからっぽ。

レリックが入っていると思っていた二人はしばし啞然とする。
やがて、ルーテシアがぽつりとつぶやいた。

「Oh、Shit！」

「ル―ル―！？」

アギトに、幸あれ。

お笑い好きのクーデレとか大好きです（後書き）

ただアギトに「ルルルー!？」と言わせただけです。

ルーちゃんが不思議ちゃんっぽくなりましたね。後悔はしてないです。

あだ名は、似たような物しか思いつかなかったです。あと思いついたのは「ルーティ」というあんまりおもしろくない物でしたから。「ルルルー」でもいいかな? と思っただんですが、そこで挫けたら負けだと思いましたので、「ルンるん」に落ち着きました。

悠一君に悶えるエリオ君を想像して私が悶えました。はい、どうでもいいですね。

ヴィヴィオの話まで進める予定だったんですが……ままならないですね。

本編で何か分からないことがありましたら、お気軽に感想くださいね。Q&Aコーナーなんて設けられたらおもしろいかなーと思っておりますので。

何かありましたらご一報ください。

次回こそヴィヴィオの話を書きたいと思います。短くなってしまわないか心配です。

さて……今回は楽しんでいただけましたか? 次回も楽しんでいただけたら幸いです。では。

とじあえず、『聖』の字を『性』にしてみる。これが昔いつていとなんだなあ（昔

みつを

とりあえず『聖』の字を『性』にしてみる。これが若いってことなんだなあ

釈然としない結果の休日が明けて翌日。

レリックやルーテシア、彼女を連れ去ったアンノウンなど報告書に纏めることが多く、作業に集中するようにと指示を受けて、今日の訓練は中止となった。

私、ティアナを含めたフォワード隊員五人は、早朝から書類製作に勤しんでいた。お供二匹は、それぞれの主人のデスクの上で邪魔することなくくつろいでいる。

私は、自分の端末に向かいながらも、隣のデスクでモニタとにらめっこをしているユーイチの様子を逐一確認していた。

ユーイチはデスクワークが苦手らしく、うゝ、と呻きながら恐る恐るコンソールを叩く姿は、垂涎ものだ。可愛らしさ的な意味で。

じゅるり、と本当に垂れてきたよだれを拭って、威厳を装う。

困る弟いたならば、助けてみせようお姉ちゃん。ということ、

私は自分の書類作成を進めながら、ユーイチの作業を手伝っている。

昨日の汚名を返上しようと、意気込んで補佐をしているわけだが、いかんせん魅力に目が眩む。

今のユーイチは髪型をツインテールに結わえている。もちろん私の要望だ。

体を動かすたびに不規則に揺れる二本の髪束。間違いを指摘する代わりに、一束を摘まんで毛先をで首筋をこちょこちょ。すると、むず痒そうに身じろぎしながら、こちらを恨みがましく見るユーイチの可愛いこと可愛いこと。

そして何より、垣間見えるう・な・じ。

真剣な横顔に、垂れた髪束の間に見える綺麗なうなじ。揺れる髪によって見え隠れするうなじは、チラリズムすら演出する。これを芸術と呼ばず何と呼ぼうか。写真に収めて額縁に飾っておきたいくらいだ。

麗しく、そして愛らしい。今でこれほどなのだ。時を重ねたら一体どのような成長を遂げるのだろうか。

雄雄しく育ち行くだろう。それこそがきっとユーイチの本質だ。それを彩るのは麗しさか愛しさか。どちらか一方しかないということはないだろう。

戦場に立つ姿に魅せられ、訳知り顔で言葉を交わす姿に惹きつけられ、あどけない姿に絆され、その存在に奮い癒される。

際立つのはどの性質か。元気に育ってくればまず言うことはないのだが。

歳を取れば、私に対する呼び方なんかも変わるかもしれない。私がそうだったように。

お姉ちゃんから……姉さんかしら？

ティア姉さん、なんて呼ばれるようになる日があるだろうか……

あれ？ 愛くるしい姿しか浮かばない！？

やがて歳を重ねれば、恋の一つもするようになるのだろうか。ユーイチに興味がなくても、周りがほうっておかない。外見だけの有象無象にユーイチが騙されるとは考えにくいが、そこは私がしかと目を光らせておくべきだろう。

それでもいつか、恋人を紹介しに来る日がくるのだろうか。姉さん、ぼくたち結婚しますなどと、

「ダメよ！ ユーイチにはまだ早い！！」

「ひゃうー！ び、びっくりしました……」

ユーイチのものも含め、私に視線が集中する。

大丈夫、大丈夫。冷静に、冷静に。

間は一瞬。思考の切り替えは迅速に。

「まだ早さを追求するレベルじゃないわ。少しずつでもいいから精

確に打ち込みなさい」

「……はあゝい」

どこか釈然としない風だったが、ユーイチは作業に戻っていく。非は完全にこちらにあるので、せめてもの慰めになればと頭を撫でる。ごめんね、と心の中だけで謝りながら、慈しみをこめてゆつくりと。

ユーイチが機嫌を良くして、笑ってくれているのがせめてもの救いか。

顔は笑顔だが、その動きからはたどしさが抜けない。

最初よりは幾分かマシだが、戦闘技術ほど上達が早いわけではない。恐る恐る触る様子を見るに、苦手意識が先行しているのかもしれない。

まあ、だんだんと慣れていけばいいか。私も協力は惜しまないわけだし。

書類作業に慣れれば、将来的には私の補佐官になってもらうのもいいかもしれない。

まだ夢物語でしかないが、それはなんてステキな未来図だろう。本格的に提案してみようかな、と、ここまで考えたところで、私に通信が入る。

『ユーイチを愛でてみよう。執務官補佐編』を脳内で繰り広げようとした矢先のため、若干イラつきながら相手を確認すると、相手はなのはさんだった。私は居住まいを整えてから通信に出る。

なのはさんは、挨拶もそこそこに、急いで部屋に来てくれ、と告げると、早々と通信を切ってしまった。

なのはさんらしくない慌てた様子に、私た五人はと二匹は急いで女子寮のなのはさんの部屋に向かった。

「なのちゃん、入りますよー」

ドア越しのユーイチの呼びかけと私のノックに、どうぞー、なのはさんの許可を貰ってドアを開ける。

失礼します、とユーイチを除いた四人で声を重ねて部屋に入ると、私たちを出迎えたのはなのはさんと、

「昨日の子……？」

ポツリとスバルがつぶやいた。

なのはさんの後ろに隠れながら私たちを窺う4、5歳くらいの女の子。濃い色の金髪の下、緑と赤色のオッドアイには涙が滲んでいる。

私はその姿に見覚えがあった。他の皆も同じだろう。

「うん、そうだよ。ほらヴィヴィオ、お姉さんたちに挨拶できるかな？」

「うん……ヴィヴィオ、です」

怯えの含んだ目えこちらを見る女の子——ヴィヴィオ。

昨日ユーイチが発見して保護した子に間違いないだろう。だけどこの子は確か、

「聖王医療院で検査入院でしたよね。しばらく掛かるって話を聞いてたんですけど……」

うん、となのはさんは苦笑い。制服の裾を掴んで離さないヴィヴィオの頭にポン、と手を置く。

なるほど、と事情を予測する。離さなくなっちゃわけですね。

懷かれて、引き離せなくなってしまうたんだろう。身辺警護の必要もあったからいつそのこと、ということか。

レリックが乗っていたのにもかかわらずヘリに向けてSランクの砲撃を撃ち込むなんて、目的は六課戦力をそぐためか、それともヴィヴィオを消すためか。後者だとすれば、ヴィヴィオには何か重大な秘密があるということ。とすれば、ヴィヴィオは再度狙われる可能性がある。六課で保護するのはしかるべき処置だろう。

「えっと、今回私たちが呼ばれたのって、何ですか？」

ヴィヴィオがここにいる理由は分かった。だが、私たちが呼ばれた理由が未だ不明瞭だ。なんとなく嫌な予感がするのだが……。

「あー、私今からちょっと出かけなくちゃいけないくてね。だから皆にヴィヴィオの面倒を見て貰いたいんだけど……」

「え……？」

ああ、ダメですなのはさん。そんなこと言ったら……。

「つやあああああつ!!」

案の定、ヴィヴィオが大声を上げて泣き出した。

なのはさんのスカートを両手で握り締めて泣き喚くヴィヴィオを何とかなだめようと、なのはさんが声を掛けるが、ヴィヴィオが泣き止む気配はない。

と、なのはさんを見かねたのか、ユーイチが二人に近づいていく。いつのまにか大きくなったスナオマルを伴って。

「ヴィヴィちゃん？」

「ふえ……？」

聞きなれない声に反応したのか、ヴィヴィオが顔を上げ、

「ヒッ！」

小さく悲鳴を上げた。

いきなり視界いっぱいにはトラがいたら、さすがに驚くだろう。先ほどとは別の意味で泣き出してもおかしくはない。

だが、そんなヴィヴィオの反応を無視するように、ユーイチの表情は明るい。

「初めまして。ぼくは悠一っっています。こっちの子はスナオマルです」

やはり笑顔でスナオマルに頼ずりをするユーイチ。頼ずり受けたスナオマルは気持ちよさそうに、ぐるう、と鳴いた。

怯えの色が混じりながらも、スナオマルに興味があるのか、視線はスナオマルから外れない。やがてヴィヴィオは、おずおずと口を開く。

「怖く……ない？」

「平気ですよ。スナオマルはとってもいい子です！ それに、すっごくもふもふですよ？」

もふもふ、という単語を口の中で転がすヴィヴィオ。

触ってみますか、というユーイチの問いかけに、ヴィヴィオはな

のはさんを見る。なのはさんが頷いたのを見ると、ヴィヴィオはなのはさんから離れ、スナオマルの頭を撫でる。

「うわぁ……」

ヴィヴィオから感嘆の声が漏れる。気に入ったのか、撫でる手はすぐに二本に増えた。

「ねえ、ヴィヴィちゃん。ぼくたちと一緒に帰りを待ちましょう？
遊びながら待てば、きっとすぐですよ」

「遊ぶ……ゆーいちと、スナオマルと？」

はい！ とヴィヴィオに微笑みかけるユーイチ。

エリオやキャロも時もそうだが、やはり歳が近い分、打ち解けるのが早い。その証拠にヴィヴィオはしつかりとうなずいた。

この場合はユーイチに任せて大丈夫だろう、と思ったのだが、どうやらそう簡単にはいかないようだ。

「えっと、実はゆう君も私と一緒に行ってもらわなきゃならないんだ……」

ユーイチの気遣いが完全に裏目にでた瞬間だった。

ふたたび泣き出したヴィヴィオをなだめるにはかなりの苦労を有し、スナオマルは残るということでなんとか落ち着いたのだった。

聖王教会へと出向いた私、なのはとゆう君、フェイトちゃんはシヤッハさんに案内されて、カリムさんとクロノ君、はやてちゃんの

待つ部屋に入室した。

それぞれ挨拶を済ませ、私を真ん中に左がフェイトちゃん、右がゆう君。テーブルを挟んで真向かいにカリムさん、その右にはやてちゃん、左にクロノ君という形で席につく。シャッハさんは部屋の隅で待機している。

そして、カリムさんから私たちを呼んだ理由を聞かされる。

機動六課設立の、その本当の訳を。

ロストログア、レリックの対策と、独立性の高い少数部隊の実験例。これにかんしては私たちも事前に聞かされていた。レリックを狙い、ガジェットドローンを開発したであろう広域指名手配犯のジエイル・スカリエッティの捜査も、フェイトちゃんの手によって行われている。だが、これらは表向きの理由らしい。

六課の後継人は提督であるクロノ君と、聖王教会騎士団の騎士であり時空管理局理事官でもあるカリムさん、ここにはいないが、クロノくんの母親であり上官であるリンディ・ハラウオンさんの三人だ。さらに非公式ではあるが、伝説の三提督と呼ばれる方々も六課の設立を認め協力を約束してくれているらしい。

これほどのビックネームが後盾になっている機動六課設立の本当の理由とは。

隊長である私たちだけじゃなく、ゆう君もこの場に呼ばれた理由とは。

カーテンが閉められ暗くなった室内で、カリムさんが取り出した紙束が光を放つ。

カリムさんの持つ希少技能『預言者の著書』。その簡単な説明があつたあと、予言の内容が語られた。

「『虚空の海より舞い戻りたる、獣を従えし咎人。遙かなる記憶より蘇りし、写し身の王。邂逅は必然なれど、嘲笑う道化の影は色濃く、道化達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ちる。旧い結晶と無限の欲望が交わる地、死せる王の下、聖地より彼の翼が舞い

上がる。法を守護する者こそ罰を恐れよ。古の大地にまで続く羽ばたきに、身を碎かれぬように』」

読み取れたのは、地上本部の崩壊と、管理局員に対して罰が下されること。そして、

「虚空の海より舞い戻りたる、獣を従えし咎人つて、もしかして……」

私のつぶやきに、私を含め全員がゆう君を見る。ゆう君は、平然とすべての視線を受け止めていた。

「獣を従えし咎人が悠一君なら、写し身の王について、しいては予言の内容について何か知ってるのではないですか？」

ゆう君は、何か考えるように一度目を閉じ、そして開いた瞳でカリムさんを捉えた。

「失礼かと思いますが、先にばくの質問に答えていただいていいですか？」

「ええ、かまいませんよ」

では、と一呼吸置いた次の瞬間、ゆう君は起動したアナスタシアの刃をカリムさんの首に突きつけた。

「ユーイチ！？」

クロノ君が悲鳴にも似た声を上げる。

フェイトちゃんとはやてちゃんは驚いた顔で固まっっていて、私も

きつと同じ表情を浮かべていることだろう。

カリムさんは戸惑った表情ながらも、部屋の隅で構えをとったシヤツ八さんを手で制した。

「問うぞ、騎士カリム」

ゆう君の厳かな声音に、場がさらに引き締まる。

「写し身の王の存在に、アナタは心当たりがありますか？」

「……ありません」

「偽りはありませんね？」

はい、と答えるカリムさんの表情には、疑問符が浮かんでる。なぜそこまで執拗に聞くのか、と。

「……聖者の印を持つ者が、すでに活動を始めていますよ」

「え！？ ……ま、まさか！？」

慌て始めたカリムさんを前にしても、ゆう君の態度は変わらない。

「問うぞ騎士カリム」

ただ、淡々と告げる。

「聖王の名を冠する教会の騎士よ。アナタは何を為す？」

「何を為すか……？」

質問の意図が理解できないのか、言いよんだカリムさんに、ゆう君は、騎士として、アナタは何を為す？　と言葉を重ねる。
やがて落ち着いたカリムさんが、ゆっくりと口を開きます。

「聖王様が授かりし信託を世に広め、平和を祈り、民を護りぬくことです」

「……それがたとえ都合よく歪められた信託であってもですか？
それがたとえ偽善に塗れた平和であつてもですか？　それがたとえ妄信の民であつてもですか？」

「……王のため、国のため、そして弱き者のため、剣となり盾となる誓いを違えることはありません」

「その言葉に、嘘偽りはありませんね？」

今度はしっかりと頷いてみせるカリムさん。
数秒の沈黙を置いて、ゆう君はようやくアナスタシアを待機状態に戻しました。

「それを聞いて安心しましたー。あ、予言についてはこれ以上ぼくが答えられることはないです。お役に立てず、ごめんなさい」

打って変わった笑顔のゆう君だが、空気はまだ緊張したままだ。
むしろ、その笑顔が皆を混乱させる。

「悠一君……貴方は一体何なんですか？」

皆の総意ともいえる疑問をカリムさんが口にする。

問いかけに答えたのは、ゆう君ではなく、

この方は数ある王の中の一人

アナスタシアの電子音だった。

つながりを殺され、名を殺され、自由を殺され、そして生かされた一匹の虎を従えた王。血塗られた手を握り返すことを躊躇わぬ心を持った王

「そんなに大したものじゃないですよ。ぼくは、ただの友達です」

私じゃ、話の内容を理解できる部分は少ない。けど、それでも儂げに笑う様子は、まるで、ゆう君が変わっていくみたいで、どこか遠くに行ってしまうような気がして。

気が付いたら私はゆう君を抱きしめていた。

なのちゃん？ の問いかけに、私はゆう君と視線を合わせる。

「ゆう君がどこかに行っちゃう気がして……ゆう君がどこかへ行っちゃうのは、もういやだよ？」

「……それはなぜですか？」

え？ と声が漏れる。

なぜって、それは……。私が、ゆう君のことを……。

言葉にしたい想いは、しかし言葉にならなくて。私は合わせていた視線を外してしまう。

「友達、だからだよ」

「……そう」

どこか落胆した響きの声音に私は慌てて視線を戻すが、ふたたび交わされることはなく。

気まずい雰囲気のまま今日はお開きになった。

六課に帰るころにはいつもの私とゆう君に戻っていたが、私はゆう君とすれ違ってしまったのを自覚していた。

相変わらずの待機所。

私はいつものように読書に勤しむ。

「んー？ 何読んでるんスカ？ えっと、えすわいえーまるひふじよしかい、こうほう？」

「……ゆうたん……エリオたん……ハアハア」

「——医者ああああッ！！ 誰かッ！ 誰かドクターを呼ぶっスううううー！！！！」

何か奇声を上げながら走り去っていく姿を、しかめた顔でちらりと一瞥。

まったく、集中しているのに邪魔しないでほしい。

私は視線を戻して、ページをめくってニヤリと笑った。

とりあえず『聖』の字を『性』にしてみる。これが若いってことなんだなあ（後

）（ハ、ハ）……ハアハア。

????にする意味あるのかなあ……？

彼女にかんして、時系列とかめちゃくちゃです。

というわけで、難産でした。

内容にかんして……とくに言うことはないです。急ぎ足になってしまったことをお詫び申し上げます。

さて、次回はキャラがメインの話！

私自身、どんな話になるのか楽しみです！！

今回は楽しんでいただけましたか？

次回もたのしんでいたただけたら幸いです。

では。

大人の階段。シンデレラはどちらかというと降ってるイメージが強い（前書き）

少女だったとお、いつの日いかあ、思う時いが——今やあ！！

大人の階段。シンデレラはどちらかというと降ってるイメージが強い

「由々しき事態です！」

始まりはキャラのそんな一言だった。……あれ？ デジャヴ！？

一日の業務を終え、夜。

キャラによつて、部隊長室に六課の主要人が集められた。

執務机に肘をつけて座る八神部隊長から時計回りに、机に直に腰掛けるリイン曹長、シグナム副隊長、フェイトさん、スバル、部隊長の真向かいにキャラ、私、なのはさん、ヴィータ副隊長と並んで、緩やかな楕円を描くように輪になっている。ユーイチとエリオを除いたフォワード陣と、部隊長、リイン曹長というそうそうたるメンバーだ。

それだけのメンバーを一室に集め、それぞれの顔を見渡して叫んだキャラはさらに言葉を重ねた。

「最近、エリオくんとユウくんの仲が良すぎるんです！」

……ん？ それはつまり……。

「このままじゃエリオくんが一線を越えてしまいそうで……この前の休みだって、せっかく二人っきりでデートだったのにユウくんの話ばかりで……」

……嫉妬、かな？

「……つまり、エリオがユーイチばかり構ってるから、寂しくなっちゃって、なんとかエリオの関心を惹きたい、と」

私が言うと、真っ赤になって、うう、とうつむくキャラ。

やがてポツリと、好きなんですもん……、とつぶやいた。

……何この可愛い生き物。

私が、ぽんぽん、とキャラの頭を撫でてやると、はにかみながらも顔を上げる。

「私一人が考え付くことなんて高が知れてます。ですから、皆さんにご助力をお願いしたいんです」

「……それが、今回私らをここに集めた理由か？」

はい！ と頷くキャラに、ふむ、と目を閉じて考え込む部長。
キャラは不安げな表情を浮かべているが、あの部長のことだからきつと……。

やがて目を開けた部長は、ニヤリと笑った。

「おもしろそうやないの……。六課を挙げてキャラの恋路を応援するでー！」

「いや、さすがに大げさすぎです部長」

あと、その笑顔黒すぎです。

周りの皆も呆れ顔だが、否定的な表情している人は……一人だけいた。シグナム副隊長だ。

「キャラにはまだ早いのではないか？」

視線がシグナム副隊長に集中する。

チラリと視界の端に映ったキャラがどこかイラっとしていたのが気になった。

「今、下手にあれこれ企ててもエリオにうまく伝わるとも限らん。花咲との問題にしても、他に男友達がいなかったため、距離感が独特なものになってしまっているだけだろう。どちらにせよ、時が解決してくれる問題だと思うがな」

「……ノン乙女が、ずいぶん立派なこと仰るんですね」

「だ、誰がノン乙女か!？」

「乙女には！ たとえ不利だとわかっていても！ 発起しなければならぬ時があるんですよ!!」

恋する乙女からのノン乙女認定がよほど効いたのか、シグナム副隊長は頂垂れながら、私だって恋愛の一つや二つ……、とか、主の主だから、大主とか……いい！ とかブツブツ言っているが、とばつちりはゴメンなので無視を決め込む。それはこの場にいる全員の総意だった。

「んー、一つ気になったんだけど……キャラが好きなのはエリオなんだよね？ てつきり、キャラはユーイチのことが好きなんだと思っただけなー、私」

「ありえませんよ」

スバルの問いかけに答えるキャラは若干つつむき、視線は虚空に置いている。

「私は、ユウくんが大好きです。でもそれは、エリオ君に対する気持ちは違います。……野生の鳥を美しいと思うように、吹き抜ける風を心地よいと感じるように、ユウくんを想う気持ちはきつと憧れです。ふと目を離れた隙に、どこかに飛んでいつてしまふ。ともに在ろうとするならば、相応の存在でなければならぬです。……あるいは、翼を折ってしまおうか。小さな箱の中にを閉じ込めてしまおうか。でも、翼の折られた鳥を美しいと感じるのでしょうか？ 閉じ込められた風は、もはや風とは呼べません。今こうして一緒にいられることこそ、うたかたなんだとすら思います……」って、今はユウくんの話はいいじゃないですか！ 私はエリオ君が好きなんです……！」

照れ笑うキャラは、呆ける私たちに気づかない。それほどまでに、キャラにとっては当然の考えなんだろう。

……それは、もしかしたら、私たちが無意識に思考を停止させていた部分かもしれない。

「ところで、ノン乙女のシグナム副隊長は置いておくとして、皆さん恋愛遍歴ってどういったものなんでしょう？」

……ユーイチにことを考えるのは後回しにしておこう。うん、きつとそれがいい。

「私は……訓練、訓練の毎日だったから、そういう相手がいたことはないかな。スバルは色気より食い気だったし」

スバルが何か喚いているが無視する。

「グイータ副隊長は……」

「あ？ なんつー目で見てやがる。潰すぞ？」

「望むのなら土下座でも何でもしますから睨まないでください。……では、付き合った経験がお有りです？」

「いや、別にねーけどよ……んだよ、文句あんのか？」

完全に睨まれ損じゃないですか！？ と頭では考えつつも、あの眼光は恐ろしいので、いえ、文句なんてとんでもない、と視線を外す。

……あれはマジで潰す目だった……。

「じゃあ、なのはさんは？」

なのはさんは、目を逸らした。

「フェイト隊長？」

フェイト隊長も、目を逸らした。

「……部隊長」

はやて部隊長まで、目を逸らした。

海鳴出張任務のとき、現在恋人はいないみたいな話をしていたのは知っていたが、まさか恋愛経験すらないなんて……。……私も人のことは言えないけど……。

私は、隣からポツリと漏れた舌打ちを聞いた。

「つつかえねえ……」

キャラが凄い顔つきになっている。

……どう見ても乙女の顔じゃないわよキャラ……。
と、その時だった。

「どうやら、人選を間違えたようね！　キャラちゃん！」

白衣を棚引かせたシャルさんが颯爽と現れたのは。

「アナタはシャルさん！　——いや、SYAマル秘婦女子会、
シャル会長！」

吼えるキャラ。だが、シャルさん——シャル会長は動じることなく不敵な笑みを浮かべている。

キャラとシャル会長が睨み合う中で、部隊長が、SYAマル秘婦女子会？　とつぶやいた。

見れば、なのはさん、ヴィータ副隊長、リイン曹長、スバルも疑問符を浮かべている。

私は以前勧誘されたことがあったから知っていたが、キャラがSYAマル秘婦女子会の存在を知っていたことには驚いた。そして何より、たいしてリアクションの起こさない二人。もしかして……？

「はやてちゃんには話してなかったわね……SYAマル秘婦女子会とは！　少年たちの欲望のままの愛を見守ることを目的とした保護団体のことよ！！　私たちは彼らの可愛らしさに癒されなが、日夜その存在を護るために活動している！！」

部隊長たちがポカーンと間抜け面を晒している。

気持ちばかりです。……でも部隊長。彼女たちはマジなんです。部隊長たちにろくな反応がないと見るや、シャル会長はキャラ

に視線を戻す。

「さて、キャロちゃん……。私たちSYAマル秘婦女子会は、アナタの行動を容認しない」

「……アナタたちの許しがいるとは思えませんが、いちおう聞いておきましょう。——なぜですか？」

「分からない？ エリオくんはユーイチくんと一緒にいるのが幸せなの。アナタのエゴで二人を引き離すなんて持つての他なの。——アナタじゃ、エリオくんにつりあわないのよ」

「ちょ、シャル会長、その言い方はあんまりじゃないですか？」

「あら、お姉ちゃんなんて言われていい気になってるティアナちゃん、ユーイチくんの幸せを邪魔するのかしら。そ・れ・と・も、偏愛者は弟じゃない、とでも言うのかしら？」

嘲笑うシャル会長。

……弟じゃない？ ハッ！ バカ言っでんじゃないわよ！！

「……厳しいだけじゃダメ。……甘いだけなんて持つてのほか。……妹みたい、なんて最大級の侮辱よ。——『お姉ちゃん矜持』その三！ 『お姉ちゃんたる条件は数あれど、弟に条件を求めるな』！ 間違いを犯すようなら、ぶん殴ってでも止めるわ。でも、犯罪者だろ？ 変な性癖があるのが、大事な弟であることに変わりはないわ！！」

一呼吸置く。

「キャラとエリオが結ばれることがユーイチの不幸になるなんて、そんなこと私は思えない」

それに、と私はキャラの頭を優しく撫でる。

「妹分の恋路を応援こそすれ、邪魔する訳ないじゃない」

照れが混じりながらも、嬉しそうに笑うキャラを見て思う。エリオとキャラ、双方が双方にとってよきパートナーになるだろう。今までの二人を見てきたからこそその本心だ。

だから、たとえSYAマル秘婦女子会を敵に回すことになったとしても、私はキャラの味方だ。

キャラのすぐ脇に立ってシャル会長を見る。

私の啖呵を持っけてしても、シャル会長は余裕を崩さない。

「な・る・ほ・ど……。ふふっ、いいわ。キャラちゃん、アナタに一度だけチャンスを上げます」

チャンス？ と私とキャラの声が重なった。

シャル会長は右手の人差し指をピンと立て、口元に持ってくる。

「明日一日、私たちは行動を起こさない。明日一日足掻いて、己の無力を嘆くといいわ」

シャル会長の瞳にはありありとした自信が窺えた。

……確かに、SYAマル秘婦女子会の力は侮り難いものがある。向こうが油断してくれるというのなら、そこを突くべきだろう。だが、なんなんだ！？ この拭いきれぬ不安感は！？

「ふふっ、一つ教えておいてあげます。この場にいる人間以外がア

ナタの力になることはないわ。すでに六課の女性人の九割は我が傘下よ!!」

なんやて!？ と頭を抱えたのは部隊長だ。

「わ、私の機動六課が……私の努力の結晶が……まさかこの中に会員はおらんよな?」

ビクンっ、と肩を震わせたのは二人。
案の定じゃない……。

「……フェイトちゃん……シグナムウウウウ……」

部隊長の目に剣呑な光が宿る。

フェイト隊長とシグナム副隊長が目に見えてあたふたしだした。

「ち、違っただよはやて! ……だって! 寝顔のツーショットと
が見せられたんだよ!? それはもうしょうがないじゃない!!」

逆ギレですかフェイト隊長。あとそれ盗撮ですよ、何やってんですか執務官。

「お、落ち着いてください主。私はシヤマルに誘われてしかたなく……。そ、それに私は花咲一筋です。エリオにはさほどの興味もありません!」

「……ちよつと待ってシグナム。かぁなあり、聞き捨てならない言葉が聞こえたんだけど……」

二人の間に漂い始める険悪な空気。

頬をヒクつかせるフェイト隊長を鼻で笑うシグナム隊長という図が出来上がった。

「ハッ！ エリオごときが花咲に勝てると思っているのか？ だとしたらずいぶんと耄碌したものだな！ テスタロッサ！」

「……確かに、ユウの可愛らしさは至高だ。でも！ エリオだって決して劣ってなんかいない！！」

「比べることすらおこがましいとなぜ気づかぬ！ テスタロッサ！
！ だからキサマは」

「——やめなさい」

静かに、されど明瞭に響くのはシャル会長の一言。
込められているのはわずかな怒り、そして大きな悲しみだった。

「フェイトちゃん。好みの問題は何にだって付いて回るわ。だからといって無益な争いは愚かなだけ。シグナム。自分を偽って好みを歪めろなんて、とてもじゃないけど言わないわ。けれど好みを押し付けるのは止めなさい。非のない少年をそしるなどもっての外！
純粋な愛の形を見守ろうというのなら、醜い行いは慎みなさい！！」

沈黙が場に敷かれる。

皆を支配するのは、呆れなどではない。

オーラすら立ち昇って見える気がするのだ、その存在感に畏敬の念を抱くのは容易だった。

その中で、矮小さを受け入れて、卑屈さを拭い捨てた乙女のみが
一歩前に出る。

「たとえば、たとえ己の無力を嘆くことになっても、それは全力を尽くしてからです。私はまだ、答えを得てはいないから。私はまだがんばれるから。背中を押してくれる人がいるから、なおさらに。与えられるのがチャンスだというのなら、私は、掴んでみせます！—— エリオ君が、好きだから！！」

奮われた愛情は、皆の顔に笑顔を灯す。微笑ましいからでは決してない。その勇氣に感銘を受け、キャロの手を引き、背中を支えたいと心の底から思ったからだ。

そして、笑顔なのはシャル会長も同じだった。

「ふふつ、だったらどうするのかしら。精一杯の背伸びでも届かぬ場所に、頼りない仲間たちを携えて……」

「頼りないつちゅーのは、早計すぎるで？」

勇氣は伝染する。

意気込みを新たにするのは、キャロだけではない。

「ねんねなはやてちゃんに何ができるって言うのかしら？」

「二次元と妄想で鍛えた私の恋愛力……舐めとったら後悔することになるで！！」

……二次元と妄想……？

雰囲気に吞まれていた思考が冷静さを取り戻した。
いや、部隊長、すつごく頼りないです。そもそもアンタら主従関係でしたよね？ と思ったが、こんな空気の中で言い出せる筈もなく、キャロの助けになってくれるならまあいいか、と口を噤んだ。

こうして、キャロ・ル・ルシエの長い一日は幕を開けたのだった。

開けて翌日。

昨晩は遅くまで作戦会議に熱中していたため、少しばかり寝不足だが、そんなことは感じさせないほど今の私、キャロは意気込んでいる。

場所は食堂。

私の左にユウくん、ユウくんを挟んでエリオくんが座り、右にティアナさん、ティアナさんの向かいにスバルさん、私の向かいになるのはさん、ユウくんの向かいにヴィヴィオ、エリオくんの向かいにフェイトさんと、八人で一つのテーブルを囲んで座っている。

「ゆーいち！ おいしいね！！」

スプーンをグーで握って笑うヴィヴィオ。

機動六課で保護されることになったヴィヴィオは、ユウくんやなのはさん、フェイトさんによく懐いていた。なのはさんとフェイトさんにかんして言えば、それぞれをなのはママ、フェイトママと呼ぶほどに。

保護責任者になのはさん、その後見人にフェイトさんが付いていて、私やエリオくんにとっては、妹ともいえる存在だ。まあ、私にしてみたら、フェイトさんはお母さんというより、お姉ちゃんといった存在だ。お母さんというのなら、プレシアさんの方が近いかもしれない。

そんなフェイトさんだが、シグナム副隊長とともに、SYAマル秘婦女子会の会員でありながら、今回は私に協力すると言ってくれ

た。フェイトさんとは敵対しなくなかったので、これは、素直に嬉しかった。

作戦はいろいろ考えた。今から始めるのはその内の一つ。スバルさんが考えた作戦だ。

それぞれが食事をする中で、私は自分のカレーを一さじすくい、

「ユウくん、あ〜ん」

ユウくんの目の前に差し出した。

同じくカレーを食べている人間に自分のカレーを食べさせようとする、という愚行を冒しているわけだが、これも作戦のためだ。恥ずかしさは捨てるべきだろう。

ユウくんのきょとんとした表情に、込み上げる羞恥心を押し殺しなんとか笑顔を保ち続ける。

やがてユウくんはニツコリ笑うと、あ〜ん、と大きなお口を開けてかぶりつく。

もぐもぐ、ゴクン、と咀嚼して、

「おいしいよ、キャロりん。ありがとう」

と笑うユウくんの向こう、私は無表情でユウくんを見るエリオクんに視線を移す。

そう、これこそがエリオくんの心に小さな嫉妬心を残そうという作戦。その名も！『キャロが他の男に、あ〜んしてる……あれ？

この気持ちはいったい……作戦』……！！

だが、ここに来て大きな誤算に気づいた。

エリオくんの視線に気づいたのか、振り返るユウくん。その視線から何を感じ取ったのか、自分のカレーを一さじすくい、

「あ〜ん」

え？ と恥じらいを見せたのは一瞬、頬を染めたままエリオくんはスプーンをくわえた。

……い・ち・ど・り……！

というか、こうなることは容易に想像できたはずなのに！！

「あつ！ ゆーいち！ ヴィヴィオにもあ〜んして！」

ヴィヴィオの声が遠く聞こえる。

うう、何で私と同じメニユーにしたんですかユウくん……。

位置取りが遠い上に、同じメニユーを食べさせるなんて愚を二度も冒したくはない。

……まあいい、しょせん色気より食い気のスバルさんが考えた作戦だ。こちらとしても最初の作戦から成功するとは思っていない。

私は次の作戦に思考を移しながら、隠しきれぬ不機嫌のままにカレーをかき込むのであった。

いくら時間がないといっても、訓練を怠るわけにはいかない。

朝食を食べ終えた私は、ユウくと連れだつて教導が始まる少し前から訓練場に来ていた。

二人で秘密特訓をするためだ。

「キャロりんは力がないですからね。合気柔術あたりを覚えるといいと思うんですが……」

「あいきじゅうじゅつ？」

先日の事件で、紫の召喚師——ルーテシアちゃんはユウくんに

対して近接格闘を仕掛けてみせた。

ユウくんは簡単に受け止められていたが、その突きは鋭く、相手が私であったのならかわしきれなかっただろう。一対一で戦ったとき、私じゃルーテシアちゃんには勝てない。

競うように強くなりたいと願ったのは、同じ召喚師としての意地だったのかもしれない。

「口で説明する前に、実践してみますね？ キャロりん、ぼくの殴りかかってきてもらえますか？」

相談相手としてユウくんを選んだのは、実際にルーテシアちゃんの刃を受けたことももちろんあるし、なにより、私自身が武器の心得がなく、無手での戦いを得意としているユウくんなら私に正しい道を示してくれると思ったからだ。

私は全幅の信頼をもって、全力でユウくんに拳を振るう。瞬間、

「え？」

視界が反転した。

「ぎゃん！」

背中に衝撃を受けて、乙女らしからぬ悲鳴を上げてしまう。

ユウくんに投げられたと気づいたのは、空を数秒間見上げた後だった。

キュクル、と心配そうに近寄ってきたフリードを一撫でして、差し出されたユウくんの手を取って立ち上がる。

「体格差を無視して小よく大を制す、あるいは相手の力を利用し柔をもって剛を制す、といったものです。投げ技や関節技が主体で、

キャロリンには持つて来いだと思うんですが……ぼくには基礎の基礎程度の技術と知識しかないんですよ。ぼくじゃ、どの程度教えられるか……」

あごに手を当てて、思案顔を浮かべるユウくん。

私にとっては、とても魅力的な技術なのだが……。

付け焼刃では役に立たないことは分かっている。だが、敵が姿を現した以上、ふたたび相対するのが遠い未来ということはありえないだろう。修行項目の選択は慎重に行うべきだ。

「ん、キャロリンは鎖を扱えましたよね？」

アルケミックチェーンのことでしょうか？

「単純に腕に巻いて振るえば打撃力アップですし、ナムナムさんのシュランゲフォルムのように、魔力付加を与えて自由自在に操ることができれば、近、中距離で戦えて複数の敵を相手にすることができるとは……」

やはり難しい顔で目を閉じるユウくん。

うーん、うーん、と唸りながらの長考。さきほどよりも多く時間をとって導き出された結論は、

「とりあえず、時間も限られてますから、ウォームアップしながら決めましょうか」

あっけらかんと言われた言葉だが、反対する理由は特にない。ただ一つ、少しくらいなら、欲望を優先させてもいいよね？

「鞭の技法を取り入れた柔術、という形にしましょうか……」

「あの、ユウくん」

なんですか？ と小首を傾げるユウくんは、柔軟体操をしながら尋ねる。

「好きな人って、いますか？」

エリりんです、と答えられたらどうしようか。

私の心配をよそに、ユウくんは固まってみせた。

今日はこんなのはっかりだなー、と思いつつ、深く考えたら負けな気がするので、素直にユウくんの表情を楽しむことにする。

現実逃避から復帰したのは、ユウくんの表情に愁いを見たからだろう。

「好きな人……ですか。……どうなんでしょうね。好きだった、はずなんです。好きでいられた、はずなんです。けど、共にいることのできた時間よりも、離れていた時間の方が長くて……。ぼくにとつての一瞬が、彼女にとつてはあまりに長くて……。もう、よくわかんなくなっちゃいましたね」

それでも笑顔のユウくんはどこか痛々しくて、そして私にはユウくんの思い人に思い当たる人がいた。

「それって、もしかして……」

唇に立てた人差し指を当て、しいゝ、と囁くユウくんは、私が口を出すべき問題ではないのかも、と口を閉ざす。

ユウくんを困らせたみたいで、心が痛むが、ユウくんは次の瞬間には表情を一変させて悪戯っぽい笑顔を作った。

「そういうキャロリンは、エリリンが好きなんですよね？」

今度は、私が困る番だった。

「な、なんでそれを!？」

隠してきた、いや、正確には表に出せなかった恋慕の念をユウくんに悟られていたなんて……うう、恥ずかしい……。

「なんだか、昔のゆきぼんを見ているみたいでしたから、もしかしたらって思ってた」

「謀られた!？」

ユウくんが意地悪です……。

「アハっ、お似合いだと思いますよ。ぼくも応援してますから」

からからと笑うユウくんを、恥ずかしさと恨みを半分ずつ込めて睨みながら、思う。

これで一つハッキリした、と。

問題は、エリオくんにあり!!

午前中の訓練の終わりをなのはさんに告げられて、真っ先に動いたのはティアナさんだった。

「ユーイチ、お風呂行くわよ!」

間髪入れずに反発したのは、ユウくんのすぐ隣に立っているエリオくんだ。

「今日はまた突然ですねチヨナさん。嫌がつてるんですから、いかにげんあきらめたらどうなんです？」

「今日はアンタも一緒よ」

え？ と疑問符を浮かべるエリオくんを小脇に抱え、反対の手でユウくんの襟首を掴んで、二人に 有無を言わせることなくティアナさんは駆け出した。

行先は打ち合わせ通りお風呂場だろう。

それにしても、何とも乱暴ですねティアナさん。

ユウくんの、ぐえっ、という悲鳴が耳に残っている。でも、応援すると言ってくれたのだ、ここは我慢してもらおう。

とにかく、私もお風呂場に急ぎます。

今回の作戦は至ってシンプルだ。その名も！ 『あわあわうぶん、フルヌードスキンシップ大作戦』！！

エリオくんに女の子を意識させようという作戦で、内容はただ一緒に風呂に入るといふもの。

簡単だ、簡単なことだ。簡単なことなのだが、いかんせん恥ずかしい。脱衣所で、しばらく心を落ち着ける時間を有するほどに。

何度目かの深呼吸を終えて、扉を開く。タオルで体を隠して、湯気立ち上る浴室に踏み入り、皆の姿を探します。

湯船に浸かっているのは三人。ユウくんを真ん中に左にティアナさん、右にスバルさん。そして、お目当てのエリオくんは、洗い場にいる。

ドキドキを押し殺し、平常を心に押しつけて、ニッコリ笑顔でエリオくんの元へ。

「エリオくん、お背中お流ししましょうか？」

「うん……」

どこか心ここにあらずなエリオくん。

……私が必至になって声を掛けたのにその態度ですか。

「髪も洗いますよ？」

「うん……」

エリオくんは首を固定して動かさず、視線だけはチラチラと動かしている。

顔が向けられているのは浴槽。さまよう視線が捉えているのは、

「それとも、私の背中を流してくれますか？」

「うん……」

ユウくんを見ているのはこの際、よしとしましょう。でも、ティアナさんとスバルさんを交互に見比べてるのは……ねえ？

「……エリオくん、聞いてますか？」

「うん……」

エリオくんも女の人に興味があつたんですねえ。

ちなみに、どっちの方が好きですか？

おやおや、変態紳士モンデヤルの誕生ですか？

——そうはさせません!!

「えい」

ゴキッ、という鈍い音。

「く、首いいいいッ!？」

「ううう、私だっていつかは……」

作戦の失敗を自覚する。

ですが、しょせんノン乙女シグナム副隊長が考えた安直な作戦です。失敗して当然と考えるべきでしょう。まだ作戦はいくつもあるんです。

でも。

私は自分の体を見下ろして、小さくため息を吐くのでした。

その後も次々と作戦を仕掛けました。
けれども。

「エリオくん、私の作った肉じゃがの味はどう、かな？」

「……とりあえず絶対的に量が足りない」

「——エリオくんのばかああああッ!—」

『掴めストマック！ シャマル会長ならマジで驚掴みできるんじゃない？ 作戦』……失敗。

「ちよっ！ フリード！？ そんなとこ引つ張らないで！..」

「キョクルー」

「ああ！ エリオくんのエリングが！..」

『待ちなさいフリード！！ ああ、すみませんウチの子が……作戦』……失敗。

「エリオ先輩……私、ずっとアナタのことが！..」

「……何やってるの？ キャロ……」

『放課後ブラストレイ 教室はちよっぴりドラゴンの香り』作戦』……失敗。

他にもたくさん用意した作戦は、すべて、ことごとく失敗に終わったのだった。

あと数分で今日が終わろうかという時間帯。

私は一人、隊舎裏でしゃがみこんでいた。

地面にじかに座っているため、どんどんと体から熱が奪われていくが、そんなことは気にならない。

自分が、あまりにも不甲斐なくて。

いっばいの人に応援してもらって、私自身も頑張ったつもりだった。

けど、エリオくんを振り向かせることはできなくて。

情けなくて、シヤマル会長が言っていたように、私じゃエリオくんにつりあわないんじゃないかとすら思えてきて。

涙を流さないことが、私の最後の意地だった。

「キョクル」

「ん、ありがと、フリード……」

私の頬を舐めて慰めてくれるフリードを一撫でする。と、

「キャロ、こんなところで何してるの？」

「エリオくん!？」

いつの間にか、エリオくんが傍らに立っていた。

エリオくんは私の許しを得ることなく、私の隣に腰かける。

「どうしたの、キャロ? 今日一日様子がおかしかったけど……」

どんな顔で向き合っていていいかわからず、私はうつむく。

初めて会ったときから、一緒にいてくれた人。ふとした時に、一緒にいられて嬉しい人。いつまでも、一緒にいたいと願う人。

さりげなく支えようとしてくれるこの人がやっぱり好きで。
好きなのに相応しくなれない自分がたまらなく嫌で。

こんなはずじゃなかったのに、と悔しくて。

ぐちゃぐちゃした思考は、心配してくれるエリオくんに対しても
まともに働いてくれない。

「エリオくんには分かんないよ……」

「分かるよ」

迷いなく紡がれた言葉に、え？ と私は顔を上げる。
目が合うのは、真っ直ぐに私を見詰める静かな笑顔。

「いつも、見てきたんだから」

……ズルイと思った。

「……いつも？」

「うん。いつも」

ズルイと思った。そんなこと言われたら、あきらめられなくなる。
あきらめるわけにはいかなくなる。

私はエリオくにぎゅっ、と抱きついた。

「キャロ？」

「……ダメ、かな？」

「ううん、そんなことないよ。僕で、よければ」

このぬくもりを感じたならば、私はどんな妨害があってもめげたりしないから。

シグナム副隊長の言ったとおりになったみたいで少し癢だけど、私は少し急ぎすぎたのかもしれない。

今は、まだ。でも、いつか、きっと。

私は静かに涙を流すのだった。

物陰から、私、シャマルとユウくんは、エリオくとキャロちゃんの様子を窺っていた。

「それにしてもゴメンなさいね、ユウくん。わざわざエリオくを呼んでもらって」

私がエリオくを呼びだしたら変に警戒されてしまう。スムーズに事を運ぶためには、ユウくんの協力が不可欠だったのだ。

私は、改めて座って抱き合う二人を見る。いろいろと紆余曲折があったようだが、どうやら収まるところに収まったようだ。

と、私をニヤニヤと見るユウくんの視線に気づいた。

「ティアお姉ちゃんに聞いたんですけど、マロマロさんはキャロちゃんに邪魔がしたかったんじゃないんですか？」

邪魔、ねえ……。

「私だって、女の子だもの。がんばってる女の子の邪魔をしたりなんてしないわ。ま、素直に応援してあげるほど優しくはないですけどね」

あそこまで煽る必要はなかったかもしれないが、はやてちゃんに仕切らせるとおもしろおかしさを追求して、目も当てられない結果になってしまっていた可能性がある。

それでは、キャラちゃんがあまりに可哀そうだ。

「それでも、マロマロさんは二人の恋の恩人ですよ」

「フフっ、ユウくんが恋の悩みに直面したときは、いつでも相談に乗ってあげますよ?」

「そうですね。その時がきたら、ぜひ」

私たちは互いに笑いあって、そっと二人でこの場を離れた。

六課に芽生えた小さな恋は、大勢の人に見守られながら、大切に、大切に、育まれていくのであった。

大人の階段。シンデレラはどちらかというと降ってるイメージが強い（後書き）

ん、ちょっとイメージしてた形と違う……けどまあこれはこれでおもしろいかな、とは思ってます。

この話で一番おもしろいのはきっと、エリート集団で固められた六課女性陣の九割がシヨタコン化。従者にすらなんねとか言われるはやての近況……違いますか？

あるいは、カレー食べてる人間にカレーを、あぐんする状況……え、これも違う？

……じゃあ一体なんだってんだ！？ ……はい、少し興奮しました。皆さんがそれぞれの見方で楽しんでください。

内容の補足としましては……私の中で、キャラは完全にドS。異論は認めます。けど、この物語に反映されることはありません。

シヤマル会長の口調が何だかおかしい気がしてきました。……氣になるようならご指摘ください。

さて、次回ですが……少し忙しくなってきました、更新が遅れるかもしれません。あらかじめご了承ください。

内容も決めかねてます。物語を進めるなら、過去話フェイト編なんです、もしかしたら閑話を挟むかもしれません。

今回は楽しんでいただけましたか？

次回も楽しんでいただけたら幸いです。

では。

10万アクセスだよ、全員集合！？（前書き）

えー、みなさん、お久しぶりです。

遅くなって申し訳ありませんでした。遅くなった理由としましては、学業が忙しかったのと、デジモンと武装神姫のせいです。

長らく音沙汰がなくほんつとに申し訳ありませんでした！！

10万アクセスと題打っておりますが、記念品とかそういったこと
はないです。ただ語呂がよかったので。

長らく執筆してなかったせいか、本編が書けず、短編集ということ
でなんとか書ききりました。はい、完全に自業自得です。

あと、はやてゴメン。

とりあえず、どうぞ。

10万アクセスだよ、全員集合！？

『重ねた年月の分だけ母性が潜む』

機動六課が誇る訓練場の片隅。

森林を模したフィールドで、折り重なる二つの人影。

木を背に座るヴィータと、その膝を枕にして横になっている悠一だ。

「ヴィーちゃんはあゝ……あつたかですう……」

木漏れ日が二人を優しく包んでいる。

ぽやぽやとした声音の悠一と、悠一の頭に手を置いたヴィータ。

他の隊員たちが書類仕事に勤しむ中で、二人つきりで行った訓練。ほどこいところで切り上げたつもりだったが、予想していたよりも早くに終わってしまい、こうして昼食までの時間を二人で潰しているのだ。

「寝ちまうなよ？ 午後はあたしも忙しーからな」

「はあゝい……」

そして二人はそれきり口を閉じる。

穏やかな沈黙に身を置く二人は、ともに小さく微笑んでいる。

さらさらと悠一の髪をすくヴィータと、目を閉じて仰向けで眠る悠一。

やがて、ヴィータの耳が、スウスウと小さく漏れる息を捉えた。

「……ったく、しょーがねーな」

つぶやかれたあきらめには、笑顔が添えられている。

その眼差しは母親のそれに似ていた。

ヴィータはもう一度、しょうがないなとつぶやくと、自身もそつと目を閉じる。

ゆっくりと流れる時間は、二人を見守るようであった。

『姉補正は、剣の騎士と互角に渡り合う』

負けられない戦いがある。

掲げた理想のために。

話し合うよりも、武を競い合うことを選んだ者たちの戦い。

押し通すことで、想いはさらに昇華する。

譲れぬ信念がある。

もしかしたら、分かり合える道があったのかもしれない。

しかし事は動き出した。

並び立つ事はない、と。

つかみたい未来がある。

互いが互いの至福を目指して。

恐れを捨てて、私欲を夢と称して。

願う明日を信じて。

今、両者は激突する。

「ツイン！ テェルウウウツッ！！」

「ポニイ！ テエルウウウツ！！」

決着は、今だ付かず。

「……あたしはおさがが似合つと思っただが」

第三勢力現る！？

『SYAマル秘婦女子会、会員募集中』

薄暗い医務室。デスクに備え付けられた電気スタンドのみが室内を照らしている。

室内にある人影は一つ。この部屋の主であるシャマルだ。

彼女は椅子に腰かけながら、デスクの上に敷かれた小さな紫の座布団の上に鎮座する赤い宝玉に話しかける。

「同志アナスタシア。今回の成果はどうかしら？」

まずまずといったところです、同志シャマル。いつものようにデータを送信しておきます

ピコピコと点滅しながら電子音を発するのは、メインコアのみのアナスタシアだ。

アナスタシアは、SYAマル秘婦女子会の会員ではない。しかし、主人である悠一の可愛らしさを理解し、布教までしてくれるシャマルたちにアナスタシアは大きな感銘を受けた。全力の支援を約束す

るほどに。事実、SYAマル秘婦女子会の活動は、彼女の心意気でもっていると言っても過言ではないだろう。

悠一が全幅の信頼を置く存在として。寝食に、入浴すらともにする存在として。魔力スフィアを用いての高画質の多方向同時撮影可能な存在として。

アナスタシアはSYAマル秘婦女子会に欠かせない存在なのだ。

ああっ……！ やはり我が君の美しさは至高……！！

主に、盗撮の手腕という意味で。

シャルはPCに送られてくる写真のデータを吟味しながら一つ一つうなづく。

「そうね……。けど、ユーイチくんの写真ばかりというのは……少し配慮してくれないかしら？ エリオくんの写真も撮ってくれるとありがたいんだけどね」

ありえませんか。私には、我が君以外に用いる容量はありません……そもそも、会報の内容などは我が君一人で十分過ぎるほどに潤います。エリオ・モンディアルていどが我が主と並び立つなどと

「——アナスタシア」

ぴしゃりと言い放つシャルは、会長の威風を纏う。

「私の愚痴が招いた浅慮です。今回は見逃しましょう。ですが……二度目はありませんよ？」

……分りました。私は口を噤みましょう。だが、これ以上の譲歩は望まぬことです

「ええ、分ってるわ。今のままでも十分、アナタには感謝してるもの。ただ……最近どうもマンネリ化してきてね。会報も似たような内容ばかりで……」

確かに、現状は被写体に頼り過ぎている節がありますからね。ですが、そこは会長であるアナタの腕の見せ所では？

「そうなのよねえ……」

深く、深く吐かれるため息。

SYAマル秘婦女子会の明日はどっちだ！？

『六課が誇る、癒しのシンボル』

「スナオマルう」

「ぐるう」

寝そべったスナオマルに覆いかぶさる悠一は、緩みきった表情をしている。

もふもふに頬ずりしてにへらと笑う悠一を、どこか嬉しげに受け入れているスナオマル。

機動六課隊舎内において、たびたび目撃される光景である。

『洗ってるうちに潰れてエグいことに』

「はう、満腹です」

人気がない食堂。

昼食を食べ終わり、膨らんだお腹をさするリインは悠一の頭の上で仰向けで寝ていた。

食後の余韻に浸り、幸せそうに笑うリインに、ふと影が差す。

「ん？——えぶうツ！」

影——スナオマルは、リインにのしかかる。

下敷きにしたリインをスナオマルは器用にくわえると、そのまま放った。

空中で二転三転して停止したリインは、ビシッとスナオマルを指さして睨みつける。

「なあにするですか！ スナオマル！ あやうく中身が出ちゃうところでしたよ！！」

「グルウ」

「し、失礼なこと言うなです！ リインは重くなんてないです！！」

「グルウ」

「……上お等です。いつかは決着をつけなくてはならないと思って

いました。——今ッ！ 雌雄を決する時ッ！！」

どこか馬鹿にした風に鳴くスナオマル。それを受けたリインは、真ッ赤にしていた顔を冷めたものに変えた。

裂帛の気合をもつてスナオマルに飛びかかるリインに、しかし制止の声がかかる。

「ダメですよリインちゃん。スナオマルも。ケンカはめーです」

「で、でも！ ここで退くのは私のメンツにかかります！」

「まあまあ。それでも食べて落ち着いてください」

まくしたてるリインに、悠一はリインにある物を差し出した。

リインの動きを止めた『それ』。

『それ』は赤き宝石。

白き大地の上で、爛々と輝く赤き宝石。

『それ』は選ばれし勇者。

切り刻まれる運命から逃れ、仲間が眠る地に雄々しく立つ選ばれし勇者。

『それ』は優しき灯。

己が滅びと引き換えに、幸せを与える優しき灯。

悠一が差し出したのは、苺のショートケーキの『苺』だ。

一瞬で満腹を忘れるほどの魅力を秘めた禁断の果実が、今リインの目の前にあるのだ。

これは、しょうがないではないか。

「ユ、ユーイチがそこまでいうのなら、この場合は勘弁してあげるです」

これを逃すのは、女の子の名折れ。

大人の態度を見せつつも、リインの言葉の節々からは隠せぬ無邪気がうかがえる。

悠一のあゝんに、もはや喜色を隠すことなく、満面の笑みで、フオークに刺さった蓐に狙いをつけ、

「あゝん」

今まさに口に含もうかという瞬間、再び奔る黒い影。

眼前から颯爽と消えた蓐。

リインが黒い影を追って蓐を探せば、机の上にちょこんと座って舌舐めずりするスナオマルの姿が。

「……フ、フフフフ……」

不敵に笑うリインを止められる者など、もはや存在しない。

リインとスナオマルの、血で血、いや、蓐を蓐で洗う戦いの火ぶたが切られたのだった。

『六課の癒しは感染す』

広域指名手配犯、ジェイル・スカリエッティのアジト。いつものごとく待機所にて、至福ともいえる趣味の時間に没頭するナンバーズ7、セツテ。今日も今日とて、SYAマル秘婦女子会の会報を読みながらニヤニヤ。

そんなセツテに、近づく人影が一つ。

「セツテ？ ……何を読んでのの？」

ナンバーズ10、ディエチだ。

「SYAマル秘婦女子会の会報です。ゆうたん、エリオたんの魅力がこれでもかと詰まった一冊です。よろしければ、ご覧になりますか？」

「……じゃあ、せっかくだから……」

セツテの隣に腰かけて、ディエチも会報に目を通す。

互いに無言で、しばらくの間、ページをめくる音だけが部屋に響く。

やがて一通り読み終わったところで、二人は同時に、はふう、と息を吐いた。熱い熱い感嘆の息を。

うつすらと朱の差した頬のまま、ディエチが口を開いた。

「……なかなかどうして……いいね」

「分かっただけですか？ でしたら、私の部屋に会報のバックナンバーが保管してあります。見に来ますか？」

「うん……すぐ行こう」

どこかそわそわした様子のディエチに、どこか嬉しそうなセツテ。普段あまり感情を表に出すことのない二人が見せた表出。

その想いが導く未来ははたして。

願わくば、無垢なる少女に祝福を。

『こういう場合、扱いはヴィヴィオと同程度でよい』

六課女子寮のなのはとフェイトの自室。ヴィヴィオを加えた三人で暮らす部屋に、悠一とスナオマルが泊まりに来ていた。

キングサイズのベッドの上に、足を伸ばして座る悠一と、その腰に抱きついて、ふかふかのシーツに体を沈めて横になるフェイトがいる。どちらも寝間着姿だ。

「ふーちゃんはある、甘えんぼさんですね？」

頬を赤く染めるフェイトは、恥ずかしそうな眼を伏せながらも腰に回した腕は離そうとしない。そんなフェイトに、悠一は笑み浮かべて彼女の髪を優しく弄ぶ。

甘甘を繰り返す二人に、しかし頬を膨らます者が一人。
ヴィヴィオだ。

「フェイトママー！ ヴィヴィオと変わってよー！」

「ん……もうちょっとだけ……」

逃げるように顔を埋めるフェイト。されるがままの悠一は困った顔をするだけだ。

先ほどまで戯れていたスナオマルを頭に乗つけて膨れるヴィヴィオは、あきらめきれずに、ううう、と小さく唸る。

「いいもん！ ヴィヴィオ、なのはママにぎゅー、っけてもらおう

もん！」

ダダダっ、と足音荒く寝室から出ていくヴィヴィオ。それを苦笑いで見送った悠一が、ふと視線を感じてうつむくとフェイトの眠たげな瞳と目が合った。

「ふーちゃん？」

「うん……ヴィヴィオには、悪いこと、しちゃたな……でも、まあ、ちよっ、と……」

尻すぼんでいく言葉は、むにやむにやと意味を成さなくなっている、やがて静かな寢息に変わった。

悠一が、ふーちゃん、と呼びかけるが本格的に寝入ってしまったのか反応はない。

「ふーちゃんは、変わりませんねえ」

あどけない寝顔につられるように悠一は笑顔を見せる。しかしその笑顔に、心配の色を添えながら、

「けど、変わらなきゃいけないことがあるはずですよね？　ねえ、ふーちゃんはどうしますか？」

小さくつぶやくのだ。

そっとフェイトの頬を撫でる悠一。と、何を思ったのかフェイトは、

「あ、ん」

「ふえ！？」

かぶんちよ。

悠一の指をくわえこんだ。

悠一の人差し指と中指を口の中でモゴモゴとなぶるフェイト。指をなぞる舌の熱さを感じながらも、突然のことで嘔然となる悠一。しばらく固まっていた悠一は、やがてぼそりと、

「……えつと、いつまでこのままなのでしょう……」

つぶやきに反応する声はなく。

なのはとヴィヴィオがこの部屋に来るまで、この状態は続くのだった。

『とりあえずおデコに脳筋って書きました』

いつぞや中止になった鍋パーティー。ティアナたちの自室にて、今日この日によく開催されることとなった。

三つの大きな土鍋を囲むのはフォワード隊員五人とそのお供が二匹。皆の視線がは、鍋の中でぐつぐつ煮える食材たちに目を奪われていた。

「それじゃあ、皆さんと一緒に……いただきます！」

『いただきます！』

それぞれが思い思いの食材を口にして、相好を崩す。スナオマルとフリードもそれぞれの主人にお肉を食べさせてもらい、嬉しそうに鳴いている。

と、ここで皆が一つ異変に気付いた。こういった状況において真っ先に騒ぎ出す人物が静寂を保ったままなのだ。

四人と二匹の視線がスバルに集中する。当のスバルは、うつむいて何かブツブツとつぶやいていた。

「やはり、美味。この味を毎日堪能するにはどうしたらいい？ いや、答えはすでに出ているはずだろう、スバル。いまこそ女を見せるとき……いざ！」

ガバッと顔を上げたスバルの瞳が、真っ直ぐに悠一を捉える。

「悠一ッ！ 結婚しよう！！」

「結婚したら亭主関白気取るつもりなんですけど、それでもよろしければー」

「裏切ったんだね！？ 私の気持ちを弄ぶだけ弄んで！ 裏切ったんだ！！」

「いい夢見れたんじゃないですか？」

「ううう……ティア、ユーイチがいじめるう」

よよよ、と泣き崩れるスバルはティアナにしなだれかかる。しかし、今は状況と相手が悪かった。

「フフフ、ユーイチと結婚？ ずいぶん愉快なこと言うじゃない。

ねえ、エリオ？」

「ティ、ティア？」

身の危険を感じ取ったスバルは、慌てて後ずさる。だが、その背後にさらに迫る人影が。

「お腹がよじれてしまいそうですよ、ティアナさん。そうですねえ、もし仮にユウと結婚したいというのなら……」

「エ、エリオ？」

どこか物騒な雰囲気醸し出すティアナとエリオを前に、スバルは知らぬうちに冷や汗を垂らす。

ティアナとエリオのギラついた瞳が、スバルを貫いた。

「私を」「僕を」

『倒してからにしてみらおうか！！』

「い、いや、二人とも、落ち着いてっ！　ここは穩便にっ！　……あ、あれっ？　デバイスなんて取り出しちゃって、もお、冗談がきついなあ……。——話し合いつ！　話し合いで解決しようよ！　！　……そおそお、デバイスなんかしまつて……。あ、あの、どうして油性ペンを取り出すんですようか？　罰が、一気に現実味を帯びてきて——ティア！　エリオ！　私が、私が悪かったからあ——ぎ！　ぎにや~~~~~っ！！」

六課女子寮に、スバルの悲鳴が木霊した。

「……キャロりん、バランスよく食べなくちゃダメですよ？」

「リズムを刻むんだよね？ 肉肉野菜、肉野菜、とかかな？」

「そうですね。でも、キャロりんの場合は……肉ニンジン野菜、肉ニンジン、ってところかな？」

「ユウくんは私に死ねと申されますか？」

平和を全力で謳歌する。

とある一日のことであつた。

『むしろ枕が変わつたら眠れない人です』

今夜はお泊まり会。フォワード隊員陣でのお泊まり会は、ティアナが悠一のお姉ちゃんになってから頻繁に開かれるようになった。そして今、ティアナたちの部屋に五人と二匹が集まっている。ひとしきり談笑を交わしたあと、さあ寝るぞ、となったところで、例によって例のごとく問題が発生した。その問題とは、

「何度言つたら分かるんですか？ ユウは僕と一緒に寝るんです」

「アンタこそいい加減諦めなさいよ。ユーチは私と寝るのよ」

ベッドの数は四つ。人数は五人。誰か二人が一つのベッドで寝なければならぬ状況を逆手に取った、エリオとティアナによる悠一

の取り合いが繰り広げられているのだ。

「い・つ・も・どおり、僕がユウに安らかな睡眠を提供するんです」

「よく聞いて、エリオ。マンネリは倦怠期の始まりよ？　ここで私に譲るのはエリオのためでもあるのよ？」

「何を恩着せがましいことを……コホン、いえいえ、心配していただいてありがとうございます。ですがティアナさん、アナタは寝るとき枕を使うでしょう？　つまりは、そういうことです」

「……どういうこと？」

「ユウにとつての僕、そして僕にとつてユウはまさに枕といつても過言ではありません。枕に飽きるということはないでしょう？」

「……確かに枕は毎日のように使うわね。でもね、エリオ、枕だつて使い古せば買い換えるのよ？　自分にあつた、よりよい枕に、ね？」

「……だとしたらなおさら問題ないですね。使い古されてもいないし、僕たちは相性バツチリですから」

「……」

「……」

「だああ！　もお！　ごちゃごちゃ言つてんじゃないわよ！　いつも一緒に寝てるんだから、今日ぐらい譲ってくれてもいいじゃない！……」

「ごちゃごちゃ言わせたのはティアナさんが小芝居を始めたからじゃないですか！　いつも、なんて譲る理由になりません！　ユウは、僕と寝るんです！！」

「だったら、間を取ってキャロリンと寝ますねー」

「——なんでやねんっ！！」

エリオとティアナの声が重なる。
ケンカするほど仲がいい……のか？

10万アクセスだよ、全員集合！？（後書き）

本当にお久しぶりです。ハナサカです。

レポートやらテストやらで忙しく、暇を見つけてはデジモンやりたり武装神姫やったりで執筆活動をしてませんでした。申し訳ありません。

活動していない間に、1万ユニーク、お気に入り100人達成して
いて……本当、情けなくて涙がでます。

改めまして、大勢の方が読んでいただき、本当にありがとうございます。

一つの節目を迎えたということで、一つアンケートです。

記念品ということでイラストリーを書いてみようかと思うのですが……。

候補として一つは『ヤンデレ・ふぁいと』。

なのは、ティアナ、エリオ、シグナムをヤンデレ化させます。

もう一つは『アダルト・ふぁいと』

虚数空間に落ちたあと、ある場所で10年の時を過ごした悠一君が、
海鳴市に帰ってきます。舞台はA'sです。

あるいは、『こういった話が読みたいなー・ふぁいと』です。

その名の通り、こういった話が読みたい、とリクエストしてくだされば、あるていど媚びへつらいます。

待たせたくせに何言っただ！ さつさと本編進めろ！ といった意見の方もおられるでしょう。その思いはそつと胸にしまっただければ、こちらの方で察しますのでご安心ください。

さて、何一つリクエストがなかった時の予防線も張ったところで……くどいかもしれませんが、本当に申し訳ありませんでした。更新頻度にかんしては何ともいえませんが、完結させる、ということとはここに明記させていただきます。

長々と書かせていただきましたが、また、次回お会いしましょう。では。

昔語り―死に物狂いには死に物狂いで（前書き）

相変わらずの失速ぶり、けど今回は後半のほうが纏まってるっていいよね……。

まあ、あーん、うまくかけへーん……。

昔語り―死に物狂いには死に物狂いで

母さんのため。

それが、私、フェイト・テスタロッサが自然豊かなこの地にいる理由だ。

海鳴と呼ばれるこの地にばらまかれた、願いを叶えるロストロギア、ジュエルシード。そのジュエルシードを収集するのが、母さんから与えられた私の使命。今も使い魔のアルフと二手に分かれ、ジュエルシード探索の真っ最中だ。

徒歩でしらみつぶしにジュエルシードを探していた私が、その反応を捉えたのは、正午を二時間ほど回った時のことだった。

ジュエルシードが発動した反応。そして、気になる反応がもう一つ。私が、その場所に急ぐ途中で張られた、封時結界の存在だ。

アルフには、ここは私にまかせて別のジュエルシードを探すように、と念話で伝えてある。つまり、ジュエルシードの下には、誰か別の魔導師がいるということだ。

魔法文化のないこの世界での魔力反応。次元漂流者か、密漁者か、はたまた時空管理局か。これがもし時空管理局なら、いささかやつかいなことになる。

私は、慎重を期して結界内に侵入した。

結界自体は、大したことはない。術者に気づかれることなく結界内に入った私が見たのは、奇妙な光景だった。

結界内でまず目にしたのは巨大なネコ。

おそらくあの巨体ネコがジュエルシードの所有者だろう。この世界にあれだけ大きなネコが普通に生息しているのなら別だが。

次に目がいったのは、巨体ネコと対峙する二人の人物。一人は魔導師だろう。栗色の髪を両サイドで結び、身を包むのは白色のバリアジャケット。杖型のデバイスを胸の前で抱えるように握っている。もう一人は一般人然とした少年。黒色の長髪、空手の両手を巨体ネ

コに向けて伸ばしている。その表情は切実で、紡ぐ言葉は聞き取れないが巨体ネコに何か訴えかけているように見える。

そして起こった奇妙な光景。

緩慢な動きで少年にすり寄った巨体ネコは、次の瞬間、淡い光に包まれた。光を放つシルエットはだんだん縮んでいき、やがて二つに分かれる。光が収まると、本来の大きさであるう子ネコと、宙に浮かぶジュエルシードが残された。

何故だ？ と湧いた疑問は、しかし、どうでもいいと切り捨てる。ジュエルシードが目のあるのだ。すべきは行動。敵の、排除。

「フォトンランサー、シュート」

……少し痛い、ただだから。

生成した発射体から、魔力弾を射出する。その数、三つ。魔力弾は、ネコを抱く少年とジュエルシードを封印した少女に、直線を描いて襲いかかった。

一つ目の被弾音とともに二人と一匹が煙に包まれ、そして続く二つの爆音。

やがて晴れた煙の先には、

「……」

少年を庇うように立つ少女と、少女が突きだすように持ったデバイスの先に張られた障壁があった。

まさかあのタイミングで反応できるとは。認識を改めなければならない。

少女の瞳が真っ直ぐに私を捉えている。

少女は管理局員といった風でも、ましてや密漁者といった風でもない。その正体は相変わらず分からないが、油断はできないだろう。少女が飛行魔法を展開して、空中にいる私に近づいてくる。

迎撃か、離脱か。

……とりあえず、様子を見よう。

正面、少し離れた位置に止まった少女は、

「こんにちはなの！」

満面の笑顔でそう言った。

「……………」

「こんにちは、なの……………」

理解が及ばずしばし啞然としてみると、少女は不安げにもう一度同じ言葉を繰り返す。その表情は悲しげで、だからだろうか、

「こ、こんにちは……………」

気がつけば私は、挨拶を返していた。

「ほら！ 聞いた？ ユーノ君。やっぱりいきなり悪い子だって決めつけちゃダメだよ」

「決めつけるもなにも、いきなり攻撃されたんだよ！？ どう考えたってこの子は敵じゃないか！」

少女の肩にはバナナのような生き物が乗っている。おそらく彼女の使い魔ではないだろうか。

なんとも不思議だ。この世界には動いてしゃべるバナナがいるらしい。そのバナナを使い魔にするあたり、あの少女は相当の変わり者だろう。

「敵が必ずしも悪い子だとは限らないでしょ？ 学校で先生も言っていたの。ちゃんと挨拶のできる子はいいい子だって」

「そーゆーことじゃないと思うんだけど……？」

「攻撃はされたよ？ でも、防げたんだよ？ だったら水に流せるの。せっかく防げたのに、目くじらたてちゃって分かり合えなくなっちゃうのはイヤなの。何事もまずはお話なの」

少女はバナナと話すために傾げていた首を戻すと、改めて私と向き合った。

「初めまして、私の名前は高町なのはっています。アナタのお名前は何ですか？」

私は口を噤む。

少女の意図が分からないからだ。

「……アナタもジュエルシードを探してるんだよね？」

少し迷って、首肯を返す。

ここは襲撃の理由を明確にした方がいいと思ったからだ。

「キミはジュエルシードの危険性を分かっているのか！？ あれはとても危険な物なんだぞ！！」

バナナが何か喚いているが、関係ない。母さんが望んでいるんだ、危険性など二の次。そもそも、母さんが、その概念も分からずに収集させるはずがないんだ。私はただ、母さんのためにジュエルシ―

ドを集めるだけでいい。

そこに疑う余地などいらぬ。

「まあまあ、落ち着いてユーノ君。……あのね、私は、ユーノ君にお願いされたからジュエルシードを探し始めたの。最初は困ってるユーノ君のために頑張ってたんだけど、今は少し違うんだ。ジュエルシードを放っておいたら、この町の皆の平和が壊されちゃうから、私の大好きな皆が住むこの町を守りたいから、私はジュエルシードを集めてる。……アナタは、どうしてジュエルシードを集めてるの？」

「私は……」

理由は明確。言葉にするのは簡単。でも、

「……言葉にしたって、何も変わらない。話し合うことに、意味なんてない」

敵と、分かり合うことなんてない。
と、

「僕も混ぜてくださいー」

腰に少年がしがみついた。

な……！ いつの間に！？

軽い声と軽い衝撃を感じるまで、その接近に気付かなかった。
どうする！？ どう振り払う！？

射撃魔法か、近接魔法か、それとも高速移動で振り払うか。
と、とりあえず……。

否、対応はもっとシンプルに。

私はただ、魔力を垂れ流せばいいだけ。

「――ほ～～うで～～んツ!!」

「つにゃ～～～～つ!!」

奔る電撃。ずり落ちる少年。

私は体を硬直させた少年が落下していくのに追いつき、空中でキャッチして地面におろした。

痺れはすぐに治まり動けるようになるだろう。

「ゆづくーん!」

高町なのはと名乗った少女が少年に駆け寄る。

その姿はあまりに無防備で、今なら簡単に倒せるかもしれない。けど、

「大丈夫!？」

「……なのちゃん、忘れてはいけませんよ? 電気タイプの攻撃は、岩タイプには普通に効くということを」

「ゆづくーん!?! 辞世の句がそれなのー!?!」

「いや、死にませんかね?」

ジュエルシールドを確保してこの場所から離脱する。

無意識にこぼれた、ごめんなさいという言葉を残して。

高町なのはたちとの再びの対峙はあれからすぐのことだった。

場所は違えど、木々に囲まれた地。夜の帳の中で、私は、手をつないで宙に浮かぶ高町なのはと少年の二人と向き合っている。

一緒に行動していたアルフは、バナナによって分断されてしまった。念話によると、バナナと転移魔法で飛んだ先では敵が多数待ち構えているでもなく、バナナ一匹が相手ということらしい。アルフなら一人でも大丈夫だとは思うが、油断しないように、とだけ伝えて私は目の前の敵に集中する。

おそらくあの少年は魔導師ではない。バリアジャケットを身につけないことからそれが窺える。少年が浮かんでいるのは、高町なのはによるフロッターの効果だろう。

ただ、注意は怠らない。あの少年は音もなく私に接近してみせたのだから。

「今日こそ名前諸々を教えてもらうの！ でもその前に！」

「前は不甲斐ない姿を晒したので、まずリベンジです！」

……夜も更けてるのに、元気だなあ……。

「先手必勝！」

「行くよ！ ゆうくくん……」

高町なのはが少年の腕を掴んで、その場でぐるぐると回転を始めた。

「——ミサイル——！」

「環境には優しいです」

回転の勢いを利用して、高町なのはは少年を投げ飛ばした。

……は？

こちらに真っ直ぐに飛んでくる少年。

ど、どうしよう!?

避けるのは簡単。でも、バリアジャケットも纏わぬ少年がこのまま地上に落下したら。

……トマトでグシャンなことに……。

悲惨な結果を想像して固まった私に、少年がぶつかった。

勢いのままに運ばれる私の体は、すでに飛行魔法の恩恵を受けていない。

木々の間に沈む私は、鈍い音とともに地面に落ちた。

……あれ、痛くない……。

予想していた痛みはなく、感じるのは暖かな感触。

「大丈夫ですかあ？」

ふと見ると、私は少年を下敷きにしていた。

……庇われた……？

「うん……大丈夫……」

心配そうな表情をしていた少年は、一転して笑顔をたたえた。

……綺麗、だな……。

「それはよかったです。先日はろくに挨拶もできませんで……。では改めまして、ぼくは花咲悠一と申します。あなたのお名前はなんですか？」

「私は……・フェイト。フェイト・テストロッサ」

応えたのは、半ば無意識だった。

「フェイト、フェイト……じゃあ、ふーちゃんなんてどうですか？」

……ふーちゃん？

聞きなれない名詞に、私は首を傾げる。

「あだ名ですよ。親愛を込めてそう呼ばせてもらいます。……嫌でしたか」

「……ううん、そんなことない」

不思議と、イヤじゃなかったんだ。

「ゆうく〜ん、大丈夫〜？」

高町なのはの声が遠くから聞こえたところで、私は我に返った。わ、私の目的はジュエルシード！ アルフも頑張ってるんだから、こんなところでのほほんとしてる場合じゃない！！

「ぶ、ぶりつつあくしょん！」

高速移動魔法を発動してこの場から離脱する。

封印状態で放置されていたジュエルシードを確保して、アルフに念話を飛ばす。撤退する、と。

そして私は、ふと後ろを振り返った。

失ったぬくもりに、一抹の寂しさを感じながら。

三度目の邂逅。

市内の自然公園。開けた場所で、ジュエルシードを挟んで私たちは向かい合う。

「今日は、どうしてジュエルシードを集めるのか教えてもらおうの！」

「……フォトンランサー」

返答は魔力弾での一撃。

慣れ合うために私はここにいるわけじゃない。優先すべきは母さんの願いであって、私の望みではないから。

私が欲しいのは、そのぬくもりじゃない……。

真っ直ぐ進んだ魔力弾は、しかし花咲悠一が張った障壁に阻まれた。

彼も魔導師？ …… デバイスを使っていないのに、展開が早い……。

私は距離を取って空へ。と、私に追いつがる物があつた。六つの誘導弾がそれぞれの軌道を描いて迫りくる。

速い……けど！

間を縫うように難なく避ける。と、誘導弾同士がぶつかって爆発を起こす。

遮られた視界。背筋がゾクリと震えた。

「デバババイン・バスタアアア……！」

爆煙を裂いて、桃色の砲撃が奔る。

——ッしまっ！

『Blitz Action』

避けようと翻した体がそのまま加速する。
バリアジャケットの端を砲撃が掠めたが、なんとかその場から離脱する。

間一髪なんとか避けられたが、直撃したらひとたまりもないだろう。

「ありがとう、バルデッシュ」

『No problem』

私は頼りになるパートナーを一撫でする。

「バルデッシュ、こっちもおっきいのいくよ」

『Yes sir』

「撃ち抜け、轟雷」

『Thunder Smasher』

撃ち出すは電撃を伴った砲撃。しかしそれは、高町なのはの前に出た花咲悠一に防がれる。
だが、それは想定内。

『Scythe Form』

「ブリッツアクション！」

鎌のようなフォルムを取ったバルデッシュを強く握り直して、高町なのはの背後に回る。

魔力を纏わせて振りかぶり、

「ふふーん、甘いですよ」

振り下ろしたバルデッシュは、しかし花咲悠一に止められた。

そのままバルデッシュの柄を握られて、次の動きまで止められてしまう。

「戦う前に、少し話をしませんか？ ふーちゃん」

「……話すことなんてない」

「フェイトちゃん。私は、何も分からないまま戦うのはイヤだよ。ぶつかり合ったり、傷つけあったり、仕方のないこともあるのかもしれない。でも！　せめて私は、分かり合うことをあきらめたくなんてないの！！　……だから、教えてほしい。フェイトちゃんの戦う理由」

「私は……」

「——フェイト！　答えなくていい！！」

私に叱咤の声をかけたのは、他ならぬアルフだった。

バナナの相手をしていたアルフは、さらに声を張り上げる。

「おかしいじゃないのさ！　人の心にずけずけと！　分かり合う？

——フェイトはそれができなくて苦しんでるんだ！　会ったばかりのアンタらに何が分かるっていうんだい！？　……他人の心な

んて怖くて当たり前なんだ。それが分からないアンタらがキンチョになんか、何も教えなくていい!!」

使い魔であるアルフとは、精神リンクで心がつながっている。だから、アルフの感情がダイレクトに伝わってくる。

憤りも確かにあったけど、何より強いのは不甲斐ないという自身への恨みにも似た感情だった。

……ごめんね、アルフ。

アルフには、何より迷惑をかけてきた。何より心配させてきた。そして、

(気にしなくていいよ、私はフェイトの使い魔だからね)

それでもなお、そばにいてくれた存在。

……ありがとう、アルフ。

「……フェイトちゃん、わたし——えッ？」

高町なのはが、何か言いかけた瞬間、天に向かって一条の光が昇った。

根元を見れば、まばゆい光を放つジュエルシードの姿が。

「まずい！ 魔力に反応して封印が解けたんだ！」

喚くバナナの言葉に、弾かれるように動き出す。

ジュエルシードに接近し、バルディッシュをシーリングフォームに変えて突きだし、

「——え？」 「——あ！」

私と同じように行動した高町なのはのデバイスとバルディッシュがかち合う。そして、

「——くッ！」 「——きゃッ！」

ジュエルシードから魔力が噴出し、私と高町なのはは同時に吹き飛ばされた。

空中で体制を立て直しなんとか着地するが、手元を見ればヒビの入ったバルディッシュの姿が。あるていど時間をかければ自動修復でなんとかなるレベルの傷だが、このままでは封印処置が行えない。高町なのはを見れば彼女のデバイスもバルディッシュと同じ状態だ。

「……」

瞬間、私の頭にある言葉が蘇った。

「——ジュエルシードを放っておいたら、この町の皆の平和が壊されちゃうから、私の大好きな皆が住むこの町を守りたいから——」

無意識のうちに、私はジュエルシードに向かって走り出していた。ジュエルシードを掴み、封印の術式を編みこんだ魔法陣を展開して、暴走を抑え込もうとするが、

「ぐー！ ぐううう！！」

バルディッシュの補助なしでは術式が安定せず、荒れ狂う魔力は私のバリアジャケットを傷つけていく。

「止まれ、止まって……！」

魔力の本流に晒された両手から血が噴き出す。

「止ま——あ……」

痛みを噛み殺して封印処理を続ける私の両腕を包むぬくもりがあった。そのぬくもりは私の両手を持ち上げ、そのまま私の腰を包み、回るように花咲悠一と位置を交換した。

「無茶すぎですよーちゃん。こーゆーのは、まず男の子の役目なんですから」

ぬくもりは離れ、ジュエルシードに向けられる。

花咲悠一は私と同じようにジュエルシードを両手で掴むが、それはあまりにも愚策だ。

それは封印処置でもなんでもなく、魔力による力押し。現に、反発したジュエルシードの魔力が、魔法の保護のない花咲悠一の両腕を焼き、切り裂いている。

地面には彼から滴った血によって血だまりが広がっていく。

何度か、脈動するように膨れ上がる魔力の衝撃が花咲悠一を襲うが、彼は揺らぐことなくジュエルシードを抑え続ける。

やがて魔力の本流が納まるころには、花咲悠一の両腕は肘まで火傷と裂傷に覆われていた。

「あの、だいじょう」

「——ゆうくん！！ 大丈夫！？」

私の言葉は、慌てた様子で駆けてきた高町なのはに遮られた。

「うん、痛みはあるけど動かせるから、見た目ほどダメージはないかな。とりあえず止血を……」

「止血！ 止血だね！？ …………… バインド！！」

「ずいぶん手荒ですね。でも、助かりました。なのちゃん、ありがとう」

「うん…… 大丈夫なんだよね……？」

「大丈夫ですよー」

軽い調子で答えてはいるが、私の怪我ですら少し動かすだけで痛みが走るのだ。彼の苦痛は、きっと……。

「うん、信じるよ…… けど、帰ったらちゃんと治療させてね？」

「分かりました。でも、その前に」

花咲悠一が私を見る。高町なのはもつられるように。

花咲悠一は右手で握り締めたジュエルシードを私に突き出す。

「奪い合いますか？」

「……今回は譲る。私も万全じゃないから」

万全じゃない。……理由はきっとそれだけ。

「そして次回、ちゃんと奪い合えるように」

「——フェイト!!」

アルフから制止の声がかかる。

……ごめんね。もう、決めたから。

「……私の戦う理由は母さんのため。母さんがジュエルシードを集めるように言ったから、私はそれに従う。母さんが私を必要としてくれる。それだけで十分なんだ。それだけで、私たちは分かり合える。……言葉を重ねる必要なんてない」

「ちがう! ……言葉にしなきゃ、伝わらないこともある。言葉にしなきゃ、分かり合えないことだってある」

悲痛な面持ちで声を張り上げたのは、高町なのはだった。

「私ね、フェイトちゃんの気持ち、少し分かるんだ。私も昔そうだったから。……気持ちを、言葉にすることへのためらい。気持ちを、素直に伝えることへの恐怖。もし言葉にして、もし伝えて、拒絶されてしまったら、きっと私はそこで終わっちゃう。だから自分の気持ちを隠して、いつか気づいてもらえるのを期待して……。けど、結局なんにも変わらない」

うつん、むしろ悪くなったかな、と高町なのはは自虐的に笑った。

「どうしようもない解決策で自分を誤魔化して、ただふさぎこむだけだった私に、ゆう君が教えてくれたの。一人じゃできないことも、一緒ならきつとがんばれるって」

「……なにが言いたいの?」

理由が知りたかったのは、気兼ねなく戦うためだと思っていたけど、それだけじゃない。なぜだか分からないけど、そんな確信があった。

「ふーちゃんの瞳に悲しみを見たんだ」

差し出されたのは、ジュエルシードを握らぬ左手。

「そして今、その悲しみの理由を知ったの」

差し出されたのはデバイスを握らぬ右手。

「いつも、すぐいなくなっちゃうから……これでやっとと言える」

傷つき、血ぬられ、なお親愛を示す者の左手。

「私たちは」

真新しいまめが目立つ、非日常を受け入れた者の右手。

『キミと友達になりたいんだ』

「……とも、だち？」

……私は知らない。

「……私は……」

私は、友達なんて知らない。

「私は！」

——仲良くなって、どうするの？ 相手は、母さんの願いを妨げる敵でしかないのに。

気づけば私は、飛行魔法を展開してその場から逃げだしていた。今度は振り返ることすらできず、私は逃げ出したんだ。

それから。

管理局との遭遇があった。

局員に攻撃された私は、花咲悠一と高町なのはの二人に庇われた。

海上での、ジュエルシードの暴走があった。

私が原因のこの事件は、管理局員と一緒に駆け付けた二人と協力して解決した。

全力のぶつかり合いがあった。

最初で最後の本気の戦い。高町なのはと一対一で戦い、私は負けた。

そして。

管理局の時空航空艦、アースラ。武装解除し拘束された私が現在いる場所だ。

そのアースラのモニターの向こうに、母さんと、大きなカプセルに入った私そっくりの女の子がいる。

「私のアリシアに、近寄らないで！！」

母さんが放った紫色の雷撃は、時の庭園に突入した武装局員をこごとく焼き払った。

……アリ……シア？

遠くで、艦長であるリンディ・ハラウオンが撤退を命じるのが聞こえる。

転送される局員たちに目を向けることなく、母さんはそっとカプセルに手を当てた。

「もうダメね、時間が無いわ……。たった9個のロストログアでは、アルハザードに辿り着けるかわからないけど」

モニター越しに、母さんと目が合う。

「だけど、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから、暗鬱な時間も……。この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも」

みがわりの、にんぎょう……？

「聞いていてフェイト？ あなたの事よ。せつかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない、私のお人形」

わたしは、にんぎょう……？

「……プレシア・テストロッサは実の娘、アリシア・テストロッサを事故で亡くしているの。彼女が最後に行なっていた研究は、使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成。そして、死者蘇生の秘術。『フェイト』って名前は、当時彼女の研究に付けられた開発時のコードネームなの」

遠くで何かが聞こえる。

じんぞうせいめいたい？ ……わたしは、にんげんですらない？

「よく調べたわね。そうよ、その通り。だけどダメね。ちっとも上手くいかなかった。造り物の命は所詮造り物。失ったものの代わりにはならないわ。アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我侭も言ったけど、私のいう事をとてもよく聞いてくれた」

……やめて……。

「アリシアは、いつでも私に優しくかった……。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ。せつかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃダメだった」

記憶のなかにある母さんの優しい笑顔。けどそれは私ではなく、アリシア向けられたもの。

いやだ……やめて……。

「アリシアを蘇らせるまでの間の、私が慰みに使っただけのお人形……。だからあなたはもう要らないわ。——何処へなりと消えなさい！」

私に向けられたのは、偽りの優しさと鞭打ちだけ。

もう、やめてよ……。

「いいことを教えてあげるわフェイト。あなたを作り出してからずっとね、私はあなたが」

「——ダメです!!」

遮ったのは花咲悠一の一喝。見れば、彼は涙を流していた。その時になって初めて、私の頬を伝っているものに気づいた。

「それは言葉にしたらダメです。言葉にしてしまったら、きっと手遅れになる」

「なにを……」

母さんの表情にあるのは、疑わしさと煩わしさ。睨むようにこちらを見ていた。

「——大切なお子さんを失って、どうしようもない悲しみの全てを、ぼくが理解することはきっとできません。でも！ 家族を愛する気持ちはぼくでも理解できます！ 今のアナタを見て、アリシアさんは喜ぶんですか！？」

「アナタにアリシアの何が分かると！」

「分からないから聞いてるんです！ 全部なんて分かりませんよ！…… ぼくに分かるのは、大好きな母上がいろんな人を傷つけてしまつのはイヤだということです！ そして、ぼくのために母上が死んでしまうのは絶対にイヤだということです……。…… プレシアさん、アナタはそう長くはないんじゃないですか……。？」

「……」

沈黙は肯定だった。

…… 母さんが…… 死ぬ？

「アナタが犠牲になったらあ、なんの意味もないんじゃないですか……？」

花咲悠一の瞳からぼろぼろと大粒の涙がこぼれ落ちる。

「……かまわないわ。アリシアが生き返るのなら、私の命だって差し出していい」

「違う……・違いますよ……。仮に生き返ったとしても、アナタの罪を背負わされて、愛してくれる人もいなくて、愛する人もいなくて……そんなダメです……。残される者の悲しみは、アナタのほうに分かるじゃないんですか……？ 死者に対してしてあげられることは、その死をなかったことにするだけですか？ そんなの絶対に間違ってます……！」

ぐしぐしと荒っぽく涙を拭った彼は、真っ直ぐに母さんを見詰めた。

「深い愛を見ました。娘を想う、母の愛を感じました。でも！ だからこそ悲しいんです……。それほどまでの愛を捧げる人が、どうして自身に捧げられる愛を蔑ろにするんですか！？ ……偽物ってなんでしょうか……。ふーちゃんがアリシアちゃんとは違うってことは、アナタが一番分かっているんじゃないんですか！？ アリシアちゃんとは違う、それでもアナタを母と慕うふーちゃんは、確かにアナタの娘のほうです……！」

視線がかち合った。私と花咲悠一の視線が。

「ふーちゃんは、どうしたいんですか？」

「私は……」

イヤだった。出生の秘密が。偽りの愛情が。直面した現実が。でも、そのどれよりも、母さんがいなくなってしまうことがイヤだった。

嫌われているのかもしれないけれど、受け入れてもらえないかもしれないけれど、私は、

「母さんの娘がいい。そして」

きつと。

この気持ちはアリシアから受け継いだもの。けど、今はちゃんと私の気持ち。

アリシア。私より先に生まれた、母さんの娘。だから。

「アリシアの、妹がいい」

「……私の娘はアリシアただ一人よ」

こちらに向け、手をかざす母さん。放たれた魔力弾が画面いっぱいに広がり、モニターは暗転した。

通信、途切れました、とエイミィと名乗ったオペレーターの人がつぶやく。と、

「ふーちゃん」

右側からそつと抱きしめられた。

「まずはおめでとつを。ちゃんと、自分の気持ちを伝えられたじゃ

ないですか」

「フェイトちゃん」

反対側からも包むぬくもりがあった。

「だから、私たちにも答えが欲しいな」

あ……、と声が漏れる。

いいのだろうか、私みたいな造り者が……。

「なにか、変なこと考えてるんじゃないですか？ ふーちゃんはふーちゃんですよ。あえて言葉にするのなら……生まれできてくれてありがとうございます。キミと出会えてよかった、って……受け取ってください」

「うん。だからフェイトちゃんとは、ちゃんと友達になりたいの」

……いいのかな、甘えてしまっても。好きになっちゃってしまっても、いいのかな。

ただ。

「あの、私……知らないんだ。……どうやったら友達になれるのかな……？」

恥ずかしさと情けなさで熱くなった顔を隠すようにうつむく。
呆れられたりしないかな……。

覗き込むように二人の顔を窺えば、私を安心させてくれる頬笑みが見えた。

「そんなの簡単ですよ。友達になるのなんて、些細な理由があればいい。それでもきつかけが必要なら」

「名前を呼んで、フェイトちゃん」

「……なのは」

うん！ と満面の笑みを見せるなのはに、私もつられるように嬉しくなる。
そして。

「……ユウ」

受け取った親しみに報いるように、精一杯のオリジナリティを添えて。

「はい、ふーちゃん」

一瞬、きよんとした表情を浮かべたユウは、しかし、なのはと同じく顔いっぱいの笑顔を見せた。

生まれ初めての友達ができた。生きていてよかったって想えた。居場所を見つけられた気がした。

だから。

「それじゃあ、プレシアさんのところに向かいましょうか。まさかアレだけで言いたいこと全部出し切った、なんて言いませんよね？」

「……一緒に、行ってくれるの？」

「もちろんだよ、フェイトちゃん」

今度はモニター越しなんかじゃなく、直に母さんと向き合うと、

「まったく、勝手に話を進めるんじゃない」

割って入ってきたのは、黒髪のクロノ・ハラウオンと名乗った管理局員だった。

「ぶー、クロりん、邪魔するんですか？」

ユウに合わせるように、なのはもぶーぶーと不満を表している。わ、私も、と、友達なんだから……。

「ぶう……ぶう……」

……今までで一番恥ずかしかった。

「邪魔なんかしない。ただ、僕も混ぜると言ってるんだ。なに、準備はできている。すぐにでも乗り込めるさ。目的はジュエルシードの確保、そして全員での無事帰還だ。プレシア・テストロツサも含めてな」

「そうだね。やっぱりあいつは気に入らないけど、フェイトが立ち向かうっていうんだから、使い魔のあたしがうだうだ言ってるわけにはいかないよ！」

「僕も、微力ながら力になるよ」

勇ましく胸を張るアルフに、実はバナナではなく人間だったユー

ノが続く。

心の準備はできたから、いざ、母さんのもとへ。

（プレシア・テストロッサ。終わりです。次元震は、私が抑えています。駆動炉は、じき封印。あなたの元には、執務官が向かっています。忘れられし都、アルハザード。そして、そこに眠る秘術は、存在するかどうか曖昧な、ただの伝説です！）

届いた念話は、アースラ艦長、リンディ・ハラウオンのものだった。

（辿り着ける確立なんてゼロに等しい。分の悪い賭けに、どれほどの人間を巻き込むつもりですか！？）

「確立、ね……私は伊達に大魔導師と呼ばれていたわけじゃないわ」

（な！？ あなた、分かっている——）

私は強制的に念話を断ち切る。

「巻き込むつもりなんてなかったのにね……」

蘇るのは遠い記憶。遠くなってしまった記憶。

アリシアの、最後の誕生日。あの子の、数少ないわがまま。

『——アリシア、もうすぐ誕生日だけど、何か欲しいものはあるかしら——』

『——えつとね……ん……あつ、私、妹が欲しい!——』

『——それは、ちょっと……。ほ、ほかにはないかしら?——』

『——だったら弟でもいいよ——』

幸せだった日々。もう二度と帰らない日々。

取り戻せないなんてことは、とっくの昔に気づいてた。
それでも。

「せめて最後の一瞬まで、私はアリシアのために生きるの」

次元航行エネルギー駆動炉『ヒュードラ』の使用に失敗したあの
日、全てが変わってしまった。

アリシアを生き返らせたいと願ったのは、きっと科学者としての
私。アリシアのために生きたいと望んだのは、きっと母としての私。
結局どちらも中途半端だった。

私の失敗で死んだアリシア。

誰が望むでもない、私の罪滅ぼし。償うために悩んで、気づけば
ただの妄念だった。

そしてその犠牲者が、フェイト。

私の失敗で生まれたフェイト。

娘がいいと、妹がいいと言ってみせた人形。

『——アナタを母と慕うふーちゃんは、確かにアナタの娘のはず
です——』

ふーちゃんね……ふふ、おかしなあだ名。

アリシアが生きていたなら、どう思うだろうか。

そもそも、前提からしておかしな考え。でもきつと……。アリシ

アは優しい子だったから。

今さらだ。今さら……死にゆく者には不要の感情。

あの子には、私に大言吐いた少年がいる。あの子には、隣で寄り添ってくれる女の子がいる。

私を見限れば、あの子はきっと幸せになれるというのに。
なのに。

「何しに来たの？ —— フェイト」

私は、『娘』と対峙している。

「私はまだ、母さんに言いたいことがあるから」

「恨みごとでも言いに来たの？」

きつとそれは諸刃の剣。

「……私は、母さんに優しくしてもらったことはありません」

いともたやすく人を傷つける。

「けど、私はアナタの優しさを知っています。アリシアが私に残してくれたから」

けれども、奮わなければ成せぬことがあるから。

「私は、アナタの娘として生まれてよかったって、そう思っんです」

「……すぐに思い知ることになるわ。この世界がいかにも無価値で無慈悲かを。この、どうしようもない世界で、生まれてきてよかったなんてすぐに言えなくなるわ」

「それでも」

勇気を貰った。

「辛いことばかりじゃないから。この世界は私が思ってたよりも、ほんの少しだけ優しくかったから」

絆を紡いだ。

「ほんの少しでいいんです。それだけで私は騙されることができ。まだ生きていたって思える」

希望を見つけた。

「母さんだっけ知ってるはず。この世界に確かな愛があるって。私は、アリシアの代わりにはなれないけれど」

だから私は、今までの自分よりちょっとだけわがままになれるだ。

「アナタは私の母さんだから。だから、私は母さんと一緒にこの世界で生きたいんです」

「私は、母さんと一緒にこの世界で生きたいんです」

駆動炉の封印を終えた私とゆう君とユーノ君は、激しさを増す揺れの中で最下層まで辿り着いた。

ところどころ崩れ始めている部屋で、目にしたのはプレシアさんと向き合うフェイトちゃんと、すぐ後ろで控えているクロノ君とアルフさん、何か言いたそうに口を開閉させるプレシアさんだった。やがて意を決したように、プレシアさんはフェイトちゃんを見詰め、

「言ったはずよ、何処へなりと消えなさい、と。私は、アリシアについていてあげないと」

瞬間、ひと際大きな揺れが部屋を襲い、本格的に崩壊が始まった。アリシアちゃんの遺体が眠る、よく分からない液体で満たされたカプセルの足元が崩れ落ち、

「なのちゃん、必ず帰りますから」

振り向いた先にはすでにゆう君はいなくて、視界の端で捉えた影を追えば、

「ちゃんと弔ってあげてくださいね」

崩壊でできた穴に吸い込まれる黒い髪だけが見えた。

「約束ですよ」

聞こえる声はすでに遠くにあつて、穴から飛び出てきたカプセルが地面にぶつかる音が聞こえるまで私たちは誰一人として動けなかった。

あつという間の出来事が、私とゆう君を引き離した。10年後、

再開を果たす、その時まで。

昔語り―死に物狂いには死に物狂いで（後書き）

外伝を先に書くこう思ったけど、この話を読まなければ、なんのこつちや分からなくなるというワナ。……分かる人だけ分かってくれればいい謝罪です。スンマセンツした！

次回ですが、外伝を書きます。……多分、きっと、おそらく……。本編の方は、次の次ってことで……プレシアさんが六課にやってくるよ！ っていう内容です。更新がいつになるかは分かりませんが、気長に待ってもらえるとありがたいです。

あー、ハーレムが書きたいー。

さて、今回はこれにて失礼させていただきます。
また次回、お会いしましょう。
では。

外伝―あだると・ふぁいと「1クール? わずか三日間のできごとです」(前書

どうも、お久しぶりです。

待っていた方、もうしわけありません。それと、ありがとうございます。

久々なのに外伝かよー、と思われるかもしれませんが、そこはもう平謝りさせていただく他ありません。

お読みいただく前の注意としまして、なかなか強引な仕上がりとなっておりま。ご都合主義満載の内容ですが、それでもよいという方のみ、お進みください。

外伝―あだると・ふぁいと「1クール? わずか三日間のできごとです」

これが走馬灯ってやつなのかな、なんて、ハッキリとしない頭で考える。

浮かんでくるのは、大概がゆう君との思い出だった。

初めてゆう君と出会った時。私の心を見抜いて、寄り添ってくれたこと。

お別れしなくちゃいけなくなった時。再会を誓ってくれたこと。

そして再会の時。ゆう君はちゃんと約束を守ってくれたこと。

ゆう君と過ごす日常の時。何をするでも一緒だったこと。

家族ぐるみで海水浴に行った時。泳げない私に付き合って、浜辺で遊んでくれたこと。

泊りがけで温泉旅行に行った時。二人で洗いっこをして、並んで温泉に浸かったこと。

中等部に進学した時。少しだけ変わって、けど変わらずに一緒にいたこと。

高等部に進学した時。改めて想いを伝えあって、正式にお付き合いすることになったこと。

学校を卒業して、二人で翠屋を継いで、そしてゆくゆくは結婚な

んて――。

「この状況で考え事なんて、ずいぶんとよーだな」

――はっ！ 走馬灯のつもりが、後半は完全に妄想だったの！

現実逃避から復帰して、改めて見る。今、私の目の前には赤い服を着た女の子。ハンマーみたいなデバイスを構えていて、すごい目つきのウサギのマスコットが付いた帽子の下、鋭い目つきで私を睨んでいる。

「ま、どーでもいいけどな。てめーがよーぶっこいてよーが、あたしのやることは変わらねー」

襲撃は突然だった。

不意打ち気味の一撃、私の油断もあったんだろうけど、女の子の強さも本物で、あつという間にビルの中に追い込まれてしまった。

右手に握ったレイジングハートはボロボロ。私自身にもダメージが大きく、膝立ちでようやく女の子と向き合っている状態。

正に絶体絶命だった。

「魔力、いただくぜ」

ゆう君がいない世界なら、なんてあきらめが頭をよぎるけど、次の瞬間には、ふざけるな！ と否定する。

ゆう君はちゃんと約束してくれた。ゆう君が約束を破るはずがな

いの。それなのに私だけがあきらめるなんて、もつてのほかなの！

レイジングハートを強く握りしめる。だけど、それだけ。

意気込んでみても、膝には力が入らなくて。

情けなくて、泣きそうになって、私は気付けば声を上げていた。

「助けて……ゆう君！」

されど、想いは、届かない。

「もちろんだよ、なのちゃん」

はずだった。

「え？」

いつのまにか、目の前には大きな背中。たなびく黒髪からは、懐かしい匂いがした。

声には聞き覚えがなかったけど、言葉に含まれた気軽さには覚えがある。

手に持った長槍は煌びやかで、こてこてとしているところを見るとデバイスだろうか。

だれ……なの？

私は、その答えを知ってる気がした。

「なんだ？ てめーは」

「この子の騎士様ってところかな。……あれ？ 君は……」

「ヴィータ！ 引くぞ！ ヤツらが来る！」

「……チツ！ 分かったよ」

「あ、ちょっと待って」

背中の人を手を伸ばすが、女の子は飛び去って行ってしまう。

目まぐるしい事態の変化に混乱しそうだけど、難が去ったのだけはなんとなく理解できた。

女の子はいなくなったし、背中の人、多分男の人は敵だとは思えない。

そして何より、この人は私のことを「なのちゃん」と呼んだ。

私のことをそう呼ぶのは一人だけ。私のことをそう呼んでいいのは一人だけ。

胸が高鳴る。期待する心をどうして止めることができようか。

力が湧いてくる。ヨロヨロと立ち上がって、私は男の人に近づいていく。

男の人は、伸ばした腕を名残惜しげに引っ込めると、ゆっくりと振り返った。

「ただいま、なのちゃん」

見覚えのない顔だった。けど、その優しい眼差しは、よく見知ったものだった。

「僕のこと、分かるかな？」

「ゆう、くん……？」

間違えるはずがない。どれだけ変わってしまったても、私がゆう君を見間違えるはずがないの。

男の人はかがんで、私に顔を近付ける。至近距離で見つめ合う。

信じていたから、じゃない。知っていたから、わたしは。

「うん。遅くなっちゃって、ごめんね？」

ゆうくんは、ちゃんと……ゆうくん、ゆうくん。

鼻の奥が、ツンとした。

「ふえっ、うええええ……」

「なのちゃんは、相変わらず泣き虫ですね」

ゆう君は、私をぎゅって抱きしめてくれた。私も、すがりつくようにゆう君を抱きしめ返した。

かえってきてくれた。ゆうくんが、かえってきたよう……。

ゆうくん……。

「その人、なのはから離れてください！」

ゆうくんゆうくん。

「ん？ あ、ふーちゃん」

ゆうくんゆうくんゆうくん……あれ？

「え？ ええ！？」

ぬくもりが離れていったの。

肩を掴まれたせいで、抱擁を解いてしまった。

視線を移せば、ゆう君はフェイトちゃんを抱きしめる、というかだっこしている。って、

「フェイトちゃん！？」「ユウ！？」

叫んだのは、フェイトちゃんと同時だった。

どうしてフェイトちゃんがここに……？

フェイトちゃんはゆう君の腕の中ですよ！ ワタワタしている。

再開は突然に。重なって訪れた。

嬉しいけどフェイトちゃん、声をかけるのはもうちょっと遅くてもよかったです。

所変わってアースラ管制室。

あの後、アルフさんとクロノ君もやってきて、説明もそこそこにアースラへと招かれた。もちろん、大人ゆう君も一緒に。

クロノ君やリンディさんはゆう君を不審そうに見ていて、一定の距離を取っている。

ちなみに、私とフェイトちゃんはゼロ距離。だって、ゆう君の腕の中にいるから。

フェイトちゃんは真っ赤な顔で、ぼーっとゆう君を見ている。

気持ちはすぐ分かるの。

大人ゆう君、身長は高いけど、顔はベビーフェイスで、子どもゆう君の面影を色濃く残している。それがすっごくかっこいいの！！

体型は全体的にスラリとしていて、それでいて黒いインナーの下は固い筋肉の感触がした。下半身は裾の長い黒いスカートみたいな物を履いていて、開けた全面部からは同じく黒色のショートパンツと無骨なブーツが覗ける。

全身黒色の服装は、私と女の子の間に乱入したものと同じで、唯一違うのは、無骨な手甲が金の腕輪に変わったこと。

今の姿とバリアジャケットが同じデザインなのかな？

「……さて、いくつか君に聞きたいことがある。まず、君は何者だ？」

クロノ君がゆう君に言い放つ。けど、その質問は間違いなの。だって、

「僕は、花咲悠一ですよ。久し振り、と言えば伝わりますか？」

ゆう君はゆう君でしかありえないの。

だというのに、クロノ君は頭を抱えた。

「……君が、僕たちの知る花咲悠一だという証拠は？」

「証明するつもりはありません。分かってくれる人だけが分かってくればいいですから」

そう言って、ゆう君は私とフェイトちゃんの頭を撫でる。

うん、なのはにはちゃんと分かってるの。

「君は……分かった、質問を変えよう。君がユーイチだと仮定して、君にいったい何があったんだ？」

そう、聞くべきことはそれなの。唯一気になるのが、ゆう君が大人になったわけ。

……私はまだ、子どもなのに。

「虚数空間に落ちて、次に気が付いたのはベッドの上でした。僕を看病してくれた人は、僕にこう言っただんです。『ようこそ、過去へ』と」

ゆう君も、大人の女の方がいいのかな。

「その人は、未来予知の技能を持っていて、僕を発見できたのもその力のおかげだそうです。確かに、僕自身すぐには信じられませんでした。けど、うだうだ言うのは性に合いません」

私じゃ釣り合わないのだろうか……ううん、そんなことないの！

「僕なりに納得して、それから十年。なんとか元の場所に戻る方法を見つけて、今に至るわけです。少し、着地点がずれてしまって、寂しい思いをさせちゃったみたいだね」

え？

ゆう君を見る。視線が合う。そんな顔、しないでほしいの。

私は、大丈夫だよ、と、しがみつくように抱きついた。

今はただ、嬉しいから。

「突拍子もない話だな。だが…… そうだな…… 僕の正直な気持ちは」

クロノ君はゆう君との距離を詰める。

まったく、最初から素直になればよかったのに。

今、クロノが何を考えているのか、その顔を見れば一目瞭然なの。

「君にまた会えて、本当に嬉しい。うまくは言えないが、確信があるんだ。…… おかえり、ユーイチ」

クロノ君は右手を差し出し、

「うん。ただいま、クロりん」

ゆう君はその手を握った。

「…… リンディさんは、信じていただけていないようで」

「にわかには信じ難い話でしょ？　すぐには、ね」

「無理に信じていただく必要も、すぐに信じていただく必要もないですから」

「あら、そう？」

「ええ、もちろん」

ふふふ、ははは、と二人は笑い合う。

……なんだろう、険悪というわけではないけれど、なんだか二人の間に壁があるように感じます。

このままではいけない気がする、ということで、私が一肌脱ぐの！

「あ、あの！ 私も一つ質問いいですか？ ゆう君にじゃなくて、リンディさんに」

「あら、何かしら？」

可愛らしく、立てた人差し指を顎に添えて、リンディさんは小首を傾げる。

ピリつとした雰囲気は微塵に消え去っていた。

「あの女の子、いったい何者なんですか？」

あの時、ゆう君が間に入ってくれなかったら、女の子が退いてくれなかったら、きっと私はこうしてここに立つてはいない。

不意打ちだとか、油断だとかではなくて、ハッキリとした実力の差が私と女の子との間にあった。

……ごめんね、レイジングハート。

弱い私の代わりに犠牲になったのは、私の相棒だった。

エイミィさんが言うには、ちゃんと治るとのことだけど、ただ治るからいいって話ではきつとないから。

……強くならなくちゃいけないの。

少なくとも、次に襲われたとき、何にもできずに負けないように。

知らなくちゃ。それが、まずは、第一歩。

「実は、私たちが地球に来た理由もそこにあるのよ。エイミィ、モニタに出してくれる？」

はい、と答えたエイミィさんは、コンソールで何か操作をする
と、大きなモニタの映像が切り替わった。

映し出されたのは、四人の人物。私を襲った赤いおさげの女の子
と、桃色のポニーテール女の人、薄い金髪の女の人、そして男の人
が一人。

……字が、読めないの。

プロフィールがいろいろと書かれているようなのだが、残念ながら
私の知識にはない言語で書かれていた。

ゆう君はどうなんだろう、と、顔を上げると、そこにあったのは
真剣な表情。

ゆう、くん？

私が、フェイトちゃんが、アルフさんが、クロノ君が、リンディさんが、エイミィさんが、名も知れぬ局員さんが、一斉に驚愕の声を上げた。

娘ってことは、結婚してるってことで、私の素敵な未来予想図にヒビが入るってことで。

ゆう君はなにがおもしろいのか、なにが！ おもしろいのか！！
クスクスと笑っている。一しきり笑った後、私とフェイトちゃんから離れると、コンソールに近づいて、腕輪に話しかけた。

「アナスタシア、頼めるかい？」

<よろこんで、ダディ>

腕輪についた紅玉がピカピカと光り、女性のものであろう電子音を発した。

あれがゆう君のデバイスなのだろうか。……というか、なにか、すごい単語を聞いたような気がするの。

ゆう君がコンソールを操作すると、再びモニタの映像が切り替わる。

映し出されたのは、花畑。一面白い花が咲き乱れる中に、一本伸びる芝生の上、大人ゆう君の手を引いて走るあの赤いおさげの女の子の姿があった。

「この子は撮影が趣味だね」

金の腕輪をそつと撫でたゆう君もモニタに視線を移す。

モニタの中では、女の子がバランスを崩して転びそうになっていた。

おっと、と女の子の手を引いたゆう君は、しかし、そのまま自身も倒れこむ。

緑の絨毯がゆう君を、ゆう君が女の子を受け止めて衝撃を逃がす。

女の子はゆう君の上で寝返りをうって芝生に落ちると、ゆう君と互いを見合って笑いだした。クスクスと、本当に楽しそうに。

笑い合う二人に、影が一つ近づく。桃色のポニーテールの女の子の人だ。

『あまり父上に迷惑をかけるな、ヴィータ』

女の子が差し出した手、体勢を片膝を付いたもの変えたゆう君はその手をつかみ、そして引っ張った。

きやあつ、と可愛らしい悲鳴を上げた女の子は、導かれるままにゆう君の胸元に。

『……父上は、いじわるです』

赤く照れた顔で、すねたように口を尖らせる女の子。それを見て笑うゆう君と女の子。

と、

『私も混ぜてー！』

飛びこむように乱入したのは金髪の女の人。その勢いはポニーテールの人を巻き込んで、ゆう君を芝生の上に押し倒す。

『……なにやってんだよ、シャルル』

『私だってパパ様とイチヤイチャしたかったんだもん！ 何よ！ 悪い！？』

『なんでキレてんだよ！？』

『ツと、にかく、どけシャル！ 重い！！』

『重くないわよ！？』

映像の視点が、大きく移動する。

捉えたのは、屋根のついた広いテラス。

白いトラと青い狼が並んで寝そべり、白い椅子に腰かけているのは銀色の髪の女性と、金色の髪の女性。ともに浮かべる表情は、ほぼ笑みのそれだった。

そして、暗転。映像は静かに終わりを告げた。

「膨大な記録装置の製造、最初はただそれだけだった。けれど、やがてその装置は、未来へと帰るある男への贈り物として製造される

ことになったんです。魔導技術の収集、史実の記憶、そしてそれを未来に伝えるために、僕たちはその魔導書を造りました」

ゆう君は一息つく。そして表情を引き締めた。

「与えた名は、夜天。揺るがぬ訪れを、悠久の輝きを内包せよと願った名です」

前者は再開を、後者は真実を、ということだろうか。

「実際に対峙したから分かります。あの子は間違いなく僕の知るヴィータです。……だからこそ解せない。あの子がなぜなのちゃんを襲ったのか……」

ゆう君の顔には、様々な負の念が入り混じっていた。それは後悔であったり、困惑であったり、苦悩であったり、中でも自責の念が強いように思えた。

本当なら、隣に立ってゆう君を慰めたかった。けど、それをするには私は知らなすぎた。

重い空気の中、リンディさんは口を開く。その動作は、ひどく重々しい。

「エイミィ、闇の書の事件録を見せてくれる？」

「あ、はい」

エイミィさんがカタカタと軽い音を鳴らしてキーボードを操作する。

これは、と啞然とつぶやくゆう君。私の気持ちも同じだ。

画面いっぱいに広がるのは、星が黒い渦に飲み込まれていく映像だったから。

あまりにもスケールが大きすぎて理解が追い付かない。けど、画面の隅に書かれた数字から、想像をしまつて吐き気がした。

映像の枠が小さくなって、空いた余白に文章が流れる。

ゆう君の目が細くなったということは、そういう内容が書かれているのだろう。ただ、私に明確なイメージを与えないようにとの配慮があるだけで。

それが不快だとは感じなかったけど、不満はあった。

……私が子どもだと、突きつけられてる気がするから。

子ども扱いしないで、なんて口に出せるはずがなく、私はリンデ伊さんが口を開くのを黙ってみているしかなかった。

「これは闇の書による被害の一端でしかないわ。闇の書の名が世に現れるたびに、あまりの多くの被害がでているから」

「……そして今回も、ですか？」

ゆう君と、目が合う。

私も、被害者の一人に数えられるのだろう。

ゆう君が感じる、罪悪感の一端に。

ようやく、体が動く。ゆう君の傍に寄って、手を握る。

大丈夫だよ、って。

「……リンディさん。力、お貸しますよ？ 改変されているとはいえ、製作者ですから」

「ええ、いろいろと聞きたいことも残ってるから。協力してくれるなら、ありがたいわ」

握り返す力は、痛みを覚えるほどだった。

「どうした？ 今日はやけにおとなしいな。普段からこうならいいのだが」

八神家のリビング。中央に置かれたコタツを囲んで、二人のうち、そう切り出したのは私、シグナムの方だった。

「うん……」

対するはヴィータ。いつもの不遜ともいえるハツラツな態度は鳴りをひそめ、今は物憂げに視線を下げている。

私の言葉にかみつくこともせず、これにはさすがに眉をひそめざるを得ない。

私の問いに応えることをせず、しばらくうつむいたままでいたヴィータは、しかし、次の瞬間には何か思い切るように顔を上げた。

「あのさ！……あたしの邪魔をした男のことなんだけどさ」

「白い魔導師を庇った男のことか？」

そうだな、と考える。ヴィータがおかしくなったのはその男に遭遇してからのことだ。

管理局の介入に不安を見せるでもなく、今日の失敗に憤っているわけでもない。

その様子はヴィータにしては珍しく、何かを考え込んでいる風であつた。

件の男とはヴィータのみが相対しており、又聞いた情報だけではヴィータが何を悩んでいるのか予想することすらできない。

ただ、その答えは本人の口から明かされるようだ。

「ああ……よく、わかんねーけど、懐かしい感じがしたんだ」

「懐かしい？」

「昔から知ってるような気がして、それに」

ヴィータと目が合う。

なんだ？ なぜお前はそんなに追い詰められた目をしている？

「逆らっちゃいけない気がして、あたしたちが逆らったら、あの人は誰よりも傷つくから」

「――上がったでえ」

遠く、脱衣所から、ヴィータの言葉を遮って、主の声が聞こえる。

直に、主はこの部屋にくるだろう。

主の前で魔法関連の話はできない。ヴィータの話も気になるが、今は切り上げねば。

しかし……懐古の念か……シャマルとザフィーラも交えて話さねばならぬことかもしれんな。

それぞれの思惑を乗せて、再会の夜は過ぎ行く。

翌日。

私、高町なのはは、両親の経営する喫茶店「翠屋」の前で、ゆう君たちがやってくるのを待っていた。

あの後、細部の事情聴取があるとかで、ゆう君はアースラに泊まることに。

離れることに不満と不安がないわけではなかったけど、ちゃんと翌日会う約束をして、会う時間と場所を決めて、私は帰ってきた。

集合場所である翠屋の店内では、パーティーの準備が完了している。

サプライズの意趣をこめて正体を明かすことはしなかったけど、大事な人を迎えたい旨を伝えたところ、パーティーという形に相成った。

店内には私の家族だけじゃなくて、アリサちゃんやすすかちゃん、丸太君に雪ちゃんも待機している。ゆう君の要望もあつたし、私も覚悟を決めたから。

……ゆう君、早く来ないかなあ。

約束の時間まであとちょっと。自然と心がはずむ。

けどそうやって一人で待っていると、頭をよぎることがある。昨日の出来事で、ゆう君の口から「ベルカ」という単語がでたときのこと。

「ベルカの地まで送ってくれませんか？」

その言葉が、事の発端だった。

「できれば、王都まで」

ゆう君は、待ち遠しくて仕方がないとばかりにワクワクしている。

「ん、今代の聖王陛下はどんな人かなあ」

「聖王……？ ……何を言ってるんだ？ 聖王の血筋はすでに絶えたはず」

「……………は？」

「そもそも、ベル力だって遠い昔に滅んだ、ッ」

「う、そ……………」

私が何より驚いたのは、ゆう君が、うつん、人があんな表情を浮かべるんだ、ってこと。

陳腐な言い方になってしまっけど、世界の終わりを知ったみたいな表情。絶望しきった、そんな顔。

少なくとも、私が覚えている限りでは、見たことのない類のものだった。

……………つまり、ゆう君にとってそれだけ大事なものだったことだよ
ね？

自問自答。ぐるぐると思考が巡る。

私とどっちが大事なのかな？

それは、ずるい考えだった。

約束、守ってくれたんだか、きっと。

そして、浅はかな考えだった。

——違う。

誰かと、何かと比べるのじゃダメ。すぐりつくのじゃダメだ。

私は私で、ゆう君にふさわしい女になるの！

「なのちゃん、おまたせ」

……けど、嫉妬しないかといえばそうじゃないんだよ？

ゆう君たちが歩いてくる。

ゆう君はフェイトちゃんと手をつないでいて、フェイトちゃんを挟んでゆう君の反対側にアルフさん。三人の少し後ろを並んで歩いているのがクロノ君とリンディさんだ。あと、ゆう君の頭の上に黒い線の入った白いもこもこが乗っている。

帽子……にしては変だけど……まあいいか。

私はゆう君に駆け寄って、フェイトちゃんとは反対の手を握る。

……えへへ。

「ゆう君、おかえり」

「うん、ただいま、なのちゃん」

みんなとも挨拶を交わして、改めて店に向かう。

「さて、いよいよ暴露大会だね」

連れだって店内に入る。この後のことを思うと緊張するけど、握ったゆう君の手から感じるぬくもりを意識すると、体がほぐれていくのが分かる。

店内には、訝しんだ表情の数々。それもそうだろう。見知らぬ男の人が私と手をつないでいて、反対側ではフェイトちゃんとも手をつないでいるんだから。

さらに、ゆう君は爆弾を放り投げた。

「花咲悠一。ただいま戻りました！」

『は？ はあああ~~~~~!?』

叫んだのは男性陣。というか、お兄ちゃんと丸太君。女性陣は啞然とした表情で、口をぽかんと開けている。

対してゆう君は、悪戯が成功した子どものような顔。

昨日のやりとりで、味を占めたねゆう君。

ゆう君のくすくす笑いだけが響く中で、爆発したのは丸太君だった。

「——ッざっけんな！！　おい、おっさん！　人のダチの名前かたって冗談ブっこくたあい度胸じゃねーか！　覚悟できてんだろうな！？」　——　やつちまえ士郎さん！！」

「俺がかい？」

「落ち着きなさいよバ梶」

「——　誰がバ梶だコラア！？」

「落ち着けて言っでんでしょバカ丸」

「そうそう、親父や母さんはバカじゃないからな。バカにすんなら名前のほうで、ってざけんな！！　バカにすんじゃねえよ、えつと……　金髪！！」

「せめて悪口を言いなさいよ。　ってアンタに付き合ってたら話が進まないじゃない！！」

「バ、バツカ、お前、女が軽々しく付き合つとか言うんじゃねえよ……」

「うわ、なにこの恥ずかしい生き物……　はあ、付き合いきれないわね。とにかく！　私が気になってるのは、唯一ユウの行方を知っているであろうなのはが傍で寄り添ってるってこと！！」

「丸太君の言うとおりの悪質な冗談だったなら、真っ先になのはちやんが否定なり反発なりしているはず。ってことだよね、アリサちゃん」

「それがないということは、そこの方が言っていることが事実ということになります……信じられませんが、そのところ、きちんと説明していただけるんでしょうね？」

「すずかちゃん、雪ちゃん……うん。もちろんだよ」

そして、私たちは語り始める。魔法という、不思議な力に出会ったからのことを。

「と、いうわけなの」

立ち話もなんだから、と囲んだテーブルに肘をついて、私は一息つく。

ユーノ君のこと、ジュエルシードのこと、フェイトちゃんのこと、管理局のこと、ゆう君がいなくなったこと。途中でフェイトちゃんたちの自己紹介も済ませ、なんとか話し終えた。

全部を全部話したわけではないけど、要点は伝わったと思う。

……やっぱり、すぐには信じないかな。

みんなの顔は固かった。

「荒唐無稽な話ですね」

雪ちゃんは赤いフレームの眼鏡をクイッと上げた。

「常識的に考えて、ありえません」

「ゆきぽんの常識に、魔法という要因はないでしょう?」

「む……」

「つーか、雪よお。いちいち形式的に否定してかかんなめんどくせえ」

とりあえず否定してみたということだろうか。というか、

「……丸太君は信じてくれるの?」

魔法の一つぐらい使ってみせれば、と考えていただけに丸太君の反応は以外だった。

「あ? 何言ってるんだお前」

そうして返ってきたのは、呆れだった。

「どんだけハチャメチャな話でも、なのはが言つのなら私たちは信じるわよ」

ア、アリサちゃん……うっ、感動なの。

「そもそも、なのはちゃんはウソつけないもんね？　すぐ顔にでるから」

ん？　すずかちゃん？

「それもそうですね」

え？　雪ちゃんはそれで納得するの？

みんなもうなずいている。

……感動、なの？

「今は、感動を返せて感じかなー？」

「ゆう君まで！？」

むー、と唸って、ゆう君を見る。

頭撫でるだけじゃ、許してあげないんだからね！

「おいコラ、イチヤイチャしてんじゃねー。いいか？　なのはの話は信じる。ゆうがいなくなった理由も分かった。けど、突然現れたテメエがゆうだって証拠はどこだよ？」

「証明するつもりはないよ。分かってくれる人だけが分かってくれればいいから」

「うわ、すつげえゆうっぱい。かつこいいだけのこと言いやがつてめんどくせえ。証明できるんならとつとしちまえばいいじゃねえか。……そうだな」

少し考えるそぶりを見せた丸太君は、やがて何かを思いついたのか、ぐつと拳を握りしめ、

「青空色のクールな俺」

……は？

「でも女心と秋の空とは違うのだよ！」

え？

「ゆう……ホントに、ゆうなんだな？」

「うん。ただいま、かじゅまる」

何、今の？

「今のやりとりで何が分かるのよ。……まあ、いいわ。私も、信じてあげるわよ。なーんか、偽物つてのとも違う気がするのよね。ただし！ 年上になったからって、かしこまったりしないんだからね！」

「もちろん、ありのままのアーりんできてくれなくちゃ」

はいはい、と呆れ顔のアリサちゃんだったが、小さく付け加えた、おかえりには笑顔が添えられていた。

「なんとなく面影が、ってレベルじゃないもんね。ゆうちゃんが成長したらこうなるんだー、っていうのを体現してるんだもん。信じるなって方が無理かな。というわけで、おかえりなさい、ゆうちゃん」

「諸々無視してしまえば、これほど良いニュースはないでしょう。今は素直に喜びたいと思います。おかえりなさい、悠一君」

もう一度、ただいま、と言うゆう君は、どこかホッとしているようにも見えた。

信じてもらえないよりも信じてもらえる方が良いに決まってる。そして何より、信じてもらいたかったんだよね？ 大事な、友達だもん。

「積もる話もあるけれど、その前に僕の家族を紹介しておくよ。なのちゃんもまだ知らない子だよ」

私も？ …… そういえば昨日、不穏な発言をした存在があったの。

「僕の、大切な家族です。まずは、スナオマル」

応じたのは、ゆう君の頭の上のもこもこだった。

もぞもぞと動くもこもこ。やがて、そこから足が生えた。目を凝らしてよく見ると、もこもこが白いトラであることが分かる。

傍目からでも分かるふわふわな白い体毛に、ところどころ走る黒いしましま。伸びた四肢に眠たげな眼は保護欲をそそられる。

かわいい……。

ゆう君の頭の上で寝そべるトラ——スナオマルちゃんは、しかし、それ以上のアクションを起こさない。

「えっと、この子は僕の使い魔なんですけど……人見知りが激しくてね。根はいい子だから、仲良くしてあげてください」

ただ物臭なだけにも見えるけど……頼んだら、だっこさせてくれないかな。

「もう一人紹介」

<——いよいよ私の番ですね！>

ゆう君の言葉を遮って、大きな電子音声が響いた。発声源は、ゆう君の腕輪から。待機状態のデバイスだろうか、しかし、私のレイジングハートやフェイトちゃんのバルディッシュとは様子が異なる。テンション的な意味で。

<初めての皆様はじめまして。なのは様は昨日ぶりです。私は、花咲悠一様の最愛の娘！長女にして超女！！アナスタシアと申します。以後、お見知り置きを>

「娘、というか、性別はないはずなんですけどね。愛すべきの子どもであることに変わりはありませんが」

<何を仰いますか！娘であればこそ、ダディとの愛欲に塗れた日々を目指せるのではないですか！！>

「生まれ変わって出直してくるといいよ」

<早くユニゾンデバイスになりたーい！！　ダディとの合体…
…フフ、なんて背徳甘美なひ・び・き…>

「計画の段階で頓挫する気がするよ？」

<心配ご無用！　夜天のスペアボディとうそぶいて造らせた物を押収して改造してありますから。後はダディのゴーサインを待っただけ！！>

「いつの間に……。んー、僕はありのままのアナスタシアが好きかな」

<て、照れるぜい……>

口調が変わるほどに！？　……実はとっても照れ屋さんとか？

周りを見れば、啞然とした表情の数々。……うん、私も同じ気持ちなの。

なんだろう…ひどく、疲れた……。

「スナオマルちゃんと、アナスタシアちゃんね。ふふ、よろしくね？」

さて、と両手を合わせたのはお母さんだった。

「自己紹介も済んだところで、そろそろパーティーにしましょうか」

異論は全然なかったの。

「桃ちゃん、みゆちゃん、ただいま帰りました」

「おかえりなさい、ゆう君」

「お、おかえり……なさい」

「ん？ どうしたんですか、みゆちゃん。顔が赤いですけど」

「う……」

「んふふ、美由紀はね、照れてるのよ。ゆう君があんまりにも力
ツコよくなっちゃったから」

「ちょ、お母さん!？」

「みゆちゃんこそ……子どもの感性では分からなかったこと、改め
て思うよ。可愛いな、って」

「あら、美由紀ったら固まっちゃって。よっぽど嬉しかったのかし
ら」

「桃ちゃんもお変わりなく、お美しいままで」

「あらやだ、ゆう君ったら。どこでそんな言葉づかい憶えたの？」

「偉い人に仕えてると、ハニートラップなんかも盛んでして。いろいろ、憶えさせられましたから」

「……ねえ、雪ちゃん。ハニートラップってなに？」

「色仕掛けの事ですよ」

「……ゆう君。ちょーっと詳しくお話してほしいの」

「ちよつとと詳しくが矛盾してるね」

「——誤魔化されないよ？」

「強くなったみたいだね、ゆう君。もう俺では敵わないかな？」

「どうでしょう？ まあでも、環境が違いますから。強くならなければ、僕はここに立っていないでしょうから」

「ゆう君……」

「あ、そんな悲観的にならないでください。強いられた事ではありましたが、自身で望んだ事でもありますから」

「……そうか。本当に、敵わないかもしれないね」

「——湿っぽいのはその辺にしたらどうだ？ ……って、なんだ、二人してその眼は？」

「いや、だってなあ？」

「ええ、きよーや君のことだから、まっ先に『勝負しろ！』とか言い出すかと」

「色褪せない認識に少し自分を見直してみようか。……いくら俺でも、めでたい席でそんなこと言い出すわけがないだろう」

「ところでゆう君、お酒はイケる口かい？」

「もちろん。今夜にでもぜひ」

「せっかくだ。とっておきを披露しよう」

「ちょっと待て！ そのあからさまな無視はなんだ！？ あれか！？ 『様子がおかしいからほっとこうぜー』 的なノリか！？ 」

「だって、僕の知ってるきよーや君は、『的なノリ』なんて言わなかったですもん」

「分かってやってくれゆう君。君とまた会えて浮かれてるんだよ」

「ぐう………！」

『……マジかよ』

「つーかズルいよなー。ゆう一人だけ先に大人になっちまいやがって」

「そうは言っても、僕にも積み重ねがあつて、ようやくここにいるわけだから」

「そうですね。悠一君にも事情があつたわけですし、低能なこと言つてないで、少しは気持ちをくんであげたらどうです?」

「そーは言つてもよー……ん?　なんか今、バカにされた気が……テーノー?」

「どういう理屈で時を超えたのかも分からない状態だったから。十年で戻れたのも奇跡的なんだよ?」

「難しいことはよくわかんねー。……そういや、ファンタジーな世界に行つてたんだよな?　なあなあ、なんかおもしろー話とかねーの?」

「んー……ドラゴンと戦つた時の話とか」

「マジで!?　おう、聞かせろ聞かせろ!」

<そついつことなら、私の出番ですね!!-->

「アナスタシアさんでしたか?　何がどう私の出番なのでしょうか

「？」

「くふっくふ、よくぞ聞いてくれました雪道様。ハイスpekの代名詞にして、ダディの最愛の娘である私に死角なし！！旧暦の遺産と侮るなかれ！！最っ高の画質！最っ高の音質！で、ご覧いただきましょう！大ッ！spekタクルウ！！」>

「何はともあれそのテンションなの……まあいいか。おい、リアルドラゴンのクエストの上映会するってよー。見たい奴は集まれー」

「……アナスタシア。あの時は僕も君もいっぱいいいっぱいで、撮影する余裕なんてなかったよね？」

<陛下から厳命されてしまったので>

「……どーゆー状況よ、コレ……」

「なのちゃんはだっこしましたし、ふーちゃんも、すずちーも、ゆきぽんもぎゅってしましたから。残すはアーリンのみとなったので」

「理由になってないから。はあ、十年経っても抱きつき癖は矯正されなかったわけね……」

「ア、アリサ！よかったら交代してくれない、かな？」

「フエイト？ 代われるなら代わりたいわよ……」

「それじゃ僕が満足できないんですー。もうちょっとー」

「……まあ、ユウにとっては久し振りなわけだし、もう少しだけなら付き合っただげるわよ」

「——ふーちゃん、今だ！」

「う、うん！ ツンデレ乙ー！」

「アンタフエイトに何仕込んでんのよッ！？」

「ねえ、ゆうちゃん。こんなのもらっちゃった」

「ん？ 本？ えっと、『聖王と獣王』？」

「ああ、それはな、管理世界でも有名な物語で、童話なんかにもなっているものなんだが……昨日ユーイチの話を聞くかぎり、主人公がユーイチに酷似してるんだ」

「クロノ様から話を聞いて確認してみたところ、いくらか誇張されていますが、ダディと陛下をモチーフに描かれているものに間違いありません」

「なんで僕を通さずに話が進んでるのは置いとくとして……ねえ

リンディさん？」

「なにかしら？ ユーイチ君」

「一冊だけ製本して、しかもその本をすずちーにプレゼントするってことはどーゆーことなんですかね？」

「とりあえずエイミィに報告しておく必要があるわね」

「ユーイチの友人に！ 本好きの子がいます！ アナスタシアから！ 聞いたただだ！！」

「クロノはその本の大ファンだもんねー？ 布教活動？」

<首まで真っ赤ですよ、クロノ様。ちなみに、製本作業は私も手伝いました。偉いですか？ 私偉いですか？ —— でしたら褒めて！ 欲望の赴くままに私を褒めて！ 褒めてちぎっては投げて！ むしろ契って！！>

「うん、偉いよアナスタシア。さすが僕の最愛の娘だね」

<て、照れるっス……>

「アナスタシアちゃんがこっぴどい性格になった原因はゆうちゃんにある気がするなー」

事の始まりは唐突だった。

はやてを訪ねてきた男が、先日、あたし、ヴィータの前に立ちふさがった男だったのだ。

平和ボケしていた、ということなのか、はやての案内でリビングに現れるまでまったくの無警戒。いいわけをする機会があるのなら、ご無沙汰だった友人に会えるということで、はやてのあまりの喜びように気が緩んでいた、とでも言うか。

突然のことに固まるあたしたち。はやても、事態がつかめず啞然としている。

なんたる運命……、という男のつぶやきで、あたしたちはようやく我に返った。

それぞれ騎士甲冑を纏い、男の悲しげな瞳を無視してデバイスをかまえる。

シグナムの、主から離れる！！の一言は、しかし、

<騎士の誇りすら忘れたかッ！？——愚か者ども！！！！！>

電子音声の一喝にかき消された。

そして、無意識のうちに、あたしは頭を垂れていた。片膝を付き、かつてはやてに対してしたように、騎士としての最敬礼を、男に対してしていたのだ。

そして、それをしているのはあたしだけじゃなかった。シグナム

も、シャルも、ザフィーラも同じように礼を尽くしていたのだ。

疑問はもちろんある。けど、違和感はまったくなかった。むしろ、こつするのが当たり前前に思えたんだ。

落ち着いて困惑するという奇妙な状態に陥り、男の接近に気付かず、けど、立ちなさいの一言には体が反射的に動いていた。

「ヴィータ」

胸が締め付けられたように痛む。あたしの名前を呼ぶ声に、聞き覚えがあつて。

男は、あたしを強く抱きしめる。その感触が、妙に懐かしくて。

包容が解かれた瞬間に、思わず、あ……、と声が漏れた。

男はあたしの頭を一撫ですると、シグナムの元に向かい、あたしにしたように立たせて、抱きしめる。シャル、ザフィーラに対しても同じように振舞い、

「え？」

次の瞬間、転移してきた仮面の男を組み伏せていた。

「——グッ！ 何者だ！ 貴様ア！？」

「そっくりそのままお返しするよ」

あたしにしてみたら、双方名乗ってくれよ、と思う。

突然現れた仮面の男は、出現を予見されていたかのように組み伏せられた。

事態に付いていけず、あたしは置いてけぼり。あたしだけじゃなく、八神家全員がそうだったと思う。

管理局員らしき人物たちが乱入してきて、仮面の男を拘束。あたしたちじゃなくて、だ。

拘束された仮面の男は実は猫耳の女で、黒髪の小さな管理局員と口論を始めた。言葉に節々に闇の書という単語が聞こえることから、あたしたちについて言い争っているのだろう。

すぐそばで聞こえる話の内容が不確かだったのは、別のことに集中していたから。

傍らにはやてを置いて、闇の書が男の手の中にある。何で、誰も男を止めない？ …… あたしを含めて。

答えはなく、事態は留まることなく進む。

「これは…… アナスタシア、夜天を呼び出せるかい？」

<ダディの命令権はまだ生きています。なので、オーダーを。反応次第、私が引つ張り出します>

「頼む。……起きるんだ、夜天」

本が光輝き、姿を現したのは、一人の女性。白銀の長髪に真紅の

瞳には見覚えがあった。

管制人格……闇の書そのものといってもいい存在で、けど、発現の条件はまだ満たしていないはず。

なのに、なぜ？ ……男の言葉に、応えた？ ……なぜ？

管制人格は無表情……に見せている？ 何かを押し殺しているようにも見える。

その証拠に、

「——お父様」

零した言葉は、震えていた。

お父様？ ——違う、少しだけ、違う。……とー、さま？

「お姉様……私を、殺してください」

管制人格の声はあまりに弱弱しかった。

「私はもう、傷つけないんです」

それは何かを呪うようで。

「私はもう、傷つきたくないんです」

あるいは、ただただ縊るようで。

「だから……私を殺してください」

気付けば、あたしの頬を伝うものがあつた。

管制人格の想いは、たぶん人事じゃないから。

あたしも、かつて、同じことを、想ったことが——ある？

「なッ！ なにゆーとるん！？ 簡単に殺してとかゆーたらアカン
！！」

はやて……簡単じゃないよ。その想いは、きっと簡単なんかじゃない。

「はやて……貴女には、いくら感謝してもしたりません。貴女のおかげで、騎士たちは最後の一線を越えずに済んだ。貴女が騎士たちを人として扱ってくれたから、かつての在り方の一端を思い出すことができたのです。……ありがとう、はやて」

「礼なんかいらんよあ……やから、そない悲しいこと、言わんと……」

「……夜天」

男——とーさまが、管制人格——夜天を抱きしめる。

宝物を扱うように、大切に、もう離さないとばかりに、力強く。

「——大丈夫。もう大丈夫だから」

「おとうさま……」

「悪い夢はもう終わる。僕たちが、終わらせる」

「ああ……こんな私でも、抱きしめていただけるんですね？ お父様の腕の中にいられる……お父様がまもってくれる……なら、もう、こわいものなんて、なにも……」

「夜天……今は、少しだけ眠りなさい。目が覚めたら、きっと世界は優しくなっているから……」

「は、い……」

静かに目を閉じる夜天。その顔は安らかで、先ほどまで死を望んでいた人物には見えない。

愛おし気に夜天の頭を撫でたとーさまは、やがて表情を引き締め、固い声でアナスタシア、と呼び掛けた。

＜ヴォルケンリッターの切り離しはすぐにでも可能です。記憶の末梢は念入りで、おそらく、戻ることはないかと。それと……＞

「続けて」

＜はい……書自体の修復は不可能です。へたに修復を試みれば、さらなる悲劇を生んでしまいます。……ダディ、夜天はただ己の運命を恨んだから死を望んだではありません。己の状態を正しく認識していたからこそ死を望んだのです。ならば、せめて……安らかな死を＞

「……昨日言っていたスペアボディがあるだろう？　それを使えば」

＜——ダディ！　お分かりのはず！　中枢へ干渉すれば浸食が進み、侵食が進めばはやて様に危険が＞

「——そんなのダメだ！！」

あたしはとつさに叫んでいた。

侵食？　はやてに危険？　——死？

そんなの絶対にダメだ！！

にじむ視界、映るとーさまは、あくまで優しくあたしに笑いかける。

「大丈夫だよ、ヴィータ」

だって、と思って、結局言葉にはせずに、あたしは腕を使って乱暴に涙を拭う。

「アナスタシアも落ち着いて。命令権は活きていると、そう言ったのはキミだろう？」

＜——まさか＞

「所有権の譲渡。僕が書のマスターになり、はっちゃんと書のつながりを断つ。そうすれば、何の問題もない」

＜そんな！　いくらダディといえど個人で耐えられるものではない

ません!!>

「いくら改悪されていようと、この子は僕の娘だ。――ならば、全てを受け止めよう」

ふと、浮かんだ情景がある。

そこにはシグナムがいた。今よりも柔らかく笑い、誉められるとすぐに真っ赤になるシグナムがいて。

そこにはシャマルがいた。茶目つけたっぷりで、たしなめられてなお笑うシャマルがいて。

そこにはザフィーラがいた。白いトラに冷たくあしらわれ、それでもアプローチを欠かさないザフィーラがいて。

そこには夜天がいた。常に一步引いた位置からあたしたちを見守り、何かあれば真っ先に駆けつけてくれる姉のような夜天がいて。

そこにはトーマとオッドアイの女性がいた。あたしたちの全部を包み込んでくれて、無償の愛を注いでくれる、そんな親のような存在がいて。

そこにはあたしもいて、それは本当に、本当に幸せな日々。

一瞬の、それは確かに追憶だった。知らないと、白を切るにはあたたか過ぎて。知っていると、直視するには眩し過ぎた。

……ねえ、ホントに、アナタは一体誰なんですか？

「それに、個人で耐えるつもりはないよ？」

くッ！……出過ぎたマネをいたしました。王の行く末を、お傍でお支えするのが我が喜びなれば>

「ともに臨もう。我が最愛の娘」

最愛の娘。その言葉が、妙に引っかった。

とーさまは金色の腕輪を一撫ですると、その視線を黒い小さい管理局員に向けた。

「クロりん。アースラの設備を借りてもいいかい？」

「あ、ああ。アースラと言わず、望むなら本局に掛け合ってみても……」

「今は、一分一秒が惜しいから。すぐに、許可が下りるものでもないでしょう？」

「——僕に、できることは？」

「作業に集中できるように環境を整えてくれると嬉しいかな」

まかせろ、と不敵に笑う黒小さいの。

おいてけぼりで、いまいち事態がつかめなかったけど、あたしたちを取り巻く環境が大きく変わろうとしているのだけは理解できた。

そうして、一週間が過ぎた。

結論を言えば、夜天は助かった。

書自体の破棄は免れなかったけれど、夜天の人格プログラム諸々はスペアボディに移されたい。

あたしたちの状態についても説明を受け、とーさまの正体も聞いた。

とーさまは、本当にあたしたちのとーさまだったのだ。

はやてにも事情を全て話した。すごく怒られて、けどそれ以上にありがとう、と泣かれた。つられるようにあたしも泣いて、シグナムやシャマルも涙ぐんでいた。

書の破棄に伴い、はやてはもう、あたしたちの主人ではなくなった。夜天の修復するに当たり、まずはあたしたちとはやてもが闇の書から切り離され、お互いに魔力的なつながりはなくなった。けどそれは、決して悪いことじゃなくて、書の影響で麻痺していたはやての足は、リハビリは必要なものの、後遺症もなく回復するという話だった。

これには、みんなが諸手を上げて喜んだ。

主従の関係ではなくなったけど、あたしたちとはやては家族だったから。

「と、夜天の状態はこんな感じかな。しばらくしたら、普通に生活に戻るよ」

「そうかあ……ごころうさま、ゆーくん」

はやての希望ととーさまの勧めもあり、あたしたちは変わらずにはやてと生活をともにしている。

「今はスナオマルがついてくれていて……ザフィーラ、もしよかったら、スナオマルの話し相手になって」

「——よろしいのですか!？」

「ああ、うん……ほどほどにね?」

さらには、とーさまもこの家で暮らすことが決まっていた。先ほど生活必需品を買ってきたところだ。

「『愛は記憶じゃないのだよ』とか言ってみたり!? なんつって、なんつって!」

「……」

「……なによ、言いたいことがあるなら聞くわよ?」

「いいのか？　ならば遠慮なく。――恥を知れ」

「うわーん、パパ様〜シグナムがイジめる〜」

「そういうところが恥知らずだと！　ええい、父上から離れる！」

とーさまの移住が決まった時、一悶着あつたが、些細なことだ。

「こんにちわー、って！　何やってるの！？　ヴィータちゃん！」

一悶着と言っても、このうるさい白いのが騒いだけだが。

「お、お邪魔します！」

「いらっしやい、フェイトちゃん。なのはちゃんも」

うるさい白いのに目をつむれば、きっとこれからの生活は楽しくなるだろう。

何事にも代えがたい、そんな幸せな日々の訪れ。

とーさまの膝の上に、上体を投げ出す形で寝転んでいるあたしは、ふとそんなことを考えた。

「んー……」

時々、思い出したように頭を撫でる手が心地よい。

少なくともここは、極楽だった。

彼女たちは被害者だった。

彼女たちは加害者だった。

どうして彼女たちを許せようか。どうして彼女たちを責められようか。

彼女たちは悪だった。

彼女たちは無垢だった。

歩まされた罪悪の道。ただ家族が大好きなだけの子どもだったのに。

名を堕とされた。誇りを汚された。記憶を奪われた。

罪は誰にありますか？ あるいは誰もが罪人ですか？

生きることは、罪ですか？

——もし、願いが叶うのならば。

贖罪の道を歩き出すその前に。

どうか、一時でいいのです。

彼女たちに、平穩を――。

外伝―あだると・ふぁいと「1クール? わずか三日間のできごとです」(後書

ひとまず、これで終了になります。

聖王教会訪問、ハラウオン親子とグレアム氏の確執、なのはリベンジなど、書くべきことはあると思いますが、気が乗れば書きますし、乗らなければ書きません。

本編更新しなきゃですからねー…… まあ待つとしたら、気長に待ってくれると嬉しいです。

ただ今、ようやくこれを書き上げ、軽く燃え尽きております。なので、次回更新がいつになるかなど、まったく目途が立ちません。もうしわけない。

なるべく頑張ってみようかな、とは思っております。はい。

最後に、ゆう君と丸太のネタ、分かる人いるのかなあ。ボンボン派の人は分かるかもしれませんが。分ってくれたら嬉しいです。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432k/>

魔法少女リリカルなのは ちゃいんど・ふぁいと

2011年5月3日07時08分発行